
Arc-en-ciel ~ なないろのきざはし ~ (共通ルート)

CENTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Arc-en-ciel(なないろのきざし)(共通ルート)

【Nコード】

N2320J

【作者名】

CENTER

【あらすじ】

学園の二年生である城崎陽は、友人たちとごく普通の日常を送っていた。

ある日、陽は取り壊し間近の神社で一人の少女と出会う。

少女は言った。「虹を架けてみないかな？」と。そしてそのとき、物語は始まった。

虹色の願いと小さな小さな奇跡が紡ぐ物語。

コンセプトは小説でギャルゲ。

ヒロインは七人。

はじめに（前書き）

小説としては変則的な書き方をするので、作品についての諸注意です。

始めに

始めに。

この作品は、恋愛ADV　いわゆるギャルゲと呼ばれるジャンルのゲームをそのまま文章に書き換えたようなスタイルを取ります。そのため、普通の小説のルールをいくらか無視してしまいますが、それは作品の前提ですので、指摘を受けた場合も修正はしません。具体的には、発言の前に発言者の名前を書く、台本形式と呼ばれる形式。

事細かに書かなくても、何となくわかるであろう状況描写の排除などです。

ゲームだった場合は絵があるので、発言者や、その表情は文にしなくてもわかるんですよ。そのテンポを崩さないために、そういうスタイルで書かせていただきます。

もちろん、書かないとわからない部分はちゃんと説明を入れるつもりですのでご心配なく。

それと、年齢制限はありませんが、作中に描写しないだけで、そういうシーンがあります。本来なら18禁になるところを、直接的な描写を削ることで制限無しにしてるだけです。洋画のベッドシーンくらいのエロさと言えればわかるでしょうか。

注意は以上です。

ここまで読んで大丈夫な方は、どうぞお付き合いください。

六月二日(その1)

祈り、願い。

それは、人が生きる時、決して離れられないもの。

叶えてくれる神様の存在なんて信じていなくても、

不安な時、叶えたい夢がある時、

そして、自分1人の力でどうにもならない事がある時、

人は、その想いを祈りに託す。

どうか かないますように。と。

— Arc-en-ciel アルカンシエル かないろのきざしはじ —

< 6月2日(火) >

< 学生寮 213号室 >

ピ、と電子音を立て始めた目覚まし時計の頭を叩いて沈黙させる。
味気ないデジタル時計の表示は、朝の7時30分。

【陽】

「よし、勝った」

俺の戦績は学園の2年に上がってから全勝継続中だ。

敗北〃遅刻なんだから当たり前と言ってしまうばそれまでなのだが。

【陽】

「仕度するか」

フローリングの床の片隅に積まれた服の山から制服を拾い上げて手早く着替える。

うちの学園の制服は不思議な事に夏服も長袖だ。

生地が薄いからそれほど暑いと感じる事はないんだけど、

ぱっと見ただけだと一年中同じ服を着ているように見える。

各部屋備え付けの風呂場の鏡を覗き込んでざっと髪型を整えたら、それで準備は完了だ。

鞆に教科書と筆箱を放り込んで部屋の出口に向かう。

ドア脇のスロットに挿してあったカードを引き抜いてからドアを閉めると、自動でドアが施錠された。

ちなみに、カードを抜かないとオートロックは働かないから、うっかり締め出されたりはしない。

5年前に校舎を建て替えた時、同時に立てられたこの寮は『近代的な寮』を目指したらしいが、少しばかり行き過ぎている気がする。

カードキーくらいならいいが、このカードは学園内の自販機や売店、学食で財布代わりに使えたりする。

便利ではあるのだが、逆にこれを忘れてしまうと学園内では非常に不便な目に遭ってしまうわけだ。

< 学生寮 食堂 >

俺の部屋がある2階から、階段を下りて1階へ。

この寮の1階は男子学生の居住部と食堂や購買などの共有スペースでできている。

その中で、食堂があるのは階段のすぐそばだ。

食堂は朝食を食べに来た寮生でこった返していた。

この学園は全寮制で、近くに住んでいる生徒も寮に入らないとい

けない事になっている。

俺は家を出て生活したかったからそこに不満は無いが、やっぱりそれだけの人数が集まると共有の生活空間は手狭に感じる。

さてと、あいつはもう来てるか？

人の邪魔にならないように壁際に寄りながら人波を見回す。

【男子生徒】

「お、城崎きのさき、おはよー」

【陽】

「ん、おはよう」

何人が顔見知りを見かけて挨拶を交わすが、目的の人物は見当たらない。

どうやら、また、寝坊しているらしい。

仕方ないな、起こしに行くか……。

食堂を抜けて、人の流れに逆らいながら階段まで戻り、2階に上がる。

< 学生寮 廊下 >

2階に戻ると、廊下を結構な数の男子生徒が歩き回っていた。

この寮には三学年分、それも男女両方が住んでいるが、1、2階は男子、3、4階は女子の部屋と一応分けられている。

2階だけでこれだと、急がないと食堂の席が全部埋まるな……。

【男子生徒A】

「城崎、また起こしに来たのか？」

【男子生徒B】

「お前ら、ほんと仲いいよなー。付き合ってたのかあ？」

【陽】

「だから、そんなんじゃ無いって。怖い事言っなよ」

からかってきた知り合いをいつもの様に流して、隣室の214号室の前に立つ。

カードリーダーにカードをかざすと、鍵のランプが施錠の赤から緑に変わる。

もちろん、自分のカードで開けられるのは自分の部屋の鍵だけが、面倒な手続きをすればルームキーの機能拡張もしてもらえるのだ。

それほど意味が無いから、やっている奴はほとんどいないのだが……。

確かに、全員が寮に住んでいるんだから、不在時に他人の部屋に入る必要は無いと言えば無い。

ま、俺は朝起こすために使っているんだけど。

そのせいで、俺達の仲をからかわれる羽目に合うのだが、無いと不便なのだから仕方ない。

<学生寮 214号室>

【陽】

「お邪魔しますっ」と

部屋に入ると、案の定、部屋の主はベッドの上だった。

【陽】

「おーい、朝だぞ。起きろー」

肩に手をかけて揺さぶってやる。

【???】

「う……後、5ぶん……」

【陽】

「またベタな事を……。いいから起きろー!」

かけ布団ごとベッドから引きずり落とす。

【???】

「うおおっ!」

【陽】

「ほら、起きろ。朝飯食べる時間が無くなる」

【??】

「わかったって。ったく、もうちょっとましな起こし方は無いのか
よ」

ようやく目が覚めたのか文句を言いながら起き上がって来た。

【陽】

「そういうのは唯鈴ちゃんに期待してくれ。ほら、さっさと着替え
ろ」

【??】

「ったよ」

のそのそと着替え始めたこいつは大陣だいじん 黄牙おうが。

この学園に進学する少し前に知り合った友人だ。

<大陣 黄牙

少年漫画の主人公のような尖った感じの金髪。瞳の色は青。
陽より少し大柄>

【黄牙】

「よっしゃ、準備できたぞ」

【陽】

「ん、ってお前、寝癖が凄いぞ」

跳ねまくっている金髪の頭を指摘してやる。

制服の前を全開にしてシャツが見えてるのはいつものことだ。

【黄牙】

「そうか？」

黄牙は鏡を見ようともしないで髪をぐしゃぐしゃとかき混ぜる。

傍目には余計に酷くなったようにすら見えるのだが、

【黄牙】

「ま、いいだろ」

それでいいらしい。

まあ、俺も特に髪型をセットしたりしてないから、人の事は言えないんだけどな。

< 学生寮 食堂 >

黄牙と共に食堂に入り、朝食を受け取る列に並ぶ。

【黄牙】

「陽、今日の朝飯何だ？」

黄牙に言われて、入り口近くのショーケースを見てみると、中身のメインはサンドイッチだった。

【陽】

「ん、サンドイッチだな」

【黄牙】

「なんつーか、和食の気分なんだけど……いいか、別に」

【陽】

「食堂のメニューは1択だからな。昼に学食で好きなもの頼めよ」

【黄牙】

「そうすっかな」

食事の載ったトレイを受け取り、席を探す。

が、黄牙を起こしたりしている間にほとんどの席が埋まってしまっている。

【陽】

「出遅れたなあ」

【黄牙】

「1つだけなら空いてんだけど。くそっ、何であそこ詰めねえんだ」

【陽】

「お前のせいで出遅れたのに、何でお前が文句言っただよ」
文句を言う権利は俺にはあってもお前にはないぞ。

【??】

「陽！ 黄牙！」

【陽・黄牙】

「ん？」

背中からかけられた聞き覚えのある声に、そろって振り向く。

少し離れた席で、見知った顔がぶんぶん手を振っていた。

【陽】

「げ、橙歌……」

<時雨 橙歌

オレンジが強い茶髪ショートカット。瞳の色は焦げ茶

【橙歌】

「やっほー、こっちだよ！」

元気一杯、と言つか、小学校低学年のような空気を読まない元気すぎる声に、自然に食堂中の視線が集中する。

本人は全く気にしていないが、こっちが恥ずかしい。

こんな視線を浴びて平然としていられるの橙歌ぐらいだろう。

【黄牙】

「お、ラッキー。行こうぜ、陽」

【陽】

「……そうだな」

訂正、もう1人いたようだ。

……

【陽】

「あー、恥ずかしかった」

【??】

「そ、そうね……。おはよう、城崎君、大陣君」

2つ空いていた席に座ると、橙歌の隣で小さくなっていた赤明あかりが苦笑を浮かべて話しかけてきた。

<新嶋にいじま 赤明

肩にかかるくらいの赤髪。毛先が外ハネ。瞳の色は紫>

最初に声をかけてきたのが時雨 橙歌。

その隣にいるのが新嶋 赤明。

1年の時からのクラスメイトで、この4人で何かと行動している事が多い、いわゆる仲良しグループと言うやつだ。

【橙歌】

「むー、せっかく取っておいてあげたのに。何でそういうヤな態度を取るのさ」

【陽】

「もうちよつと静かに呼んでくれたら素直に感謝できたんだけどな」

開口一番文句を言った俺も悪いかも知れないが、あの視線を浴びた後だと素直にお礼を言いたくない気持ちになって当然だ。

【橙歌】

「ふーんだ」

橙歌はいかにも不機嫌ですという感じでそっぽを向き、

【橙歌】

「席とつてあげた代わりに、その卵サンドいただき！」

余所見をしながら俺と黄牙の皿から狙った物をしっかり奪っていくという荒業を披露してくれた。

【陽】

「おい、橙」てめえ、何やってんだ！」「」

俺の文句を声で上書きしながら、黄牙が橙歌に文句をつける。

テーブルを叩いたバンツという音が意外に良く響き、再び無数の視線が集まる。

【陽】

「うあ、すみません」

【赤明】

「き、気にしないで下さい……」

思わず赤明と2人で近くの生徒に頭を下げまくる。

が、元凶の2人は少しも気にしていない、と言うか注目を浴びている事にも気づいていないらしい。

【橙歌】

「怒らないでよ、ちゃんと代わりのあげるから、トマトの。陽は……きゅうりでいい？」

ほいほいと俺と黄牙の皿に野菜サンドが投げ込まれる。

絶対嫌いなものを押し付けただけだ。

野菜嫌いとか、子供かよ……

【黄牙】

「ったく、しゃあねえな」

黄牙はそれで納得して、トマトサンドを食べ始めた。

この大雑把な友人の事だ、サンドイッチが腹に入るなら一緒だと考えてるのだろう。

俺は、文句を言う気すら根こそぎ奪われて、貰ったきゅうりサンドと自前のきゅうりサンドでハムサンドを挟んで口に放り込んだ。

う、思った以上に分厚い。

【赤明】

「あら、サンドサンドね」

ね、とか言われてもそんな珍妙な食べ物の名前は初耳だ。

【橙歌】

「サンドイッチとサンドイッチでサンド。でも挟んでる回数は二ド、なんて」

【黄牙】

「なんだそりゃ。ちっとも面白くねえぞ」

【橙歌】

「酷っ!?!」

黄牙の素直な感想に橙歌が吼え、三度食堂中の視線が集中した。

いいから静かに食ってくれ……

<通学路>

寮から学園までの短い道を4人で並んで歩く。

道路と敷地を隔てる塀の向こうには、まだ新しい白い校舎が見えている。

私立嶺明^{れいめい}学園。

50年以上の歴史を持つ学園だが、最近校舎を建て替えたこともあって特に歴史を感じさせる佇まいではない。

校舎を建て替える為に、入試をしないで生徒数をゼロにしたのだから校風なんかも忘れ去られてしまっている。

ここまで来ると、もう以前とは別の学校と言ってもいいかもしれない。

学園の由来は、嶺から明かり、つまり太陽が昇る様らしいが、有名校というには2、3歩足りない現状を見ると名前負けしている気がする。

【赤明】

「もう、本当に恥ずかしかったわよ。もうちょっと周りを見て騒ぎなさいよ」

隣で、橙歌が赤明に怒られている。

騒ぎには慣れても、それが平気になるというものではないのは赤

明も俺と同じらしい。

【橙歌】

「そう？ いつも通りだったと思うけどなー」

【赤明】

「だからそれがいけないのよ」

【陽】

「そつだよなあ。迷惑してると言うよりも、ほほえましい物を見る視線だったし」

当事者よりも周囲の人間の方が慣れてるのはどうなんだろう。

【橙歌】

「えー、陽も赤明も硬いよ」

【黄牙】

「おう。人生は楽しんだ者勝ちだよな」

【赤明】

「あら、大陣君までそんなこと言うのね。

それじゃあ、私の楽しい学園生活の為に話聞いてくれるかしら？」

【黄牙】

「うげ……」

にっこり笑って赤明が言うが、笑っているのは顔だけだ。

【橙歌】

「やーだよー」

それをいち早く察して橙歌が走り出し、あっという間に人波の中に消えていった。

【赤明】

「あ、橙歌っ。もう……それじゃあ大陣君っ」

【黄牙】

「んな、俺かよ!？」

代わりとばかりに捕まえた黄牙にお説教を始める赤明。

【陽】

「人生は楽しんだ者勝ち、か」

それなら、この友人達と楽しんでいる今は、俺は勝ち組なのかもしれない。

学園の門を抜けながら、そんな事を思っていた。

<学園 2年教室>

【古典教師】

「つまり、神社と言っても神様だけが祀られるわけではなくて、歴史上の人物とかの時もあるわけだが」

4 限目、古典の男性教師が授業内容からは少し脱線して、豆知識というか無駄知識の話をしている。

【古典教師】

「お、そうだ。神社と言えば、駅前神社が取り壊される事になったらしいな。」

みんな、知ってたか？」

駅前の、神社。

駅前に神社は一つしかない。」

管理している人もいないのか、荒れ放題になっていて、近所の子供達の遊び場のようになっている所だ。

俺も、昔は遊んだ事があるが、最近は立ち入った事も無かった。

【女子生徒】

「せんせー。何で取り壊されるんですか？」

【古典教師】

「さあな、偉い人が決めただろう。」

まあ、何が祀られてるのかすらわからないような神社だったから、価値がないと判断されたのかも知れんな」

【古典教師】

「そう言えば、昔遊んでいた子供が怪我をした事もあったから、その辺も関係してるのかもな」

安全管理上の何とかというやつだろうか。

それにしたって、何で今更になって……。

【古典教師】

「さて、ちよっと早いけどどこまでにするか。チャイムまでは騒ぐなよ。委員長、号令」

【クラス委員長】

「起立ー」

クラス委員長の号令にあわせて、生徒たちががたがたと席を立った。

<学園 2年教室>

授業が終わると、いつものように黄牙たちが机の周りに集まってくる。

【橙歌】

「ね、ね、先生の言った神社って知ってる？」

【赤明】

「知ってるわよ。駅からボロボロの鳥居が見えてるし」

【黄牙】

「俺もだ。なんつーか、待ち合わせ、に使ってたからな」

【橙歌】

「陽は？」

【陽】

「知ってるよ。そう言う橙歌はどうなんだ？」

【橙歌】

「もちろん僕も知ってるよ。遊び場だったし」

【赤明】

「地元だけあって、みんな知ってるのね。それで、それがどうかしたの？」

【橙歌】

「うん。せつかくだし、壊される前にみんなで行ってみようよ」

【黄牙】

「あんな所行ってどうすんだよ、ガキじゃあるまいし」

【橙歌】

「いーじゃんかあ、記念だよ。き・ね・ん」

【黄牙】

「記念か。それなら、まあ、いいか」

「そこで納得するのかよ！」

【橙歌】

「赤明は？」

【赤明】

「そうね……もう一度行ってみるのも良いかもしれないわ」

赤明まで賛成するのかよ!？」

いつもならこんな突発的な話をする橙歌を宥める側なのに。

【橙歌】

「もちろん、陽も行くよね？」

【陽】

「ん、あんまり行きたくないんだけど」

【橙歌】

「えー、何でそんな事言うのさ。ノリが悪いなー」

【陽】

「何でって……」

【橙歌】

「もしかして、怖いのか？何か出そうだーとか？」

にやにや笑いながら橙歌が顔を覗き込んでくる。

【陽】

「いや、そういう訳じゃないけど」

別にそんな事を怖がってる訳じゃない。

ただ何となく、気が乗らないだけだ。

【橙歌】

「なら決定。今日の放課後に予定入れないで待っててね！ それじゃーねー」

【陽】

「って、勝手に決めるなよ」

適当な言い訳を探している間に、そういうことになってしまったらしい。

橙歌は勝手に言うだけ言うと、手をひらひら振りながら教室を出て行った。

【赤明】

「あ、橙歌、待ちなさいよ！」

すぐに赤明がその後ろを追いかけていく。

【黄牙】

「あいつら学食か？ 俺らはどつする？」

【陽】

「そつだな……」

昼食は学生食堂、通称学食か朝と同じ寮の食堂で食べる事が出来る。

寮の生活費には昼食分は含まれていないから、どつちで食べても損と言う事は無いんだが。

安くてメニューが1択の食堂か、それともメニューが豊富で多少割高な学食か。

【陽】

「今日は寮でいいや」

【黄牙】

「じゃ、俺もそうすっかな」

【陽】

「昼は学食じゃなかったのか？」

【黄牙】

「あれは朝飯食ってたらどうでもよくなった」

【陽】

「そうか。なら、さっさと行くか」

【黄牙】

「おう」

そういうわけで、寮へと向かった。

<学園 2年教室>

【橙歌】

「放課後だね！」

放課後になったと思ったら、待ちきれないとばかりに橙歌が声を上げた。

黄牙と赤明も荷物を持って集まってくる。

【橙歌】

「じゃ、早速行こ！」

【陽】

「ちよつと待て」

今にも飛び出していきそうな橙歌を引きとめる。

【橙歌】

「何？ 今更行かないなんて聞かないからね」

【陽】

「いや、外に出るとは思ってなかったから、財布持って来てないんだ」

学園の中だけなら、現金を持ち歩かなくても、カードだけで事が足りる。

しかも、カードケースが制服とセットになっているからカードを財布に入れる必要も無い。

入学当初は中々慣れなかったが、今では学園から出る用が無いなら財布は一つ持ち歩かないようになってしまっている。

うちの卒業生は財布を忘れる確率が高いというのは割りと有名な

話だったりする。

【黄牙】

「あ、俺もだ」

【橙歌】

「あ、そういえば、僕も持ってきてない……。それじゃ一回寮に戻ってから集合って事で」

学園の前を待ち合わせ場所に決めて、一度解散する事になった。

<道路>

部屋から財布だけ取って戻って来ると、赤明がもう待っていた。

【陽】

「早いな」

【赤明】

「ええ。」

私、財布持ってたから」

寮に戻らずにここで待っていたらしい。

【陽】

「でも、鞆ぐらい置いてきたら良かったのに」

【赤明】

「あ……そうね」

手に持ったままの鞆を指摘すると、明らかに、しまったという表情になる。

【陽】

「気づいてなかったのか」

【赤明】

「自然に持ってたから、ちょっと置いてくるわね」

赤明が寮の方に向かって行く。

が、すぐに足を止めてしまった。

【陽】

「どうした？」

【赤明】

「ちょっと遅かったみたい」

寮の方を見ると、橙歌が黄牙を引っぱりながら向かってきていた。

【陽】

「どうする？」

【赤明】

「うーん」

赤明は鞆と寮を何度か見比べて、

【赤明】

「いいわ、持って行く」

鞆を抱えなおしながらそう言った。

< 神社 石段 >

【黄牙】

「着いたな」

【陽】

「まだ着いては無いけどな」

神社の前まで辿り着いた俺達は、神社へと上る石段の前で自然に足を止めていた。

【赤明】

「改めて見ると、上る気を失くす階段ね……」

【陽】

「ん、そうだよな……」

神社へと続く石段は、かなりの急勾配だ。

通り過ぎる時に見かける位ならどつって事ないように見えるのに、いざ上るとなると凄く厳しそうに見える。

【橙歌】

「止まってもしょうがないじゃん。さっさと上っちゃおうよ」

【赤明】

「そうね。行きましようか」

【黄牙】

「おう、とつとと上っちゃおうぜ」

【陽】

「よしっ、行くか」

気合を入れて、石段へと足を踏み出した。

<神社 境内>

【黄牙】

「だー、疲れたー」

【赤明】

「やっぱり、この階段、ハード、ね」

【橙歌】

「いい運動に、なるねー」

【陽】

「子供の頃、こんなの登って遊びに来てたのか……」

ボロボロになった鳥居をくぐって、急な階段で乱れた息を整えながら境内を見回してみる。

急な階段も、おんぼろな神殿も、植えられている木も、昔と少しも変わらない風景で、

古ぼけた記憶と感情が胸の中にごみ上げてきた。

俺は、ここで

【赤明】

「城崎君？　どうかしたの？」

どうやら、記憶の中に潜ってしまっていたらしい。

ふと気がつくと、赤明が目の前に立っていた。

【陽】

「え、あ、いや、何でもない。それより、黄牙と橙歌は？」

【赤明】

「あー、あの2人なら」

赤明は苦笑しながら神社の神殿を指差す。

その中から、2人の騒ぐ声が聞こえてきていた。

【陽】

「いいのか、あれ」

【赤明】

「い、一応止めてはみたのよ。でも……」

【陽】

「聞くわけないよなあ」

取り壊し直前とは言え、勝手に踏み込むとは、バチとか当たらないだろうな。

【赤明】

「城崎君はどうするの？」

【陽】

「ん、ちょっと周りを見てみるよ。随分久しぶりだからさ」

【赤明】

「わかったわ。私は橙歌達と一緒にいるから」

【陽】

「了解」

赤明と別れて、神社の裏手へ向かう。

その途中に、木造の小さな小屋があった。

多分物置か何かだろう。

扉には「たちいきんし」と書いたプレートが貼り付けられ、南
京錠がかけてあった。

【陽】
「こじは……」

一瞬、記憶の底から、古ぼけた情景が浮かんできそうになる。

けれど、それは像を結ぶ前に、もう一度記憶の中に沈んでいってしまった。

俺がしっかりと覚えていないからなのか、それとも他の理由があるのか。

【陽】
「いや……思い出したくないだけ、か」

馬鹿馬鹿しい話だ。

目を背けても、過去にあった事は変わりはないってのに。

軽く頭を振ってもやもやした気持ちを切り替える。

扉に手を掛けて引っ張ってみるが、開く様子は無い。

立ち入り禁止にされてるんだから、当然か。

俺は、小屋から離れて神社の裏へと向かった。

< 神社 裏 >

神社の裏手は川に面していて結構な高さの崖になっている。

木の柵でぐるりと囲われているそこは、天然の展望台のようになっていて、川とその向こうの町並みを一望する事が出来た。

「ざあ、と風が吹き抜けて、

思わず目を覆った手をどけた時、その風景の中に、彼女はいた。

夕暮れのオレンジ色の光に照らされて、風に乱される長い黒髪を片手で押さえている。

【陽】

「あ、の……」

その姿を見たとき、俺は、なぜか声をかけていた。

少女の背にかけた声は、頼りなく風に散らされてしまう。

確かにそこにいるのに、今にも消えてしまいそうな、奇妙な存在感の無さ。

声を伝える大気の震えですら、彼女を容易く消し去ってしまいそうだった。

【陽】

「君は……」

今度は声が届いたのだろう。

少女がこちらを振り向く。

その姿は、初対面の筈なのに、何故か俺に懐かしさを感じさせた。

【??】

「あ………」

短い声を漏らした唇が驚きに開かれ、

そして、穏やかな笑みに形を変えた。

希薄だった存在感が増し、彼女の存在が幻想から現実に現れたとさえ感じる。

何か言おうと思っても、不思議な感覚に囚われて言葉を出す事さえ出来ない。

そんな俺に向かって、その少女はこう言った。

「ねえ　　虹を架けてみないかな？」

こうして、俺は彼女に出会い、

俺達の物語は　　始まった。

六月二日(その2)

< 神社 裏 >

「ねえ 虹を架けてみないかな？」

【陽】

「え……？」

虹を架ける。

彼女は確かにそう言った。

【??】

「私と一緒に。ね、陽君」

【陽】

「あ、ああ」

少女が手を差し出す。

彼女の言った言葉の意味さえ良く理解しないまま、

俺は引き寄せられるようにその手を取り、

【橙歌】

「その話乗ったー！」

【陽】

「うわっ！」

ぱっと手を離して振り返る。

そこには、橙歌達が3人揃って立っていた。

いつの間に来てたんだ。全然気がつかなかった。

【橙歌】

「僕も参加したいっ。ね、いいよね？」

【??】

「もちろん。歓迎するよ」

突然すぎる橙歌の申し出にも、少女は快く頷く。

【橙歌】

「赤明達もやるよね？」

【黄牙】

「俺は別に構わねえけど」

【赤明】

「ちょっと待ちなさいよ。」

やるやらないの前に、何をするのかすらわからないんだけど？」

【橙歌】

「へ？ 何って、虹を架けるんでしょ？」

【赤明】

「虹って、あの7色で空に出るアレ？」

【橙歌】

「そうそう。……で、いいんだよね？」

【??】

「うん、そうだよ」

【赤明】

「そうって言われても、ねえ？」

赤明が俺に視線を送ってくる。

いつもならここで赤明と協力して橙歌を止めるんだけど……

悪い、今回はお前の味方は出来ない。

【陽】

「いいんじゃないか。ほら、記念にはなりそうだし」

【赤明】

「城崎君!？」

赤明が裏切られた、と言いたげな表情になるが今回は仕方が無い。

理由はよくわからないけれど、俺はあの女の子に何かを感じていて、

何となくこの話に乗ったほうがいいような気がしている。

【陽】

「何か嫌な理由でもあるのか？」

【赤明】

「そういう訳じゃないけど」

【陽】

「だったらいいだろ？ な？」

【赤明】

「……仕方ないわね。付き合っわ」

言葉を重ねて頼むと、赤明が渋々と言う感じではあるが、頷いてくれた。

【陽】

「そういうわけで、全員参加だ」

【??】

「みんな協力してくれるんだね。ありがとう」

俺達を見てにっこりと笑う。

こうしていると、最初に感じた感覚がとんでもない間違いだったような気がするくらい、普通の女の子だ。

【黄牙】

「で、虹を架けるのはいいけどよ。何をすればいいんだ？」

【??】

「んーと、そうだね。まずは」

【みんな】

「まずは？」

【??】

「自己紹介かな？」

<神社 境内>

【橙歌】

「じゃ、僕からだね」

風が吹き付けてくる裏手から境内に場所を移したところで、橙歌が名乗りを上げた。

4分の3の面子が知ってるメンバーより、謎の女の子の自己紹介を先にした方がいいと思うけど。

【橙歌】

「陽、何か言いたそうだけど？」

【陽】

「ん、いや、別に」

【橙歌】

「そう？ ま、いや。僕は時雨橙歌。」

『しぐれ』じゃなくて』ときさめ』だからね。
はい、次は黄牙」

【黄牙】

「大陣黄牙だ。よろしく頼む」

【赤明】

「新嶋赤明よ。よろしくね」

何でお前らそんなにシンプルなんだよ。

それじゃ名前しかわからないだろ。

【陽】

「城崎陽だ。えーと」

……確かに言う事が思いつかないな。

ここで好きな食べ物は、とか言い出すよりは前の奴等に合わせとくか。

【陽】

「よろしくな」

【??】

「城崎………?」

【陽】

「どうかしたか?」

【??】

「あ、ううん、何でもないよ」

【赤明】

「それで、あなたは？」

私としてはそれを最初に聞きたかったんだけど」

【??】

「私は あ」

【黄牙】

「あ？」

【??】

「んーと……」

何故か困った風に唇に指を当てながら視線を彷徨わせる。

【??】

「そう、那美^{なみ}。那美^{なみ}って呼んで」

<那美

腰まで届く長い黒髪と黒い瞳

前髪の左側に矢羽の形の髪飾り>

那美ね……

「何だか悩んでいたけど、本名なんだろうか。」

【橙歌】

「那美かぁ、うん、よろしくね。僕の事は橙歌って呼んで」

あっさりその名前を受け入れる橙歌。

「こいつは単純と言うか何と言うか……」

【那美】

「うん。よろしく、橙歌」

【赤明】

「那美、ね」

【那美】

「どうかした？ 赤 新嶋さん？」

【赤明】

「……いいえ、なんでもないわ。私も赤明でいいわよ」

【那美】

「そう？ それじゃ、よろしくね、赤明」

ま、赤明が認めたならそれでいいか。

【橙歌】

「自己紹介も終わったし、次は？ 次は何するの？」

橙歌が子供みたいに目を輝かせている。

虹を架ける魅力にすっかり夢中みたいだ。

【那美】

「んー、今日はもう無理かな」

【橙歌】

「何でっ？」

【赤明】

「あのねえ、太陽がほとんど沈んでるのに、虹が出来るわけ無いでしょ」

【橙歌】

「そんなぁ……」

【黄牙】

「って事は、学校ある日は無理って事か」

【陽】

「無理とまでは言わないけど、厳しいだろうな」

詳しい虹のメカニズムなんてわからないけど、何となく、虹がで
きるのは昼のような気がする。

【那美】

「だから、目標は今週末になるかな」

【橙歌】

「ええ、まだ火曜日だよ？」

【赤明】

「はいはい。週末を楽しみに一週間過ごさなさい。それじゃあ、今日はこれで解散でいいかしら？」

【那美】

「あ、待って」

【赤明】

「何？」

【那美】

「えっと……」

那美の言葉は尻すぼみに消えていく。

さっきのは、理由は無いけど思わず呼び止めたという感じだった。

もしかして、彼女は

【陽】

「まだ話す事は色々あるけどさ、また明日でいいだろ？」

【那美】

「あした？」

【陽】

「ん、明日。那美は何か都合が悪いか？」

【那美】

「あ、ううん。全然そんなことないよ！」

那美は勢い良く首を振る。

【陽】

「じゃあまた明日。今日と同じくらいの時間に」

【那美】

「うん また明日」

【橙歌】

「ばいばい」

【黄牙】

「じゃーな」

【赤明】

「それじゃ、さようなら」

挨拶を交わして神社を後にする。

那美は、石段を下って姿が見えなくなるまで手を振って見送っていた。

<道路>

四人で固まって歩きながら、寮への道を辿る。

【赤明】

「妙な子だったわね、彼女」

【陽】

「名前の事か？」

【赤明】

「それもあんだけど、最後のあの態度も」

【陽】

「どう思った？」

【赤明】

「別れを惜しんでるようではあったけど、ちょっとね」

【陽】

「……そうだな」

まるで、俺達と別れたら1人きりになってしまっような。

こんな風に思うのは、出逢ったときの彼女が簡単に消えそうに見えるからだろうか。

【陽】

「何か、事情があるのかもしれないな」

【橙歌】

「気にしなくてもいいって」

思わず深刻な雰囲気になりかけていたところに、暢気な声で橙歌が割り込んで来た。

【陽】

「橙歌？」

【橙歌】

「どんな事情があたって、困ってたら僕達が助けてあげればいいじゃない」

【黄牙】

「おう。荒事なら任せとけよ」

黄牙が胸を張るけど……荒事って……

【赤明】

「簡単に言うのね。まだよくわからない相手の事なのに」

【橙歌】

「だって、僕達もう友達じゃんか」

友達って言うのは便利と言うか卑怯な言葉だ。

絶対思いつきで言っているだけの橙歌の言葉が、妙な説得力を持っているように聞こえる。

でも、橙歌が本気で言っているのがわかるから、心の中が暖かくなるのを感じた。

俺や赤明は、物事を複雑に、悪いように考えすぎなのかもしれない

い。

【陽】

「ん、橙歌の言うとおりだ。友達だよな」

【赤明】

「ええ。とりあえず、明日も逢いに行ってみましょう」

【橙歌】

「うん。また明日って約束したもんね。

あ……でも、あの神社、無くなっちゃうんだっけ。
なんだか、勿体無いな」

橙歌は少し寂しげな顔をしている。

彼女にも、あの神社の思い出があるのかもしれない。

【陽】

「仕方ないさ。大人の考えってのがあるんだろ」

【橙歌】

「そっか。……やだな、大人って」

ぼつりと零れた言葉。

そこに込められた意味は、俺が拾うより早く夕暮れの空に消えて行った。

夕食の後、特にする事も無かったから黄牙の部屋でだべっていた。

自然に、話題は今日の事になる。

【黄牙】

「それにしても、お前のタイプがああいう子だったとはな」

【陽】

「は？ 何言ってるんだ？」

思わず、まじまじと黄牙を見てしまう。

【黄牙】

「俺たちが行った時、お前ら見つめあってたじゃねえか」

【陽】

「いや、あれはそんなんじゃないんだって」

【黄牙】

「じゃあ、どんなんだよ？」

【陽】

「あーそれは……」

あの時那美を見ていたのは、彼女の不思議さとも言うものが原因だし、

彼女に覚える妙な感覚も、懐かしさに近いものだ。

間違っても、一目惚れだとかそんなのじゃない。

自分の中では明確な違いがあるのだが、それを他人に説明するのはどうも難しい。

などと頭を悩ませていたのだが、その思考は鳴り始めた黄牙の携帯に中断させられた。

メールにしては長々と着信音が鳴っている。

【陽】

「電話か？」

【黄牙】

「みたいだな」

黄牙は机の上の携帯を手取る。

【陽】

「誰から？」

【黄牙】

「唯鈴だ」

ぶっきらぼうに答えるが、表情がほころんでいるのが隠しきれない。

大陣唯鈴。黄牙の妹で、今は中学生。

俺もそれなりに仲良くしている相手だけど、体育会系な兄に似ず可愛い感じの女の子だ。

そして、黄牙はこの妹の事を、殊更に大切にしている。

兄妹の団欒を邪魔する事も無いだろう。

【陽】

「俺は部屋に戻るよ」

【黄牙】

「悪いな」

【陽】

「気にするな。さっさと出てやれよ。じゃ、お休み」

黄牙の部屋を後にする。

色々あったし、今日はもう寝よう。

六月三日

< 6月3日(水) >

< 学生寮 廊下 >

【黄牙】
「よう」

準備を終えて部屋を出ると、黄牙がドアの前の壁にもたれて立っていた。

いつもなら食堂で会うか、寝過ごしているんだが、珍しいこともあるもんだ。

【陽】
「おはよう。珍しいな、お前が先に起きてるのは」

【黄牙】
「まあな。食堂行こうぜ」

【陽】
「ん、そうだな」

黄牙と並んで食堂へ向かう。

その途中、黄牙が妙に真剣な顔で声をかけてきた。

【黄牙】

「なあ、陽」

【陽】
「どうした？」

そんな真剣な顔して、何かあったのか？

はっきり言って黄牙に似つかわしくない。不気味だ。

【黄牙】

「お前、唯鈴と、その、特別な関係になったりしてないだろうな」

【陽】

「……はあ！？」

そう来たか。

それは流石に想像できなかった。

【黄牙】

「電話で話してたら『お兄さん』の話ばかりだよ。

それに、この前はごちそうさまでしたって、お前何やったんだー
」！

あー、あったなそんな事。

多分この前商店街で会った時にクッキーの屋台を見かけて、物珍
しさに負けて2人で食べたやつか。

そう言えば、あれ、俺のおごりだったな。

【黄牙】

「確かに、お前はいい奴だし、唯鈴を任せられるのはお前ぐらいだと思ってる。」

いや、でも、それとこれとは別で……。

唯鈴、お前はまだ中学生なんだ。それはまだ早すぎるっ！」

【陽】

「いや、何もしてないから……」

お前の頭の中では、俺は唯鈴ちゃんに何をやってるんだ……

【黄牙】

「唯鈴が欲しければ、この俺を倒してからにしろ！」

【陽】

「俺がお前に喧嘩で勝てるわけ無いだろう、このシスコンめ」

これは落ち着いて話が出るまでしばらくかかるな。

こつこつというときのこいつは、放置するに限る。

<学生寮 食堂>

食堂に行くと、1人で食べている赤明を見つけた。

【陽】

「おはよう、赤明」

挨拶して、空いていた隣に座る。

【赤明】

「おはよう。」

「あら、今日は大陣君はいないのね」

【陽】

「ん、ちょっとな」

さっきの黄牙とのやり取りを説明する。

【陽】

「とまあ、そういう訳で放置してきた」

【赤明】

「あら、友達甲斐が無いのね」

【陽】

「赤明こそ、今日は橙歌と一緒にじゃないのか？」

【赤明】

「昨日の夜なんだかはしゃいでたみたいだから、まだ寝てるんじゃないかしら」

「まだ何日も前なのに、虹を架けるってイベントが楽しみではしゃいでいたのか。」

遠足前の小学生かよ。

【陽】

「起こしてやらないのか？」

【赤明】

「食べ終わったら起こしに行くわ。先に学校に行つてて」

【陽】

「それぐらいなら待つてるぞ？」

【赤明】

「女の子は男の子みたいに起きて5分で登校なんてできないの。色々あるんだから」

女の子の準備といえば、化粧とかか？

でも、橙歌も赤明もそんなのしてるようには見えないが。

うーん、わからない。

そんな事を考えていると、いつの間にか食べ終わっていた。

【陽】

「じゃあ、先に行つてるからな」

【赤明】

「ええ、また後でね」

まだ食事中の赤明を残して、トレイを手に立ち上がった。

<通学路>

一人で登校するのは久しぶりな気がする。

いつも、誰かしらが一緒だったからなあ。

【陽】

「黄牙を待ってた方が良かったか」

学園まで3分かないとは言っても、何となく物足りない。

誰か知ってる奴はいないかなって。

ぐるっと周りを見回してみる。

ん？

【陽】

「何だ、あれ？」

知っている人は見つからなかったが、妙な物は見つけた。

学園の塀の側に1冊のスケッチブックが落ちていた。

どっかで見たことがあるような気がするんだけど、どこだったっけな。

とりあえず、そのスケッチブックを拾ってみる。

サイズは多分A4くらいで名前は書いていないようだ。

なぜか、付箋が大量についている。

【陽】

「えーと、『説明』『応対』『挨拶』？」

中、見てもいいよな？

持ち主の手がかりがあるかもしれないし。

【陽】

「よし、開けるぞ」

一番最初の『説明』と書いてある付箋のページを開く。

そこには、太目の黒マジックで『私は喋れないので、筆談でお願いします』と書いてあった。

もう一ページめくってみる。

今度は『事故にあって、精神的なものだそうです』と書いてある。

『応対』の付箋のページには、1ページ目に『はい』、次のページに『いいえ』と書いてあった。

【陽】

「これって、風見のだよな」

風見 かぜみ
藍叉 あいの

交通事故に巻き込まれて、その時のショックで口が利けなくなっている、クラス替えの後の自己紹介で説明されていたクラスメイ
トの事を思い出した。

一時的なものらしいが、去年は別のクラスだったし、俺はまだ声を聞いたことは無い。

【陽】

「届けてやるか」

これが無いと困ってるかもしれないしな。

スケッチブックを閉じると、小走りで教室へと向かった。

<学園 2年教室>

【陽】

「さて、風見は……」

新年度が始まってもう二ヶ月だが、それほど親しくない相手の席の位置までは覚えていない。

教室を見回すと、教壇の目の前の席に2人の姿を見つけた。

羽みたいな髪止めをつけているツインテールが風見で、もう1人の方はその友人だ。

確か、夏原^{なつはら} 湖珠^{こたま}だったか。

<風見 藍叉

青い髪の毛のツーンテール。くくった状態で肩まで。瞳の色は緑髪をくくっている位置に、羽のような形をした髪留め>

<夏原 湖珠

茶髪のショートヘア。瞳の色は群青。

音符の飾りがついたカチューシャをつけている>

2人は、肩を寄せ合って小さなメモ帳を覗き込んでいる。

スケッチブックの変わりにしてるんだろっか。

何にしても、早く返してあげたほうがいいだろう。

【陽】

「風見」

声をかけると、2人が揃って振り向く。

風見は俺の顔を見て少し首をかしげた。

疑問なのはわかるが、これは「何？」だろうか、それとも「誰？」かもしれない。

なるほど、口が利けないと言うのは確かに不便だ。

【湖珠】

「えーっと、城崎君だよな？ どうしたの？」

困っていると、夏原の方が声をかけてくれた。

【陽】

「これ、来的时候に拾ったんだけど。風見のじゃないか？」

スケッチブックを差し出すと、風見の口が「あ」の形に開いた。

俺の手からスケッチブックを受け取ると、慣れた感じでページをめくり始めた。

【藍叉】

「……………」

途中で手を止めたかと思うと、スケッチブックを閉じてしまう。

【陽】

「えっと、どうかしたか？」

もしかして、どこか汚れたり破れたりしてたんだろっか。

そうだったとしてもそれは俺のせいじゃないんだが……

風見はスケッチブックを机の隅に押しつけ、机の中からスケッチブックを取り出した、って二冊目！？

さらに、制服の内ポケットからチェーンに繋がったマジックを取り出し、蓋を開ける。

あのチェーンはカードのケースについてるものだが、どうやら改造してるらしい。

スケッチブックのページにマジックを走らせて、こちらに向ける。

【藍叉】
『名前』

そのままスケッチブックを手渡される。

えっと、俺はどうすればいいんだ？

【湖珠】

「アイちゃんは城崎君の名前を教えて欲しいんだよー。書いて書いて」

夏原が俺の手に風見のマジックを握らせる。

【陽】

「ああ、そついう事が」

スケッチブックに書き込もうとすると、それほど長くないチェーンに引っ張られて、風見の体が近づく。

僅かに感じる女の子の香りに、急に気恥ずかしくなる。

何で俺の名前はこんなに画数が多いんだっ。

【陽】

「ほ、ほら。これでいいだろ、城崎陽だ」

出来るだけ手早く名前を書き、スケッチブックとマジックを風見の手に押し付ける。

風見は、そのページをしばらく眺め、次のページにマジックを走らせる。

【藍叉】

『陽 ありがとう』

それが俺に向けられた言葉だと気づくのにしばらくかかった。

筆談に慣れないからか、どうも会話のテンポが掴みにくい。

【陽】

「え、ああ、どういたしまして」

慌てて返事をする、風見はこくと頷き、スケッチブックを閉じて前に向き直った。

これは会話はおしまいって事か。

風見の席から離れると、なぜか夏原がついてくる。

【陽】

「どっした？」

【湖珠】

「私からもお礼。持ってきてくれてありがとう」

【陽】

「別にいいって。通学路と自分のクラスで面倒もなかったし」

【湖珠】

「そっか。でも、やっぱりありがとうだよ」

ぺこり、と頭を下げる。

【湖珠】

「それでね、ありがとうついでに、もう一つお願いしてもいい？」

【陽】

「お願い？」

【湖珠】

「あのね、これからもアイちゃんとお話して欲しいんだよ。アイちゃん城崎君とお話したそうだったから」

【陽】

「そっか？」

とてもお話ししたそうな態度には見えなかったけど。

【湖珠】

「だってね、城崎君が拾ってくれた定型文用のに

『ありがとうございました』も『お名前を教えてください？』もあるんだよ。」

【湖珠】
「でも、アイちゃんはわざわざ会話用のスケッチブックでお話してたから」

あの2冊にはそんな用途があつたのか。

【湖珠】
「アイちゃん、新しいクラスでお話してくれる人がいなくて、多分、寂しがつてるはずなんだよ。だからね」

そういう事か。

確かに、俺は風見が夏原と一緒にいるところしか見たことが無い。俺がさつき感じた会話のしにくさが、新しいクラスという環境で、風見を浮いた存在にしまっているのだろう。

【陽】
「ん、わかった。ちょっと気にしとくよ」

【湖珠】
「本当！？ ありがとうっ」

夏原の笑顔からは、風見の事を考えて本当に喜んでいるのがよくわかる。

【陽】
「風見の事、好きなんだな」

【湖珠】

「うんっ。親友なんだよっ」

こんな娘の親友なら、風見と仲良くなればまた楽しくなりそう
だ。

俺は、そんな事を思いながら風見の席に戻っていく夏原を見送っ
た。

<学園 2年教室>

午前の授業が終わって昼休みになった。

【陽】

「飯食いに行こう……ってあれ？」

今授業が終わったばかりなのに、もう黄牙の姿が消えていた。

もしかして、朝放置したのを根に持つてるのか？

【陽】

「なら橙歌か赤明と……ってあいつらもないし！」

可能性は食堂か学食か。

ここでミスをすれば1人寂しい昼食に……

【陽】「……学食に行ってみるか」

<学園 学生食堂>

【陽】「外したかあ……」

全部のテーブルを回って探してみたが、1人も見つけることができなかった。

俺は、がつくりと肩を落として食券を買う列の後ろに付いた。

見つけれなかったんだから仕方がない。

さっさと食べて教室に戻ろう。

そんなことを考えながら順番を待つ。

【陽】「さて、何を食べようか うおっ！」

突然の騒音に思考を中断させられる。

俺の並んでいた券売機がアラームを鳴らしていた。

【陽】「『玉手箱』か……。くそっ、厄日だ」

この学園に通っていれば誰だって遭遇するだろう、カードリーダーの誤作動だ。

いや、本来は不正使用を知らせる音だけど、実際のところはほぼ100%誤作動だ。

原因がよくわからない上に、うるさい、学生権限のカードでは止められない仕様の三重苦で、迷惑なびっくり箱＝玉手箱と呼ばれている。

事情を把握して、並んでいた生徒が散っていく。

また他の券売機に並び直しか……数は沢山あるのが救いだけど。

【陽】

「ん？」

人のいなくなった券売機の前で、女の子が一人立ち尽くしていた。事情を知らない1年生だろうか。

気がついたのに放っておくわけにもいかないよな。

【陽】

「あのさ」

【??】

「心配しなくても大丈夫だよ。結構よくあることだから」

声が被った。誰かが同時に声をかけたらしい。

にしても、よく知ってる声だったような。

視線を左に移す。

そこには、小柄な女子生徒が1年生の子に話しかけていた。

1年生の子よりも身長は小さいのに、制服を窮屈そうに押し上げる胸のふくらみがどうしても目を引く。

【??】

「ここは私に任せて、お昼ご飯を買いに行つてね」

【女子生徒】

「でも……」

女子生徒は明らかに戸惑っている。

これは多分勘違いをしてるんだろうな。

【陽】

「みどり緑璃先輩」

【緑璃】

「あ、陽君。こんにちは」

【陽】

「こんにちは、先輩」

【女子生徒】

「え、先輩？」

先輩、にアクセントを置いて話しかけると、案の定女子生徒が目を丸くする。

くはしり
九走

みどり
緑璃先輩。

こつ見えても最高学年の3年生だったりする。

く九走 緑璃

腰まで届く長い緑色の髪（那美よりは少し短い）。瞳の色は青。頭の両サイドに小さな黄色いリボンを結んでいる。小柄で童顔、でも巨乳>

俺と特に関係のある人じゃないけど、何となく顔見知りで会えば立ち話をする程度の仲だ。

【緑璃】

「そう、先輩。だからお姉ちゃんに任せて、ね？」

【女子生徒】

「あ、すみません。その、よろしくお願いします」

胸を張る先輩に頭を下げつつ女子生徒が立ち去っていく。

あのすみませんは、多分間違えてた事に対してだろうなあ。

【陽】

「先輩、制服に学年を示すものがあつた方がいいと思いませんか？」

【緑璃】

「陽君？ それ、どういう意味？」

じろつと横目で睨まれた。

【陽】

「いえ、特に深い意味は無いですけど」

先輩の視線を避けてまだ鳴り続けている券売機に向き直る。

【陽】

「どうするんですか、これ？」

【緑璃】

「うーん、どうしようか。陽君、権限強化してる？」

権限強化と言うのは、カードの機能拡張の事だ。

内容は多岐に渡るが、部長が部室の鍵を開けられるようになったりとかそんな感じだ。

【陽】

「残念ながら。長のつく役職でも生徒会役員でもありませんから」

【緑璃】

「私もそうだよ。じゃあ、先生呼んでこようか」

【陽】

「それしかないですね」

【??】

「あの」

【緑璃】

「どうしたの？」

俺達に声をかけてきたのは、1人の女子生徒だった。

後ろに、『玉手箱』に遭ったさっきの女子生徒もついて来ている。

【??】

「私のカードを使って下さい。私、クラス委員長ですから」

【緑璃】

「そつなの？　ありがとう」

【陽】

「俺がやりますよ。先輩はそっちの相手をして下さい」

【緑璃】

「うん、お願いしちゃうね」

緑璃先輩を経由してカードを受け取り、表記に目を通す。

南雲なぐも 紫苑しおんっていつのか。

<南雲 紫苑

背中 of 真ん中辺りまでの紫色の髪。瞳の色は赤の強い紫色。
横髪にシンプルな赤いヘアピンを一本ずつ挿している>

1年生のクラス委員長で権限はレベル1+。

確か、職員用コピー機の使用と一般教室の開錠、それと券売機の解除ができるはずだ。

委員長と券売機に関係はないと思うのだが、どうせなら全員のカードにつけてもらいたい。

カードリーダーにカードをかざし、取り消しボタンを押す。

軽い電子音が鳴って、アラームが止まった。

【陽】

「はい、ありがとう」

【紫苑】

「いえ、失礼します」

紫苑はカードをしまつと女子生徒と一緒にさっさと立ち去って行った。

【陽】

「やれやれ、やっと昼飯にありつける……」

【緑璃】

「ごめんね、つき合わせちゃって」

【陽】

「緑璃先輩が謝る事ないですよ。先輩がいなくても声かけてましたから」

【緑璃】

「そっかあ。うん、陽君は良い子だね。ご褒美をあげちゃおう」

【陽】

「ご褒美？」

【緑璃】

「ふふ、ちよっと屈んで？」

【陽】

「はあ」

よくわからないが、言われた通りに腰を屈める。

【緑璃】

「それじゃあ行くよ」

【陽】

「え……」

緑璃先輩はすつと体を寄せてくると、すつと背伸びをして、

【緑璃】

「よしよし」

頭を撫でてくれた。

何が嬉しいのか、満面の笑みだ。

【陽】

「あの、恥ずかしいんですけど」

【緑璃】

「先輩のご褒美は黙って受け取るのがいい後輩だよ。もうちょっと、
ね」

いい笑顔で言われるとどうも断り難い。

結局、先輩が満足するまでたつぷりと撫でられてしまった。

【緑璃】

「うん、満足満足」

【陽】

「何でのご褒美あげた方がご機嫌なんですか……」

【緑璃】

「ふふ、それじゃあ何かおごってあげる。それでいいよね？」

【陽】

「そこまでしてもらうのは悪いですよ」

【緑璃】

「陽君、先輩のご褒美は？」

【陽】

「黙って受け取るのがいい後輩でしたね。わかりました。それじゃ」

緑璃先輩にジュースを一本買って貰って、いつもより少し豪華な昼食を2人で楽しんだ。

<神社 境内>

【黄牙】

「だー、疲れたー」

【赤明】

「やっぱり、この階段、ハード、ね」

【橙歌】

「いい運動に、なるね……」

【陽】

「昨日も、同じこと、言っただけだったか？」

放課後、デジャヴを感じる会話をしながら、神社までの石段を上りきる。

【橙歌】

「あれ？　ね、何か聞こえない？」

こいつは、昨日の話をまだ引つ張ってたのか。

【陽】

「だから、俺は怖くて来るのを嫌がってたんじゃないって」

【橙歌】

「そうじゃなくって、ほんとに聞こえるんだって」

【赤明】

「そうね……確かに聞こえるわ」

【陽】

「赤明まで……」

耳を澄ませる。

【陽】

「……本当だ」

【黄牙】

「これは、歌か？」

【赤明】

「そうね。あら、この歌って」

よく聞いてみると、その歌は音楽の教科書にも載っているような

有名な曲だった。

【黄牙】

「裏の方から聞こえてくるな」

【橙歌】

「じゃあ、これ那美が歌ってるのかな？」

【黄牙】

「行ってみりゃわかるだろ。行こうぜ」

【陽】

「あ、待てよ」

<神社 裏>

崖側に回ると、一気に歌声がクリアになる。

【黄牙】

「ありゃ？」

そこで川の方を向いて歌っていたのは、那美ではなかった。

【陽】

「夏原と風見？」

歌っている夏原はまだ気づいていないが、柵に背中を預けていた風見はすぐに俺達に気がついた。

閉じていた瞳を開いて、唇に指を当てたジェスチャーを送ってくる。

【黄牙】

「うちのクラモがもっつ」

気にしないで発言しようとした黄牙の口を素早く塞ぐ。

横目で見ると、橙歌も赤明に口を押さえられていた。

俺達が沈黙したのを確認すると再び目を閉じた。

それに倣って目を閉じてみる。

相変わらず風が吹いているが、それに負けずに歌が響いてくる。

歌の事はよくわからないけど、素直に上手いと思う。

俺達は、しばらく夏原の紡ぐ旋律に身を委ねていた。

<神社 裏>

【湖珠】

「ふう。アイちゃん、どうだっ……た」

1 曲歌い終えて、振り向いた夏原が目を丸くする。

【湖珠】

「え？ 何で、何でみんないるんだよー!?」

【藍叉】

『知らない 歌ってたら来た』

【湖珠】

「えっと、城崎君？」

【陽】

「ん、ここで友達と待ち合わせしてるんだ。夏原は？」

【湖珠】

「えっとね、私は時間つぶし。この後、歌のレッスンがあるんだよ」

【陽】

「ああ、習ってたのか」

そりゃ上手いわけだ。

【湖珠】

「えっと、どうだったかな？」

【陽】

「ああ、上手だったと思うぞ」

【湖珠】

「ほんとう？」

【橙歌】

「ほんとほんと！ 僕、聞きほれちゃった」

興奮気味に橙歌が割り込んでくる。

赤明に口ふさがれてなかったら邪魔してたくせによく言っよ。

【湖珠】

「えへへ、嬉しいな。あ、でもね、アイちゃんはもっと上手なんだよ」

【陽】

「風見が？」

【湖珠】

「そうなんだよ。コンクールで優勝した事もあるんだから」

えっへん、と何故か夏原が胸を張る。

【陽】

「優勝か。それは凄いな」

【赤明】

「でも、風見さんは、その……」

【黄牙】

「喋れないんだろ？」

こいつ、聞き難い事をはっきりと……

【藍叉】

『事故に遭ったのは春休みだから』

【湖珠】

「それにね、怪我とかじゃなくてシヨックを受けたただけだから、すぐに声を出せるようになるはずってお医者さんにも言われているんだよ」

【橙歌】

「そうなんだ。だったら、治ったら僕にも藍又の歌を聞かせてくれる？」

風見は少し困ったような顔で、曖昧に頷いた。

すぐに治るはずなのに、2ヶ月も経った今も風見の声は戻っていない。

この話題にはあまり触れないほうがいいかもしれない。

【陽】

「こら、あんまり無茶な事言つなよ」

【赤明】

「そつよ。風見さんはまずは治る事だけ考えてね」

【藍又】

『ありがとう』

【湖珠】

「あ、私そろそろ行かなきゃなんだよ」

夏原が時計を見て、地面に置いてあった鞆を手取る。

【藍叉】

『それなら 私も』

さつきから風見が毎回スケッチブックに書き込んでいるのは、俺達との『会話』を楽しんでいるからなんだろうか。

朝に夏原とした会話を思い出す。

【湖珠】

『アイちゃん、新しいクラスでお話してくれる人がいなくて、多分、寂しがつてるはずなんだよ』

【陽】

「風見も一緒に行くのか？」

俺は、つい風見に声をかけていた。

【藍叉】

『私はこれから帰る』

【陽】

「だったらさ、俺達と遊んでいかないか？」

夏原に気にしておくって約束したし、

何より俺自身、風見と友達になりたいと思っている。

俺たち4人にいきなり1人で加わるのは気が重いかもしれないけれど、

同じ新メンバーの那美がいれば少しは気も楽だろう。

【陽】

「みんなもいいだろ？」

一応確認してみると、みんな快く頷いてくれる。

【陽】

「実はさ、俺達、虹を架けようって話をしてるんだ」

【橙歌】

「そうそう。僕達も昨日から始めたばかりでまだ訳わかんないけど、絶対楽しいよっ」

【赤明】

「どうしていきなり不安要素を突きつけるのよ」

【橙歌】

「え？ 理解不能とか意味不明って聞いたらすっごいドキドキしない？」

【赤明】

「普通は引くわよ」

【橙歌】

「そうかなあ……」

そうだって。

【陽】

「まあ、こいつの言ってる事はともかくとしてだ。一緒にやってみないか？」

【湖珠】

「アイちゃん、やってみたら？ 放課後は私もあんまり一緒にいられないし」

口々に言われた風見は、しばらく迷ってから、手元に向けたスケッチブックに何かを書き込む。

どっちだ……っ。

緊張の一瞬が過ぎ、スケッチブックがこちらに向けられる。

【藍叉】

『ヤー』

【陽】

「……え？」

【黄牙】

「……はあ？」

【赤明】

「……えっと」

【橙歌】

「やー??」

全員が揃って首を傾げていた。

それはどつちなんだ!?

幼児語で嫌って言うてるのか?

それとも、何か深い意味がその2文字に込められているのか?

【湖珠】

「そっかー。じゃあみんな、アイちゃんの事よろしくだよっ」

夏原だけが理解できたらしく、頭を下げてから「遅刻だー」とか叫びながら走り去っていった。

【陽】

「あの反応からして、OKでいいのか?」

本人に確認すると、一つ頷いてスケッチブックに何かを書き足す。

【藍叉】

『やー yah』

なるほど、それか。

【橙歌】

「えっと、結局どつちという意味なんだ?」

【黄牙】

「俺もわからねえな」

【赤明】

「yesと同じよ」

赤明の説明でようやく理解した2人が頷く。

【黄牙】

「これで6人目ってことか」

【藍叉】

『6人？ もう1人は？』

【陽】

「ん、那美が来たらちゃんと紹介するよ」

<神社 境内>

数分して、境内の方で合流できた那美に、ざっと事情を説明する。

【陽】

「そういう訳で、新メンバーの風見藍叉だ」

【藍叉】

『よろしく』

【那美】

「うん。私は那美、よろしくね」

いきなり勝手にメンバーを増やしてしまったが、那美は快く迎えてくれた。

良かった良かった。

そっぴや、風見は朝は俺の名前もわからなかったみたいだっただ、ど

俺以外の学園メンバーの事は知ってるのか？

【陽】

「なあ風見。こいつ等は紹介しなくても大丈夫なのか？」

風見は俺以外のクラスメイトの顔をぐるりと見回す。

スケッチブックのページを少し戻して、マジックと一緒に差し出す。

そのページには、俺の名前と風見の『名前』という字が書かれていた。

やっぱりわかってなかったのか。

【陽】

「このページに自分の名前書いてやってくれ」

圧倒的に言葉が足りない風見の代わりに補足をする。

マジックとスケッチブックが全員の手を渡って、寄せ書きみたいになって風見の手に戻る。

風見は、1人1人の名前を呼ぶように、全員の名前を指でなぞる。そして、新しいページに5つの名前を書き込んだ。

その名前の下に、もう一言。

【藍叉】

『陽 赤明 橙歌 黄牙 那美 私は風見藍叉 よろしく』

それは確かに音としては伝わらないけれど、

確かに風見の『声』が聞こえた気がした。

< 学生寮 213号室 >

ドンドン、と扉が叩かれた。

【陽】

「はい、はい」

扉を開けると、赤明と橙歌が立っていた。

赤明は手に電気ポットを持っていて、橙歌は色々和小物の入った籠を提げている。

【赤明】

「こんばんは。今、大丈夫かしら？」

【橙歌】

「やっほー。暇だよね？」

【陽】

「ん、大丈夫だ。いつものか？」

【橙歌】

「そだよ。黄牙は？」

【陽】

「自分の部屋だろ」

【橙歌】

「じゃ、呼んで来るね。赤明達は準備よろしく」

持って来た籠を渡して、橙歌が部屋を出て行く。

籠の中を覗いてみると、紅茶のパッケージが見えた。

前はインスタント珈琲だったけど、変えたのか。

【陽】

「それじゃ、入ってくれ」

【赤明】

「お邪魔します」

赤明を部屋に招き入れる。

【赤明】

「コンセント借りるわね」

【陽】

「ん、その辺のやつ使ってくれ」

赤明がポットのコンセントを繋いでいると、橙歌と黄牙が部屋に入ってきた。

【橙歌】

「来たよー」

【黄牙】

「おーす。ほれ、座布団」

【陽】

「お、サンキュ」

黄牙が抱えてきた座布団を並べる。

【赤明】

「城崎君、カップは？」

【陽】

「いつもの棚にあるだろ」

【橙歌】

「ねえ、お菓子は？」

【陽】

「あー、クッキーがあったような……」

棚の中を探すと、クッキーは無かったが、スナック菓子の袋が見つかった。

【陽】

「これでいいか？」

【橙歌】

「あ、オツケーオツケー」

【赤明】

「お茶も入ったわよ」

紅茶の入ったカップと、お菓子の袋をテーブルに並べて、その周りに座る。

これが、気が向いたときに開かれる、俺達の「お茶会」だ。

この面子で仲良くなって、最初は何となく集まってだべっていた程度だったのだが、いつの間にか備品が充実していった、今ではこんな感じになっている。

俺の部屋に集まるのは、男子が女子階に行きにくいのと、黄牙の部屋が汚いからだ。

使う道具も、全部俺の部屋に置いておくと狭くなるから、毎回各自が持ち寄る形で落ち着いている。

そして、やっている事はと言うと、結局最初と変わらずだべって
いるだけだったりする。

【橙歌】

「それにしても、藍又って面白いよね。スケッチブックを使って喋
るって」

言いたい事はわかるが、その言い方はどうだろう。

【赤明】

「橙歌、その言い方は風見さんに失礼よ」

【橙歌】

「何で？」

ここで心底不思議そうな顔をする所が橙歌らしい。

要するに、欠片も悪意が無くて、純粹に思った事を言っただけな
んだろうけど。

【陽】

「スケッチブックを使わないと喋れない、んだ。面白がる事じゃな
いって事」

【橙歌】

「あ、そっか……ごめん」

【赤明】

「あなたの事だから、悪気があって言っているんじゃないのはわか

っているけど。気をつけてね」

【橙歌】

「うん、わかった。気をつけるよ」

真面目な顔で頷く橙歌。

基本的に考えの足りない奴ではあるが、無神経な奴ではない。

風見の事は、大丈夫だろう。

【黄牙】

「でもよ、何でスケッチブックなんだろうな。普通は手話とか使うもんじゃねえのか？」

【陽】

「これから先ずっと喋れないって訳じゃないからだと思うけど」

覚えた事が無駄になりはしないだろうが、絶対に必要じゃないのなら、覚えなくてもいいのだろう。

【赤明】

「そうね。夏原さんも、すぐに声が出るようになるはずって言うていたし」

【黄牙】

「ああ、そういう事が」

【陽】

「多分だけどな」

【橙歌】

「ね、誰か1年の時に藍又と話した事ってある？」

【赤明】

「私は無いわね。違うクラスだったし」

【黄牙】

「俺もだ」

【陽】

「同じく」

そもそも、俺達は同じクラスだったのだから、赤明が違うのなら、当然、全員が風見とは別のクラスって事になる。

【橙歌】

「うーん、じゃあ藍又がどんな風に喋ってたかわかんないのか」

【黄牙】

「今だって喋ってるじゃねえか」

【橙歌】

「口で喋っても同じかどうかわかんないじゃんか。
書くのが面倒でああなのかもしれないし」

【陽】

「それは確かに」

風見の口調(?)は、必要な単語だけで構成されている感じだ。

悪いとは言わないが、昔からあんな感じだったのだとすれば、中々珍しい。

【赤明】

「気になるなら、夏原さんに聞いてみたらいいんじゃないかしら？
随分と仲が良いように見えたわ」

【橙歌】

「そっか。じゃあ、今度湖珠に聞いてみよつと」

そんな風に話しながら、夜は更けていった。

六月四日

<6月4日(木)>

<学生寮 214号室>

【陽】

「黄牙ー、朝だぞー」

声をかけながら部屋に上がり込む。

目的の人物はと言うと、暢気にベッドの上で寝息を立てていた。

【陽】

「黄牙、起きろ。朝だぞ」

【黄牙】

「…………んあ…………ぐう…………」

体を揺ると、意味不明な呻き声を発して、布団に潜って行く。

【陽】

「はあ…………起きろって言ってるだろうが！」

【黄牙】

「うわぁー！」

結局、いつものように、黄牙をベッドから叩き落すのだった。

【橙歌】

「やつほー。おっはよー」

【陽】

「おはよ」

【黄牙】

「おっ」

【赤明】

「おはよう」

【黄牙】

「朝飯は？」

【橙歌】

「鮭だって」

食堂の入り口で合流して、朝食を受け取る。

【赤明】

「どこか空いてる？」

【橙歌】

「んーっと……。あれ？　なんか飛んでる？」

食堂を横切って何か白いものが飛んでいる。

あれは……

【陽】

「紙飛行機？」

【黄牙】

「おい、こっち来てねえか」

【橙歌】

「お、ほんとだ。よっ、とっ」

トレイを片手に持ち替えた橙歌が手を伸ばしてジャンプ。

朝食が盛大に飛び跳ねる。

【陽】

「トレイ持ったまま跳ねるなっ」

【橙歌】

「じゃあお願いっ」

【陽】

「投げる奴があるかっ!!」

自分の分を片手で支えて、飛んでくるトレイを何とか受け止める。

【陽】

「お、ちょ、ととと」

無理、絶対無理！ 落ちるって！

【赤明】

「もう、何やってるのよ」

自分のを黄牙に預けた赤明が手を伸ばして支えてくれた。

黄牙は両手に1つずつのトレイを危なげなく持っている。

【橙歌】

「取ったっ。あ、何か書いてる」

橙歌が紙飛行機を広げる。

【橙歌】

「入り口から3列目？」

【陽】

「3列目？」

指定されたテーブルの方を見る。

【赤明】

「あら、風見さんじゃない」

風見と夏原が隣同士に座り、対面に4つ席が空いていた。

【黄牙】

「取っといってくれてんのか？」

【陽】

「ん、そうみたいだな。行くか」

朝食のトレイをそれぞれ持ち直し、テーブルへ向かう。

【藍叉】

『おはよう』

【湖珠】

「みんな、おはよー」

【陽】

「おはよう。席取っておいてくれたんだな、サンキユ」

【藍叉】

『みんなで食べたかったから』

【赤明】

「そうなの？ ありがとう」

風見が取ってくれていた席に座る。

【陽】

「ところで、風見の朝飯はどうしたんだ？」

夏原の前には食べかけの朝食が置いてあるが、風見の席にはコッ
プ一つ無い。

たまに朝は食べない派の人間がいるけど、風見もそうなんだろう

か。

【藍叉】
『もう食べ終わった』

【陽】
「そうなのか。早いな」

【湖珠】
「アイちゃんは食べながらお話できないから、超特急で食べてたんだよー。」
ザ・早食いなんだよ」

【藍叉】
「っ!!」

風見がスケッチブックを一閃。

スパーンとギャグみたいな音が響いた。

【黄牙】
「あれは痛えぞ……」

【湖珠】
「うう〜。私涙目だよ〜」

【藍叉】
『女の子に早食いは失礼』

【赤明】

「あはは……。私たちも食べましょうか」

【陽】

「ん、そうするか」

【橙歌】

「それじゃ、いただきまーす」

<学園 2年教室>

【教師】

「今日はここまでにしよう。号令」

【クラス委員長】

「起立、礼」

今日も最後の授業が終了、放課後がやって来た。

【藍叉】

『今日も 神社に行くの?』

【陽】

「そ、昨日は結局自己紹介だけで終わったしな」

【赤明】

「あら、一昨日も自己紹介だけだったわよ」

【陽】

「そついやそつだったな」

【橙歌】

「今気づいたけど、僕達まだ何にもしてないじゃん！」

【陽】

「今頃気づいたのかよ」

【橙歌】

「うわぁ、もう1秒も無駄に出来ないよ。急ごう！」

【陽】

「あ、おい待てよ！」

俺達はまだ誰も帰り支度できてないってのに。

1人で飛び出してどうするんだよ……

【黄牙】

「なにやってんだ。さっさと追いかけてよせ」

【陽】

「ん、そつだな」

黄牙と赤明が荷物を取りに、席に戻る。

【陽】

「風見は準備できてるのか？」

風見はこくりと頷き、手に持った鞆を掲げる。

【陽】
「お前も準備早いんだな」

朝もそうだったけど、もしかしてかなり楽しみにしてるのか？

ちょっと聞いてみるか。

【陽】

「なあ、風見は俺達と一緒に何かやるの、楽しみか？」

【藍叉】

『どっしょっ？』

【陽】

「いや、昨日は結構無理やり誘ったけど、迷惑じゃなかったかと思
つてね」

【藍叉】

『そんなことない 凄く楽しみ』

【陽】

「そうか。ならいいんだ」

予想以上にストレートに言ってくれるんだな。

折角だからもう少し聞いておくか。

【陽】

「ちなみに、どの位楽しみなんだ？」

風見は、少し考えてからスケッチブックに書き始める。

【藍叉】

『すごくドキドキして 今朝は5時に目が覚めた』

【陽】

「そ、そうか」

そんなに楽しみにされてたのかよ!?

こんな予想外のプレッシャーをかけられるとは。

【藍叉】

『どうかしたの?』

【陽】

「え、いや、何でもないよ。はははは」

不思議そうに見てくる風見を誤魔化しながら、濁いた笑い声を上げるしかない俺だった。

< 駅前 >

【陽】

「あれ、橙歌だよな」

学園を出た俺達が橙歌に追いついたのは神社への石段の手前だっ

た。

石段の傍にしゃがんで何かをしているみたいだけど。

【黄牙】

「あいつ、あんな所で何やってんだ？」

【赤明】

「行ってみましょうか」

<神社 石段>

【赤明】

「橙歌？ 何してるの？」

【橙歌】

「あ、赤明。これ……」

橙歌が体をずらした所から覗き込む。

そこには、灰色の毛並みの犬が目を閉じて横たわっていた。

小さく見えるが、犬の種類には詳しくないから小型犬なのか子供なのかはわからない。

【黄牙】

「こいつ、生きてんのか？」

【橙歌】

「生きてるに決まってるじゃんか。暖かいし、息してるし」

黄牙の無神経な一言に橙歌が噛み付く。

でも、そう言いたくなる黄牙の気持ちもわからないでもない。

【藍叉】

『弱ってる？』

【橙歌】

「わかんない。ただ寝てるみたいにも見えるし……」

【陽】

「参ったな……」

見つけてしまった以上放り出すのも気が引ける。

でも、弱っているにしても、寝ているにしても、できる事なんて思いつかない。

どうやら、それは他のみんなも同じらしい。

【緑璃】

「どうしたの？ そんな所に固まって」

【陽】

「うわっ、緑璃先輩？」

頭を抱えていると、いつの間にか小柄な先輩が面子に混ざって

た。

【陽】「先輩こそ、どうしたんですか？」

【緑璃】「ちょっとお買い物だよ。陽君達は？」

【陽】「まあ、遊びに来たんですけど、犬を見つけちゃって」

【緑璃】「犬？」

【陽】「はい、何か寝てるみたいなんですけど、弱ってるのかなとも思っ
て」

【緑璃】「ちょっと見せてくれるかな？」

【陽】「もちろん、いいですけど」

緑璃先輩に場所を譲る。

先輩は、犬のあちこちを見たり触ったりし始めた。

【陽】「何かわかりますか？」

【緑璃】

「……多分だけど、弱ってるんだと思うな」

【赤明】

「病気か何かですか？」

【橙歌】

「大変っ。病院に連れて行かないと！」

【緑璃】

「違っよ、橙歌ちゃん」

先輩は首を横に振る。

【緑璃】

「この子はね、もう時間がほとんど残っていないの」

【陽】

「先輩、それ……」

寿命で死にかけていると言わなかったのは先輩の優しさだろう。

それでも、その意味はきちんと伝わったようだった。

【橙歌】

「そんな……」

【緑璃】

「動物は、私達よりもずっと短い間しか生きられないんだよ。」

この子は、まだ今すぐどうなるって程ではないと思っけど」

【陽】

「先輩、詳しいんですね」

【緑璃】

「うん……私も、昔飼ってたからね」

先輩は悲しげな顔でそう言った。

多分、先輩はその飼っていた動物の死に目を見た事があるのだから。

【陽】

「……すみません」

【緑璃】

「うっん、気にしないで」

先輩は犬の傍から立ち上がり、膝についた土を掃う。

【緑璃】

「もう、私達にできる事はないんだよ。さ、みんなもう行って」

【橙歌】

「そんなっ、先輩酷いよっ。どうしてそんな事が言えるのさ!？」

【緑璃】

「だったら、橙歌ちゃんには何ができるのかな？ この子に、何を
してあげられる？」

【橙歌】

「それは……僕達で面倒を見てあげるとか……」

【緑璃】

「でも、私達はみんな寮に住んでるんだよ？ ペット禁止なのは知ってるでしょう？」

子供を諭すみたいに、先輩は優しく語りかける。

経験上橙歌がその位で納得するような奴とは思えないが……

【橙歌】

「それだったら、寮じゃない場所だってっ。公園とか、学校とかっ」

やっぱり収まらなかったか。

だが、橙歌の言うようにはできない。

公園に連れて行っただって環境はこの場所と変わらないだろうし、見つかったら即処分されてしまいそんな学校なんて論外だ。

【陽】

「橙歌、お前ちょっと落ち着けよ」

【橙歌】

「僕は落ち着いてるよっ。陽も見捨てた方が良いつて言っの!?!」

【陽】

「違つつて、お前に人の話をちゃんと聞けつて」

【緑璃】
「待つて、陽君。私に、お話させて」

【陽】
「先輩……。はい、わかりました」

【緑璃】
「ありがとう」

先輩は、そつと犬を抱き上げた。

目が覚めていたのか、犬が青っぽい瞳で先輩を見上げる。

何か訴えかけているようなその瞳に、先輩は気づかないように振舞った。

【緑璃】
「橙歌ちゃん。この子はね、今はこの子だけの命なの」

でもね、と続ける。

【緑璃】
「手を差し出したら、その瞬間から、その命に対する責任を負わな
いといけない。」

それは、何があつても、どんな事があつても、最期まで消えない
の」

【緑璃】

「可哀相なんて同情だけじゃ抱えられない責任を、
この子と一緒に背負う覚悟は、橙歌ちゃんにある？」

橙歌に差し出される、小さな命。

小さなその体が、途方もなく重く見えた。

橙歌は、唇を噛み締めながら手を伸ばし、

けれど、その体を受け取る事はなかった。

【緑璃】

「その覚悟を持ってない人には、命を預かる資格は無いんだよ」

先輩が犬をそつと地面に下ろす。

重苦しいほどの沈黙が続いて、誰も、何も言えなかった。

俯いてしまった橙歌を、赤明が黙って抱き寄せる。

でも、俺は橙歌に厳しい言葉をかけた緑璃先輩が、一番傷ついているような、そんな気がした。

その時、

【??】

「そんなに言わなくてもいいんじゃない？」

沈黙を破ったのは、新しい人物の声だった。

声の方向を見ると、那美が石段を下って来ていた。

【陽】

「那美!？」

【那美】

「上にいたんだけど、話し声が聞こえたから降りて来たの」

【陽】

「ん、そうだったのか」

途中から結構ヒートアップしてたからな。

石段の上の神社まで声が届いてたのか。

【那美】

「んと、緑璃、でいいのかな？」

【緑璃】

「うん、そうだけど……」

【那美】

「じゃあ緑璃。緑璃はこの子が1人寂しく死んじゃった方がいい、なんて思ってる訳じゃないよね？」

【緑璃】

「当たり前だよ!」

【那美】

「そう。なら、この子は私が責任持って面倒見るよ」

【橙歌】

「本当!？」

【那美】

「私は、出来ない事は言わないよ」

【陽】

「大丈夫なのか？」

【那美】

「うん。私に任せて」

【陽】

「ああ。頼むな」

那美にどんな心当たりがあるのかはわからないが、俺達に手段が無い以上は那美に託すしかない。

那美は頷き、犬を抱き上げる。

【那美】

「会ったばかりで悪いけど、この子連れて行くね」

【陽】

「そうだな。じゃあまた明日って事でいいか？」

【那美】

「うん。みんなも、またね」

那美は挨拶を終えるときびすを返して歩き出した。

【陽】

「俺らも解散しよう。この後遊ぶって感じじゃないだろ」

【赤明】

「そうね。それがいいと思うわ」

【藍叉】

『自己紹介より進まなかった』

【陽】

「明日は進むって。……多分だけど」

【藍叉】

『そうならいいけど』

ほんと、そうならいいよなあ……

【那美】

「陽君……。ちょっといい？」

少し離れたところで那美が手招きしていた。

帰りかけていた足を戻して那美の所へ向かう。

【陽】

「どっした？」

【那美】

「あの先輩、いい人だね」

そつと見てみると、みんなが帰っていく中で緑璃先輩がじつとこちらを見つめていた。

【陽】

「……そうだな。優しくて、いい先輩だよ」

【那美】

「そんな人なら、大歓迎だからね」

【陽】

「まさか、勧誘しろと？」

【那美】

「陽君が嫌じゃなければ、ね」

【陽】

「……そうだな。考えておく」

【那美】

「それじゃあね」

【陽】

「ん、またな」

那美と別れて緑璃先輩に近づく。

【緑璃】

「何を話してたの？」

【陽】

「えーと、内緒です」

先輩を勧誘するかどうかですとは言えないよなあ。

【緑璃】

「内緒なんだ」

【陽】

「はい。秘密です」

【緑璃】

「そっか。それじゃあ聞けないね」

先輩と並んで歩き出す。

【陽】

「緑璃先輩」

【緑璃】

「なあに？」

【陽】

「良かったですね」

【緑璃】

「……………うん」

たっぷり時間をかけて頷いた先輩は、花がほころぶような穏やか

な笑みを浮かべた。

【緑璃】

「本当に、良かったよ」

この人は本当に、綺麗に笑う人なんだな。

俺は、その笑顔を横目に見ながら、どうやって勧誘しようかと考え始めていた。

< 学生寮 213号室 >

夕食をすませて部屋に戻ってくる。

【陽】

「橙歌の奴、出て来なかったな……」

いつもよりゆっくり夕食を食べたが、結局橙歌は食堂に姿を見せなかった。

【陽】

「拗ねてるんだろっなあ……」

朝と違って、夜はバラバラに食べる事が多いから、必ずしもそうとは言えないが……

【陽】

「ん、電話か」

机の上で鳴り出した携帯を手取る。

相手は、橙歌か……。

タイムリーな奴だな。

【陽】

「もしもし？」

【橙歌】

「あ、陽……」

電話から聞こえてきたのは、弱弱しい橙歌の声だった。

いきなり怒鳴られるくらいは覚悟してたのに、妙にローテンションだな。

【陽】

「どうした？」

【橙歌】

「……緑璃先輩の事、だけど」

【陽】

「ああ」

【橙歌】

「僕、先輩は酷い人だーって怒ってたんだけど、お腹空いたらそうじゃないのかなーって気がして」

【陽】

「そ、そうか」

空腹との因果関係はさっぱりわからないが、橙歌は怒っているんじゃないかと悩んでいるみたいだな。

【橙歌】

「赤明も緑璃先輩は優しい人だって言うし……陽は、どう思う？」

【陽】

「そうだな。俺も、赤明に賛成だよ」

先輩の態度を見ていれば、先輩があのだの事を気にしているのはよくわかる。

橙歌には少しキツイ事を言ったけれど、あれだって、本当は

その時、電話の音に混じって、ドアが叩かれる音が聞こえた。

【陽】

「はい？」

【緑璃】

「えっと、私、緑璃だよ」

【陽】

「先輩？」

電話越しに橙歌が息を呑むのがわかる。

【緑璃】

「ちょっとお話、いいかな？」

【陽】

「あ、はい。すぐ開けます」

このタイミングだ。話の内容は今日の事だろう。

橙歌とダブルブッキングだけど、これはある意味都合がいい。

【陽】

「いいか、絶対切るなよ。後、声も出すな」

携帯に一言言って、さりげなくテーブルの上に置く。

【陽】

「どござ」

【緑璃】

「お邪魔します」

【陽】

「その辺に適当に座って下さい」

座布団を渡して、テーブル越しに対面に座る。

【陽】

「それにしても、緑璃先輩が来るなんて、びっくりしました」

それなりに親しいとは思うけど、部屋まで訪ねてきたのは初めてだ。

【緑璃】

「あ、ごめんね、急に来ちゃって」

【陽】

「構いませんけど、なるべく見つからないようにしてして下さいね」

寮は階層で男女別にされている。

別に、異性の階に行つてはならないという決まりは無いけど、見られたら妙な噂が立つかもしれない。

赤明や橙歌については今更過ぎてそんな心配も要らないだろうけど、先輩が、しかも一人きりなのは問題だ。

【陽】

「それで、どうしたんですか？」

【緑璃】

「うん。あのね、今日の犬の事なんだけど。

あの後どうなったのかわからないかな？

私、あの那美ちゃんって子の連絡先とかわからないから……」

【陽】

「あー、すみません。

実は俺達も知り合つたばかりで、連絡先とか知らないんですよ」

しかも、一日目以外はろくに会話も出来ていない。

わかっているのは、那美が放課後にあの神社にいるって事だけだ。

【緑璃】

「そっか。ごめんね、無理言っちゃって」

【陽】

「先輩は悪くなんて無いですって。

それに、俺達あそこで那美と会う約束してますから、明日にはちやんとわかりますよ」

【緑璃】

「それじゃあ、明日どうなったか教えて貰っていいかな？」

【陽】

「もちろんですよ。と言うか、先輩も一緒に来ませんか？
いえ、むしろ一緒にやりましょう」

【緑璃】

「え、え？ 陽君、話が見えないよ。何をやるの？」

先輩が目を白黒させる。

しまった。

勧誘のチャンスを見つけて、つい熱くなってしまった。

ちゃんと説明しないと。

【陽】

「実はですね、虹を架けようって話がありまして」

【緑璃】

「にじ……ってあの空の？ レインボー？」

【陽】

「はい。その虹です。レインボー」

【緑璃】

「面白そうだね。何だか青春って感じで」

にっこりと笑う緑璃先輩。

なんだろう、この「はしゃいでる子供たちを微笑ましく見守るよ
うな母親」っぽい笑顔は。

【陽】

「えーと、それで、どうですか？」

実は、那美にも是非誘って欲しいって言われてたりもするんです
が

【緑璃】

「うーん、お誘いは嬉しいけど……」

【陽】

「忙しいですか？ 出られる時だけでもいいんですけど」

【緑璃】

「そうじゃなくてね。私、今日酷い事言っただでしょ？」

きつと、橙歌ちゃん達に嫌われちゃってるよ」

【陽】

「……そんな事ないです。
先輩は、ちゃんと理由があつて、橙歌のためにあんな風に言つてくれたんですよね？」

【緑璃】

「うん……。寮でなんて絶対飼えないし、公園とかはちゃんと見回つてる人がいて、見つかったら、処分されちゃうの」

【緑璃】

「飼い主を探せたらいいんだけど、寿命を迎える直前の犬を飼うって人なんていないから……」

【陽】

「みんな、わかってますよ。先輩があのだの事、ちゃんと考えてるつて」

【緑璃】

「でも、もつと他に言い方があつたと思うの。
あんな嫌な言い方で、無理矢理に諦めさせなくても良かったのに」

【緑璃】

「昔飼つてた子にね、よく似てたから、つい感傷的になつちゃつて。本当にダメな先輩だね」

【陽】

「その子は……その」

【緑璃】

「うん。ずっと前に、死んじゃったんだ……」

【陽】

「先輩……」

先輩の小さな体は微かに震えていて、

やっぱり、1番傷ついていたのは先輩だったんだ。

自分自身の言葉にも傷ついて、それなのに良かったって笑う、そんな人なんだ。

そんな人に、これ以上傷ついて欲しくなんて、ない。

【陽】

「俺達が悪かったんですよ」

【緑璃】

「陽君？」

【陽】

「橙歌が後先考えない子供みたいな奴なのも悪いし、それがわかってたのに止めなかった俺達も悪いんです」

【陽】

「先輩が憎まれ役みたいになってたのに、結局何にも出来なくて、任せっぱなしにして」

【緑璃】

「そんな事言ったらダメ。」

陽君達が悪いなんて言ったら、私が悲しくなっちゃっよ」

【陽】

「ですよ。俺も、先輩が悪いなんて言われたら悲しいです」

【緑璃】

「あ……」

【陽】

「ね、先輩？」

【緑璃】

「もう……陽君はほんとにいい子だね」

先輩は、呆れたように言って、ようやく笑ってくれた。

【緑璃】

「そんないい後輩の陽君には、ご褒美をあげちゃっね」

隣まで移動してきた先輩の手が、俺の頭に置かれる。

【緑璃】

「座ってたら、背伸びしなくても届くね」

【陽】

「そうですね」

俺もしゃがまなくていいし、と思ったが黙っておくことにした。

撫で撫で。

【緑璃】

「……………」

【陽】

「……………」

撫で撫で。

【緑璃】

「……………」

【陽】

「……………あの、まだですか？」

【緑璃】

「うん……………もうちょっと……………」

頭を撫で続ける緑璃先輩。

正直かなり恥ずかしいけど、先輩の気が済むまで我慢しておこう。

【緑璃】

「……………陽君、ありがとう」

【陽】

「……………はい」

気恥ずかしさを我慢しながら、しばらく撫でられ続ける俺だった。

<学生寮213号室>

【緑璃】

「それじゃあ、陽君、お休みなさい」

【陽】

「はい。また明日」

緑璃先輩を見送って、部屋の中に戻る。

と、机の上に開きっぱなしの携帯が目に入った。

【陽】

「あ……」

しまった、橙歌の事を完璧に忘れてた。

慌てて携帯を手に取る。

【陽】

「あー、橙歌？」

【橙歌】

「なあにー？」

めっちゃ不機嫌な声が返って来た。

軽く30分は放置してたからな……

【陽】

「怒ってるか？」

【橙歌】

「べっつにい」

やっぱり怒ってるな。

【陽】

「えーと、あれだ、緑璃先輩の事よくわかっただろ？」

【橙歌】

「そうだね、すっごくよくわかったよ。先輩と陽が仲良しなのがねっ！」

【陽】

「えええ！？」

何でそういう結論に達するんだよ！

ちゃんと話聞いてたのか？

【橙歌】

「熱心に勧誘してるし、先輩も『ご褒美』とか『背伸びしなくていい』とか『もうちょっと』とか、一体何やってたんだか」

【赤明】

「声だけだから余計に気になるのよね」

【陽】

「赤明もいるのか!？」

【赤明】

「あら、風見さんも一緒よ」

バサバサと、スケッチブックをめくる音が聞こえてくる。

【陽】

「な、何で……?」

【赤明】

「橙歌と話をしようと思って風見さんをつれてきたら、携帯電話の前で固まっていたのよ」

【陽】

「あーそうなのか」

みんなに先輩の話をして回る手間が省けて良かったような、

みんなに先輩との会話を聞かれて悪かったような……。

【赤明】

「それじゃ、城崎君と先輩の話を聞かせてもらおうかしら?」
「う褒美について、とか」

【橙歌】

「『私も気になる』だって、藍又が」

その後、消灯時間が来るまでねちねちと苛められてしまった。

か、勘弁してくれ……

六月五日

< 6月5日(金) >

< 学生寮 食堂 >

【黄牙】
「よっ」

食堂に行くと、珍しく先に来ていた黄牙が待っていた。

珍しい事なんだが、一昨日も黄牙の方が早かった気がするな……

【陽】
「……あー、おはよー」

【黄牙】
「今朝はまた随分と低いテンションだなあ、おい」

【陽】
「色々あってさ……」

1 晩経っても精神的な疲れが抜けてない感じだよ。

【黄牙】
「よくわからねえけど、大変だったんだな」

【陽】
「ん、まあな。で、他の奴らは？」

【黄牙】

「赤明は風見と夏原と一緒にもう行ったぞ。さっきすれ違った」

【陽】

「赤明だけが？ 橙歌は？」

【黄牙】

「あいつならあそこだ」

【陽】

「ああ、本当だ……って何で緑璃先輩と一緒にいるんだよ」

特に険悪そうな雰囲気ではない、と言つかむしろ仲が良さそうに見えるけど。

【黄牙】

「いいんじゃないか？ 喧嘩してるよりよっぽどマシだろ」

【陽】

「……ん、そうだな」

物事を大雑把に捉えたり、単純に考えたりする所はこいつの欠点でもあり、長所だ。

こんな風に、本質を突いて悩みを断ち切ってくれる時は特にそれを感じる。

そもそも、こいつが余計な事を考えて行動を起こせないような奴なら、今こうして一緒にいる事は無かったかもしれないな。

【陽】

「お前、緑璃先輩の事どう思う？」

【黄牙】

「ああ？ そつだな、いい人なんじゃねえか？」

【陽】

「そつか」

「こいつがこつ思ってるなら、わざわざ緑璃先輩の話をする必要も無いか。」

【黄牙】

「んじゃ、さつさと飯にしようぜ」

【陽】

「そつするか」

「橙歌の方も気になるけど、周りに空席も無いし、教室でも話を聞こつ。」

「俺達は、朝食を受け取り、空席を探し始めた。」

<学園 2年教室>

【橙歌】

「やっほー」

【陽】

「はいおはよう。さあ、ちょっとこっち来い」

登校してきた橙歌を捕獲、連行する。

【橙歌】

「何？ 僕、また何かした？」

またと言っからには色々やらかしている自覚はあるのか。

【陽】

「緑璃先輩の事だよ。朝何を話してたんだ？」

【橙歌】

「えーと、放課後に神社に集合って事とか、まだ何もやってないって事とかだけど？」

【陽】

「一応聞いておくが、何でそんな話を？」

【橙歌】

「勧誘してたの陽じゃんかあ。だから教えておいてあげたのに」

【陽】

「それはそうだけど。お前はいいのか？」

昨日はグダグダになってしまつて、結局橙歌が緑璃先輩の事をどう思っているのかはうやむやのままだ。

まあ、橙歌が気に入らない人物を仲間に入れるとも思わないんだが。

【橙歌】

「昨日わかったって言ったじゃんか。だからいいんだって！」

昨日言われたのは全然別の内容についてだったぞ。

【陽】

「まあ、お前がいいならいいんだけど」

【橙歌】

「だからいっていったじゃん。それと、えと……」

【陽】

「何だよ。何か余計な事も言ったのか？」

【橙歌】

「言っていないっ。……もうっ、1回しか言わないからっ」

【陽】

「な、何だよ？」

【橙歌】

「その、……とう」

【陽】

「え？」

【橙歌】

「なんで聞き返すのさっ!?!。1回しか言わないって言ったじゃん
!」

【陽】

「聞こえてないんだからまだ1回も言われた事にならないって」

【橙歌】

「うっ……」

【陽】

「今度は聞こえるように言ってくれよ」

橙歌を促すと、橙歌は思いつきり息を吸い込み、

【橙歌】

「だから、ありがとうっ!」

【陽】

「お、おっ」

【橙歌】

「ちゃんと言ったからね!」

それだけ言うと、橙歌は逃げるように去って行った。

過程がどうもわからんが、先輩と橙歌は仲直りして、先輩の勧誘にも成功したらしい。

【陽】

「やれやれ、良い方向に落ち着いたって事みたいだな」

今日からはまた1人新メンバーが加わるのか。

放課後が楽しみだな。

< 神社 境内 >

【陽】

「……と、思ってたんだけどなあ」

神社に来た俺達を出迎えたのは、先に来ていたらしい那美と緑璃先輩。

それに、一昨日食堂で出逢った1年生の女の子が1人。

確か、南雲紫苑って名前だったはずだ。

【赤明】

「あらあ、まさかの新顔ね」

少々呆れ顔で赤明が呟く。

【緑璃】

「あ、みんな。こんにちは」

【陽】

「どうも、先輩。それと、南雲だったか？」

【紫苑】

「こんにちは、先輩」

南雲が軽く頭を下げる。

【赤明】

「城崎君、知り合いなの？」

【陽】

「知り合いつて程でもないけど。『玉手箱』の時にカード貸して貰ったんだ」

【紫苑】

「気にしないで下さい。鳴らしたのはクラスの子ですし」

【紫苑】

「でも、止める方法を持っていないのに引き受けるなんて、何を考えていたんですか？
信じられません」

うわ……。

大人しそうに見えてきつつい事言つな。

【緑璃】

「あはは、陽君も怒られちゃったね」

【陽】

「先輩も言われてたんですか……」

2人して苦笑する。

【陽】「で、先輩はわかるんですけど。南雲はどうしてここに？」

【紫苑】

「この神社が取り壊されると聞いたので、見てみようと思ひまして」

【陽】

「それはまた物好きなの……」

【紫苑】

「こんな所に大勢で来ている先輩に言われたくはありませんが。それに、少し縁がありましたから」

【陽】

「縁？」

【紫苑】

「昔、お参りした事を思い出して、気になってしまったんです」

【陽】

「何か神頼みしたい事があったのか？」

【紫苑】

「……いえ、単なる合格祈願です。ここ、学園から近いじゃないですか」

【陽】

「なるほど。でも、効果があったとは思えないけどなあ」

ぼろくて管理してる人もいなければ、何が祀られているかもわからないのに。

これでご利益があったら、由緒正しい神社なんて奇跡の大安売りだろう。

【那美】

「陽君。そんな失礼な事を言ったら神様に怒られるよ？」

それに、ここにお参りに来た人は1人じゃないんだから」

【陽】

「ほんとかよ？」

【那美】

「ほんとよ。ね、緑璃」

【緑璃】

「うん。ちっちゃい時にだけど、来た事あるよ」

【橙歌】

「あ、僕もある。ね、赤明」

【赤明】

「そういえば、1年生の時に一緒に来た事があったわね」

【藍叉】

『湖珠が時間をつぶしてる時に お参りした事がある』

【陽】

「まじか……」

那美に話を振られたのは先輩だけだったのに、次々に同意する声があがった。

何でみんなこんなぼろ神社に来るんだよ。

【陽】

「わっかんないなあ。なあ、黄牙」

【黄牙】

「……悪い。俺もある」

黄牙よ、お前もか。

【赤明】

「城崎君は無いの？ 子供の時から遊んでたんでしょ？」

【陽】

「昔の事過ぎてよく覚えてないけど、無いと思っぞ」

神社と言うよりは空き地みたいな感覚で遊んでいたはずだ。

【那美】

「本当に？」

【陽】

「そりゃ絶対には言えないけど、多分な」

【那美】

「よく思い出してみてください。本当に、お願いした事は無いかな？」

そんなに食い下がってくるような事か、これ？

昔、昔……

ん、やっぱり思い当たる事は無いな。

【陽】

「無い、と思っけど。」

【那美】

「……そっか」

【陽】

「俺がお参りしていないと何かいけないのか？」

【那美】

「え、ううん。ただ、これで陽君だけ仲間外れなのかなって思ったから」

【陽】

「うげ。那美もあるのかよ」

【紫苑】

「先輩だけがマイノリティーだったみたいですね」

【藍叉】

『1人ぼっちはかわいいそう』

【陽】

「悪かったな！」

【緑璃】

「まあまあ、みんな、陽君を苛めちゃダメ。可哀相だよ」

先輩、そのフォローは逆に辛いですから。

【赤明】

「城崎君が少数派なのは置いておいても、凄い偶然ね。みんながこの神社にお祈りに来た事があるなんて」

【那美】

「これも、まさに縁だね。そういう訳なんだし、紫苑も参加してみない？」

【黄牙】

「こいつも勧誘してたのか？」

【緑璃】

「うん。さっき那美ちゃんと一緒に誘ってたんだよ」

【那美】

「ねえ、紫苑。こうやってみんなが出逢ったことにはきっと意味があると思うの。」

紫苑をここにつれてきた縁とか、ね」

【紫苑】

「縁、ですか」

悩んでるみたいだな。

それはそうだろう。

南雲からすれば、俺達はほとんど知らない上級生の集団な訳だからな。

とは言え、即答で断られないのを見ると、脈在りか？

【黄牙】

「そんなに難しく考えなくてもいいんじゃないか？
今俺らと話してて楽しかったんなら参加したのでいいだろ」

【橙歌】

「そうそう。きっと楽しいから、参加してよ」

【赤明】

「そうね。もしあなたが参加したいのなら、私は歓迎するわ」

【藍叉】

『多分 退屈だけはしないはず』

仲間達が次々に声をかける。

「まったく、こいつ等は。」

初対面の人間を遠慮無しに勧誘して……

でもま、俺等は今までそんな感じで集まって来たんだしな。

その縁とやらを信じてみるのもいいだろ。

【陽】

「変な奴らだろ？ でもさ、その分面白いのは保証するぞ」

口々に勧誘された紫苑は、しばらく俺たちの顔を眺めていたが、やがて、呆れたように溜息を吐いた。

【紫苑】

「本当に、先輩方は変な人です。」

どうして、初対面の私をそんなに熱心に誘うんですか？」

【赤明】

「どうしてって、それは」

【黄牙】

「あれだろ？」

【橙歌】

「楽しそうだから！」

【陽】

「だよなあ」

結局、そう言う事だ。

俺達は多分、虹が架けたくて集まってるんじゃないかと、

みんなで虹を架けるのが楽しそうだから、集まっているんだ。

多分、那美の誘いが虹でなくても、俺達は同じように集まっていたらろう。

【紫苑】

「何なんですか、その理由。馬鹿みたいです」

紫苑は、口ではそう言っているけど、表情は笑っていた。

【紫苑】

「でも、そんな風なのが、楽しそうだって思いました」

【陽】

「それじゃあ」

【紫苑】

「はい。私も、参加させて下さい」

【陽】

「もちろんだ。なあ、みんな？」

他のメンバーに聞くと、一斉に頷いてくれた。

【陽】

「ん、これで南雲も新メンバーだな」

【紫苑】

「はい。よろしくお願いします」

南雲が頭を下げる。

【那美】

「それじゃあ、新メンバー歓迎の意味で」

【橙歌】

「意味で？」

【那美】

「自己紹介から始めようか」

【陽・赤明・橙歌・黄牙】

「「また!?!?!」」

頼むから、そろそろ自己紹介は最後にしてくれよ……

< 駅前 >

【陽】

「どうする？ 商店街にでも寄るか？」

隣を歩いている黄牙に問いかける。

結局今日も自己紹介だけで解散。

女の子達は、同性同士の親睦の為にと言ってどこかに行ってしまうって、今は男2人だ。

素直に寮に帰ってもいいけれど、

商店街は駅に隣接しているから寄り道しても距離はほとんど変わらない。

少しなら遊んでもいいだろ。

【黄牙】

「そっちなあ。……うげ」

【陽】

「どうした？ 変な声出して」

【黄牙】

「唯鈴がいた」

【陽】

「あ、ほんとだ」

俺達の少し前を、近くの中学校の制服に身を包んだ唯鈴ちゃんが歩いていた。

<大陣 唯鈴

後頭部の高い位置で輪を作るように束ねた金髪。余った分は両サイドの低い位置で束ねてる。

瞳の色は青（黄牙と同じ）>

【陽】

「何で嫌そうなんだ？ シスコンのお前らしくない」

【黄牙】

「シスコンじゃねえよ！ 妹思いなだけだ！」

ほとんど同じだろうが……

そもそも、自分で妹思いとか言っちゃう時点で結構アレだ。

【陽】

「はいはい、その妹思いの黄牙君が、どうして今にも逃げ出そうとしてるんでしょうかね？」

【黄牙】

「ぐ……そういつ日もあるんだ。ここはお前に任せる」

【陽】

「何勝手な事言ってるんだ」

【黄牙】

「任せたからな。変な事するんじえねえぞ」

【陽】

「だから、お前は俺を何だと思ってるんだよ！」

って、もういないし。

しかし、あの黄牙が唯鈴ちゃんを避けるなんて、一体何が？

まさか……急な反抗期で恐ろしく荒れてるとかか！？

家の中には不穏な空気と暴力の嵐が立ち込めてたり？

いや、もしかしたら怪しげな黒魔術的な物にはまってるとか……

家には夜な夜な生贄になった動物たちの悲鳴が響き渡ったり、

【??】

「……さん？ お兄さん！」

【陽】

「うわぁっ！ 唯鈴ちゃん!?!」

妙な想像から戻って来ると、唯鈴ちゃんが目の前に立って顔を覗き込んでいた。

【唯鈴】

「良かった。やっぱりお兄さんだ。」

返事してくれないから別の人かと思ったよ?」

【陽】

「ごめんごめん、ちょっと考え事してたんだ」

あー、びっくりした。

でも良かった。いつもの唯鈴ちゃんだ。

【唯鈴】

「お兄さんは1人?」

【陽】
「さっきまで黄牙がいたんだけど、唯鈴ちゃん見つけたら逃げて行ったよ」

【唯鈴】
「もう……お兄ちゃんってば、お兄さんにまで迷惑かけて」

【陽】
「それは別にいいんだけどさ。喧嘩でもした？」

【唯鈴】
「だって、お兄ちゃん酷いんだよ。あんな事言うなんて……」

何だかんだ言っても仲のいい兄妹なのに、こんなのは珍しい。

黄牙の奴、何を言ったんだ？

【陽】
「ちなみに、何を言われたんだ？」

【唯鈴】
「『私、女の子っぽい体になってきたかな？』って言ったら、『はっ、お前なんてまだガキだ。認めて欲しけりゃ料理くらいまともに作れるようになるんだな』って。
私だって女の子なのに……」

【陽】
「……それって、もしかして一昨日の電話で？」

【唯鈴】

「そつだよ?」

【陽】

「あー、それは気の毒な……」

俺との関係を気にしすぎて頭回ってなかったんだろつなあ。

考えもせずに思いつくままに適当な事を言っただってとこだろつ。

にしても、どうもこの子は黄牙が男性関係を気にしまくってるのをわかってないみたいなんだよな。

黄牙の気づいてない所で彼氏とか作ってないよな……?

確認しといてやるか。

【陽】

「唯鈴ちゃん、今付き合ってる人とかいる?」

【唯鈴】

「ええ!?! い、いないよつ、そんな人!」

妙に慌てて唯鈴ちゃんが答える。

【陽】

「ん、なら良かった」

もしもいたりして、黄牙にばれでもしたらどうなる事が。

いや、良かった良かった。

【唯鈴】
「私に付き合ってる人がいなくて良かったって、もしかして、お兄さん……」

【陽】
「唯鈴ちゃんは俺にとっても妹みたいな子だからな。黄牙ほどじゃないけどちょっと気になってね。」

好きな人ができたら、ちゃんとお兄ちゃんに相談するんだぞ」

そつでなきや血の雨が降りかねないからな。」

【唯鈴】
「……うう、そつだよね。お兄さんにもやっぱりまだガキで妹なんだよね……。」
わかってたけど、もうちょっと夢が見てたかったよ……」

【陽】
「どうした？　なんか落ち込んでるけど」

【唯鈴】
「うう、何でもないよ。私、料理の勉強も頑張るからね！」
そつ言い残すと、唯鈴ちゃんは商店街の方へ走って行ってしまった。

【陽】
「……何だったんだ？」

うーん、わからん。

<学生寮 213号室>

【陽】

「今日も色々あったな……」

また新メンバーが加わって、これで8人目だ。

さすがにこれ以上は増えないだろうな……

【陽】

「お、メールが来てたのか」

ランプが点滅している携帯を開く。

メールは3通。

差出人は橙歌と赤明、それに唯鈴ちゃんだ。

取り合えず、最初に来ていたメールから開く。

From: 時雨 橙歌

Subject: 新メンバーのアドレス

登録よろしくー。

藍叉『xxxxxxxxxxxxxxxxxx』

先輩『 × × × × × × × × × ×
紫苑『 × × × × × × × × × ×』

アドレス書いてあるけど、ちゃんと許可とってから送ってきたんだろっな……

まあ、全部見てから登録するか。

【陽】

「次のは、赤明か」

橙歌の直後に送られてきている赤明のメールを開く。

From: 新嶋 赤明

Subject: 橙歌のメールだけど

ちゃんと許可はとってます。大陣君にも回しておいて。

それと、那美は携帯持っていないのよ。驚いたわ

さすが赤明、お見通しか。

散々橙歌のフォローをしてるだけの事はあるな。

橙歌のメールをそのまま黄牙に転送し、3通目。

From: 大陣 唯鈴

Subject: お問い合わせ

今日からお母さんに料理を教えて
もらう事にしました。

それで、お兄さんにお問い合わせがある
んだけど、上手になったら食べて
くれますか？

へえ、早速始めたのか。

よっぽど黄牙を見返してやりたいんだなあ。

さてと、一応返信しておくか。

赤明と橙歌には『わかった』ってくらいでいいだろ。

新しく知った人には『陽です。よろしく』と。

唯鈴ちゃんには『了解、楽しみにしてる』。

【陽】

「これでラストだな」

全員にメールを返して時計を見ると、もう日付が変わりそうな時間だった。

今日はもう寝よう。

六月六日(その1)

< 6月6日(土) >

< 学生寮 213号室 >

【陽】

「……ん」

休日の朝だと言うのに、目覚ましの音で目が覚めた。

【陽】

「……間違えて目覚ましかけてたか？」

手探りで目覚まし時計の頭を叩くが、音は鳴り止まない。

って、これ目覚ましじゃないな。

【陽】

「携帯？ しかも電話か……」

寝る前に使ったまま、放ったらかしだった携帯を取って電話に出る。

【陽】

「もしもし？」

【橙歌】

「あ、陽？ ちゃんと出てよ」

橙歌か……。

こんな朝から、何の用だよ。

【陽】

「まだ寝てたんだよ……。で、どうした？」

【橙歌】

「今すぐ食堂に集合。大急ぎでね」

【陽】

「は？ 何だよ？」

【橙歌】

「それはこっちで説明するから。みんなも待ってるから、早くしてね」

【陽】

「みんなって……。おい橙歌？」

……。切られたか。

【陽】

「何なんだ？」

事情はわからないけど、橙歌だけならともかく、他の人も待たせてるのなら急がないとやばいな。

さっさと着替えて食堂に行こう。

<学生寮 廊下>

【赤明】

「おはよう、城崎君。早かったのね」

【藍叉】

『おはようございます』

身支度を整えて部屋を出ると、部屋の前に赤明と風見が立っていた。

【陽】

「ん、おはよ。どうしてここに？」

【赤明】

「大陣君の携帯、電源が入っていないみたいなのよ」

【唯鈴】

『起こしに来た』

【陽】

「ん、そういう事ならさっさと起こしに行こう」

<学生寮 214号室>

鍵を開け、こっそりと黄牙の部屋に侵入する。

【陽】

「さて、黄牙君のお部屋にやっしまいました。
黄牙君はまだ、ぐっすりと眠っているようです」

【赤明】

「何やってるのよ」

【陽】

「いや、寝起きドッキリみたい」

【赤明】

「馬鹿なことやってないで、さっさと起すわよ」

【陽】

「待て、赤明」

【赤明】

「何よ？」

【陽】

「いや、俺じゃない。風見が」

【赤明】

「風見さんが？」

風見は、いつものスケッチブックを、いつもより大きな動作で頭上に掲げていた。

【藍叉】
『ドッキリする』

【赤明】
「しないわよっ」

【藍叉】
『声が大きい 起きる』

【赤明】
「起こしに来てるのよっ」

【陽】
「赤明、落ち着け。
そして聞け」

赤明の服の裾を引いて、小声で話しかける。

【陽】
「俺達は長い付き合いだけど、風見はまだ仲間になって日が浅いだろ。」

だからさ、あいつのやりたい事やらせてやらないか？」

【赤明】
「それは……そうね。わかったわ」

【陽】
「よっ」

普段はツッコミ役をしているが、俺も赤明もノリはいい方だ。

赤明なら乗ってきてくれると思ったが、思った通りだったな。

黄牙、俺に唯鈴ちゃんの相手を押し付けて逃げた報いを（別に嫌じゃなかったけど）受けて貰うぞ。

【陽】

「作戦を説明するぞ。

やる事は簡単、妹思いの黄牙を妹になりきって起こす、それだけだ」

【陽】

「唯鈴ちゃん役は赤明。風見は赤明に指示を出してくれ」

「この配役は変更できない。」

持っているスケッチブックがカンペに使えそうだったのもあるけど、

何より、喋れない風見に唯鈴ちゃんの役は無理だからだ。

【赤明】

「わかったわ」

【藍叉】

『ヤー』

【陽】

「よし。それじゃ、位置にっしっし」

俺と風見は赤明にスケッチブックを見せられる位置に移動し、赤明が黄牙の寝ているベッドの傍に立つ。

【陽】

「風見」

【藍叉】

『「寝起きでドッキリ お兄ちゃん お・き・て」 作戦開始』

何だ、その凄いネーミングは……

【赤明】

「……………」

赤明は物凄く何か言いたげな顔をしたが、結局何も言わない事を選んだようだ。

【赤明】

「大陣君」

【藍叉】

『ダメ』

開始1秒でダメ出しが出た。

赤明は黄牙の方を見ていて気がついていない。

【陽】

「おい、赤明。指示が見えないだろ。こっち見ながら起こしてくれ」

【赤明】

「難しい事言わないでよ。って、もうダメなの？」

【藍叉】

『お兄ちゃんって呼んで』

【赤明】

「ええー。大陣君を？」

本気で嫌そうだな……

【藍叉】

『今のあなたは 黄牙の妹』

【赤明】

「……そう。そうよね。今の私は唯鈴ちゃん。私は妹。……よし」

ぶつぶつ呟きながら赤明が再び黄牙に向かう。

自己暗示なのか？

【赤明】

「ふう……。お、お兄ちゃん？」

【藍叉】

『もっと愛情を込めて』

【赤明】

「ちょっと、風見さんっ」

【藍叉】
『もっと愛情を込めて』

【赤明】
「……………。おにいちゃんっ」

【藍叉】
『ちょっと恥ずかしそうに』

【赤明】
「お、お兄ちゃん……………」

【藍叉】
『もっと幼い声で』

【赤明】
「おにいちゃん？」

……………なんか変な方向に向かっている気がするんだが、大丈夫なのか？
とか思っている間にも、風見の指示はどんどん進み、

【藍叉】
『いいねー それじゃあ上だけ脱いでみようか』

おいおい、その指示は明らかにおかしいだろ！

【赤明】
「そうだよな。あかり、いもうとだもんっ」

いつの間にか風見に洗脳されている赤明が、本当に上着を脱ぎ始めた。

1つずつボタンが外される度に、赤明の肌が露になっていく。

って、それはマジで洒落になってないって！

【陽】

「赤明！　しっかりしろって！」

【赤明】

「城崎君……あれ……私は？」

【陽】

「いいから早く服！」

【赤明】

「え？　え？　何で私脱いで……？」

【陽】

「後でいくらでも説明してやるから、服着ろー！……」

【黄牙】

「るせえなあ。陽か？」

【赤明・陽】

「あ……」

黄牙が起きた。

何でよりによってこのタイミングで起きるんだ。

【黄牙】

「うお、赤明か！？ 何でそんなかつこして」

【赤明】

「き、きやあああああ！！」

黄牙の言葉を遮って、赤明の悲鳴が響き渡る。

【藍叉】

『ドッキリ成功』

2度とこいつに指示を出させない。

満足げに頷く風見を見ながら、俺はそつ心に誓った。

< 学生寮 食堂 >

一悶着あったが、俺達は起こした黄牙と一緒に食堂に下りた。

【赤明】

「本当に、ごめんなさい。つい……」

【黄牙】

「まあ、別にいいけどよ……」

【陽】

「まあ、不幸な事故だったって事で。で、橙歌は？」

【藍叉】

『

【陽】

「あっちか。お、いたいた」

ぱらぱら埋まっているテーブルの一角に、残りのメンバーが揃っていた。

本当にみんないたのか……

【橙歌】

「おっそーい」

近づいていくと、いきなり橙歌に怒られた。

【陽】

「それでも急いで来たんだよ」

実はちよつと遊んでたけど。

【橙歌】

「でも遅いものは遅い。僕達はもう全員揃ってるのにさ」

【陽】

「悪かったよ。でも、ほんとにみんな揃ってたんだな」

時間は朝の9時を少し過ぎた辺り。

早いとは言えない時間だけど、休日なら寝てる人もまだ結構いるはずだ。

【緑璃】

「私は楽しみでちょっと早く来ちゃったけど、みんな同じぐらいに集まってたよ?」

文句言ってきたのは橙歌だけだけど、割とみんなを待たせてたのか。

って、ちょっと待て。楽しみで?

【陽】

「もしかして、先輩はこの集まりの事知ってました?」

【緑璃】

「昨日みんなで約束したんだよ。親睦会をしようって」

緑璃先輩がちょっと首を傾げる。

【緑璃】

「あれ、もしかして陽君は知らなかったの?」

【陽】

「親睦会の話はまさに今聞きましたよ」

【黄牙】

「俺も聞いてねえな」

【赤明】

「橙歌？ あなた、昨日連絡しておくって言わなかった？」

【橙歌】

「ごめんごめん。黙ってた方が面白くなってるから、つい」

【赤明】

「つい、ですまないわよ！ そのせいで朝からあんな目に……」

【橙歌】

「もう赤明い。そんなに怒らないでよー」

【赤明】

「あなたねえ……」

【紫苑】

「先輩方が仲良くじやれている所に水を差して申し訳ありませんが、そろそろ移動しませんか？」

騒いでいるところに、南雲が冷静に切り込んでくる。

【紫苑】

「このままだと、那美さんを待たせてしまいます」

【陽】

「那美まで誘ってたのか」

【紫苑】

「はい。先日、先輩と別れた後に決まりました」

淡々と、だが的確に紫苑が説明してくれる。

【陽】

「次からは南雲に連絡係を頼むよ」

橙歌の数倍は正確に情報が伝わるだろう。

【紫苑】

「そうですね。時雨先輩が当てにならないのはよくわかりました」

【紫苑】

「それと、私の事は紫苑で構いません。先輩は名前で呼んでいる方が多いみたいです」

確かにそうだな。

この場で名前で呼んでないのは風見と南雲だけだ。

いつの間にかそうなっていただけで特にこだわりがあるわけでもないけど、

南雲　紫苑がそう言うならそうさせてもらおう。

【陽】

「ん、それじゃ遠慮なく紫苑って呼ぶよ」

【紫苑】

「はい」

【赤明】

「話もまとまった所で、出発しましょうか。那美を待たせるのも悪いものね」

【橙歌】

「それじゃ、えーと……僕達、出発！」

橙歌の号令で、がたがたと席を立つ。

俺と黄牙が朝飯を食べていない事を思い出したのは、学校を出てからだった。

<神社 境内>

【那美】

「おはよう、みんな」

いつものように境内で出迎えてくれた那美と挨拶を交わす。

【那美】

「ごめんね。わざわざここまで来てもらって」

【赤明】

「あら、そんなの気にしなくていいのに。商店街に行く通り道なんだから」

【那美】

「そっか。ありがとう、赤明」

【赤明】
「ええ」

【陽】
「それで、これからどうするんだ？ 俺と黄牙は何も知らないんだけど」

【紫苑】
「午前中は主に買い物予定ですな」

何となく発した質問に、紫苑がきつちり答えてくれる。

赤明も商店街って言ってたし、そうだと思ってたけど。

そもそも、この辺にはその位しか遊ぶ場所は無いんだけどな。

【橙歌】
「あ、待って待って。僕、さっき凄く大事な事思いついたんだ」

【赤明】
「何よ？」

【橙歌】
「チーム名決めない？ ナントカ集合ーとか言えるやつ！」
橙歌にしてはなんかまともな発言だ。

流石にこれだけの人数になるとそうというのがあった方が便利かもしれないな。

【陽】

「いいと思うけど。嫌な奴いるか？」

もちろん、反対意見は出てこず、チーム命名会議が始まった。

< 神社 境内 >

【陽】

「うーん……」

会議開始からおよそ30分。

チーム名は未だ決まらず、俺達は頭を抱えていた。

案は結構出されたのだが、必ず数人が気に入らずに却下の嵐。

人数が多いと、ともかく意思統一が難しいと言つのを思い知ってしまった。

【陽】

「なんて言うかさ、みんなセンス無いんじゃないか？」

【紫苑】

「『虹をかけ隊』なんて言い出した先輩には負けますけど」

【陽】

「もう案が出尽くした後に無茶振りするからだろうが！」

【緑璃】

「まあまあ。ほら、意図がよくわかっていい気もするよ?」

【紫苑】

「教室で『虹をかけ隊』なんて言われたら他人のふりしますから」

【陽】

「……それは確かに恥ずかしいな」

【紫苑】

「言った本人が何を言っているんですか」

【陽】

「いやー、あはは……」

考えるのに手一杯で、実際に使う事まで考えてなかった。

【陽】

「なあ、風見は何かあるか?」

スケッチブックを使って即席ホワイトボードになっている風見に話を振ってみる。

自動的に書記をされていて、まだ案を出していない風見になら、何か名案があるかもしれない。

みんなも同じ事を考えたのか、期待の籠った目が風見に集中する。

風見は、俺たちの注目を集めたまま、チーム名案の書き散らされ

たページをめくって、新しく書き始める。

【藍叉】

『何か希望はある？』

【橙歌】

「格好いいやつ！」

【赤明】

「そうになると、横文字とかかしら？」

【緑璃】

「虹の意味も欲しいかな？」

【黄牙】

「俺は何でもかまわないぜ」

【紫苑】

「先輩方にお任せします」

【赤明】

「那美は？ 何かある？」

【那美】

「んーと、みんなにまかせるよ」

みんな好き勝手な事言うなあ。

【藍叉】

『……………』

わざわざ三点リーダーを並べて見せてくれる。

考えてるって事か？

風見は三点リーダーを見せたままじっと考えていたが、しばらくして、新しいページに何かを書き込んだ。

ゆつくりと、スケッチブックがこちらに向けられる。

『Arc-en-ciel』
アルカンシエル

そこには、そう書かれていた。

【陽】

「アルカンシエル……」

聞いた事のない言葉だが、口に出してみると、思いのほかその響きはしっくり来るものがあった。

橙歌風に言うなら、格好いいって事になるだろうか。

【藍叉】

『フランス語で虹って意味』

フランス語か。

そりゃ馴染みがないはずだな。

俺は気に入ったけど、他のみんなはどうだろ。

【陽】

「じゃあ、聞くぞ。この名前に反対の人！」

恐る恐る聞いてみる。

今までは、必ず2本か3本は手が上がってたんだが……

【陽】

「反対無し、でいいのか」

奇跡的に（と心境的には言いたい）誰の手も上げられなかった。

【陽】

「紫苑もそれでいいのか？」

【紫苑】

「どうして私に聞くんですか？」

【陽】

「いや、なんとなくだけど」

俺の見ていた感じでは、1番見る目が厳しそうだからだ。

【紫苑】

「皆さんが良いと言っているのに、私だけ反対したりはしませんよ。それに、これは私も良いと思いますよ」

【陽】

「ん、ならいいか」

こうして、俺たちのグループはアルカンシエルと言う名前に決定した。

<商店街>

思わぬ所で時間を取ったが、俺達は予定通りに商店街のアーケードまで移動してきた。

【陽】

「ここからは2手に別れるんだったな」

ここに来るまでに聞いた話によると、今日の話のメインは那美が携帯を買う事らしい。

ただ、この小さな商店街には規模に見合った小さな携帯ショップが1軒しかない。

アルカンシエルのメンバー全員が入ると、他の客の迷惑になると言う事で、2手に別れる事になった。

ちなみに、残りの半分は午後に備えて昼食を調達する係りだ。

【那美】

「そうだね。私たちはもう決めてるけど、陽君と大陣君はどうするの?」

【黄牙】

「俺はどっちでも構わねえぞ。陽が先に選べよ」

【陽】

「そうだな……」

携帯組みは、那美、赤明、風見、

昼食組みは、緑璃先輩に橙歌それに紫苑だったよな。

俺はどっちについて行こうか。

<選択肢>

1・携帯組みに付き合う（那美、赤明、風見）

2・昼食を買いに行く（緑璃、橙歌、紫苑）

六月六日（選択肢1）

<商店街>

食糧確保に向かったチームと別れ、俺達は商店街の携帯ショップにやってきた。

【陽】

「今更だが、那美って携帯持ってなかったんだな」

今のご時勢、中々珍しい奴だ。

同じ寮に住んでいても、携帯が無いと何かと不便だって言うのに。

【那美】

「うん。必要無かったから持ってなかったんだけど、アルカンシエルのみんなと連絡取るのに必要だと思って」

【藍叉】

『不便じゃなかった？』

【那美】

「んーと、実はあんまり。無かったら無かったで何とかなるものだし」

【赤明】

「でも、学校が違うんじゃないさすがに困るわよ」

【那美】

「わかってるよ。だから買いに来たんだから。でも、私携帯の事はよく知らなくて。選ぶの手伝ってくれる？」

【赤明】

「そうだったわね。それで、那美はどんな携帯がいいのかしら？」

店頭に置いてあるパンフレットを適当に手に取りながら赤明が聞く。

やれやれ、長くなりそうだな。

あの橙歌でも機種を変えるのに付き合ったときは軽く1時間は悩んでたし。

買う機種まで決めていてアレだったのだから、今回はさらにかかるところ。

俺は、長期戦を覚悟して開きっぱなしの自動ドアに背中を預けた。

【那美】

「電話とメールだけ出来ればいいよ。で、一番安いのに」

【陽】

「……予想外に単純明快だな」

俺の覚悟は何だったんだろう……。

そもそも、電話とメールが出来ない携帯なんて存在するのか？

【藍叉】
『いいの?』

【那美】
「実はあんまりお金に余裕無くて。連絡だけ取れればいいから」

【赤明】
「そう。それなら、ここから選べばいいわね」

赤明が指差したのは、でっかいワゴンに適当に放り込みましたっ
て感じの携帯の山だった。

もはやディスプレイにすらなっていない。

旧世代ハードのゲームソフトでももうちょっとマシな売られ方を
してるぞ……。

【赤明】
「電話とかメールは利用サービスの問題だから、
どれを選んでも問題ないわ。安さも文句無いでしょ?」

どう見ても型落ちだが、1円だとか10円と確かに安い。
これに文句をつける人物は一生買物なんて出来ないだろう。

【那美】
「んと、結構色々あるね」

【赤明】
「少しずつ絞っていきましょか。」

折りたたみ式とスライド式ならどっちがいい……
って言うか、スライド式なんてあるのかしら？」

「ごちゃごちゃになっているワゴンの前で、赤明が首を捻る。

【陽】

「ちょっと仕分けてみるか？ 風見、手伝ってくれ」

【藍叉】

『ヤー』

【陽】

「今のってイエスでいいんだよな？」

まだ風見との意思疎通にはイマイチ自信が無い。

確認をとってみるとこくりと頷いてくれた。

……

……

……

【陽】

「少し調子に乗りすぎたか」

【藍叉】

『いいことした』

【陽】

「そうなんだけど、何か無駄な労力を使った気がする」

ワゴンの上の携帯は、形や色や機種で細かく分類されている。

那美が選ぶ時にもざっと分けたが、那美と赤明が手続きに行った後、

暇になった風見と意味もなく分けてしまったのだ。

【陽】

「バイト代とか出ないかな？」

【藍叉】

『親切の押し売りは ただの迷惑』

【陽】

「言ってみただけだって」

そんなどうでもいい話をしていると、ポケットの中の携帯が鳴り始めた。

取り出してみると、見覚えの無い電話番号が表示されていた。

中々切れないな……ワン切りとかじゃないのか。

出てみるか。

【陽】

「もしもし？」

【??】

『あ、えーと、陽君?』

【陽】

「その声、那美か?」

【那美】

『うん。良かった、ちゃんと通じたね』

【陽】

「契約終わったんだな」

店内を見ると、さっき選んだ真っ白の携帯を耳に当てている那美と目が合った。

【那美】

『赤明にみんなの番号教えてもらったから、掛けてみたの。陽君が私の初めての相手だよ』

【陽】

「お、そうなのか。ん?」

くいくいと袖を引かれる。

視線を向けると、スケッチブックいっぱいの大文字で『ずるい』と書いてあった。

【陽】

「あー、じゃあ一回切るから、次は風見にメールでも送ってやって

くれ」

【那美】

『あ、うん。わかった』

【陽】

「じゃあな」

電話を切って風見を見ると、携帯を取り出していた。

まだ来てもないだろうに、気の早い奴だ。

結局、俺達は呆れた赤明が那美を連れて出てくるまで数メートルの距離で携帯を使って遊んでいたのだった。

六月六日（選択肢2）

<商店街>

那美の携帯を買いに行くチームと別れ、緑璃先輩と橙歌、紫苑が残る。

【緑璃】

「それじゃあ、私達も出発しようか」

そう言って歩き始めた先輩を追いかけて隣に並ぶ。

【陽】

「昼食の買出しですよ？ コンビニですか？」

【緑璃】

「コンビニにも行くけど、そっちは後回しだよ」

【陽】

「先にどこか寄るんですか？」

【緑璃】

「すぐにわかると思うよ。はぐれないで付いて来てね」

【陽】

「そんな、小学生じゃないんですから」

まだ朝なのもあって人通りは少ない。

こんな状況でははぐれる方が難しいだろう。

【紫苑】

「あの、先輩。既に時雨先輩がいませんけど」

【緑璃】

「え？ あれ、本当だ」

【陽】

「おかしいだろっ！」

歩き出して10m位しか進んでないぞ！？

【緑璃】

「あ、帰って来たよ」

【橙歌】

「ただいまー」

帰って来た橙歌の手には、かじりかけの少し大きめのクッキーが一枚。

【陽】

「……何してたんだ？」

【橙歌】

「その屋台で買って来たんだよ。美味しそうだったから」

「ご機嫌な様子でクッキーをかじる。」

前に唯鈴ちゃんと遭遇したクッキー屋台で買ってきたのか。

まだこの商店街にいたのか。っつーか、よくこんな朝からいたな。

【陽】

「買うなどは言わんが、せめて一言くらい言って行け」

【紫苑】

「ここまで自由に行動するなんて、ある意味尊敬してしまいますね」

【陽】

「いやいや、これは悪い見本だから。するのなら反面教師で頼む」

【紫苑】

「それは、かなり優秀な先生になりそうですね」

【陽】

「そ、そうだな……」

慣れてはきたけど、やっぱりきつついなこの後輩。

【緑璃】

「あはは。それじゃ出発しようか」

【陽】

「まずはどこにっ」

【緑璃】

「最初はお肉屋さんだよ」

【陽】

「肉屋？」

何で肉？

昼食はバーベキューでもするのか？

まさかなあ……

ま、行けばわかるか。

……

【緑璃】

「はい。お肉屋さんのコロッケと焼き鳥をゲットだよ」

なるほど、それで肉屋なのか。

【橙歌】

「うわぁ、美味しそう。先輩先輩、1個食べていい？」

【緑璃】

「ダメ。お昼まで我慢だよ」

先輩の持っている紙袋から、美味しそうな匂いが漂ってくる。

うう、朝飯抜き的身には辛い……。

【陽】

「先輩。持ちましようか？」

【緑璃】

「うーん、今にも食べちゃいそうな顔してるから止めておくれ」

【陽】

「……そうですか」

さすがにそこまでは考えてなかったんだけど、

そんなに表情に出ってたのか？

【緑璃】

「さ、次は牛乳屋さんだよ」

【陽】

「牛乳屋!？」

そこで何を買ったんだろうか。

と言うか、この商店街にそんな店があったのか……

……

……

……

俺達は商店街を巡り、結構な数の店で大量のお惣菜を買い込んだ。

おかげで全員の両手は袋で一杯になってしまっている。

【陽】

「随分と買い込みましたね」

【緑璃】

「ちょっと買いきすぎちゃったかなあ？ 重くない？」

【陽】

「そりゃ重いですけどね……」

見た目に持っている量は同じでも、俺が持っているのは飲み物だ。

2リットル入りのペットボトル4本分の重さが手に食い込む。

【陽】

「でも、大丈夫ですよ」

重いと言えば先輩辺りは手伝ってくれと思うけど、

両手一杯持っているのにさらに持たせる気にはならない。

こんな力仕事は、やっぱり男がするものだろう。

【陽】

「それにしても、よく知ってるんですね。

俺なんか知らない店までありましたよ」

肉屋のコロッケなんかは俺でも知っているけど、

八百屋で野菜スティックが注文できたりするのは全く知らなかった。

【緑璃】

「ちゃんと調べてきたからね。えへん」

先輩が胸を張ると、ただでさえ豊かな膨らみが一層強調される。

思わず視線が……ってダメだダメだ、見とれてどうする。

【陽】

「さすが先輩ですね。どっかの誰かにも見習って貰いたいですよ」
さりげなく視線を外して橙歌の方を見る。

【橙歌】

「ん、ふあんふあいつふあふあ（何か言った）？」

【陽】

「って何食ってんだお前はー！！」

妙に静かにしてると思ったら、つまみ食いしてやがったのか！

【橙歌】

「だって、腕の中からすっごく美味しそうな匂いがしたんだもん」

【陽】

「我慢してるよ！俺なんか朝飯も食ってないんだぞ！」

【橙歌】

「はい」

しぶしぶ袋の口を閉じる。

【紫苑】

「食べつくされる前に合流してしまった方がいいと思いますよ」

【陽】

「そうだな。橙歌、お前は俺と場所交代だ」

【橙歌】

「えー」

場所を交代した橙歌を後ろから監視しながら、俺達は集合場所へ向かった。

六月六日(その2)

<公園>

全員が合流した後、俺達は商店街を抜けた出口近くにある公園に足を運んでいた。

準備よく先輩が持ってきていたシートを敷き、その上に買ってきた食べ物を並べる。

【赤明】

「飲み物はみんなに行き渡った?」

お茶とジュースのペットボトルを持った赤明に、みんなから適当な返事が返る。

【緑璃】

「いいみたいだね。それじゃ、乾杯の音頭を、えっと誰がする?」

なんか花見みたいなのりになってるな。

何の集まりだかわからなくなりそうだな。

【那美】

「んと、私は陽君がいいと思うよ。みんなを集めたのは陽君なんだしね」

【緑璃】

「じゃあ、陽君お願いしちゃっていい？」

俺からすればいいだしっぺの那美だと思っただけど、

本人から推薦されたんじゃ仕方ないか。

【陽】

「わかりました。それじゃあ」

ジュースの入った紙コップを掲げる。

【陽】

「えーと、アルカンシエル結成を祝して、乾杯！」

【みんな】

「かんぱーい」

紙コップ同士を合わせて、お花見ならぬ親睦会が始まった。

【橙歌】

「ね、これあけて良い？」

【緑璃】

「こっちのも開けるね」

橙歌と先輩が率先して昼食の包みを開いていく。

橙歌は自分が食べたいからだけど、先輩は世話焼きスキルが発動してるからなんだろうけどな。

【那美】

「あ、美味しそう。これ、どこで買ってきたの？」

【紫苑】

「商店街です。個人商店の隠しメニューと言っ感じでしたけど」

【藍叉】

『すごく 多い』

【緑璃】

「うーん、ちょっと買いすぎちゃったかなあ？」

【赤明】

「大丈夫よ。いざとなったら男の子たちが食べてくれるわ」

【黄牙】

「朝飯も食ってないし、食いまくるぜ」

【陽】

「俺もか。まあ頑張りはするけど」

それでも食べきれないくらいある気がするけどなあ……

……

……

……

【黄牙】

「陽、俺達は勝ったんだな……」

【陽】

「ああ、そつだ。俺達の勝利だ……」

予想通り大量に残った食料を何とか食べきり、2人して背中から倒れる。

俺達に処理を任せて、早々にギブアップした女子達は、那美を困んでわいわいと騒いでいる。

初めて携帯を買った那美に使い方を教えたり、メールや電話で遊んでいるらしい。

【黄牙】

「あー、もう食べねえ……」

【陽】

「俺もだ。今日の晩飯いらないかも……」

ぱんぱんになったお腹を撫でながら、空を見上げる。

あれ……

【陽】

「……いつの間にこんなに曇ってたんだ？」

食べ始めた頃は気持ちよく晴れていた空が、いつの間にか一面の雲に覆われていた。

【陽】

「これ、降ってくるんじゃないか？」

【赤明】

「そうね……ちょっと待って」

起き上がりながら聞くと、赤明が携帯を取り出して操作し始めた。

【赤明】

「あら、午後から雨の予報だったのね」

携帯の時計を確認すると、時間は午後2時過ぎ。

午後から降るといふなら、よくもっている方かも知れない。

【藍叉】

『撤回する？』

【赤明】

「その方が良さそうね。片付けましょうか」

【黄牙】

「そんなに急がなくても、雨降ったら帰ったんでいいんじゃないか
?」

【赤明】

「それじゃあ寮に帰るまでにびしょ濡れになるじゃない。大陣君は
傘持ってるの？」

【黄牙】

「持ってねえけどさ。でも、陽の家ってこの辺だったろ？ 雨宿りさせてもらおうぜ」

よりによって俺の家を当てにしてたのかよ。

【陽】

「だめだぞ。あの家にずぶ濡れの人間が10人近くも入ったら困るだけだ。」

家の人もいるしな」

【黄牙】

「あー、そうか……。しゃあないな」

諦めてくれたか。

さっき言った理由も確かにあるけれど、

それ以上に、せつかく寮に入って出た家に意味もなく帰りたくなかった。

【緑璃】

「それじゃあ、撤収作業開始だよ」

手早くゴミをまとめて帰る準備を整え、今日はこれで解散になった。

【黄牙】

「陽」。いるかあ」

そんな声と一緒に、扉が乱暴に叩かれる。

【陽】

「黄牙か？ 開いてるぞ」

【黄牙】

「お、そうか。邪魔するぞ」

返事をする、黄牙が部屋に入ってくる。

【陽】

「どうした？」

【黄牙】

「明日までの宿題があつた。それをしに来た」

そう言って、抱えていた筆箱とノートを見せてくる。

【陽】

「写しに来た、だろ？」

【黄牙】

「なぜわかった？」

【陽】

「そういう台詞は、教科書を持ってきてから言ってくれ」

しかも、俺の宿題が終わった途端に来るとか、狙ってたんじゃないんだろっな。

【黄牙】

「ま、そんな細かい事はいいだろ？ ノート貸してくれよ」

【陽】

「いいけどさ。たまには自分でやれよ」

無駄だと思っけど一応言ってから、机の上に置いてあったノートを渡す。

【黄牙】

「わかってるわかってる」

黄牙は部屋の隅からテーブルを引っ張り出して、ノートを置く。

【陽】

「どこでやるのか？」

【黄牙】

「持って帰ったら、また持ってこなきゃいけないだろ」

【陽】

「その位の手間を惜しむなよ……」

隣の部屋から何秒で来られると思ってるんだ。

【黄牙】

「いいじゃねえか。俺がどこで宿題したって、俺の勝手だろ」

【陽】

「いや、勝手に人の部屋でやるのは駄目だろ」

【黄牙】

「駄目なのか？」

【陽】

「ん……まあ俺は構わないんだけど」

【黄牙】

「だったら問題ねえよ。お前の部屋でしかやらないからな」

【陽】

「……そうか」

宿題は自分の部屋で、と言うか自力でやるものだ、って言う所な
んだろっけど。

言っても聞くとは思えないし、もういい事にしてしまおう。

……

……

……

【陽】

「ん？」

黄牙が宿題を写し始めてしばらく経った時、また部屋の扉がノックされた。

【黄牙】

「誰か来たのか？」

【陽】

「お前と同じでアポ無しだけだな」

多分、赤明と橙歌だろう。

【陽】

「開いてるぞー」

声をかけると、扉が開き予想通り赤明と橙歌が入って来る。

【赤明】

「こんばんは」

【橙歌】

「やっほー」

そして、お馴染みの顔の後ろにもう1人。

【緑璃】

「お邪魔しまーす」

寮内にある売店の袋を提げた緑璃先輩が入ってきた。

【陽】

「あれ？ 緑璃先輩？」

【緑璃】

「こんばんは、陽君」

【陽】

「こんばんは。どうしたんですか？」

【緑璃】

「売店で買い物してたんだけど、捕まっちゃったの」

【橙歌】

「僕が捕まえたんだよ」

偉そうに言う橙歌。

【陽】

「……すみません。こいつが迷惑を掛けてまして」

【緑璃】

「あ、ううん。気にしなくていいよ」

【緑璃】

「私もお茶会の話聞いて、楽しそうだなーって思ったし」

先輩は楽しそうにっこり笑う。

【緑璃】

「えっと、私も仲間に入れてもらっていいかな？」

【橙歌】

「いいよね？」

【陽】

「ん、別にいいけど」

【橙歌・緑璃】

「「やった！」」

2人で手を取り合って飛び跳ねる。

しかし、こうしていると、とても同級生と先輩には見えない。

【赤明】

「それじゃあ、準備をしましょう」

【陽】

「ん、そうだな」

赤明がポットのコンセントを繋いで、棚から食器を取り出す。

【緑璃】

「あ、手伝うね」

部屋を見回していた先輩が、さっと赤明を手伝い始めた。

手際よくテーブルの上に準備が整っていく。

【赤明】

「ありがとうございます、先輩」

【陽】
「橙歌もちよつとは見習えよ」

早速テーブルに張り付いている橙歌に一言言ってやる。

【橙歌】
「ふえ？ ふえんふえいつふあ？」

振り向いた橙歌は欲張ったりリスみたいに頬を膨らませていた。

【陽】
「……なにやってんだ？」

【橙歌】
「ふおいひいよ？」

【陽】
「……飲み込んでから話せ」
何言ってるのかわからん。

【橙歌】
「んぐつ。おいしいよ、これ」

橙歌が差し出してきたお菓子を受け取る。

【陽】
「ケーキバー、イチゴシヨート？」

このお菓子、始めて見たぞ。

【橙歌】

「知らない？ 最近売店で大人気のお菓子だけど」

【陽】

「売店はあんまり行かないからなあ」

包み紙を剥がすと、細長いクッキー生地のお菓子が出てきた。

間に赤いジャム、多分イチゴだろう、が挟んである。

【陽】

「お、美味しい」

【橙歌】

「でしょー」

橙歌が嬉しそうに新しい包みを差し出してくる。

それを受け取ろうとして手を出して、

【赤明】

「あー、2人とも何してるのよ！」

【陽】

「うわっ!？」

【赤明】

「もう、今日のお茶請けなのに、そんなにつまみ食いして」

【陽】

「そ、そうだったのか？」

て言うか、「そんなに」？

【橙歌】

「ばれたか」

そんな事を言う橙歌の手元には、大量の空き袋。

【赤明】

「そんなに食べたんだから、2人共お茶請けは無しよ」

【陽】

「俺も!？」

俺1個しか食べてないのに!？」

【赤明】

「当たり前じゃない。2人でそんなに食べたんだから」

【緑璃】

「つまみ食いしちゃダメ、だよ」

先輩にまで言われてしまった……

【橙歌】

「あちゃー。ゴメンネ」

両手を合わせて拝まれる。

【陽】

「濡れ衣だ！」

.....

そんな一幕がありつつ、お茶会が始まった。

【緑璃】

「それでね、食堂のゴマプリンが美味しいんだよ」

【橙歌】

「あ、食べた食べた。僕は普通の方が好きだけど」

【赤明】

「そう言えば、ミルクプリンも新商品でしたね」

【橙歌】

「あ、あっちは甘くて美味しかったよ」

【緑璃】

「もう両方食べたの？」

【橙歌】

「美味しそうだなーって思ったら我慢できなくて」

【赤明】

「太るわよ」

【橙歌】

「だいじょーぶ。甘いものは別腹って言うじゃんか」

【緑璃】

「橙歌ちゃん。それ、甘い物はいっぱい食べられるって意味だからね」

【橙歌】

「へ、そなの？　じゃあ……太る？」

【緑璃】

「少なくとも、食べても太らないって意味じゃないよ」

【赤明】

「太るわよ、普通に」

【橙歌】

「ええー」

【陽】

「……………」

食堂のデザートの話で盛り上がる女の子達にどうもついて行けない。

黄牙は黄牙でいつまでも宿題写してるし。

【緑璃】

「陽君。さっきから静かだけど、どうかしたの？」

【陽】

「あー、いえ、特には」

【橙歌】

「て言うか、黄牙はさっきから何してるの？」

【黄牙】

「何って、宿題だよ宿題。お前はやってんのかよ？」

【橙歌】

「……まだだったりして」

【緑璃】

「橙歌ちゃん。宿題はちゃんとしないとダメ、だよ」

【橙歌】

「いざとなったら赤明に借りるから、大丈夫」

【赤明】

「また私を当てにしてたのね……」

赤明がやれやれと首を振る。

【緑璃】

「写しちゃダメ。って、あぁっ、黄牙君も写してるの!?!?」

【黄牙】

「まぁ、そうだけど」

【緑璃】

「それじゃダメだよ。あ、そうだ。私が教えてあげる」

【橙歌】

「え、遠慮したいかなあ……」

【緑璃】

「遠慮しないで、お姉ちゃんにお任せ。ね？」

【赤明】

「それはいいわね。写すだけじゃ力がつかないって思ってたのよ」

【陽】

「そうだな。黄牙、お前も先輩に教えてもらえよ」

黄牙の手元からノートを取り戻す。

【黄牙】

「マジかよ……」

【赤明】

「先輩、よろしくお願いします」

【緑璃】

「うん、おねがいされちゃいました。陽君、教科書貸してね」

【陽】

「あ、はい」

教科書を取り出して先輩に渡す。

【緑璃】

「それじゃ、始めよっか」

.....

.....

.....

【緑璃】

「はい、良く出来ました」

【橙歌】

「も、もうだめえ」

【黄牙】

「お、俺もだ.....」

元々大した量じゃなかっただけあって、30分ほどで宿題は終わった。

それでも、橙歌と黄牙は力尽きてテーブルに突っ伏している。

【陽】

「ご苦労さん」

【赤明】

「だらしないわねえ。普段からちゃんとしなからそうなるのよ」

【橙歌】

「甘いものが欲しいよー。赤明ー、ケーキバー頂戴」

【赤明】

「あ、ごめんなさい。もう無いの」

【橙歌】

「そんな……勉強したのにご褒美が無いなんて、酷いじゃんかあ」

【陽】

「お前は始める前に散々食べただろうが」

【緑璃】

「仕方ないなあ。明日の朝ごはんにしようと思ってたけど、ご褒美にこれあげる」

【橙歌】

「え、何々？」

橙歌が勢い良く顔を上げて、黄牙ものそのそ起き上がる。

ゲンキんな奴等だ……

【緑璃】

「はい、どうぞ」

緑璃先輩が持ってきていた売店の袋をひっくり返す。

中から、5つのパンがテーブルの上に転がり出てきた

【橙歌】

「あ、メロンパンだ！」

【黄牙】

「メロンパンだな」

【赤明】

「そうね、メロンパンだわ」

【陽】

「何で全部メロンパン……しかも5個も」

朝ごはんのつもりだったのなら、1人分だろう。

ちっこい体だけど、割と食べるんだろうか。

【緑璃】

「えっと、違うんだよ。こんなにいっぱい食べるんじゃないってね」

先輩は恥ずかしそうにメロンパンで顔を隠して、目だけをちょこんと出す。

【緑璃】

「そのね、好きなの。メロンパンの上の所が」

上の部分というと、あれか、クッキー生地のところか。

【陽】

「上の部分だけ食べるから沢山買ってる、って事ですか？」

【緑璃】

「うん……変かな？」

【陽】

「……いえ、まあ趣味の範囲内じゃないかと」

【緑璃】

「良かったあ」

【陽】

「ちなみに、残った部分はどうするんです？」

【緑璃】

「ちゃんと後で食べるよ。ジャムとかつけて」

【陽】

「なるほど」

……

お茶を淹れなおして、お茶会を再会する。

【緑璃】

「いただきます。はむっ」

先輩はメロンパンの端っこを銜えると、クッキー生地の部分だけをちまちま啄ばむ。

【橙歌】

「先輩ってさあ」

パンを齧っていた橙歌が口を離してしみじみと呟く。

【橙歌】

「時々すっごい可愛いよね」

【赤明】

「そうね」

【緑璃】

「ふええ！？　そ、そんな事ないよう」

指摘された先輩が真っ赤になって首を振る。

うーん、先輩には悪いけど橙歌の意見に激しく同意だ……

< 学生寮　213号室 >

ベッドに入る前に、カーテンと窓を開いて空を見上げてみる。

雲に覆われた真っ暗な空からは、まだ雨が降り続いていた。

【陽】

「明日には止んでるといいんだけどな」

いくら虹が雨上がりに見えると言っても、雨が降っているは見られないだろう。

【陽】

「アルカンシエル、か」

不思議な少女、那美に誘われて集まった、虹を架ける事を目的にしたグループ。

明日、晴れて虹を架ける事が出来たら、

生まれたばかりのこのグループはどうなるんだろうか。

同じ学園のメンバーはいいとしても、那美は他校の（学校に通っていない可能性もあるが）生徒だ。

どっちにしても、明日の天気を見ないとわからないか。

雨に止んで欲しいような降り続いて欲しいような、複雑な気持ちになりながら布団の中に潜り込んだ。

六月七日

< 6月7日(日) >

< 学生寮 213号室 >

目が覚めた時、聞こえていたのは天然の目覚ましの音だった。

ベッドから出て、カーテンを開け放つ。

音でわかつてはいたが、薄暗い空から雨粒が落ちていた。

【陽】

「降ってるなあ」

携帯で天気予報を確認する。

1日中降り続くという予報だった。

【陽】

「今日は虹は架けられないな」

残念と思うより先に安堵が来た。

これで少なくともあと一週間はアルカンシエルは続く。

より正確に言うなら、那美との繋がりが存在する。

俺は……虹を架ける事が出来たなら那美がいなくなるとでも思っ

ているのか。

【陽】

「……そんな事、あるはず無いだろ」

自分に言い聞かせるように呟くが、心の奥に何かが刺さっているような気分は抜けなかった。

<学生寮 食堂>

食堂に行くと、風見と紫苑が2人でテーブルいるのを見つけた。

朝食を受け取って、同じテーブルに向かう。

【陽】

「おはよ、2人共」

【紫苑】

「おはようございます、先輩」

【藍叉】

「おはよっ」

挨拶を交わして、椅子に座る。

2人の前にはもう空になった食器が置いてあった。

俺もそれなりに早起きしたんだが、先を越されてたみたいだ。

風見は、前みたいに楽しみで早起したのかもしれないな。

【陽】

「天気は見たか？」

【紫苑】

「はい。雨でしたね」

【藍叉】

『止むと思っ？』

【紫苑】

「天気予報では1日雨って言ってましたけど」

【陽】

「そつみたいだな」

【藍叉】

『どつするの？』

【陽】

「ん、そつだな。多分みんな来るだろうから、集まってから考えよ
「う」

【紫苑】

「そつですね」

【藍叉】

『わかった』

【陽】

「それじゃ、俺は飯を食べるか。いただきますっ」と

.....

【緑璃】

「おはよう。みんな早起きさんだね」

その後でやってきた赤明と橙歌に少し遅れて、緑璃先輩がやって来る。

【陽】

「おはようございます。みんな天気の話が気になったみたいですよ」

【緑璃】

「そうなんだ。私で最後？」

【赤明】

「大陣君がまだですけど」

【橙歌】

「黄牙は起きて来ないっぽいよね」

【陽】

「.....後で起こすよ」

【緑璃】

「あはは、よろしくね」

緑璃先輩が笑いながら席に着く。

それを確認して、赤明が話し始めた。

【赤明】

「それじゃあ、今日の話をするわね」

【赤明】

「みんなももう知ってると思うけど、今日は雨よ。
天気予報では、一日中降り続くみたい」

【赤明】

「虹を架けるのは無理そうだから、その代わりにどうするかだけど。
誰か、アイデアはある？」

【橙歌】

「はいっ！」

赤明が言っただけで、橙歌がぱっと手を挙げる。

【赤明】

「何？ 橙歌」

【橙歌】

「えっとね、掃除！」

【全員】

「ええ！？」

橙歌の発案に、全員の驚きの声が重なる。

【橙歌】

「何でみんなしてそんな反応するのさ……」

【陽】

「いや、だつてなあ……」

1 番無縁そうな人間からそんな提案があつた事が信じられない。

散らかしたら散らかしっぱなしみたいな橙歌が、自分から掃除なんて……

【陽】

「まさか、それで雨が降ってるんじゃないだろうな」

【橙歌】

「陽、それどういう意味さ」

【陽】

「言葉のままだけ」

【橙歌】

「むー」

橙歌の不満そうな声が驚きで静まり返った朝食の席に響いていた。

< 神社 神殿 >

朝食後、アルカンシエルメンバーは雨の中でいつもの神社にやって来た。

【陽】

「これは酷いな」

初めて踏み込んだ神殿の中は、想像以上に荒れ放題だった。

埃が積もり、土足で上がりこんだ誰かの足跡が一面に残っている。

雨が漏っていないのが不幸中の幸いか。

【陽】

「ここを掃除するのか……」

【緑璃】

「うん。でも、やっちゃったら後で便利になると思うよ。掃除しようって言ったのは橙歌ちゃんは、偉いよね」

【紫苑】

「そうですね。少し見直しました」

【藍叉】

『そつなの？』

【赤明】

「違っと思っわ」

【黄牙】

「だよなあ」

何人かが橙歌を見直しているようだけど、橙歌を良く知っている
と、こいつがそんな殊勝な事をするとは思えない。

【陽】

「で、本音は？」

【橙歌】

「秘密基地が欲しいから！」

【陽・黄牙・赤明】

「「「やっぱり」「」」

そんなことだろうと思ったよ。

【緑璃】

「そ、そうなんだ……」

【紫苑】

「……見直して損しました」

【橙歌】

「えー欲しくない？ 秘密基地」

【緑璃】

「うーん、秘密基地かどうかは置いておいて、掃除するのはいいと
思うよ」

【赤明】

「そうですね。じゃあ、水を汲んでくるわね」

【那美】

「水道の場所はわかるかな？」

【赤明】

「あ……那美は知ってるの？」

【那美】

「うん。案内するね」

【赤明】

「お願いするわ。黄牙、バケツを運んでちょうだい」

【黄牙】

「おう」

寮から持って来た幾つかのバケツに水を汲んできて、掃除が始まった。

いきなりの事で雑巾は用意できなかったから、拭き掃除に使うのはタオルだ。

だが、埃の量があまりに多くて、数mも行かないうちにタオルが真っ黒になってしまう。

一体何年掃除してなかったらこんなになるんだ。

【紫苑】

「雑巾をかける状況ですらないですね。掃除機が欲しいです」

【藍叉】

『ほこりが 凄い』

【那美】

「はい。竹箒しかないんだけど。いいかな？」

【紫苑】

「あ、助かります」

那美がどこからか持って来た箒で埃を掃きだして、ようやく拭き掃除が出来るようになった。

壁や板張りの床を適当に拭いていく。

【橙歌】

「黄牙ー！ 今見たでしょ！」

【黄牙】

「見たんじゃねえ、見えたんだ！」

「っ！か、スカートで床拭くんじゃねえよ！」

【橙歌】

「壁拭いてたつて黄牙が床拭いてたら見えるじゃんか！ 黄牙の工
ツチー！」

【黄牙】

「どわあー！！」

視界の隅で、橙歌に蹴っ飛ばされた黄牙が転がり出て行く。

【陽】

「何やってるんだか」

呆れながら顔を上げる。

……

……なんだろうこの白と黒の縞々は。

さらに視線を上に向ける。

【藍叉】

『見た？』

スケッチブックは持っていないから口パクだが、間違いなくそう言っていた。

【陽】

「……見えました」

さっきのは風見のスカートの中だったのか。

黄牙、お前の気持ちがよくわかるよ。

それで、風見さん。その竹箒は何に使うんでしょうか？

【藍叉】

『出でって』

【陽】

「ですよねーっ！」

埃と一緒に掃きだされた俺は、黄牙と2人で雨の吹き込む廊下をひたすら往復したのだった。

.....

.....

.....

座っても汚れないレベルまで埃を取り除き、掃除は終了になった。

【赤明】

「思ったより重労働だったわ……」

【緑璃】

「うーん、疲れたねー」

【藍叉】

『きれいになった』

見違えるほど綺麗になった床の上で一息つく。

【橙歌】

「雨、止まないねー」

橙歌の呟いた言葉で、全員が空を見上げる。

空は相変わらずの有様で、暗雲が一面を覆っていた。

【橙歌】

「神様、雨を止ませて下さい」

【黄牙】

「何言っただ、お前」

【橙歌】

「神様をお願いしてるの」

【橙歌】

「掃除もしたし、取り壊される前にだからぱーっと願いを叶えてくれるかもしれないじゃん」

【陽】

「無理だと思っけどな」

閉店間近のセールみたいに願いが叶えられてたまるか。

何のありがたみも無いじゃないか。

【那美】

「わからないよ？ みんなでお願いしてみたら、もしかしたら止むかも」

【緑璃】

「やってみようか？」

反対する人もいなかったから、そついう事になった。

目を閉じて、手を合わせる。

正しい方法があったような気もするが、うる覚えの上に中にまで上がりこんでいるのだから、

今更、多少の事を気にしても仕方が無いだろう。

【緑璃】

「いくよー。せーの」

【みんな】

「雨が止みますように」

.....

【紫苑】

「当たり前といえばそれまでですけど、止みませんね」

【陽】

「わかってはいたけどな」

全員でお願いしてから約30分。

雲に覆われた空からは相変わらず雨が降り続けている。

【赤明】

「雨も止みそうにないし、そろそろ戻りましょうか」

【黄牙】

「んなに急がなくてもいいんじゃないか？」

【赤明】

「お昼を食べられなくていいのならそれでもいいわよ?」

【黄牙】

「げ、もうそんな時間かよ」

那美以外のメンバーは全員寮生だ。

当然、寮の時間割には従わなければならない。

そろそろ寮に戻らないと、昼食の時間が終わりそうだった。

【陽】

「もう結構ギリギリだな」

【黄牙】

「やっべ。さっさと帰ろっぜ」

【陽】

「ん、そうだな。じゃあ、那美、今日はこれで」

【那美】

「うん。また明日」

< 学生寮 階段 >

【??】

「うーん、んー」

食堂の自販機まで買い物に行った帰り、階段を上っていると妙な声が聞こえた。

声が聞こえてくるのは2階と3階の間だ。

【??】

「うー、困ったんだよー」

女子階の方にはあんまり行きたくないんだけど、明らかに困ってるっぽいを見捨てるわけにもいかないか。

階段を上がり、踊り場を越える。

【陽】

「夏原だったのか」

夏原が、どでかいスピーカーを抱えようとして唸っていた。

【湖珠】

「あ、城崎君なんだよ」

【陽】

「何やってるんだ？」

【湖珠】

「音楽室のスピーカーを交換したから、要らなくなった方を貰ったんだよー」。

でも、ここで1回休憩したら持ち上げられなくなったんだよ」

【陽】
「そりゃ無理だろ」

スピーカーは内部に空洞が多いという構造上、見た目よりは軽い
が、これは夏原の身長の中分くらいはある。

女の子一人で運ぶのは大変だっただろう。

【陽】
「手伝うよ。よっ、と」

夏原と変わって、スピーカーを持ち上げる。

予想していた通り、それなりに重い。

運べないほどじゃないけどな。

【陽】
「で、これどこまで運ぶんだ？」

【湖珠】
「アイちゃんの部屋までだよー」

身軽になって階段を上がっていく夏原の後ろについて行く。

3階の廊下を進んで、ある部屋の前で止まる。

320号室、ここが風見の部屋か。

【湖珠】

「アイちゃん。いるー？」

.....

部屋の中から返事は無い。

【湖珠】

「アイちゃんがないみたいなんだよ」

【陽】

「まじか。どうするんだ、これ」

【湖珠】

「でもでも、大丈夫なんだよー。じゃーん」

夏原はポケットからカードを取り出すと、風見の部屋の鍵を開けてしまった。

【陽】

「拡張キーか」

俺と黄牙以外に使ってる奴初めて見たぞ。

それだけ仲が良いつて事なんだろうな。

【湖珠】

「ここに置いてー」

【陽】

「ん、よっと」

スピーカーを部屋に入っすすぐの所に置く。

【湖珠】

「私はここでアイちゃんを待ってるけど、城崎君も待ってる?」

【陽】

「いや、遠慮しておくよ」

【湖珠】

「そっか。じゃあ、運んでくれてありがとうだよ」

【陽】

「ん、じゃあな」

【湖珠】

「ばいばーい」

俺は風見の部屋に入っていく夏原に見送られながら、自分の部屋に戻った。

<学生寮 213号室>

その日の夜。

今日も赤明達がお茶会にやって来ていた。

【橙歌】

「やつほー。今日もゲストを連れて来たよ」

【赤明】

「今日も、偶然会ったのを連れてきただけでしょう」

呆れ顔の赤明の後ろから、今日は2人の客人が顔を出した。

【湖珠】

「こんばんはーなんだよ」

【藍叉】

『こんばんは』

【陽】

「ああ、こんばんは。ま、上がってくれ」

俺は4人を部屋に招き入れ、その足で隣室の黄牙を呼びに行った。

.....

.....

.....

お茶やお菓子を用意した所で、1つ困った事に気がついた。

【陽】

「座布団が足りないな」

【赤明】

「そう言えば、人数分しかなかったわね」

【橙歌】

「あれ？ でも昨日は足りてなかった？」

【赤明】

「あら？ それもそうね……どうしてかしら？」

言われて、昨日のお茶会の様子を思い出してみる。

と、すぐにその理由に思い至った。

【陽】

「昨日は黄牙が座布団を使ってなかったからだ」

宿題を写していた黄牙が、準備の間も腰を上げなかったから、そのまま緑璃先輩の方に回されていたんだった。

ついでに言うなら、今日はゲストが2人いるから、黄牙が使わなくてもやっぱり足りない。

【橙歌】

「じゃあ黄牙はいらないよね」

【黄牙】

「おわあっ」

橙歌が黄牙の座布団を引き抜き、ちょうど座ろうとしていた黄牙がひっくり返る。

【黄牙】

「何しやがるっ」

【橙歌】

「いーじゃんか。あっても無くても一緒でしょ？」

【黄牙】

「そっちは、まあいいけどよ。いきなり引き抜くんじゃねえ！」

【橙歌】

「あー、ごめんごめん」

【黄牙】

「ったく、しかたねえな」

黄牙が直接フローリングの床の上に座り込む。

あの心のこもってない謝罪で許してしまう辺り、黄牙も相変わらず大らかな奴だ。

【橙歌】

「そっいう訳で。はいこれ」

【湖珠】

「ありがとだよ。はい、アイちゃん」

【藍叉】

「(じくじく)」

橙歌からバケツリレーよろしく座布団が回されて、風見に渡る。

【赤明】

「それじゃあ、後1つね」

【陽】

「……そこで何故俺を見る」

【赤明】

「わからないかしら？」

【陽】

「……嫌だぞ、俺は。固いし冷たいし」

夏なんだから冷たいのはまだいいとしても、固いのは遠慮しておきたい。

【赤明】

「あら、その床の上に女の子を座らせるつもり？」

【陽】

「う……」

また嫌な言い方を……

これで断ったら、俺が完璧悪人じゃないか。

【陽】

「はいはい、わかったよ」

【橙歌】
「ちよーつと待った！」

諦めて腰を上げようとすると、橙歌に押し止められた。

【陽】

「何だよ？」

【橙歌】

「うん、僕が代わるよ」

橙歌が立ち上がり自分の分の座布団を夏原に渡す。

【湖珠】

「ありがとうだよー」

【藍叉】

『橙歌は どうするの？』

【橙歌】

「僕？ 僕はねえ……ここでもいいよーっ」

ポフ

【陽】

「あ、こら」

勝手に人のベッドに入るなよ。

【橙歌】

「んー……んん？」

橙歌がベッドの上をゴロゴロと転がる。

【橙歌】

「何か僕のベッドと違う感じがする」

【赤明】

「そんなはずは無いと思うけど？」

【陽】

「ベッドは部屋の備品だしな。気のせいじゃないか？」

【橙歌】

「そうかなあ……」

納得いかないのか、さらにゴロゴロと転がる。

ゴロゴロゴロゴロ……

ゴロゴロゴロゴロ……

ゴロゴロ。

あ、止まった。

【橙歌】

「わかった！」

【藍叉】

『何？』

【橙歌】

「陽の匂いがするんだ！」

【陽】

「んなっ」

橙歌の答えは予想の斜め上だった。

何となく気恥ずかしくなる。

【陽】

「何言ってるんだよ」

【橙歌】

「だって、ホントにそうなんだもん」

【陽】

「それでもそんな事言っんじゃない」

【橙歌】

「ふえ？ 何で？」

【陽】

「何でも！」

【陽】

「あーもう、お茶会始めるぞ！」

……

【橙歌】

「あ、そだ。僕、湖珠に聞きたいことがあるんだ。別に藍又でもいいんだけど」

【湖珠】

「え？ なになに？」

興味深そうに身を乗り出す橙歌の隣で、風見が少し首を傾げる。

これは、『何？』って所だろうな。

風見と話していると、人間って言うのは声に出さなくても結構意思疎通が出来るのがわかる。

外国に行っても身振り手振りで何とかなるって話を聞いたことがあるけど、あながち嘘でもないかもしれない。

まあ、やっぱり不便といえば不便なんだが。

【橙歌】

「藍又って元々そういう喋り方してたの？」

【陽】

「おいおい……」

確かにそんな話をした時に、湖珠に聞けとは言ったけど、

それは風見が気にしてたらいけないからだったのに……

【陽】

「……………」

風見の様子を窺ってみる。

風見は、特に気にした様子も無く、スケッチブックにマジックを走らせていた。

それ程、こつちが気を使わなくてもいいのかもしれないな。

【藍叉】

『自分ではよくわからないけど 多分 こんな感じだったと思う』

【湖珠】

「うーん、でも、もうちょっと饒舌な感じだったんだよ」

【橙歌】

「ふーん、そうなんだ」

【黄牙】

「そりゃま、筆談だったら口数減るわな」

【藍叉】

『人がたくさんいると あんまりしゃべれない』

普通に考えて、字を書く方がただ喋るのより時間がかかる。

書いている間に話題が流れてしまう事も珍しくないだろう。

【湖珠】

「2人だったらいっぱいお喋りできるんだけどねー。見てみる?」

そう言っつて、夏原はポケットからメモ帳を取り出した。

【陽】

「あれ、そのメモ帳って」

【藍叉】

『知ってるの?』

【陽】

「俺がスケッチブック届けた時に見てたやつじゃないか?」

2人と親しくなる切っ掛けだった、落し物のスケッチブックを届けた時に、

2人で覗き込んでいたのが、確かこのメモ帳だった気がする。

【湖珠】

「さすが城崎君。正解なんだよ」

【赤明】

「……何が流石なのかしら?」

【黄牙】

「何だっつていいじゃねえかよ」

【陽】

「で、それは?」

【湖珠】

「これはね、アイちゃん第3の会話ツール。その名も、私専用メモ帳！」

【湖珠】

「アイちゃんと友達以上の絆で結ばれた時に貰える、親友の証なんだよ！」

【橙歌】

「そうなの？ いいなー」

橙歌が目を輝かせてメモ帳を見つめる。

【橙歌】

「ね、藍又。僕にも頂戴？」

風見は少し考えて、スケッチブックを取る。

そこには、簡潔に一言、というか、1文字。

【藍又】

『ヤ』

【橙歌】

「やった！」

と、橙歌が風見の返事を見て喜んでるけど、

【陽】

「今のはNOの方だろ？」

YESだったらヤーと『ー』が付いてる筈だ。

【橙歌】

「え、そうなの？」

【藍叉】

「（こくん）」

無情にもあっさり頷く風見。

【橙歌】

「そんなあ〜」

橙歌はがっくりとベッドに突っ伏した。

【黄牙】

「ははっ。友情ポイントが足りてなかったみてえだな」

【橙歌】

「ふん、いいよーだ。僕には赤明がいるんだから」

【赤明】

「え、私？」

【橙歌】

「何でそこでびっくりするのさ。」

僕って赤明の親友じゃなかったの？」

【赤明】

「え、そうね。橙歌は私の親友よ」

【赤明】

「色々と迷惑かけられてばかりだけど、1番の友達だと思ってるわ」

【橙歌】

「うわー、何かすごい微妙な言い方されたあ」

【黄牙】

「不安定な友情だなあ。その点、俺達の絆は揺るぎねえよな」

【陽】

「俺とか？ それは、まあ」

それなりに長い付き合いだし、今まで色々と面倒を乗り越えたりなあ……

【黄牙】

「俺らは兄弟みたいなもんだからな！ な、未来の義弟！」

そっちかよ！

【陽】

「何度も言ってるけど、唯鈴ちゃんはそっという対象じゃ無いから」

【黄牙】

「何だと？ 唯鈴の何が不満だったんだ！？」

【陽】

「いや、唯鈴ちゃんは可愛いし、いい子だけどさ」

【陽】

「まだ中学生だろ、あの子は」

恋愛対象というよりは、妹みたいな子って感覚が先に出てくるんだよな。

【黄牙】

「おま、唯鈴に中学生じゃ出来ないような事をする気かよ！」

【陽】

「違うわ！」

どうやってたらそう言う発想になるんだ！？

【黄牙】

「唯鈴をそんな目で見んじゃねえ！」

【陽】

「だから、見てないって！」

【黄牙】

「そんなに魅力が無いってのかよ！？」

【陽】

「どっちなんだよ！？」

見るなって言ったり、魅力が無いのかって言ったり、滅茶苦茶だ

ぞ。

【黄牙】

「複雑な兄心なんだよ！ わかれよ！」

【陽】

「わかるか！」

……

【黄牙】

「はあ、はあ……」

【陽】

「あー……何やってんだろ、俺」

盛大に言い争って我に帰る。

【湖珠】

「凄いね。激戦だったんだよ」

【赤明】

「これは凄いんじゃないけど、ただの馬鹿って言うのよ」

【橙歌】

「黄牙も陽も、よく飽きないね」

夏原は純粹に驚いているが、赤明達には生ぬるい視線を向けられてしまった。

妹馬鹿なのは黄牙だけなのに、何で俺までそんな評価を受けないといけないんだ……。

【藍叉】

『ところで いすずちゃんって 誰？』

【赤明】

「そう言えば、知らなかったのよね」

【赤明】

「唯鈴ちゃんは、大陣君の妹さんよ」

赤明がスケッチブックの片隅に、漢字で『唯鈴』と書く。

【湖珠】

「へー。大陣君って妹がいたんだ」

【黄牙】

「おう、そうだぜ。唯鈴はな」

黄牙が風見と夏原に、嬉々として唯鈴ちゃんの話始める。

こうなったら、もう聞いていようがいまいが関係無い。

ほっといても延々と話すだけだ。

【陽】

「やれやれ……」

【赤明】

「お疲れ様。はい、お茶よ」

【陽】
「ん、サンキユ」

俺は、赤明の注いでくれたお茶で、渴いた喉を潤す。

【陽】
「しかし、黄牙の唯鈴ちゃん好きにも困ったもんだな」

【橙歌】
「シスコンって言葉じゃ全然足りてないもんね」

【赤明】
「そうね」

【赤明】
「それにしても、この話はいつまで続くのかしら……？」

【陽】
「……さあな」

結局、この日のお茶会は半分以上が黄牙の妹談義だった……

……

……

……

【赤明】

「それじゃ、おやすみなさい」

【橙歌】

「ばいばーい」

【黄牙】

「じゃあな」

お茶会が終わり、それぞれの部屋に帰っていく。

【藍叉】

『また明日』

【陽】

「ああ。またな」

【湖珠】

「アイちゃん、先に帰ってて欲しいんだよ」

【藍叉】

『どうしたの?』

【湖珠】

「ちょっと、城崎君とお話があるんだよ」

【陽】

「俺と?」

【湖珠】

「そうなんだよ」

【藍叉】
『ないしょの話？』

【湖珠】
「うん、ちよつぴり。
先に帰っててくれる？」

【藍叉】
『ヤー』

風見は、こくりと頷いて部屋を出て行った。

【陽】
「で、どうしたんだ？」

【湖珠】
「うん。お礼を言いたかったんだよ」

【陽】
「お礼？」

何かお礼を言われるような事があつたっけ？

【湖珠】
「アイちゃんの事。
気にかけてくれるって言うてくれたけど、こんなによくしてくれ
るって思わなかったから」

【湖珠】

「だから、ありがとうなんだよ」

【陽】

「あー、そういえばそうだったな」

最初は、夏原に風見と話をしてやって欲しいって頼まれたんだっけ。

すっかり忘れてた。

【陽】

「気にかけるって言うか、もうすっかり仲間だからな」

【陽】

「アルカンシエルに必要なメンバーだよ」

【湖珠】

「アルカンシエル？」

不思議そうな顔をする。

そう言えば、名前を決めた時に夏原はいなかったのか。

【陽】

「俺たちのチーム名だな」

【湖珠】

「へえー。かっこいい名前なんだよ」

【陽】

「風見が考えてくれたんだ」

【湖珠】

「さっすがアイちゃん」

【陽】

「ま、そんな風に大事なメンバーって事だ」

【湖珠】

「そっか……」

【湖珠】

「じゃあ城崎君。」

「これから、アイちゃんの事をよろしくお願いします」

深々と頭を下げられた。

俺たちになら、安心して風見を任せられるって、そういう事だろうか。

でも、それは微妙に違うだろう。

【陽】

「ここから、何を自分はこのまでみたいなさ言ってるんだよ」

【湖珠】

「だって、私よりもみんなの方が一緒にいられるし……」

そっか。

夏原は歌の習い事で、結構忙しいんだった。

だから、自分の代わりになる人を探してたのか。

【陽】

「でも、風見と1番仲がいいのは夏原だと思うぞ。それとも、夏原は風見といるのは嫌なのか？」

【湖珠】

「そんな事、絶対無いんだよ！」

【陽】

「だったら、これからも一緒にいいだろ。と言うか、夏原もアルカンシエルのメンバーみたいなもんだし」

【湖珠】

「でも、私、放課後とか出られない日もあるんだよ？」

【陽】

「来られるときだけ来たら良いんだって」

【湖珠】

「私も、仲間に入れてもらえるの？」

【陽】

「さっきからそう言ってるだろ」

そもそも、今日のお茶会でも普通に馴染んでたし。

多分、かなり今更だ。

【湖珠】

「じゃあ、じゃあ、

アイちゃん共々、これからよろしくお願いします、なんだよ」

【陽】

「ああ、こちらこそよろしくな」

こうして、アルカンシエルに新メンバー（非常勤）が加わった。

【湖珠】

「城崎君。本当にありがとう。

それじゃあ、またなんだよ」

【陽】

「ん、またな」

夏原を見送った後、携帯を取り出す。

みんなに、新メンバー加入の報告を送るとしよう。

六月八日

< 6月8日(月) >

< 学生寮 食堂 >

【黄牙】

「よー」

食堂の入り口で待っていると、黄牙が階段を下りて現れた。

【陽】

「ん、おはよう」

今日は起こしに行かなくても大丈夫だったか。

まあ、今まさに起こしに行こうとしていたところだったんだが。

【黄牙】

「他の連中は？」

【陽】

「今日は誰も」

【黄牙】

「いつも誰かはいたのに、珍しいな」

【陽】

「一応言っておくと、俺はここで全員と会ったからな」

今誰もいないのは黄牙が遅かったからだ。

【黄牙】

「じゃ、さつさと食って行くとすっか」

【陽】

「そうだな」

<学園 2年教室>

教室について、自分の席に鞆を置いていると、荷物を置いた黄牙がやって来た。

【黄牙】

「陽。英語の宿題見せてくれねえか？」

【陽】

「ん、まあいいけど」

鞆からノートを取り出して黄牙に渡す。

【陽】

「今日は小テストもあるけど、大丈夫なのか？」

【黄牙】

「げ、マジかよ。どっから出るんだ？」

【陽】

「書き出しといてやるから、お前はそれ写してろよ」

【黄牙】

「悪いな。頼む」

黄牙が自分の席に戻ってノートを写し始める。

【陽】

「えーと、範囲範囲っと。……ん？」

ルーズリーフと教科書を出して、テスト範囲をメモっていく。

ついでに、出そうな問題も書いておいてやるか。

えーと、これは出すって言ってたな……ん？

何か視線を感じるような……

【陽】

「何だ？」

振り向く。

が、特にこっちを見ている人はいない。

【陽】

「気のせいか……？」

気を取り直してメモに戻る。

【??】

「……………」

やっぱり見られてる……

【陽】

「誰だっ」

振り向く。

【陽】

「……………」

やっぱり誰も見ていない。

【陽】

「気のせいか……と見せかけて！」

フェイントを入れて振り向く。

【赤明】

「あ……………」

赤明とばつちり目が合った。

赤明の席にいた橙歌もこっちを見ている。

【陽】

「何だ？」

【橙歌】

「な、何の事？」

【陽】

「どもってる時点でなにかあるって言ってるようなものだからな」

【赤明】

「別に何でもないの。気にしないで」

【陽】

「そう言われても、気になるだろ」

【赤明】

「気にしなくていいのよ。ほら、早く書かないと時間が無くなるわ
」
「よ」

教室の時計を見ると、ホームルームまであと5分も無かった。

取り合えず、黄牙にメモを書くのが先か。

【陽】

「……後でまた聞くからな」

追求は諦めて書き写す作業に戻る。

2人の視線は、背中に突き刺さったままだった。

<学園 2年教室>

午前中の授業が終わり、昼休みになった。

さっそく赤明の席に向かう。

【陽】

「で、朝のアレは何だったんだ？」

【赤明】

「あなた、まだ気にしてたの？」

【陽】

「普通気になるっての」

【赤明】

「そんなに気にしなくてもいいのに」

赤明は溜息を吐いて、鞆の中を探る。

【赤明】

「はい。これよ」

手渡されたのは、月刊の漫画雑誌だった。

【陽】

「これがどつしたんだ？」

【赤明】

「恋愛相性占いの特集があったから、ちょっとやってみたのよ」

【陽】

「もしかして、その結果の所為か？」

【赤明】

「そうよ。その折り目のページ」

【陽】

「えっと……ああ、ここか」

目印がつけてあったのは、占いの結果のページだった。

結果の1つずつにそれぞれ1ページ使われているらしい。

細かいのは読み飛ばして、大きな字の見出しを拾う。

【陽】

「えー、『運命に導かれたような2人。公私に渡って支え合うベストパートナーとなるでしょう。結ばれたなら明るい人生が待っています』？」

俺が見られてたって事は、占われた1人は俺だよな。

って事は、赤明か橙歌のどっちかとこんな結果が出たのか。

【陽】

「これって、俺と……」

【赤明】

「ええ、城崎君と大陣君の相性よ」

【陽】

「相手黄牙かよ！ 普通は異性でするもんじゃないのか!？」

【赤明】

「そんな些細な事はこの際問題じゃないわ」

【陽】

「全然些細じゃないから！」

【赤明】

「城崎君ってよく大陣君を起こしてるでしょう？」

それに、学園関係の手助けもしてる」

【陽】

「確かにしてるけど……」

【赤明】

「まさに公私で支え合ってるでしょう？ だから、つい気になって」

【陽】

「支え合いになってないっての。それだけじゃ俺が尽くしてるみただら！」

【赤明】

「尽くしてるの!？」

【陽】

「そういう意味で言ったんじゃないっての！」

友達として面倒見てるだけだった！

赤明だってさんざん橙歌の面倒見てるだろ？」

【赤明】

「まあ、それはそうね」

【陽】

「それと同じだって。恋愛とかありえないから」

【赤明】

「そう、よかったわ。友人が特殊な性癖の持ち主じゃなくて」

やっとわかってもらえたか……

ただの相性占いならともかく、恋愛占いを同性同士でやるとか何を考えてるんだか。

俺の恋愛対象は普通に女の子だったの。

【赤明】

「あら、それなら急がないと大変な事になるわよ」

ふと思いついたみたいに赤明が呟く。

何か凄い嫌な予感がするんだが。

【陽】

「どっしした？」

【赤明】

「橙歌が、みんなに教えてくるって。さっき飛び出して行ったわよ」

【陽】

「橙歌あああつ！」

俺は、橙歌を探して教室を飛び出した。

<商店街>

放課後。

俺は神社に行く前に商店街を訪れていた。

と言うのも、赤明に飲み物を買ってから来いと言われたからだ。

【陽】

「ドリンク代は俺持ちとかならないだろうな……ん？」

あの後姿は……

【陽】

「唯鈴ちゃん？」

【唯鈴】

「？」

確信が持てなくて、呼びかけと言うよりは独り言ぐらいの声だったが、唯鈴ちゃんが気づいて振り返る。

【唯鈴】

「あ、お兄さん！」

ぱつと笑顔になって、駆け寄って来た。

【唯鈴】

「こんにちは、お兄さん。今日はお買い物？」

【陽】

「まあな。飲み物を買いに来たんだ」

【唯鈴】

「飲み物？ わざわざ商店街まで？」

【陽】

「人数が多いから、大きいペットボトルのを買いに来たんだ。自販機に無いから」

【唯鈴】

「そうなんだ。パーティとかするの？」

【陽】

「そういうわけでもないけど、黄牙から聞いてないか？ アルカンシエルの話」

【唯鈴】

「あるかんしえる？ ううん。聞いてないよ」

【唯鈴】

「アルカンシエルって何？」

【陽】

「ん、そうだな……」

改めて何と聞かれると説明に困るな……

【陽】

「まあ、グループ名だな。俺達の」

【唯鈴】

「グループ名？」

【陽】

「最近、大勢仲良くなってさ。ひとまとめに呼ぶ名前があった方が便利そうだったんだ」

【唯鈴】

「そんなにいっぱいいるの？」

【陽】

「そうだな、えーと」

【陽】

「まず黄牙、赤明、橙歌だろ」

メンバーを指折り数える。

ここまででは、唯鈴ちゃんも面識があったはずだ。

【陽】

「で、緑璃先輩、風見、紫苑、那美。俺を入れたら8人だな」

【唯鈴】

「……そうなんだ。むー……」

数え終わると、なぜか唯鈴ちゃんが不機嫌そうな顔をしていた。

【陽】

「どうかしたか？」

【唯鈴】

「お兄さん。新しい人って、もしかしてみんな女の子？」

【陽】

「……あ、ほんとだ」

意識してなかったけど、確かにそうだな。

じゃあ、唯鈴ちゃんが不機嫌なのって嫉妬、か？

それなりに好意を持ってくれてるのはわかってるけど……

いや、やっぱりまだそういうのは早いよな。

でも、それだと何で不機嫌になるのかわからない。

【陽】

「えーと、何で怒ってるんだ？」

【唯鈴】

「べっつにい。怒ってなんかないよ」

【陽】

「怒ってるだろ……」

【唯鈴】

「怒ってないよ。ただ……」

【陽】

「ただ？」

【唯鈴】

「全然意識もされてないのに、分母が大きくなっちゃったなーって思っただけ」

【陽】

「分母？」

何の事だろ？

俺が首を捻っていると、唯鈴ちゃんはがっくりうなだれた。

【唯鈴】

「うう、いつになったら女の子扱いしてもらえるんだろ……」

今度は急に落ち込んだな……。

理由は良くわからないけど、兄としては妹を落ち込ませとく訳にもいかないか。

……ばれたら黄牙が怖いし。

【陽】

「よし、唯鈴ちゃん。折角会ったんだから、何か食べないか？
お兄さんが奢ってあげるよ」

【唯鈴】

「うう、やっぱり妹扱いだ……」

機嫌を取るつもりだったのに、余計落ち込んでしまった。

【陽】

「あれ、嫌だった？」

【唯鈴】

「はあ……今はこれで我慢するしかないのかなあ……」

唯鈴ちゃんは、肩を落として周りを見回す。

そして、1軒の店を見た途端にぱつと顔を輝かせた。

【唯鈴】

「あつ。お兄さん、あれがいいな」

【陽】

「たこ焼き？」

【唯鈴】

「うんっ」

【陽】

「ん、わかった。買って来るから、ちょっと待ってて」

唯鈴ちゃんを残して、たこ焼きを買いに行く。

唯鈴ちゃんってたこ焼きが好きだったのかな？

知らなかった。

【陽】

「お待たせ」

買ってきたたこ焼きを唯鈴ちゃんに渡す。

【唯鈴】

「お兄さん、ありがとう。ここで食べていい？」

「ごそごそとビニール袋からパックを取り出す。

やっぱり好きなんだろうか。

【陽】

「ああ。ベンチに行こうか」

この商店街は、道の両側に商店が並び、真ん中にベンチが置いてある。

放課後だけあって、買い食いしている学生で込んでいるが、空いているベンチを見つけて2人で座る。

【唯鈴】

「では、いただきまーす」

【陽】

「どうぞ」

唯鈴ちゃんが付属の割り箸で、たこ焼きを1つ頬張る。

この店は楊枝じゃないのか。

【唯鈴】

「熱っ、でもおいしっ」

【陽】

「それは良かった」

【唯鈴】

「お兄さんは、買わなかったの？」

【陽】

「俺はこの後アルカンシエルの集まりがあるから」

迂闊にたこ焼きなんて持って行ったら、食べ尽くされる自信があるぞ。

【唯鈴】

「それじゃあ……あーん」

と、たこ焼きを差し出してくる。

【陽】

「いや、唯鈴ちゃん？」

【唯鈴】

「美味しいよ？」

それに、全部食べたら私、晩御飯が食べられないよ」

【陽】

「いやでも、恥ずかしいし」

こんな人通りの多いところで、あーんなんて出来ないって。

【唯鈴】

「私はお兄さんの妹みたいなものなんでしょ？ 兄妹だったら普通だよ」

【陽】

「んー……」

兄妹いないからわからないけど、そうなのか？

でも、黄牙と唯鈴ちゃんならありえそうだなあ……

ん、そんな気がしてきた。

【唯鈴】

「はい、あーん」

再びたこ焼きが差し出される。

ま、いいか。

【陽】

「じゃ、あーん」

唯鈴ちゃんにたこ焼きを食べさせてもらう。

【唯鈴】

「どごっ?」

【陽】

「うん、美味しい」

【唯鈴】

「よかった」

唯鈴ちゃんはにっこり笑うと、たこ焼きを1つ口に運ぶ。

【陽】

「あ……」

【唯鈴】

「どごしたの?」

思いつ切り間接キスなんだが……

【唯鈴】

「?」

【陽】
「いや、別に」

気づいてないみたいだし、黙っとこう。

うん、それがいい。

【唯鈴】

「お兄さん、ちょっと赤くなってるよ？ 熱かった？」

【陽】

「そ、そうだなー。唯鈴ちゃんも火傷しないようにね」

【唯鈴】

「はい」

唯鈴ちゃんはまた1つ、たこ焼きを食べる。

唯鈴ちゃんは、妹みたいな子なんだし、つまり家族も同然って事だ。

だから照れる必要なんて無いはずだ！

【唯鈴】

「お兄さん、もう1個食べる？」

【陽】

「い、いや。遠慮しとく」

【唯鈴】

「私に食べさせてもらうのは、嫌なの？」

上目遣いで見つめられる。

黄牙ほどじゃないけど、この表情には弱いんだよ……

【陽】

「じゃ、じゃあ、もう1個貰おうかな」

【唯鈴】

「うんっ。はい、あーん」

【陽】

「……あーん」

……

【唯鈴】

「それじゃあ、お兄さん。さようならー」

【陽】

「あ、ああ。またな」

商店街の入り口で上機嫌な唯鈴ちゃんを見送る。

さ、急いでお茶を買いに行こう。

< 神社 神殿 >

神社を訪れると、アルカンシエルのメンバーは既に集結していた。掃除をして綺麗になった神殿の中に上がって、持ち寄ったお菓子を広げている。

橙歌じゃないけど、すっかり秘密基地と言っ言葉が似合う感じになっちゃってな。

【陽】

「こんにちはー」

俺も神社に上がり込み、雑談に加わる。

【橙歌】

「あ、陽。遅かったね」

【陽】

「ちょっと商店街に寄ってたんだ。はい、お土産」

【那美】

「あ、お茶買ってきてくれたんだ。ありがとう」

近くにいた那美にペットボトルを渡す。

【陽】

「で、何の話をしてるんだ？」

【橙歌】

「何って程の事もないけど。単なる雑談」

【陽】

「そうか」

ま、そうだろうな。

てか、俺がいないところで大事な話をされてたら凹むぞ。

【緑璃】

「陽君。何かお話のネタある？」

【陽】

「ん、そうだなあ……」

俺も雑談に加わる事に決め、今日の昼の出来事を話し始めた。

【陽】

「とまあ、そういう事があって」

【緑璃】

「それで陽君が凄い顔して教室に飛び込んできたんだ。

しかも何も言わずに飛び出していくから、びっくりしちゃったよ」

【陽】

「すみません。急いでたもので」

【那美】

「それで、結局橙歌は捕まえられたの？」

【陽】

「紫苑の教室で捕まえたよ。紫苑が学食に行ってなかったら間に合
わなかったな」

【紫苑】

「クラスメイトが騒いでたのはそのせいだったんですね。」

騒ぐのは先輩の勝手ですけど、他人に迷惑をかけないようにして
下さい」

【陽】

「ごめん。次からは気をつけるよ。ほら、お前も謝れ」

【橙歌】

「何で僕まで……」

【紫苑】

「時雨先輩？」

【橙歌】

「う、ごめん」

一睨みで橙歌を謝らせるとは、紫苑、恐ろしい奴だ。

【那美】

「ねえ赤明。まだその雑誌持ってる？」

【赤明】

「持ってるけど、どっかぶっ壊すの？」

【那美】

「私もやってみようと思って。いい？」

【赤明】
「ええ、構わないわよ」

赤明が雑誌を取り出して那美に渡す。

【那美】
「これ、ちょっと面倒だね」

【陽】
「そうなのか？」

那美の手元を覗き込む。

占いの手順を見ると、名前をローマ字に変えて数に換算する事から始まって、10程の手順が並んでいた。

【陽】
「うわ、面倒だな」

【赤明】
「ちなみに、城崎君の数字は524よ」

【陽】
「524ね……」

教えられたからどうと言うものでもないけど、一応頭の片隅に置いておこう。

【那美】

「それじゃあ、やってみるね」

【赤明】

「はい、紙とシャープペン。書かないとわからなくなるわよ」

【那美】

「うん。ありがとう」

那美が紙に書きながら計算を始める。

『那美』ならローマ字にしても4文字か。暗算で出来そうだな。

ちよつとやってみるか。

えーと……

……

【那美】

「んと、これでいいかな」

【陽】

「ああ、俺も」

【那美】

「え？」

【陽】

「あ、いや別に。それで、いくらになった？」

俺の計算だと、那美は628になるはずだけど。

【那美】

「私は92になったよ」

【陽】

「え、92?」

【那美】

「そつだよ。どうかした?」

【陽】

「ん……いや、何でもないよ」

数字がずれたな……。

多分俺が計算を間違っただろう。

横着するのはダメだな。

【那美】

「赤明、ここからどうするの?」

【赤明】

「そこからは」

……

……

……

【橙歌】

「ねーみんな、何かしようよー」

しばらく時間が経った時、唐突に橙歌が提案してきた。

色んな組み合わせで相性を占ったり、他愛も無い話をしてきたの
だが、それが退屈になったらしい。

【黄牙】

「何かって、何だよ？」

【橙歌】

「それはまだ決めてないけど。何かして遊ぼうよ」

【陽】

「何か、ねえ……何かあるか？」

【緑璃】

「中を綺麗にしたんだから、トランプとかがあったら良いんだけど
ね」

【赤明】

「次来的时候には持ってきましょうか」

【緑璃】

「うん、そっだね」

【橙歌】

「もー、次じゃなくて、今の話！ 何か無いの？」

【陽】
「遊ぶ道具が無いなら、かくれんぼとか鬼ごっことか、そんな感じか？」

昔、ここに遊びに来てた頃はそんな事ばかりしてた気がする。

とは言え、この年になってそれはなあ……

【橙歌】

「あ、いいじゃん。やろっよ、かくれんぼ」

【陽】

「ええー……」

自分で言っておいてなんだが、食いつかれるとは思わなかった……。

【橙歌】

「何で嫌そうな顔するのさ。自分で言っただじゃんか」

【陽】

「まさか賛成されるとは思わなかったんだよ。かくれんぼにせよ鬼ごっこにしろ、もうそんなのではしゃぐ年でも無いだろ」

なあ、と振ると、みんなが「うんうん」と頷く。

【陽】

「そついうわけだ。諦める」

【橙歌】

「ちえー、つまんないの」

ぶつぶつ文句を言っている橙歌には悪いが、何となく、かくれんぼをする気分じゃなかった。

< 学生寮 213号室 >

【陽】

「やっぱり、628になるよな……」

何回目かの計算を終えて、シャーペンを机の上に放り出す。

昼間の占いの結果が何となく気になって、赤明から雑誌を借りて計算し直してみたが、

何度やり直しても、那美の言っていた92にはならなかった。

俺の計算は間違っただけじゃなかったみたいだし、

後考えられるのは、那美が計算を間違えたのか、

それとも、『那美』では無い名前で計算をしたのか。

【陽】

「那美、か」

プライベートな事は、名前以外に何もわかっていない謎の少女。

もし、その名前さえ偽りだったとして、

那美は、一体何のために俺達の前に現れたのだろうか。

彼女の望む、虹を架ける事には、一体どんな意味があるのだろうか。

こうして考えてみると、わからない事はっかりだな。

いつか、教えてもらえる時は来るのだろうか。

彼女の、本当を。

六月九日

< 6月9日(火) >

< 学生寮 214号室 >

今日は、食堂に現れない黄牙を起こしに部屋までやって来た。

【陽】

「朝だぞー。起きろー」

無駄だと思いつつも、一応声をかけてみる。

【黄牙】

「んー……………」

【陽】

「………… やれやれ」

やっぱり起きないな。

いつつベッドから落としてばかりつても芸が無いし、今日は別の方法で起こすか。

部屋を見回すと、近くに通学鞆が落ちているのが目に入った。

持ち上げて中身を確認すると、昨日の教科書がそのまま詰まっている。

【陽】
「これで行くか」

鞆を黄牙の頭の上に持って行き、ひっくり返す。

ドサドサドサドサ。

【黄牙】

「っ痛ってえ！ 何だ！？」

教科書の山から、黄牙が飛び起きる。

【陽】

「おはよう、黄牙。さっさと時間割しろよ」

俺は、そんな黄牙に空っぽの鞆を差し出した。

<学園 1F廊下>

朝、教室に向かっていると、教室のある2階に上がる階段の手前で見知った顔を発見した。

紫苑が小さな手帳を見ながら廊下を歩いている。

【陽】

「紫苑、おはよう」

【紫苑】

「あ、先輩。おはようございます」

【陽】

「その手帳は？」

【紫苑】

「連絡事項や頼まれた事を書き留める為のメモ帳です」

そう言えば、紫苑はクラス委員長だったな。

クラス委員だと、そんなに仕事があるもんなんだろうか。

【陽】

「見せて貰っていいか？」

【紫苑】

「構いませんけど、どうぞ」

紫苑からメモ帳を受け取ってペラペラとめくる。

【陽】

「うわ、凄いな……」

メモ帳には、委員長としての連絡事項だけでなく、

宿題や提出物、小テストの予定などがびっしりと書き込まれていた。

【陽】

「こんなにきっちり書いてるのか」

言いながら、メモ帳を返す。

【紫苑】

「言われた事はきちんとこなさないといいけませんから。忘れないようにする為には当然の措置です」

【陽】

「そんなものかね」

【紫苑】

「そういうものなんです。では、そろそろホームルームですから、失礼します」

【陽】

「あ、ちょっと待った」

ちよつとした用を思い出して、今にも去って行きそつな紫苑を呼び止める。

【紫苑】

「何ですか？」

【陽】

「さつき橙歌が言ってたんだけど、今日の昼は俺らの教室で食べるらしいからさ、

紫苑も学食で何か買って来ないか？」

学食の料理を持ち出すのはもちろんダメだが、販売コーナーで売っているパンや弁当は持ち出しても構わない事になっている。

学食が混んでいる時なんかに使っ手だが、俺達は結構頻繁に教室で食べる事がある。

専ら橙歌の提案で行われるのだが、まあ特に意味は無いただの思
い付きだろう。

【紫苑】

「先輩の教室ですか？」

【陽】

「2年のメンバーはみんな同じクラスだからな。集まるのに都合が
いいんだ。」

あ、もちろん都合が悪かったら来なくてもいいんだけど」

【紫苑】

「そうですね……わかりました。昼休みに伺います、A組ですよ
ね？」

【陽】

「ああ、待ってるよ」

【紫苑】

「はい。では、また後で」

【陽】

「ん、じゃあな」

紫苑と別れて教室へ向かった。

<学園 2年教室>

午前中の授業を消化して、昼休み。

学食で昼食を買って教室に戻る。

【黄牙】

「この辺の机動かしていいか？」

【陽】

「大丈夫だろ、多分」

【赤明】

「いつもより人数多いから、6つ位くつつけて」

【黄牙】

「おう」

基本的に昼食は食堂か学食で食べるものだから、遠慮無く持ち主不在の机をくつつける。

【湖珠】

「へー、こんな風にしてお昼食べてたんだ」

【藍叉】

「椅子 持ってきた」

夏原と風見が自分の席から椅子を引っ張って来る。

【陽】

「その辺の空いてるスペースに座ってくれ」

【湖珠】

「了解だよ」

くつつけた机を真ん中にして、ぐるりと置いた椅子に座る。

【陽】

「後は紫苑と、」

【橙歌】

「緑璃先輩も誘っておいたよ」

【藍叉】

『かなり 大所帯』

そんな話をしていると、教室のドアが開いて、紫苑と緑璃先輩が入って来た。

【紫苑】

「失礼します」

【緑璃】

「お邪魔しちゃうね」

【橙歌】

「おー、来たな」

【陽】

「空いてる椅子に座ってください」

【藍叉】

『それ 何語？』

【陽】

「……先輩と後輩のどっちに言うか迷ったんだよ」

結局混ざったけどな。

【緑璃】

「ふふ、じゃあ座らせてもらっね。はい、紫苑ちゃんも」

【紫苑】

「あ、はい」

2人が椅子に座る。

【黄牙】

「そろったんならさっさと食おうぜ」

【赤明】

「そうね。それなら、先輩、ここは号令をお願いします」

【緑璃】

「私に？」

【赤明】

「はい」

【緑璃】

「うん。それじゃあ、いただきます」

【全員】

「いただきます」

小学生みたいに声を合わせて、昼食が始まった。

.....

.....

.....

【紫苑】

「あ、そうでした。あの、先輩」

適当な話をしながら食べていると、紫苑が声をかけてきた。

【紫苑】

「私、今日の放課後は委員会で、アルカンシエルの方には参加できませんから」

【陽】

「ん、そうなのか？」

そう言えば、紫苑はクラス委員長だったな。

【紫苑】

「はい。すみません」

【陽】

「いや、そんな事情なら仕方ないよ」

【湖珠】

「あれ？ アイちゃんも今日は病院だった気がするんだよー」

【藍叉】

『そうだった 忘れてた』

【陽】

「風見もか……他にはいないだろうか？」

【黄牙】

「あー、俺もだ」

【陽】

「何でだよ？」

【黄牙】

「そりゃ、あれだ、家族サービス」

【陽】

「ああ、そうかい」

要するに唯鈴ちゃん関係って事か。

黄牙ならそつち優先だろうな。

【陽】

「他にダメな人ー」

【橙歌】

「僕は大丈夫だよ」

【赤明】

「特に用は無いわね」

【緑璃】

「私も大丈夫だよ」

こっちの3人は大丈夫か。

でも、何かこれだけではすまない気がするんだよね……

<学園 2年教室>

昼休みが終わり、英語の授業が始まった。

担当の教師が入ってきて、机の上に紙の束を置く。

【英語教師】

「昨日の小テストを返すぞー。40点以下は放課後に補習するから、残っておけよ」

放課後補習か……

俺や赤明は多分問題ないし、黄牙も教えておいたから大丈夫だろ
うけど、

【英語教師】

「時雨ー。ほれ、次はもつと頑張れよ」

【橙歌】

「ええー。そんなあ」

がつくりうなだれる橙歌。

ちらっと見えたテストの点は36点だった。

これで、後2人になってしまったわけだ。

<学園 2F廊下>

【緑璃】

「陽君」

放課後。

廊下に出たところで先輩に声をかけられた。

先輩は、何故か軍手とスコップを抱えている。

嫌な予感がするなあ……。

【陽】

「緑璃先輩。何ですか、そのアイテムは」

【緑璃】

「えーと、園芸部のお友達の手伝いをする事になっちゃって……」

【陽】

「先輩って園芸部でしたっけ？」

【緑璃】

「そうじゃないけど、凄く困ってたみたいだったから。情けは人のためならず、だよ」

【陽】

「わかりました。那美には俺から言っておきます」

【緑璃】

「本当にごめんね。それじゃあまた明日ね」

【陽】

「はい、さようなら」

先輩は忙しそうに廊下を走り去って行ってしまった。

【赤明】

「あら、全滅ね」

いつの間にか、赤明が後ろに立っていた。

【陽】

「聞いてたか？」

【赤明】

「ええ。それで、どうする？」

【陽】

「そつだなあ……」

今日集まれるのは那美を入れて3人。

これは流石に活動にならないか。

【陽】

「今日はアルカンシエルは休みつて事で」

【赤明】

「それが妥当なところでしょうね」

【陽】

「赤明はこれからどうする？」

【赤明】

「橙歌に付き合つわ。城崎君は？」

【陽】

「んーそつだな、一応神社に顔出しておくよ」

メールで伝えてもいいけど、どうせ俺は用もないしな。

【赤明】

「そう？ それじゃあ、お願いするわ」

【陽】
「ん、頼まれたよ。じゃあな」

【赤明】
「ええ、また明日ね」

<神社 境内>

長い石段を上って、境内に入る。

最初に来た時より息が上がらなくなったな。

毎日上ったり下りたりしてる間にちょっとは鍛えられたのか？

【那美】
「こんにちは、陽君。今日は1人？」

【陽】
「よ、那美。今日は笑えるくらいみんなの予定が被ってな」
みんなが来られなくなった理由をざっと説明する。

【陽】
「そんな訳で、今日は休みって事にしたんだ」

【那美】

「それは仕方ないね」

【那美】

「……あれ、それじゃあ、何で陽君はここまで来たの？
メールでも良かったんじゃない？」

【陽】

「俺は特に用も無かったからな」

【那美】

「そうなんだ。なら、少し話に付き合ってくれろ？」

【陽】

「別にいいけど」

【那美】

「それじゃあ、私は陽君の話が聞きたいな。今までの陽君の話」

【陽】

「話に付き合っつて、俺が話すのかよ」

【那美】

「嫌だった？」

【陽】

「……別に嫌じゃないけどさ、あんまり昔の事は覚えてないぞ」

曖昧になった昔の記憶なんて、別人の物みたいなものだ。

それはもう、今の俺には関係の無いような遠い過去になってしま

っている。

【那美】

「それでいいよ。私は昔の陽君より、最近の陽君の方が聞きたいから」

【陽】

「そうか？ それじゃあ」

俺は、那美とここ数年の出来事をネタにした話に興じた。

だが、那美についての話は、少しも聞くことは出来なかった。

<学生寮 213号室>

夕食を終えて部屋に戻ると、机の上に置いていた携帯のランプが光っていた。

【陽】

「お、メールだ」

携帯を確認すると、2通のメールが届いていた。

1通は黄牙から、もう1通是那美から全員に宛てたメールのようだった。

とりあえず、那美からのメールを開いてみる。

From: 那美

Subject: アルカンシエルの活動に

みんなもそれぞれの用事があると思うから、放課後は来られる人だけ着てね。終末までは自由参観にするね

内容以前に誤字に目が行くな、このメール……。

【陽】

「言いたい事は通じるんだけどなあ」

思わず笑ってしまいそうになる。

携帯初心者と言うのは本当らしい。

と言うか、一体どうやったたらこんな珍妙な文面になるんだ。

【陽】

「ちゃんと教えてあげようかなあ……」

俺は、笑いかみ殺しながら、微妙に間違いだらけのメールに「了解」と返事を送った。

次は、黄牙のメールだな。

From: 大陣 黄牙
Subject: 無題

今日は実家に泊まる。

明日は直接学校に行くから、俺の教科書とか持って来てくれ。頼んだ。

【陽】

「実家に泊まる、ねえ。遅刻しないといいけど」

何度か行った事があるが、黄牙の実家はこの学園からそんなに離れていない。

学園が全寮制じゃなかったら、十分実家から通えるくらいの距離だ。

それでも、寮からの距離とは比べ物にならない。

いつもの調子で寝坊したら、多分間に合わないだろう。

【陽】

「あ、そうだ」

黄牙に返信するついでに、新しいメールを作成し唯鈴ちゃんに送

る。

【陽】

「これでいいだろ」

それじゃ、黄牙の教科書でも取りに行くか。

<ANOTHER VIEW>

<大陣家 黄牙私室>

【唯鈴】

「お兄ちゃん、携帯鳴ってるよ?」

【黄牙】

「おう。誰だ?」

久しぶりに帰った実家。

自分の部屋で妹と話していると、携帯にメールが届いた。

【黄牙】

「つと、陽か」

メールを送って来た相手は、陽だった。

内容は、さっき頼んでおいた事を了承してくれるって物だ。

【唯鈴】

「あれ、私にも来たよ？」

【唯鈴】

「あ、お兄さんだ！」

嬉しそうに唯鈴がメールを読み、くすくすと笑い始めた。

【黄牙】

「何だよ？」

【唯鈴】

「お兄ちゃんが寝坊しないように起こしてくれ、だって」

【唯鈴】

「お兄ちゃん、相変わらず朝起きられないんだね」

【黄牙】

「うるせえよ」

「まったく、陽の奴、余計な事しやがって。」

【唯鈴】

「本当に、お兄さんっていい人だよね」

【唯鈴】

「お兄ちゃんって迷惑ばかりかけてるのに、色々考えてくれて」

【黄牙】

「ばっかりじゃねえよー！」

まあ、ちよつとは迷惑かけてるかも知れねえけど。

俺があいつの役に立った事も……ある………よな？

いや、あるに決まってる。ちよつと思い出せねえだけだ。

【黄牙】

「なあ、いす………」

唯鈴に視線を向けて、俺は思わず息を呑んだ。

唯鈴は、携帯を胸に抱いて、目を窓の外へと向けていた。

頬を赤く染めて、どこか遠くへと視線を飛ばしているその表情は、俺には絶対向けられない表情だ。

こんな顔をされたら、俺にだってわかつちまう。

こいつは、マジで陽の事が好きなんだって。

【黄牙】

「おい、唯鈴。聞こえてねえのか？」

【唯鈴】

「あ、何？ お兄ちゃん」

【黄牙】

「お前、陽の事が好きなのか？」

【唯鈴】

「え……ええええ！ な、何でそう思うの？」

んなもん、見てりゃわかるっての。

「つか、気づかれてないつもりだったのか、こいつは。」

【黄牙】

「俺はお前の兄貴だからな。バレバレなんだよ」

【唯鈴】

「うう、お兄ちゃんにはわかつちやうんだ……」

【黄牙】

「まあな。で、どうなんだ？ 好きなんだろ？」

【唯鈴】

「……うん」

真っ赤になって唯鈴が頷いた。

【黄牙】

「そうか……」

陽か……

これが他の男だったら、唯鈴に近づけさせやしねえんだが。

俺の親友で、そして恩人のあいつなら、唯鈴を任せてやれると思
ってる。

まあ、実際に付き合っただのと言われた時にすんなり認めてやる気もねえがな。

【唯鈴】

「あの、お兄ちゃん？ 私……」

【黄牙】

「んな顔すんなよ。あいつとだったら、一応、応援してやるからよ
あくまで一応だけだな。」

【唯鈴】

「ほんとにつ！？」

【黄牙】

「ほんとにだ。最近あいつの周りに妙に女が増えてるからな」

特に、那美の事は妙に気にしてるみてえだったしな。

【黄牙】

「お前を陽の奴にやるのも癪だけどよ、お前を泣かせるよりはましだからな」

【唯鈴】

「お兄ちゃん……ありがとう」

【唯鈴】

「でも、どうしたらいいのかな。お兄さん、私の事、ずっと妹扱いしかしてくれないし」

【黄牙】

「そりゃ、お前が『お兄さん』なんて呼んでるからじゃねえのか？」

【唯鈴】

「ええっ！？ そうなの！？」

【黄牙】

「いや、しらねえけどよ。可能性は有るんじゃないか？」

【唯鈴】

「うう、そう言われたら、そんな気もして来た……」

【黄牙】

「お兄さんって呼ぶの止めちまえよ」

【唯鈴】

「でも、ずっとお兄さんって呼んでたし……他に何て呼んだらいいのかな？」

【黄牙】

「普通に陽でいいじゃねえか」

【唯鈴】

「年上の人をいきなり呼び捨てにしたら変だよ」

【黄牙】

「めんどくせえなあ。んじゃ、『陽さん』とかならどうだ？」

【唯鈴】

「あ、それ位なら何とかなるかも」

【黄牙】

「じゃ、今度陽に会ったら呼んでやれよ」

【唯鈴】

「うんっ。ありがとう、お兄ちゃん！」

【黄牙】

「お、っと」

感極まったか抱きついてきた唯鈴の体を受け止めてやる。

【唯鈴】

「お兄ちゃん、大好きだよっ」

【黄牙】

「俺も好きだぞ」

やっぱり唯鈴は可愛いよなあ……

それにしても、陽の奴は何でこんなに可愛い唯鈴に好かれてるってのに、こいつに惚れないんだ？

< ANOTHER VIEW END >

六月十日(その1)

<6月10日(水)>

<学生寮 食堂>

カウンターで今日の朝食を受け取る。

黄牙は昨日実家に泊まったから、今日は1人だ。

【陽】

「誰かいるかな……」

見回してみる。

【陽】

「あれは、風見と先輩か？」

2人の座っているテーブルにはちょうど空席もある。

お邪魔させてもらうことにするか。

2人のいるテーブルに向かう。

【陽】

「……何やってるんだろ、あれ」

テーブルに近づくと、奇妙な光景が目飛び込んできた。

緑璃先輩と風見は隣同士に座っているが、何故か朝食のトレイは先輩の前に2つ並んでいる。

【緑璃】

「はい、あーん」

【藍叉】

「……」

先輩の箸に風見がぱくんと食いつく。

【緑璃】

「次は何が食べたい？」

【藍叉】

『卵焼き』

【緑璃】

「うん、わかったよ」

お皿から卵焼きを摘む。

【緑璃】

「あーん」

【藍叉】

「……」

再びぱくんと食べる。

【陽】

「先輩、何やってるんですか？」

空いていた対面の席に座りながら声をかける。

【緑璃】

「あ、陽君。藍又ちゃんに食べさせてあげてるんだよ」

【陽】

「それは見ればわかりますって……」

その理由が聞きたいんだよ。

【藍又】

『これなら 食べながらでも話せるから』

【陽】

「ああ、なるほど」

確かに、それなら筆談と食事が同時にこなせるだろう。

でも……

【陽】

「先輩の食事は進んでないみたいですね」

風見の分は半分くらい減っているが、先輩の分はほとんど手付かずの状態だった。

【緑璃】

「うーん、つい藍又ちゃんに夢中になっちゃって」

【陽】

「ほんとに世話好きですね……」

【緑璃】

「そうじゃないよ。そうだ、陽君もやってみたらわかるよ」

はい、と箸を渡される。

【陽】

「やってみたらって」

さすがにこんな所で女の子に食べさせてあげるのはちょっと……

【陽】

「風見も先輩の方がいいよな？」

【藍又】

『そんな事ない 陽でもいい』

【陽】

「マジか……」

【緑璃】

「ほらほら、藍又ちゃんが待ってるよ」

【藍又】

『あーん』

2人の期待に満ちた視線が痛い。

【陽】

「……わかったよ」

手を伸ばして、皿の上で綺麗にほぐされている焼き魚の身を摘む。

【緑璃】

「陽君」

と、笑顔で先輩が指差すのは風見のスケッチブック。

【陽】

「言わないとダメですか？」

【緑璃】

「ダメ、だよ」

【陽】

「……あーん」

【藍叉】

『あーん』

差し出した箸から、風見が焼き魚を食べる。

対面の席は、先輩ほどでは無いが小柄な風見には少し遠いのだろ
う。

割と必死に食いついてくる様子は、何と云うか、可愛かった。

女の子の可愛さとはまた別の、言うなら小動物的な可愛さだろうか。

気分的には、雛鳥に餌をやる親鳥の気分だ。

【陽】

「先輩」

【緑璃】

「なあに？」

【陽】

「先輩の言っていた意味、よくわかりましたよ」

【緑璃】

「でしょ？」

【藍叉】

『何？』

【陽】

「ん、別に何でもないよ。ほら、次は何が食べたいんだ？」

俺と先輩は、代わる代わる風見に食べさせながら、朝食を楽しんだ。

【教師】

「それじゃあ今日はここまでだ。大陣、次は宿題忘れるなよ」

そんな事を言いながら教師が出て行く。

教室はたちまち喧騒に包まれた。

【黄牙】

「何で俺だけ名指しなんだ？ 忘れた奴、他にもいたろ？」

不思議そうな顔で黄牙がぼやく。

【陽】

「そりやお前がよく忘れるからだろ。昼飯どつする？」

【黄牙】

「食堂にしようぜ」

【陽】

「そつするか」

ちょうど決まったところに、赤明と橙歌が連れ立って歩いて来た。

【赤明】

「2人は食堂？」

【陽】

「ああ。そつちは？」

【橙歌】

「僕は学食って気分なんだ」

【赤明】

「そういう事よ。それじゃあ、後で」

【陽】

「ん、そうだな」

【橙歌】

「じゃあねー」

手を振る橙歌達と分かれて、食堂に向かう。

俺はこの時、昼休みにあんな事件が起こるなんて、思ってもいなかったのだった。

334

< ANOTHER VIEW >

< 学園 中庭 >

昼休みになって直ぐに向かってきた中庭は、まだほとんど人はいなかった。

【紫苑】

「場所は、ここでいいはずだけれど……」

ポケットの中に収めている手紙を、そっと押さえる。

『昼休み、中庭まで来て下さい』

そう書かれた手紙を見つけたのは、3時限目の音楽の時間だった。人違いかとも思ったけれど、宛名に『3時限目にこの席に座るあなたへ』と書いてあったので、無視する事も出来ずに出てきたのですが。

【紫苑】

「悪戯、じゃないのよね……」

つつい周囲を見まわしてしまう。

こんな悪戯をされる覚えは無いのだけれど、最近親しくさせてもらっている、あの先輩達ならそんな事をしないともしないとも言え切れませんし。

先輩達といるのは、楽しいのは、楽しんでですけど。

今までどちらかと言うと大人しく過ごす事が多かっただけに、少し戸惑っているのも確かなのかもしれない。

そんな事を考えている間に、パンの袋などを持った生徒達が中庭に増え始めていた。

やっぱり、悪戯？

それとも、何かの間違いでしょうか？

【紫苑】

「あ、これは？」

何の気なく近寄ったベンチの背の部分に、白い紙が貼り付けてあった。

紙の右上の隅に、不思議な模様が印刷してある。

【紫苑】

「この模様……」

私は、その模様に見覚えがあった。

確か、あの手紙に。

ポケットから手紙を取り出してみると、右上の部分に同じ模様があった。

これは、同じ紙って事ですね……

そうすると、この手紙の送り主と、ベンチに紙を張った人は同じ可能性が高くなる。

ベンチに張られている紙を見ると、それは学園の地図のようだった。

その1点に、赤い印が書いてある。

【紫苑】

「仕方ないわね」

どうしてこんなに回りくどい事をするのかはわからないけれど、この書かれた場所まで行くしかないみたいですね。

そこでも何も無かったら、もう放っておく事にしましょう。

< ANOTHER VIEW END >

< ANOTHER VIEW >

< 学園 音楽室 >

隣の準備室から勝手に持ってきたCDを入れて再生ボタンを押した。

最近新調したらしいスピーカーから、一昔前の洋楽が流れ出す。

あ、ほんとにいい音になってる。

そう思っても、口には出せない。

1人でスケッチブックに文字を書いても仕方ないから、ぐっと飲み込んで音楽に耳を傾ける。

音楽教師の趣味なのか、教材用のCD以外のCDはラブソングしか置かれていない。

その例に漏れず、この音楽もラブソングだった。

昔、英語圏に住んでいた事もあるから、英語の歌詞でもきちんと聞き取れる。

この曲は有名だから、私でなくても意味はわかるかもしれないけど。

【藍叉】

「……………はあ」

口を開いたり閉じたりして、最後には口を閉じた。

歌声の変わりに、溜息だけが零れる。

音楽を聴くと、どうしても歌いたくなる。

だって、私は歌が大好きだから。

でも、今の私は……

【湖珠】

「アイちゃん。お待ちせだよ」

ガラガラと、勢い良く扉を開いて私の親友が飛び込んできた。

手には、大量のパンを抱えている。

歌を聴きながら食べたいって我が儘言ったのは私なのに、買い物まで頼んでしまった。

今だけじゃない、スケッチブックを使わないと話せない私のせい

で、湖珠には迷惑をかけたばなし。

最近アルカンシエルの皆にまで迷惑をかけている。

みんな、何も言わないし、嫌そうな顔ひとつしないで、あれこれと気を使ってくれる。

……本当に、申し訳ない。

【湖珠】

「アイちゃん？ どうしたの？」

はっと気がつくのと、湖珠に顔を覗き込まれていた。

軽く首を振ると、湖珠は「何でもない」って言葉を読み取ってくれた。

【湖珠】

「それじゃあ、お昼にするんだよー！」

にっこりと笑って、パンを差し出してくれる。

【藍叉】

『ヤー』

この、スケッチブックをめくる動作にもすっかり慣れた。

こつちやって過こして過こしている間に、私の口は歌も言葉も忘れるんじゃないかって。

最近はそれがちょっと不安。

でも、そんな事を言っても仕方ない。

だから、私は笑って、湖珠からパンを受け取った。

< ANOTHER VIEW END >

< ANOTHER VIEW >

< 学園 学生食堂 >

【赤明】

「やっと順番が回ってきたわね」

【橙歌】

「長かったー。僕も陽達と食堂に行ったら良かったよ」

【赤明】

「食堂だって混むのは同じでしょう」

【橙歌】

「でも、食券は買わなくていいじゃん」

【赤明】

「今日のメニューが気に入らないって言ったのはあなたでしょう」

赤明はいつもこんな感じで正論を言う。

そんな所も嫌いじゃないけど、ノリで動いてる黄牙とか、わがまま言ったら文句言っても結局聞いてくれる陽の方が好きだ。

もちろん、恋愛的な意味の好きとは違うけど。

最近は、仲良しの子も増えだし、カッコイイ名前も付いたし、凄く良い感じだと思う。

……赤明よりも口煩い後輩が増えたのはちょっとあれだけど。

【橙歌】

「だって、嫌いなんだもん」

【赤明】

「もう、仕方ないわね」

拗ねてみたら、呆れたみたいに笑われた。

子供扱いされてるなって思う。

でも、僕はそういう性格で、それが子供っぽいって言われるならそれでもいいかな、なんて思ってる。

【赤明】

「いいから、早く食券買いなさい」

【橙歌】

「はあい」

.....

「食券を買ったら、今度はカウンターでもう一回並ばないといけない。」

「めんどくさいな。」

「暇つぶしに、傍に積んであったお盆の山を、1つの山にまとめてみる。」

【赤明】

「ちよっと橙歌、何してるの?」

【橙歌】

「お盆タワーに挑戦中」

【赤明】

「止めなさい。崩したらお昼どころじゃなくなるわよ」

【橙歌】

「うわ、それはやだな」

「適当に積んだ山を元に戻す。」

【橙歌】

「あれ?」

【赤明】

「どうしたの?」

【橙歌】

「お盆の間に、何かあった」

どこに挟まっていたのかわからないけれど、お盆の上に紙がある。

その紙には、果物の絵とたくさんの数字が書いてあった。

【赤明】

「何かしら、これ」

赤明が紙を手にとってまじまじと見つめる。

本気で言ってるのかな？

【橙歌】

「何って、こんなの暗号に決まってるじゃん！」

【赤明】

「暗号お？」

< ANOTHER VIEW END >

< ANOTHER VIEW >

< 学園 廊下 >

【紫苑】

「この辺りのはず、だけれど……」

中庭で見た地図の示した場所は、普段使う教室のある校舎と渡り廊下で繋がった、特別教棟の片隅だった。

理科室や音楽室等の特別教室の入っているこちらの校舎は、昼休みだからなのか全く人氣が無い。

遠くの教室で騒ぐ声が聞こえてくるほどの静寂に、言い知れない不安を感じる。

【紫苑】

「誰か、いませんか？」

……返事は無い。

やっぱり、悪戯だったみたいね。

【紫苑】

「……教室に帰りましょう」

【生徒A】

「おっと、帰られちゃ困るな」

【紫苑】

「え？」

突然、声をかけられたと思うと、直ぐ傍の教室から男子生徒が出てくる。

【紫苑】

「あの、んんっ!?!」

いきなり、背後から口を塞がれた。

そのまま、教室の中に引っ張り込まれてしまう。

な、何!?!

【生徒B】

「こいつで運ぶぞ、逃げ!」

【生徒A】

「わかつてる!」

教室の中には、さらに2人の生徒が待っていて、その足元には、かなり大きな段ボール箱がある。

まさか、私をあれで?

【紫苑】

「んーっ!」

【生徒C】

「こら暴れるなって、別に悪い話じゃないんだからさ」

そんな事を言われても、

こんな扱いを受けて、悪い話じゃないなんて、信じられませんっ。

【生徒D】

「取り合えず連れて行っちまおうぜ。説明なら後でいくらでも出来る」

【生徒C】

「そうだな」

【紫苑】

「んっ。んー！」

乱暴にダンボールに詰め込まれてしまった。

蓋が閉じられて、直ぐに箱ごと持ち上げられる。

これって、冗談とかじゃなくて、本当に捕まえられたの？

そんな、どうすれば……………あ、そう、携帯で！

狭い箱の中で、何とかポケットから携帯電話を取り出す。

けれど、どうやっても携帯の画面が見える場所まで動かす事が出来ない。

これじゃあ、とてもこの状況を知らせる事なんて…………

でも、せめて何かが起こってる事だけでも、知らせられたら！

携帯を開いて、選択キーの左を押す。

これで、多分着信履歴の画面になるはず。

後は、決定ボタンで あっ。

運んでいる誰かが、箱を持ち直したのだろうか。

段ボール箱が大きく揺れ、携帯が手を離れる。

慌てて、箱の中を手探りで探す。

……どうしよう、見つからない。

まさか……手を離れた拍子に、取っ手の穴から外に落ちた？

……どうしよう、本当に。

< ANOTHER VIEW END >

< ANOTHER VIEW >
< 神社 神殿 >

昼間は退屈な時間。

放課後になったら、みんなに会えるけれど、それまでは1人ぼっ
ち……

わんわんっ。

【那美】

「そっか。ごめんごめん、君がいたよね」

足元に擦り寄ってきた犬を膝の上に抱き上げる。

緑璃が仲間になった日に出会ったこの犬を、私はこっそりと面倒
を見ている。

みんなには、飼い主を見つけたと言っているけど、本当は探して
もない。

この子と出会ったのは偶然だけど、私がやらなきゃいけない事の
手助けになるかもしれなかったから。

私の目的の為に、利用しているって知ったら、みんなは怒るかな

……

【那美】

「ふう……」

いけない、1人だといついつい考えが後ろ向きになってしまう。

みんなといるのが楽しいから、それだけ、私の後ろめたさも大き

く

突然、電子音が鳴り出した。

【那美】

「ひゃうっ」

びっくりして周りを見て、それから音が自分のポケットからだ

気が付いた。

【那美】

「ああ、びっくりしたあ」

まだ持ち慣れてないせいで、鳴る度にびっくりしてしまう。

持って無かったってだけで、知らない訳じゃないんだけど……

んー、すっかり時代に取り残されちゃってるなあ。

【那美】

「つて、そんな事考えてる場合じゃないよ」

携帯電話を取り出すと、メールじゃなくて電話だった。

【那美】

「紫苑からだ。でも、こんな時間に？」

不思議に思いながら、取り合えず通話ボタンを押す。

【那美】

「もしもし？」

………

返事が無い。

【那美】

「紫苑？」

.....

もう1度呼びかけてみたけど、やっぱり返事は無かった。

しばらく待ってみるけれど、紫苑の声は聞こえてこない。

【那美】

「どうしたんだろ？」

紫苑の性格からして、たぶん悪戯なんかじゃないだろうし、操作を間違えたとか？

でも、そうじゃないとしたら？

【那美】

「何かあったのかも」

事故とか、事件とかに巻き込まれて、それで助けを求めているって思っているのは、考えすぎかな？

【那美】

「んー、取り合えず」

私は、携帯を操作して、1つの画面を呼び出した。

< ANOTHER VIEW END >

【陽】

「ん？」

昼食を食べ終えて、寮から学園に戻っていると、携帯が鳴り始めた。

ポケットから携帯を取り出す。

【陽】

「電話？ 那美からか」

アルカンシエルの活動について何かあるのだろうか？

【陽】

「もしもし？」

【那美】

『あ、陽君。もしかしたら大変かもしれないの！』

聞こえてきた那美の声は、良くわからないけどかなり焦っていた。

【陽】

「は？」

【那美】

『紫苑に何かあったのかもしれなくて、それで』

【陽】

「いや、良くわからないから、もうちょっと落ち着いて話してくれ」

【那美】

『あ、うん』

受話器の向こうで、那美が深呼吸しているのが聞こえる。

【陽】

「落ち着いたか？」

【那美】

『うん。もう大丈夫』

【陽】

「で、紫苑がどうしたって？」

【那美】

『んと、さっき紫苑から電話がかかってきたんだけど、様子がおかしくて』

【陽】

「どんな風にだ？」

【那美】

『どつって言うか、ずっと無言だったの。』

それで、もしかしたら何かあったのかもって思って』

無言電話か……。

【陽】

「それは、確かに妙だな」

【陽】

「わかった。調べてみるよ。」

何かわかったら連絡するから、待っていてくれ」

【那美】

『うん。よろしくね、陽君』

【陽】

「ん、任せる。じゃあ、切るぞ」

【那美】

『うん。それじゃあ』

電話を切る。

【黄牙】

「どうかしたのか？」

【陽】

「ん、ちょっとな……」

取り合えず、携帯を操作して紫苑に電話をかける。

しばらく呼び出し音が続いて、留守番電話に切り替わった。

那美の勝手な勘違いとか操作の間違いじゃなさそうだな。

【陽】

「黄牙」

【黄牙】

「おう」

【陽】

「紫苑に何かあったかもしれない」

端的に告げると、黄牙の表情が引き締まった。

【黄牙】

「何かって、何だよ？」

【陽】

「そつだな、悪く考えるなら事件か、事故か」

【陽】

「楽観視すれば、携帯を落としただけか、つて所だな」

まあ、わざわざ那美に電話をしたって時点であんまり楽観的には考えられないんだが。

【黄牙】

「どうすんだ？」

【陽】

「取り合えず探してみよう。話はそれからだ」

黄牙と頷き合い、俺達は校舎へと走り出した。

< ANOTHER VIEW >

< 学園 音楽室 >

ちらっと、様子を窺う。

アイちゃんは目を閉じて、流れる音楽を聞いていた。

やっぱりアイちゃんは可愛いんだよー。

初めて会ったのは、中学生に上がったばかりの時。

凄く可愛くて、凄く無口だったアイちゃんを見て、私はお人形み
たいだって思った。

お喋りするようになって、とっても可愛いのは変わらなかった
けど。

もう一回見てみる。

アイちゃんは、気持ち良さそうに体を揺らしてリズムを取ってた。

とっても集中してるみたい。

事故にあってから、少し元気が無かったアイちゃんだけど、最近
はいい表情をするようになって、私も一安心なんだよ。

城崎君達にアイちゃんを預けて正解だったんだよ。

でもでも、その反面で元気を取り戻させたのが私じゃないんだって言うのがちよっと残念でもありなんだけど。

【藍叉】

「……………」

突然、アイちゃんが目を開いた。

【湖珠】

「わ、ごめんね。邪魔した？」

アイちゃんは首を横に振って、音楽室の扉を指差す。

【藍叉】

『誰か来る』

え、って思った瞬間、乱暴に扉を開けて、1人の男の子が転がり込んで来た。

この部屋って防音なんだけど、足音が聞こえてたのかな？

とつても急いでいたみたいで、肩で息をしている。

あれ？ 確か、この男の子って同じクラスの

【湖珠】

「西野君？」

【西野】

「うわあっ！ え、えーと、夏原さん？」

声をかけると、西野君は大げさなくらいに驚いた。

【湖珠】

「どうしたの？ 次は音楽の授業じゃないんだよ？」

【西野】

「あ、僕はその、ちよつと探し物を」

【湖珠】

「探し物？ 私もお手伝いしようか？」

【西野】

「それは困るよっ……じゃなくて、一人で大丈夫だから、あははは……」

西野君は、そう言つと真つ直ぐに歩いて行つて、1つの机の中を覗き込む。

うーん。なんだか、変な感じなんだよ。

【西野】

「……やっぱり、無いか」

西野君は、机を調べ終わると、がっくりと肩を落として教室から出て行くこうとする。

【湖珠】

「もついいの？」

【西野】

「あ、うん。邪魔してごめんね。それじゃ」

西野君は、音楽室を出て行ってしまった。

【湖珠】

「何だったたろ？」

アイちゃんに聞いたら、アイちゃんもちょっと首を傾げて、ペンを取る。

【藍叉】

『今の誰？』

【湖珠】

「アイちゃん……」

人の名前覚えるのが苦手なのは変わらないね。

【藍叉】

『そんな事より』

【藍叉】

『彼の腕の気がなくなった 知ってる？』

【湖珠】

「腕？」

【藍叉】

『腕章』

【湖珠】

「腕章……腕章」

さっきの西野君の姿を思い出してみる。

そう言われると、左腕につけてたような。

【湖珠】

「うーん。私も知らないんだよ」

【藍叉】

『残念 模様がちょっと格好良かった』

【湖珠】

「それじゃあ、教室に戻ったら聞いてみるんだよ」

【藍叉】

『ヤー』

< ANOTHER VIEW END >

< ANOTHER VIEW >

< 学園 2年教室 >

【橙歌】

「うーん。この暗号、どういう意味なんだろう？」

結局、食堂から持って来てしまった紙の前に、橙歌が頭を抱える。
今更だけど、持ってきてしまったのかしら？

でも、本当に今更だし、とりあえずこの暗号（？）から片付けましょう。

【赤明】

「少し整理してみましようか」

【橙歌】

「整理？」

【赤明】

「ええ。書かれているのは、果物の絵と数字。

それに、数字だけの列」

紙の上を順番に指で示しながら説明する。

【赤明】

「おそらく、この果物と数字がヒントで

それを利用して、最後の数字の列を言葉に直すんでしょっかね」

【橙歌】

「あ、そっかー。赤明、さっすがー」

【赤明】

「そんな大層な事じゃないわ」

この位なら、暗号と言っよりも、なぞなぞのレベルね。

【赤明】

「つまり、必要なのは果物の絵じゃなくて、その文字。要するに名前なのよ」

ルーズリーフを一枚取り出して、暗号文をわかりやすく書き直す。

りんご：9 2 1 1 1 「2 5」

ぶどう：「6 3」「4 5」 1 3

いちご：1 2 4 2 「2 5」

みかん：7 2 2 1 1 1 1

5 1 2 1 5 2 1 0 1 5 5 「6 4」 1 1 1 4 2

【赤明】

「こつね」

それにしても、これ、本当になぞなぞね。

【橙歌】

「うわぁ……ますます訳わかんない」

【赤明】

「もう、考える努力を放棄しないで

この手の問題は、共通部分を探すのよ」

【橙歌】
「共通部？」

【橙歌】
「えーと、カッコがついてる？」

【赤明】
「そうね。」

しかも、この大括弧の意味も簡単にわかるわ」

【橙歌】
「えーっと……あ！ 濁点！」

【赤明】
「そう言う事ね。
それじゃあ、次は」

【橙歌】
「ね、赤明、ちょっといい？」

【赤明】
「何？」

【橙歌】
「もしかしてだけど、もう解けてる？」

あら、意外に早く気がついたのね。

【赤明】
「ええ。書き出してる時にね」

【橙歌】

「な、何でそれを言わないのさ。
だったら早く教えてよ！」

【赤明】

「橙歌の頭の体操になるかと思って」

【橙歌】

「そんなのいいから、早く教えてよ。
早く早くー」

橙歌が私の肩を掴んでゆさゆさと揺らす。

もう、本当に子供なんだから。

【赤明】

「わかったから、止めて。目が回るわ」

【橙歌】

「じゃあ、答えは？」

【赤明】

「ちゃんと教えるわ。
さ、行きましよう」

ルーズリーフと暗号の紙を畳んでポケットにしまってから、椅子から立ち上がる。

【橙歌】

「どっどっ？」

【赤明】

「その暗号に書かれている場所に、よ」

< ANOTHER VIEW END >

< ANOTHER VIEW >

< 学園 3年教室 >

お昼休みが半分くらい過ぎた時。

教室の扉が凄く乱暴に開かれた。

思わず、私だけじゃなくて、教室にいたみんなが扉に視線を向ける。

【男子生徒】

「あ、す、すみません」

そこに立っていた男の子は、ぺこりと頭を下げ、教室をぐるっと見回した。

【男子生徒】

「いないなあ」

がっくりと肩を落として呟くと、ふらっと教室を出て行った。

【緑璃】

「あの子、どうしたのかな？」

もしかしたら、何か困ってるのかも。

私は、急いで席を立って教室を出た。

廊下に出ると、さっきの男の子は少し先の廊下を歩いていた。

良かった、間に合った。

【緑璃】

「ちょっと待って！」

廊下を走って男の子に追いつく。

ちょっと悪い子になっちゃうけど、見逃してくれるよね？

【男子生徒】

「え？ 僕、ですか？」

【緑璃】

「うん、そっだよ」

【男子生徒】

「あの、僕に何か用ですか？」

【緑璃】

「もしかしたら、何か困ってるのかなって思ったから、追いかけて

来ちゃった。

もし良かったら、話してくれない？」

<ANOTHER VIEW END>

<グラウンド 部活棟>

【陽】

「黄牙ー！ どこだー？」

【黄牙】

「こっちだ」

部活棟の裏から、黄牙が出てくる。

【陽】

「教室にはいなかった。そっちは？」

【黄牙】

「ダメだ。体育倉庫とか、それっぽい場所もいなかったぜ」

一応探してはみたが、成果なしか。

これは、那美の心配が当たってたか？

【陽】

「お前はどっと思っ？」

【黄牙】

「まあ、何つーか、やばい感じもしてきたな」

【陽】

「ああ。みんなにも連絡して探してもらうか」

こうなったら、人海戦術だ。

アルカンシエルのメンバーを総動員すれば、かなり効率よくなるだろう。

【黄牙】

「いや、それは待て」

携帯を取り出したところで、黄牙に止められた。

【陽】

「何かあるのか？」

【黄牙】

「これがマジに事件だったら、余計に危ねえだろ」

【陽】

「ん……それもそうか」

考えたくは無いけど、本当に誘拐事件とかだった場合、二次被害が出かねない。

女子メンバーは巻き込まない方がいいか。

【黄牙】

「やべえ話だつてんなら」

【陽】

「お前だけで、なんてのは認めないからな」

先回りして黄牙の言葉を遮る。

【陽】

「お前みたいに強くないけど、俺も男だからな」

【黄牙】

「……怪我しても知らねえぞ」

【陽】

「そんな事態になったらお前の背中にくっ付いとくよ」

【黄牙】

「そうだったら、背中は任せませ」

【陽】

「ん、任せろ」

黄牙に答えながら、そう言えば前にもこんな会話をしたな、なんて事を思い出した。

【陽】

「懐かしいな、この感じ。嬉しくは無いけど」

それに、あの時任せられたのは背中なんかよりももっと厄介な物だったけどな。

【黄牙】

「全くだな」

同じ事を思い出して、苦笑に似た表情を浮かべる。

【黄牙】

「ま、昔の話は置いておいて、行くっぜ！」

【陽】

「ああ！」

< ANOTHER VIEW >

< 学園 廊下 >

私は今、呼び止めた男の子と一緒に、廊下を歩いている。

最初は断られちゃったけど、しつこい位に聞いてたら、ぽつぽつと話してくれた。

【緑璃】

「じゃあ、2時限目の音楽の時間に忘れちゃった忘れ物を捜してるんだね」

【男子生徒】

「はい。3限の後に取りに行った時にはもう無かったので」

【緑璃】

「でも、どうして私のクラスに来たの？」

私がそう聞くと、男の子は凄くびっくりした顔になった。

【男子生徒】

「え？ 3限で使ったのって先輩のクラスじゃ無いんですか？」

【緑璃】

「いつもはそうなんだけど、今日は時間割が変わっちゃって、数学だったの」

【緑璃】

「だから、3限目に音楽室を使ったのは別のクラスだと思うよ」

【男子生徒】

「ええっ！？ そんな……」

男の子ががつくり頂垂れる。

そんなにショックだったのかな？

【男子生徒】

「それじゃあ、アレは別の誰かが？」

「やばいよ……それはまずいって……」

何かぶつぶつ呟いてる。

ここはしっかり励ましてあげないと。

【緑璃】

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

【男子生徒】

「で、でも……」

【緑璃】

「どのクラスが使ったのかは直ぐにわかるよ。
職員室で先生に聞いたらわかるでしょ？」

【男子生徒】

「あ……そうか。そうですね」

【緑璃】

「うん。それじゃ、聞きに行こう？」

【男子生徒】

「はいっ」

< ANOTHER VIEW END >

< ANOTHER VIEW >

< 学園 中庭 >

【赤明】

「……」

さ、ベンチを探しましょう」

私は、橙歌を連れて中庭へと出て来た。

あの暗号の解き方が正しければ、ここに何かがあるはずだけど。

【橙歌】

「ちょっと待ってよ」

探し始めようとした時、橙歌に袖を引っ張られた。

【赤明】

「どうしたの？」

【橙歌】

「探す前に、暗号の答え教えてくれるって言ったじゃん」

【赤明】

「あ、そうだったわね。」

「じゃあ、説明してあげるわ」

【橙歌】

「うん」

【赤明】

「それじゃあ」

持ってきたルーズリーフを広げる。

【赤明】

「大括弧が濁点って所までは話したわよね？」

【橙歌】

「うん、聞いた」

【赤明】

「そうになると、大括弧の中の数字は濁点の無い文字って事になるでしょう？」

「25」「63」「45」がそれぞれ「ぶぶぶ」に対応する。

それなら、25は「こ、こ」、63は「ふ、ふ」、45は「と、と」と言う風に交換できる。

ついでに言うと、「こ」で「ぶぶぶ」で残った文字の「う」は13と言う事もわかる。

【橙歌】

「あ、そっか。

それでそれで？」

【赤明】

「それで、って言われても、私は「こ」で気が付いたわ。橙歌も、良く考えてみたらわかるはずよ」

【橙歌】

「えー？」

「うーん？」

ルーズリーフを見つめてうんうんと唸る。

しばらく見守っていると、ぱつと目を輝かせた。

何か思いついたみたいね。

【橙歌】

「あ！ ひらがなの何文字目って言うのはどつっ？」

【赤明】

「50文字しかないのに、63って出てきたらおかしいでしょう？」

【橙歌】

「あ……。」

「じゃあ、アルファベットだ！」

【赤明】

「もっと少ないわよ。26文字」

【橙歌】

「うあ、そっかあ」

【赤明】

「でも、目の付け所は良かったわよ。」

「後は、数字の見方に気がつけば、解けるわ」

【橙歌】

「えー。もういいよ。」

「赤明、答え教えて」

ヒントを出してあげたのに、あっさり諦められてしまった。

【赤明】

「あら、自力で解けなくていいの？」

【橙歌】

「解きたいけど、解く前に昼休みが終わりそうなんだもん」

時計を見してみる。

残り時間は、大体昼休みの3分の1位になっていた。

【赤明】

「仕方ないわねえ」

私もこの先に何かがあるのか気になっているし、答えを教える上げましようか。

【赤明】

「この数字は、1つの塊じゃなくて、それぞれが別の意味を持っているの」

【橙歌】

「え？ どういう意味？」

【赤明】

「『1』の25は『じじゅうご』じゃなくて『2と5』なのよ」

【橙歌】

「あ、それが数字の見方なんだ」

【赤明】

「そう。」

そして、この2つの数字の1つ目は50音表の行を
2つ目は段を表わしているの」

【橙歌】

「あー、50音はあつてたんだ。
でも、行とか段って何？」

【赤明】

「ア行とか力行って言うでしょう？
縦の列が行、横の列が段よ」

【橙歌】

「へえー。そうなんだ」

感心してるみたいに頷いているけれど、小学校くらいで習わなかつたかしら？

そんなに使つ言葉じゃないから、忘れてても仕方ないのだけれど。

【赤明】

「25は2つめ、つまり力行目の5段目だから、『じ』。
そんな風に読んでいくのよ」

【橙歌】

「そっかー」

【橙歌】

「じゃあ、りんごの『り』は、

えーとあ、か、さ、た、な、は、ま、や、らだから、9の2。
あ、ホントに92だ！」

【橙歌】

「あれ？」

でも、11つて、『あ』だよな？

何で『ん』？」

指を折って数えていた橙歌が首を捻る。

【赤明】

「『ん』は1111よ。」

「11行目の1番目」

【赤明】

「『ん』は50音に含まれないから、とりあえずそこに置いたんでしようね」

【橙歌】

「ふーん。それじゃあ、この文章は……」

【橙歌】

「えつと、『な』『か』『に』……1と0？」

【赤明】

「違うわ。10と1で『わ』『よ』」

【橙歌】

「あ、そっか。」

後は、えーと、『の』『べ』『あ』……じゃなくて『ん』だ

それで、『ち』」

【橙歌】

「なかにわのベンチ……あ、中庭のベンチ、なんだ」

【赤明】

「そう言う事よ。」

さ、ベンチを探しましょう」

【橙歌】

「うん！」

次は、何があるのかしら？

少し楽しみになってきたわね。

……

……

……

【橙歌】

「あ！ 赤明！ あったよ！」

校舎近くにあるベンチの前から、橙歌が私を呼ぶ。

【赤明】

「今行くわ」

ベンチの側に行くと、ベンチの背に紙が張っているのがわかった。
描かれているのは、地図かしら？

【橙歌】

「これ、絶対続きだよね」

【赤明】

「多分そうでしょうね」

【橙歌】

「うん。」

でも、この模様何なんだろ？」

右上に、何かの模様が描かれていた。

何かのシンボルマークのようにも見える。

【赤明】

「そう言えば、最初の暗号の紙にもあったわ。このマーク」

暗号の続きって事を示しているのかしら？

多分、さっきの続きはこれで間違いないようだし、追いかけていけばわかるかもしれないわね。

【赤明】

「橙歌。この地図の場所に行ってみましょう」

【橙歌】

「あ、何だか乗り気じゃん」

【赤明】

「そうね。楽しくなってきたわ」

【橙歌】

「よし、それじゃ、しゅっぱーっ！」

< ANOTHER VIEW END >

< ANOTHER VIEW >

< 神社 境内 >

時間が進むのが、遅い。

開いた携帯の時計は、さっき見た時から3分も進んでいなかった。

陽君からの連絡は、まだ無い。

本当に、何かがあったのかな……。

神社の神殿を見上げる。

【那美】

「私も、お願いしてみようかな……なんて」

言ってから、その滑稽さに笑いそうになる。

他の人ならともかく、私がお願いして、誰がその願いを叶えるんだろう。

【那美】

「君は？」

何か叶えたいお願いはある？」

足元に擦り寄っている犬に聞いてみる。

犬は、私の顔を見た後、神殿の方をじっと見上げた。

その姿は、まるでお願いをしているみたいに見える。

【那美】

「ん、そっか。」

そのお願い、きっと叶えてあげる」

私は、軽く犬の頭を撫でてあげた。

携帯を開いてみる。

相変わらず、時間はほとんど過ぎていなかった。

< ANOTHER VIEW END >

< ANOTHER VIEW >

< 学園 廊下 >

特別教棟にある職員室に向かって歩いてみると、大きなダンボールを抱えて歩いている集団が向こうから歩いてきた。

邪魔にならないように、廊下の端っこに避けてあげる。

男の子が4人で抱えなくちゃいけないなんて、何が入ってるのかな？

【運んでいる生徒】

「お、西野じゃないか。こんな所で何してるんだ？」

【西野】

「あ、先輩。ちょっと私用で……」

ダンボールを運んでいるうちの1人が、話しかけて来て、一緒にいた男の子が返事をした。

そっか、この子、西野君って名前なんだ。

【西野】

「先輩達は、例のアレですか？」

【運んでいる生徒】

「まあな。お前もその私用とやらがすんだら部屋に来いよ」

【西野】

「はい」

【西野】

「じゃあな。」

よし、急いで運ぶぞ」

段ボール箱を抱え直して、集団は歩いて行った。

【緑璃】

「お友達？」

【西野】

「はい。友達と言っか、同士です」

そう言って、西野君は腕の袖に付いている腕章を指で撫でる。

そう言えば、さっき運んでいた人達もおそろいの腕章をしていた。

同士って珍しい言い方だけど、もしかしたらアルカンシエルのみ
んなも同士なのかな。

【緑璃】

「でも、あのダンボールの中身って何だったのかなあ？」

何か中のごとごと言っただけど……

もしかして、生き物？

……まさかね。

< ANOTHER VIEW END >

< ANOTHER VIEW >

< 学園 廊下 >

ベンチで見つけた地図を頼りに、僕と赤明が辿り着いたのは、特別教棟の隅っこの廊下だった。

【赤明】

「地図の印があったのは、この辺りね」

【橙歌】

「またヒントかな？ それとも、そろそろ宝物？」

【赤明】

「どうでしょうね。とりあえず、辺りを探してみましよう」

【橙歌】

「うんっ」

今度は何があるんだろ？

わくわくしながら廊下を探す。

【橙歌】

「あ！ 赤明、あれ！」

廊下の少し先に、何かが落ちてる！

駆け寄って拾ってみると、それは携帯電話だった。

あれ？

この携帯電話、どこかで見た事がある気がするんだけど……どこだっけ？

【赤明】

「橙歌？ 何か見つけたの？」

【橙歌】

「あ、うん。」

この携帯なんだけど」

近づいて来た赤明に携帯電話を渡す。

【赤明】

「携帯？」

【橙歌】

「うん。どこかで見た事あると思うんだけど、うー」

思い出せそうで思い出せないのって、気持ち悪いよ。

【赤明】

「あ。」

橙歌、ちよっとこれを見てくれる？」

【橙歌】

「え、何か見つけた？」

赤明が見せてくれたのは、携帯の発信履歴の画面だった。
知らない名前と一緒に、よく知っている名前が並んでいる。

【橙歌】

「これって、アルカンシエルのメンバー？」

【赤明】

「多分そうだと思うわ。」

それで、これを見て思い出したんだけど、
紫苑がこの携帯を使ってなかった？」

【橙歌】

「あ！ そう言えば使ってたかも！」

そっか、それで見覚えがあったんだ。

【橙歌】

「でも、何でこんな所に紫苑の携帯が落ちてるんだろ？」

【赤明】

「それは私にも分からないけど、でも、ここを見て」

【赤明】

「昼休みが始まって少し後位に、那美に電話してるでしょっ？」

【橙歌】

「あ、ほんとだ」

【赤明】

「だから、携帯をここに落とす前の事を那美なら知ってるんじゃないかな
いかと思うの」

【橙歌】

「じゃあ、那美に聞いてみる？」

【赤明】

「ええ。そうしてみましよう」

< ANOTHER VIEW END >

< 学園 廊下 >

【陽】

「ん、それじゃ」

那美との通話を終えて、携帯をしまう。

【黄牙】

「どうしたって？」

【陽】

「赤明と橙歌が紫苑の携帯を見つけたらしい」

【黄牙】

「はあ？ 何であの2人が見つげんだよ？」

【陽】

「それは俺にも良くわからないけど、暗号がどうしたとか」

早く俺達に伝えようとして、赤明達との電話を直ぐに切ったから、那美も詳しい事はわかっていないみたいだった。

【黄牙】

「あー、で、つまり結局どういう事になってんだ？」

【陽】

「そうだな……。」

最初に那美の所にかかった電話が無言電話だったのは、紫苑が携帯を落としたから」

【陽】

「新しく分かったのはその位か」

【黄牙】

「んだよ、何があったのかわかんねえのは相変わらずかよ」

【陽】

「そついう事になるな」

【黄牙】

「で、どうするよ」

【陽】

「取り合えず、赤明達と合流して詳しい話を聞こう」

【黄牙】

「そうだな。そうするか」

携帯をもう一度取り出し、そこでふと思いついた。

【陽】

「なあ、黄牙。他のメンバーにも声かけないか？」

【黄牙】

「ああ？」

【陽】

「何かあったら危ないってのもわかるけど、正直今は情報が欲しいんだ。」

集まって話をする位ならいいだろ？」

むしろ、集まってる方が安全かもしれないし。

【黄牙】

「ま、そんならいならいいか」

【陽】

「よし。それじゃ、みんなに連絡しよう」

俺は、全員に宛ててメールを送信した。

.....
.....

……

【湖珠】

「お待たせなんだよー」

【藍叉】

「待った？」

【橙歌】

「うっん、僕も今来たばかり」

数分後、アルカンシエルのメンバーが次々に集まって来た。

先輩だけは、携帯を見ていないのか、返信も帰って来ない。

一応電話もしてみたが、電源が入っていないと言われてしまった。

【赤明】

「それで、どうして私達は集められたの？」

紫苑の携帯が落ちていたのと、何か関係があるのよね？」

【陽】

「ん、それは今から説明する。実は」

……

【橙歌】

「ええっ！ それって大変じゃん！」

【湖珠】

「誘拐なんて、大事件なんだよ！」

説明を終えると、事情を知らなかったみんなは騒然となった。

【赤明】

「ちょっと落ち着きなさい。

まだそうと決まったわけじゃないんでしょう？」

【陽】

「ああ。それで、みんなが何か知らないかと思って集まってもらったんだけど」

この様子だと、誰も知らないか。

【陽】

「あ、そうだ。

赤明、那美から暗号がどうのって聞いたけど、何の事なんだ？」

【赤明】

「橙歌が食堂で暗号の書いてある紙を見つけたのよ」

【赤明】

「それで、その暗号に書いてあった所に行ったらそこに地図があってその地図の場所にこの携帯が落ちていたの」

【陽】

「その暗号、今持ってるか？」

【赤明】

「ええ。これよ」

赤明がポケットから一枚の畳んだ紙を取り出した。

それを開くと、そこには絵と数字の列が並んでいた。

なるほど、確かにこれは暗号だな。

【藍叉】

「……！」

他のメンバーもその紙を覗き込み、

そして、風見が何かに気づいたのか、急いでスケッチブックにペンを走らせた。

【藍叉】

『これ 見た』

書かれた一言に、俺達の間を驚きが駆け抜けた。

【黄牙】

「この暗号をか!？」

黄牙の問いかけに、風見は首を横に振る。

【藍叉】

『暗号じゃない このマーク』

風見は紙の隅に描かれているマークを指差した。

【湖珠】

「あ、そうだよ。」

確か、西野君のつけてた腕章に描いてたの同じなんだよ」

【陽】

「西野？」

西野は俺のクラスメイトだ。

別に親しくは無いが、顔は知っている。

でも、何でここで西野が出てくるんだ？

【橙歌】

「え！？ じゃあ、あいつが犯人って事！？」

【黄牙】

「いや待て、その一味かもしれねえぞ」

【陽】

「それは流石に短絡的過ぎるだろ」

【赤明】

「そうね。」

でも、西野君に聞けば、この暗号が何なのかわかるかもしれないわ」

【陽】

「ん、そうだな。」

じゃあ、西野を捕まえて話を聞いてみるか

教室にいるといいけど？」

と、そこまで言った所で誰かの携帯が鳴り始めた。

俺の携帯の音じゃない。

でも、みんな他人事みたいな顔をしている。

【黄牙】

「誰かしらねえけど、さつさと出るよ」

【橙歌】

「赤明の方からしてるけど、赤明じゃないの？」

【赤明】

「え？ でも、私の携帯じゃ あー！」

赤明が慌ててポケットから携帯を取り出す。

【赤明】

「紫苑の携帯よ」

【陽】

「……ちょっと貸してくれ」

頷いた赤明から、携帯を受け取る。

恐る恐るディスプレイを見てみる。

そこには、九走 緑璃と書かれていた。

< ANOTHER VIEW >
< 学園 ???? >

ずっと運ばれていたダンボールがやっと床に置かれて、蓋が開かれる。

【生徒A】

「よし、着いたぞ」

【紫苑】

「……………」

周りの様子を窺うと、そこは小さな部屋だった。

長机と椅子が幾つかと、本がぎっしり詰まっている本棚が置かれている。

そして、部屋の置くにあるパイプ椅子に、1人の女子生徒が座っていた。

【女子生徒】

「良く来たな。私が…………ん？」

何かを言いかけた女子生徒が、私の顔をじっと見て首を傾げる。

【紫苑】

「あの、貴女は？」

【女子生徒】

「全く、お前達は何をやってるんだ！」

女子生徒は、私の言葉には応えずに、私を運んで来た生徒達に怒鳴った。

【生徒B】

「え？ 何かまずかったですか？」

【女子生徒】

「連れて来る相手を間違えてるんだ！」

ま、間違えた？

私、この人達に誰かと間違えてこんな目に遭わされたって事なの？

信じられません……

【生徒A】

「ええ！？」

ど、どうする？」

【女子生徒】

「どうするって、そんな事は決まってるだろう」

女子生徒は、そう言つと、私の方へと手を伸ばした

< ANOTHER VIEW END >

< ANOTHER VIEW >
< 学園 廊下 >

【緑璃】
「失礼しました」

【西野】
「あ、先輩。どうでしたか？」

職員室を出ると、待っていた西野君に質問された。

【緑璃】
「うん、ばっちり。
音楽の先生に教えて貰ってきたよ」

【西野】
「それで、どこのクラスだったんですか？」

【緑璃】
「1年生のクラスだったよ。
しかも、なんと私のお友達がいるクラス」

先生から聞いたそのクラスは、紫苑ちゃんのクラスだった。
偶然ってあるんだなあ。

【緑璃】

「だから、今から聞いてあげるね」

【西野】

「あ、はい。お願いします」

【緑璃】

「うん。お姉さんに任せてね」

ポケットから携帯電話を取り出す。

あ、授業の時に電源を切ったのそのままにしちゃってる。

いつアルカンシエルのみんなから連絡が有るかわからないから、
気をつけないと。

電源を入れて、アドレス帳から呼び出した紫苑ちゃんの番号に電
話をかけた。

少し待つと、相手が電話に出る。

【陽】

『もしもし？ 先輩ですか？』

【緑璃】

「あれ、陽君？ ごめんね、間違っちゃったみたい」

【陽】

『あ、待って下さい。紫苑にかけたんですよね？
それならあってますから』

【緑璃】

「そうなの？」

「じゃあ、どうして紫苑ちゃんじゃなくて陽君が出るの？」

【陽】

『何と言つか、ちょっと複雑な事情がありまして』

【緑璃】

「事情？」

【陽】

『実は、紫苑が誘拐されたんじゃないかって話があるんですよ』

【緑璃】

「誘拐!？」

びっくりして思わず叫んじゃった。

隣にいた西野君がぎよつとした顔でこっちを見る。

【緑璃】

「あ、ごめんね。何でもないから」

西野君に断って、電話に戻る。

【緑璃】

「陽君。一体、どういこと?。」

【陽】

『その辺の詳しい話がしたいんで、合流できませんか?』

【緑璃】

「うーん、それはしたいんだけど、今はちょっと別の用事があった」
紫苑ちゃんの事は気になるけれど、だからと言って西野君を放り出して良いって事じゃない。

【陽】

「ん、そうですか。わかりました。
それじゃ、1つだけ。」

今、マークの入った腕章をつけてる人が怪しいって話になってるんです」

【緑璃】

「ええっ!？」

またまたびっくりした。

マークのある腕章の人って、私のすぐ横にいるよね？

【陽】

「先輩？ どうかしましたか？」

【緑璃】

「陽君、私の隣に、いるの。
腕章つけた人が」

【陽】

「えっ？」

小声で言つと、電話の向こうがざわざわと騒がしくなる。

【緑璃】

「よ、陽君。どうしよう……」

ちらりと横を見てみると、西野君は大人しく電話が終わるのを待
つてくれている。

でも、陽君の話の聞き終わった後だと、今にも私を襲ってきそ
うだよ……

【陽】

『……先輩、今どこですか？』

【緑璃】

「えっとね、職員室からちょっと離れた所」

【陽】

『割と近いな……』

それじゃあ、食堂側の端に向かって下さい。

俺達も、そっちに向かいますから』

【緑璃】

「う、うん。わかったよ」

みんながいるんだ。

だったら、そこまで辿り着ければ、大丈夫なんだよね。

【緑璃】

「じゃ、じゃあ、行くね」

【陽】

『はい。くれぐれも怪しまれないように、ってこら、何』

【黄牙】

『先輩、走れ!』

【緑璃】

「は、はいっ!」

いきなり代わった黄牙君の声にびっくりして、私は思わず走り出していた。

< ANOTHER VIEW END >

< 学園 廊下 >

【陽】

「おい、黄牙!

何するんだよ!」

【黄牙】

「犯人と一緒になんかいたら危ねえだろうが」

【陽】

「いきなり走り出す方が危ないだろ!」

黄牙と言い争っていると、鼻先に白い紙が割り込んで来た。

風見のスケッチブックだ。

【藍叉】

『そんな事言ってる場合じゃない』

……確かに、ここでこんな事言っている暇があったら、先輩の所に行かないといけないな。

【陽】

「ん、そうだな。今は先輩と合流しないと。

急ごう！」

俺達は、職員室の方へと走り出した。

……

走り出して直ぐ、向こうから走って来る人影を見つけた。

先頭を走っているのは先輩。

その後ろから追いかけているのは、うちのクラスの、

【赤明】

「西野君ね」

【橙歌】

「ほんとだ、腕章もつけてる」

そんな事を言っている間に、俺達の距離は近づき、

【陽】

「先輩！」

【緑璃】

「陽君っ」

飛び込んできた先輩を抱きしめるように受け止める。

そして、入れ替わりに黄牙が飛び出した。

【黄牙】

「西野っ」

西野の胸倉を掴んで、壁に押し付ける。

【黄牙】

「てめえ、紫苑をどこにやりやがった！」

【西野】

「え？ え？」

「な、何の事？」

【黄牙】

「とぼける気か？」

別に、力づくで聞き出したっていいんだぜ？」

黄牙が見せ付けるように、拳を振り上げ、

【紫苑】

「先輩つ。待って下さい！」

そこで、意外な声が割り込んできた。

【黄牙】

「ああ？ つて紫苑じゃねえか！」

黄牙が驚きの声を上げて、手を離す。

俺達が走って来た廊下に、紫苑が立っていた。

その後ろに、数人の男子生徒と1人の女子生徒が続いている。

【西野】

「部長！」

西野が、女子生徒を部長と呼んで駆け寄る。

【橙歌】

「どっなってるの？ これ」

【陽】

「さあ？ 俺にもさっぱりだ」

意外な展開に全く付いていけない。

俺達が首を捻っていると、部長と呼ばれた女子生徒が前に出る。

そして、俺たちに向かっていきなり頭を下げた。

【部長】

「すまない。こちらの手違いで迷惑をかけた」

<学園 2年教室>

昼休みの騒動が無事に解決した後、俺は教室で那美に報告の為に電話をかけた。

話を聞いた那美は、『無事だったんだ。良かった』と心底ほっとした様子だった。

随分と、心配をかけてしまっていたみたいだな。

【那美】

『それで、その手違いって何だったの？』

【陽】

「ん、何から話すか……」。

そうだな、まず、紫苑を攫ったのはミステリ研だったんだ」

あの揃いの腕章は、ミステリ研のシンボルだったと言う訳だ。

【那美】

『ミステリ研？』

それって、何なの？』

【陽】

「部活の名前なんだ。ミステリー研究会。推理小説とかが好きな人が集まって作ったらしいけど」

何でも、文芸部から独立した部活で、

部員同士でパズル合戦をやったり、

オリジナルの推理小説を書いてたりしているらしい。

【那美】

『んと、そのミステリ研が何で誘拐なんかしたのかな？』

【陽】

「あれな、入部試験だったんだって」

本当に馬鹿げてるというか、紫苑じゃないけど、信じられない話だ。

【那美】

『入部試験？』

【陽】

「仮入部の部員を暗号とかでテストして、最後に部室まで運んで部長が合格を告げるはずだったらしいんだ」

【陽】

「橙歌が食堂で見つけたのは、そのテストの途中の暗号だったみたいだな」

【那美】

『そうだったんだ。』

あれ？　じゃあ、その西野って人は？

全然関係なかったの？』

【陽】

「ん、そこがこの事件をややこしくした原因なんだ。

西野はミステリ研の部員なんだけど、入部テストには関わってなかったんだよ。

紫苑が間違っって持って行った手紙を探していただけで」

【陽】

「西野は、その手紙を部長に渡すつもりだったんだ。

だから、悪戯だとか思われないように、部活のシンボル入りの紙に手紙を書いた」

【陽】

「でも、それは授業変更で紫苑に渡ってしまって、

しかも、入部テストの暗号の場所と、偶然一致してしまったんだ」

【那美】

『それで、紫苑がテスト中の部員と間違われて攫われたんだ』

【陽】

「そついう事」

色々な偶然が重なり合ったせいで、妙にややこしい事件になってしまったという訳だ。

【陽】

「全く、人騒がせな話だよな」

【那美】

『そうだね。』

でも、何事も無くて良かったよ。』

【陽】

「ん、そうだな」

その時、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

【陽】

「あ、授業が始まる。」

じゃ、また放課後に」

【那美】

『うん。じゃあね』

俺は、携帯を切ってポケットにしまった。

あ、そうそう。

西野が部長を呼び出した理由だけど、あいつ、部長に告白するつもりだったらしい。

って言うか、あの後みんなの前で告白してしまっている。

その結果は、なんと成功。

終わり良ければ全て良しってこつこついう事なのかな。

ま、何にしても大変な昼休みだった……

<学園 2年教室>

授業も全て終わり、今日も放課後がやって来た。

さて、これからどうしようか……

<選択肢>

- 1・駅前(藍叉)
- 2・廊下(紫苑、緑璃)
- 3・神社(赤明、橙歌、那美)
- 4・商店街(唯鈴)

六月十日（選択肢1）

<神社 石段>

【陽】

「何の音だろ？」

神社の石段の下まで辿り着いたとき、大通りを挟んだ向こう側から、何かの音が聞こえてきた。

【陽】

「ちょっと行ってみるか」

俺は、上りかけた石段から足を下ろし、音の聞こえる方へと向かった。

<駅前>

【陽】

「へえ……」

駅前にいたのは男性2人組みのストリートミュージシャンだった。

1人がギター（楽器の事はよくわからないから多分だが）を弾き、

もう1人がボーカルをしているようだ。

学校帰りのような制服姿の学生が、小さな人だかりを作っていた。

【陽】

「ん？」

袖を引っ張られる。

見てみると、スケッチブックを抱えた風見だった。

【陽】

「風見もこれ聞いてたのか？」

【藍叉】

『湖珠の教室まで行った帰り』

【陽】

「そうなのか」

確か、夏原は歌を習っていたんだっただか。

そう言えば、風見は歌が上手いんだっただか。

【陽】

「この演奏ってどんな感じなんだ？」

風見は、少し考えてからマジックを手取る。

【藍叉】

『普通に上手』

【陽】

「普通？」

【藍叉】

『ちゃんと音も取れてる 一般人のパフォーマンスとしてなら上手』

【陽】

「プロほどでは無いって事か？」

【藍叉】

『歌い手と言うには技量が足りない』

【陽】

「そうなのか……厳しいな」

特に音楽にこだわりの無い俺からすれば、

今ここで歌っている2人もテレビの歌番組で聞く歌も変わりなく聞こえるんだけど。

正確に言えば、どっちでもいいって事だ。ファンの人には悪いけどな。

【藍叉】

『でも 楽しそうだから いいと思う』

【陽】

「そっか」

歌っている2人に目を向ける。

足を止めた聴衆に向かって演奏している姿は、風見の言う通り、楽しそうだった。

【陽】

「風見も……」

【藍叉】

「？」

【陽】

「いや……」

歌いたいのか、と言う問いを飲み込んだ。

歌う事の出来ない風見に、それを聞いてもいいのかわからなかった。

だが、風見は俺の聞きたかった事を理解していたらしい。

【藍叉】

『歌は 好きだから』

【陽】

「そうか……。早く、また歌えるといいな」

【藍叉】

「(くぐくぐ)」

風見が頷く。

俺達は小さなライブが終わるまで、ずっとその場で立ち止まっていた。

……

……

……

<大通り>

路上ライブを見た後、俺達はいつものように神社へと向かった。

【陽】

「そういえば、風見は夏原について来た帰りだったな」

【藍叉】

「(こくん)」

【陽】

「風見も夏原と一緒に歌を習ってるのか？」

【藍叉】

『ヤー』

【藍叉】

『湖珠と一緒に習おうって誘ってくれた』

【陽】

「あれ、そうなのか」

風見の方が上手いって聞いたから、先に風見が習ってたんだと思
ってたけど、違うのか。

【藍叉】

『前の学校で入ってた合唱部で出たコンクールで優勝した後に誘わ
れた』

【陽】

「じゃあ、コンクールってその合唱部みんなで優勝したって事か？」

【藍叉】

『や、違う』

【藍叉】

『出たのは個人の部 先生にすいせんされた』

【陽】

「へえ、そんなのがあるのか。部活単位しかないのかと思ってたよ」

【藍叉】

『結構いろいろある』

【陽】

「ふーん、勉強になるな」

【陽】

「で、勉強ついでに聞くけど、歌を習うって、どんな事するんだ？」

まさか、ただ歌を歌ってるだけって訳でもないだろう。

【藍又】

『それも 結構いろいろある』

【藍又】

『発声練習とか 歌ったりとか』

【藍又】

『歌詞の読み取りとかもする』

【陽】

「歌詞の読み取り？」

【藍又】

『作者がどんな気持ちで書いたのか とか考える事』

【陽】

「へえ。現国みたいだな」

【藍又】

『そつとも言える』

【陽】

「他には？」

【藍又】

『他には
』

神社に着くまで、色々な歌の話を聞くことが出来た。

楽しそつに話をする藍叉を見て、早く声を出せるようになればいいと、そつ思った。

六月十日（選択肢2）

<学園 1F廊下>

放課後をどう過ごすか考えながら靴箱に向かっていると、

【陽】

「あれ？」

箒で廊下を掃いている緑璃先輩を発見した。

【陽】

「先輩、何やってるんですか？」

声をかけると、先輩は掃除の手を止めた。

【緑璃】

「あれ、こんな所で会うなんて奇遇だね」

【陽】

「靴箱から見えましたから。割と目立ってますよ」

【緑璃】

「ふふ、そうなんだ」

【陽】

「で、何してるんですか？」

改めて尋ねると、先輩は軽く箒を振ってみせる。

【緑璃】

「お掃除だよ。見ての通り」

【陽】

「掃除なのは見てわかってますけど。その理由を教えてくださいませんか？」

学園内の掃除は、当たり前だが通っている学生が行う。

ここは1年の教室の廊下なのだから、教室を掃除する1年生の掃除範囲の筈だ。

いくら見かけがちっちゃくても、3年生の先輩が掃除する場所ではない。

【緑璃】

「さつきね、美術部の子がここで鉛筆削りをひっくり返しちゃったんだよ。」

でも、その子は急いでたみたいだし、今日の掃除はもう終わっちゃってたから」

言われてみると、確かに削り節みたいな木屑が廊下に散らばっていた。

【陽】

「でも、先輩が掃除する事は無いと思うんですけど」

【緑璃】

「私は先輩だからね。
みんなのお姉ちゃんとしては、困っている人を放っておけないんだよ」

えっへんと胸を張る。

【緑璃】

「それに、後輩は先輩の背中を見て育つもの、だからね」

そんな事を言われたんじゃ、このまま立ち去るわけにもいかないな。

【陽】

「それじゃ、緑璃先輩の背中を見た後輩としてお手伝いしますよ」

【緑璃】

「いいの？」

【陽】

「もちろんです。な、紫苑」

頷くついでに、教室から出てきた紫苑に声をかける。

先輩の後ろの扉から出てきたから、気づいていなかった先輩が目を丸くする。

【緑璃】

「紫苑ちゃん？ どうして？」

【紫苑】

「ここ、私の教室なんです。
日誌を書いていたんですけど、外から声が聞こえたので見に来た
んです」

紫苑はそっけなく言うが、わざわざ見に来てくれたって事は多分
手伝ってくれるんだろう。

【陽】

「紫苑も手伝ってくれるだろ？ ついでに、掃除用具を貸してくれ
ると助かるんだけど」

【紫苑】

「先輩方に掃除させて、私だけ手伝わないという訳にはいきませ
ね。」

「ちょっと待っていて下さい。今取ってきます。」

紫苑は、1度教室に戻り、2本の箒を持って出て来る。

【紫苑】

「どうぞ」

【緑璃】

「ありがとう、紫苑ちゃん」

【陽】

「サンキュ」

俺と先輩は、一本ずつ箒を受け取った。

【陽】

「それじゃ、さっさと掃除してしまっか」

【緑璃】

「うん、そうしよう」

3人で箒を動かす。

【陽】

「あ」

【緑璃】

「あーら」

木屑を掃いた箒の跡に沿って、真っ黒い線が廊下に引かれていた。

【陽】

「そう言えば、鉛筆なんだっけ」

【緑璃】

「雑巾もいるね。」

「紫苑ちゃん、貸してくれる？」

【紫苑】

「あ、はい。わかりました」

.....

.....

.....

それからしばらく掃除を続け、

【陽】

「こんなものかな」

顔を上げると、綺麗になった廊下が広がっている。

雑巾掛けまでしたせいで、隣の廊下と微妙に色が違ってしまっていた。

【緑璃】

「綺麗になったねー」

【紫苑】

「そうですね。綺麗になると、気持ちがいいです」

【緑璃】

「2人とも、ありがとう。」
「褒美だよ」

「褒美と言う言葉を聞くと、もう自然に屈んでしまう。」

先輩の手が頭に載せられて、撫でられる。

隣の紫苑も反対の手で撫でられていた。

【紫苑】

「あの、先輩。恥ずかしいです……」

【陽】

「諦める。先輩のご褒美は大人しく受け取るしかないんだ」

【緑璃】

「そうだよ。はい、大人しくしててねー」

【紫苑】

「もう、子供じゃないんですから……」

紫苑は、ぶつぶつ言っているが、それほど嫌がっているようには見えない。

頬を赤くして頭を撫でられている姿は、

このしっかり物の後輩にしては珍しく、年下の女の子らしく見え
た。

六月十日（選択肢3）

<道路>

神社への道を辿っていると、少し前を歩いている橙歌と赤明を見つけた。

【陽】

「おい、そこのお二人さん」

【橙歌】

「あ、陽だ。やっほー」

【赤明】

「あら、本当ね」

俺に気がついた2人が、足を止めた。

小走りで追いつき、合流して歩き始める。

【橙歌】

「陽も神社に行くの？」

【陽】

「ん、まあな。2人もか？」

【赤明】

「ええ。誰も行かなくても、那美ってずっと待ってそうでしょう？」

【陽】
「そうだな。みんなに行かない人はメールするようにとでも言っておくか」

【橙歌】
「メールと言えば、陽も見たよね？ 那美のメール」

【陽】
「あの間違いだらけのやつか？」

【橙歌】
「そうそう。面白かったねー」

【陽】
「まあ、面白かったと言えば面白かったけど」

俺も見た時は笑いを堪える羽目になったし。

【陽】
「連絡内容が伝わらない事態になる前にちゃんと教えないとなあ」

日本語と言うのは漢字の変換ミス1つで意味が変わる事も珍しくない。

週末が来るのは歓迎だが、終末には来てもらいたくは無いなものだ。

【赤明】
「それなら、今日は那美に携帯の使い方を教えてあげましょうか」

【橙歌】

「あ、それいいね」

【陽】

「ん、そうするか」

<神社 境内>

【那美】

「こんにちは、みんな」

石段を上りきると、いつものように那美に出迎えられた。

【橙歌】

「やつほー。来たよー」

【赤明】

「こんにちは、那美」

【那美】

「今日は3人なのかな」

【橙歌】

「そうだよ。後から誰か来るかも知れないけど」

【那美】

「そうなんだ。それじゃあ、まあ上がってよ」

【赤明】
「いつからここはあなたの家になったのよ……」

<神社 神殿>

すっかり自分の家扱いになっている神殿に上がる。

【赤明】

「那美、今日は何かする事はあるの？」

【那美】

「んーと、今日は別に何も無いかな？」

【赤明】

「ならちようどいいわ。那美、携帯を出して」

【那美】

「携帯？ どうして？」

【赤明】

「昨日のメールが間違いだらけだったからよ。
使い方を教えてあげるわ」

【那美】

「あ…… やっぱりおかしかったよね」

【赤明】

「自覚はあったのね。」

気づいてもいなかったらどうしようかと思ってたわ」

【那美】

「変なものには気がついてたんだけど、直し方もわからなかったから……」

【赤明】

「私がつっちり教えてあげるわよ。ほら、携帯出さない」

【那美】

「うん、お願いします」

【赤明】

「任せなさい。まずは変換からよ」

那美が取り出した携帯を開き、赤明の携帯講座が始まった。

……

……

……

【赤明】

「こんなところかしらね」

およそ30分程で赤明の携帯講座は終了した。

【赤明】

「理解できた？」

【那美】

「んー、多分……」

那美が曖昧に頷く。

【赤明】

「ま、後は慣れでしょうね」

【陽】

「それなら実際にやってみるか？」

【赤明】

「メールを？」

【陽】

「ここにいるメンバーで伝言ゲームみたいに回すんだ」

【橙歌】

「伝言メールだね、面白そう！」

【赤明】

「そうね。テストも兼ねて、やってみましようか」

そんな訳で、伝言メールゲームをする事になった。

相談して決めたルールは3つ。

赤明　那美　俺　橙歌　赤明の順にメールを回す。

1人の持ち時間は30秒。

意味は同じでも、内容をまとめたり、文章を変えたりしない。

この条件で、どれだけ正しく情報を伝えられるかを試すゲームだ。

【赤明】

「それじゃ、行くわよ」

赤明が那美にメールを送信する。

【赤明】

「30、29、28、27……」

カウントは送った後暇になる赤明の仕事だ。

【赤明】

「ゼロ」

【那美】

「送るね」

那美からメールが送られて来る。

From: 那美

Subject: 無題

今日の宿題は英語の和訳

これ位なら余裕だな。

……

よし、出来た。

【陽】

「送るぞ」

10秒を残して橙歌に送る。

【橙歌】

「こんなの楽勝、楽勝」

橙歌もさくつと赤明に送って一回り。

それぞれの携帯の画面をつき合わせて送ったメールを確認する。

【赤明】

「最初の文は『今日の宿題は英語の和訳』。全員正解ね」

【橙歌】

「こんなの簡単すぎるよ。もっと難しくしない？」

【赤明】

「これから少しずつ難しくするの。それじゃ、2問目よ」

しばらく無難な文章が続き、那美も含めて全員が正解し続けた。

【赤明】

「9問目、少し難しいわよ」

赤明から那美へ。

【那美】

「えっと……あれ……」

苦戦してるみたいだな。

【赤明】

「3、2、1、時間切れよ」

【那美】

「うう……送るね」

那美からメールが回って来る。

From: 那美

Subject: 無題

庭には二羽庭

さて、これは何だろう。

原文は「庭には二羽鶏がいる」か？

憶測で原文を修復してメールを打つ。

確かに、違う『にわ』が変換されて凄い打ち難いな。

【赤明】

「3、2」

【陽】

「間に合った！」

ギリギリで書き上げ、橙歌に回す。

橙歌も何とか間に合わせ、この問題は那美だけが不正解だった。

【赤明】

「それじゃ、最後の問題よ」

赤明がメールを出す。

問題を書いている時間が明らかに1分以上だったんだが、いいのか？

【那美】

「……確か、こうして……これで……」

【赤明】

「時間切れよ」

【那美】

「うん。はい、陽君」

那美からメールが送られてくる。

【陽】

「うわ……」

メールを開いて思わず唖ってしまった。

From: 那美

Subject: 無題

直射日光や高温多湿の場所を避け
しっかりと蓋を閉めて保管の上
、開封後はお早めにお召し上がり
下さい

何の保存方法だよ、これは。

奇をてらうような言葉や、面倒な漢字は無いが、とにかく長い。

間に合うか……っ？

【赤明】

「はい、終了」

【陽】
「間に合わなかったー」

途中のメールを橙歌に送る。

【橙歌】
「な、何これー!？」

橙歌もその内容に驚きながらメールを書き始めた。

その後、橙歌が赤明にメールを送り、結果発表。

俺が書ききれなかったのだから、当然橙歌が正解できる訳も無く、
正解は那美だけだった。

【橙歌】

「僕ができなかったのは陽のせいだからね」

ふくれた橙歌が文句をつけてくる。

俺が間に合ったからと言って橙歌ができたと言う保障は無いが、

実際俺ができなかったのは事実だから否定もできない。

【陽】

「はいはい、悪かったよ。それにしても凄いな、よくあんなのを打
てたな」

【那美】

「あ、あれは打ってないよ」

【陽】

「はい？」

「どういう事だ？」

【那美】

「コピーして貼り付けただけだから」

【陽】

「そんなのありかよっ！」

【赤明】

「携帯の機能を使いこなすのが目的なもの、当然よ」

「ねー、とか言っただけ盛り上がる2人。」

「いや、それは確かにそうだろうけど。」

「でも何だか納得いかない。」

【陽】

「ええー」

【橙歌】

「ええー」

俺と橙歌の不満の声が神社に響き渡った。

六月十日（選択肢4）

<商店街>

【??】

「おっ兄さーんっ！」

【陽】

「おわっ」

何だ！？

商店街を歩いていると、いきなり背中に重みがかかる。

ひっくり返りそうになるが、飛びついた相手が軽かったのもあって何とか踏みとどまる。

顔だけ振り返ると、見知った顔が背中にくっついていていた。

【陽】

「唯鈴ちゃんだったのか」

【唯鈴】

「うんっ。こんにちは、お兄さん」

背中から降りた唯鈴ちゃんがちょこんと頭を下げる。

【陽】

「急に飛びつかないでくれ。びっくりしたよ」

【唯鈴】

「あ、ごめんなさい。お兄さんを見つけたから、つい嬉しくなって唯鈴ちゃんは楽しそうに笑っている。」

いつ見ても明るい子ではあるけど、今日はいつにも増して笑顔が輝いているみたいだ。

【陽】

「随分とご機嫌だな。何かあったか？」

【唯鈴】

「そんな風に見える？
うーん、久しぶりにお兄ちゃんに甘えられたからかな？
いーっぱいお話しちゃった」

そう言えば、黄牙が昨日は実家に帰ってたんだっただか。

【陽】

「黄牙と何の話をしたんだ？」

【唯鈴】

「色んな話をしたよ。お兄さんの話も……あ！」

【陽】

「どっした？」

【唯鈴】

「えっと、お兄、じゃなくて……よ、よ……」

何だ？

急に真っ赤になって、口ごもって……大丈夫か？

【唯鈴】

「よ、よー」

【陽】

「ヨーヨー？」

【唯鈴】

「よ………よー………よー………無理無理無理、絶対無理っ！」

【唯鈴】

「はあはあはあ………」

【陽】

「い、唯鈴ちゃん？」

何か疲れ切ってるけど、今の間に唯鈴ちゃんの中で何があったんだろう。

【唯鈴】

「き、気にしないで、お兄さん」

【陽】

「あ、あぁ………」

【唯鈴】

「うう……ごめんね、お兄ちゃん。私できなかったよ……」

良くわからないけど、どうも黄牙関係だったらしい。

それで、こんなにながっくり落ち込むなんて、

【陽】

「唯鈴ちゃんと黄牙は、本当に仲がいいんだな」

【唯鈴】

「あ、うんっ。お兄ちゃんは大好きだよ」

唯鈴ちゃんの笑顔を見れば、本当に黄牙の事が好きなんだと伝わってくる。

こんな妹がいたら、黄牙じゃなくてもシスコンになるかもなあ。

【唯鈴】

「あ、でも、お兄さんの事も、す、好きだよ」

今度は真っ赤になっている。

わざわざ俺にフォローを入れてくれるなんて、唯鈴ちゃんはいいい子だなあ。

【陽】

「それは光栄だな。でも、気安く好きなんて言っちゃダメだよ」

【陽】

「俺は唯鈴ちゃんの兄みたいなものだからいいけど、他の人には勘違いされるかも知れないからな」

【唯鈴】

「うう、相変わらずの妹扱い……。勘違いして欲しいのに……」

【陽】

「ん？ 何か言った？」

【唯鈴】

「……何でもないよっ。それじゃあね、お兄さんっ！」

唯鈴ちゃんは、怒ったように商店街を走り去ってしまった。

【陽】

「何だったんだろ？」

最初はおんなにご機嫌だったのに。

わからないなあ……。

<学生寮 214号室>

【陽】

「で、商店街で唯鈴ちゃんに会ってさ」

夜、俺は黄牙の部屋で唯鈴ちゃんの話をしていた。

【陽】

「って事があつたんだよ」

俺が話し終わると、黄牙はなぜか盛大に溜息を吐いた。

【黄牙】

「お前、普段はそうでもなくせに、唯鈴が絡むと急にとんでもなく鈍くなるな……」

【陽】

「は？」

【黄牙】

「だからよ、唯鈴はお前に好きだって言ったんだろ？」

【陽】

「ん、そうだな。お前は『大好き』で、俺は『好き』だろ？
ちよつと負けてるよなー」

やっぱり本家兄には勝てないのか……

【黄牙】

「いや、そうじゃねえって……」

【陽】

「何がだよ？」

【黄牙】

「だから、その好きの意味が……って、何で俺がお前に教えてやらなきゃいけないんだよっ」

【陽】

「何でいきなり切れるんだよ……」

【黄牙】

「うるせえ！　一生悩んでろ！」

【陽】

「ちょ、何だよっ」

部屋から追い出されてしまった。

さすが兄妹。

なんだかよくわからないところが似てるな……。

【陽】

「部屋に帰るか……」

六月十一日(その1)

<6月11日(木)>

<学生寮 214号室>

【陽】

「黄牙！ 起きろ！」

声をかける 揺する工程を飛ばして、黄牙をベッドから叩き落とす。

【黄牙】

「うお、何か今日はいつもより激しかった気が……」

【陽】

「早く準備しろって。遅刻するぞ」

うつかり目覚ましをかけ忘れて、目が覚めた時にはかなり危ない時間だった。

【黄牙】

「遅刻だあ？」

【陽】

「ほら」

黄牙の前に突き出して時計を見せる。

【黄牙】

「うっわ、やべえ」

【陽】
「そういう事。じゃ、俺は先に行くからな」

【黄牙】
「おい、ちょっと待ってくれよ」

【陽】
「やばいって言ってるだろ。起こしてやっただけでもありがたいと思ってくれ」

俺は、それだけ言い残して学園へと向かった。

<学園 2年教室>

4限目の歴史の授業。

教室にはただならぬ緊張感が漂っていた。

生徒のほとんどは、黒板に目もくれず、壁の時計と睨み合っている。

授業終了のチャイムがなってから既に1分。

緊張感は暴動一歩手前という感じだった。

わかりやすい言葉に直すと、「早く終われ」。

その空気を感じ取ったのか、ようやく初老の歴史教師がチヨークを置く。

【歴史教師】

「それでは、今日はここまでにしましょう。号令を」

【クラス委員長】

「起立、着席、礼っ」

がつん、と言う痛そうな音が教室のあちこちから響いた。

うつかり座ったまま礼をした生徒が頭をぶつけた音だ。

そんなとんでもない号令をかけた委員長はと言うと、礼を言い切るのと同時に席を立てて走り出していた。

【クラスメイト男子】

「委員長、このやろっ」

【クラスメイト女子】

「抜け駆けよっ」

【クラス委員長】

「すまんっ、みんなの事は忘れないからなっ」

委員長がクラスメイトの批判を浴びながら教室から飛び出し、

【クラス委員長】

「おわあっ!」

ドアに仕掛けてあったロープに引っかかって盛大にひっくり返った。

【橙歌】

「やたっ！」

【赤明】

「読み通りね」

実行犯と計画犯が顔を見合わせてにやりと笑う。

抜け駆けしようとした罪人には裁きが下った。

ここからが、本当の勝負だ！

【陽】

「行くかっ」

席を立ち、駆け出す。

ロープを飛び越えながら振り向くと、ゾンビ映画のゾンビのことがクラスメイトたちがドアに殺到してきた。

ゾンビと違うのは、やたら俊敏な所か。……正直怖い。

だが、その前に1人の男が立ち塞がる。

【クラスメイト男子】

「げえっ、黄牙！」

【黄牙】

「陽、ここは俺に任せろ。お前は行け！」

【陽】

「頼むっ」

黄牙に後を託し、走り出す。

振り返る寸前にちらりと見えた教室の中では、

風見が『死ぬ気で頑張れ』と書いたスケッチブックを掲げていた。

言われなくても、頑張るって。

風見に手を振って合図を送り、廊下を全力で走り始めた。

さて、俺達が戦場さながらの戦いを行っている理由はと言つと、

それは今朝、やけに静かな食堂に張られていた、1枚の張り紙だった。

『本日昼、学食にてオラクルを販売します』

その紙を見た瞬間、学生達は誰もが敵同士になった。

オラクル。

学食でパンを販売しているパン屋がごく稀に売り出す、限定100個の創作パンの事だ。

何でも、パン職人が不意に神託を受けたかのように閃くメニューだそうで、菓子パンだったり惣菜パンだったり様々だが、共通して言えるのは、美味しい、と言う事だ。

しかも、今回は今年度初で、1年生にあまり知られていない。

張り紙や噂でわかるかもしれないが、まだ実感として知らないのだ。

つまり、通常なら全校生徒約600人いるライバルが約400人になるチャンスという事だ。

そんな理由で、今この瞬間、学園はオラクルを狙う突発的なお祭り騒ぎの渦中にある。

<学園 1F廊下>

B～E組みの生徒でこった返していた外階段への道避けて、内階段で1Fに降りる。

さて、ここからどうするか……

ここから選べる道は2通り。

1つは1年教室前の廊下を使う方法。

もう1つは、少し遠回りだが靴箱を経由して学食に向かう方法だ。

いつもなら靴箱経由の1択だけど、今日は1年生が少ないというアドバンテージがある。

……ここは、1年の廊下を使おう。

同じ事を考えている連中と競うように廊下を走る。

【紫苑】

「あ、先輩」

教室の前を通り抜けようとした時、中から出てきた紫苑と鉢合わせた。

【紫苑】

「凄い騒ぎになってるみたいなんですけど、何が起きてるんですか？」

紫苑はオラクルの事を知らない派の1年生だったようだ。

【陽】

「話してる時間も惜しい、付いて来いっ」

【紫苑】

「え、先輩!？」

律儀に紫苑が追いかけて来る。

【紫苑】

「一体何なんですかつ!」

【陽】

「んー、オラクルが売られてて」

【紫苑】

「は？」

疑問符を浮かべる紫苑。

こんな説明ではわからないだろうが、細かく説明している暇は無い。

外への出口の前で、生徒が固まっているのが見える。

多分、外の階段を下りてきた2、3年生との合流でつかえてい
るんだろう。

【陽】

「後で嫌でもわかるよ。それより紫苑、カード持つてるだろ？
ちよつと預けてくれないか？」

【紫苑】

「いいですけど、何に使うんですか？」

疑問符を浮かべたままの紫苑からカードを受け取る。

【陽】

「ん、それは後のお楽しみだ」

【紫苑】

「え？ あの、先輩？
後のお楽しみとかでカードを持って行かれると困るんですけど…」

【陽】

「学食に来ればわかるから。じゃ、そう言う事で」

【紫苑】

「あ、先輩！？」

疑問符の数が増え続ける紫苑は取り合えず後回し。

手近な窓を開き、外に飛び降り、また走り出す。

冷静になったらどの行動も後悔しそうな気もするが、

今は取り合えずテンションが上がっていて気にならなかった。

<学園 学生食堂>

学食に飛び込む。

普段なら券売機に列ができているが、今日はパン売り場に人ばかりができていた。

砂糖に群がる蟻のような群集は、軽く100人と越えているだろう。

【陽】

「よし、行くぞ」

ポケットの中で、預かってきたみんなのカードを確認し、

気合を入れなおして、人の群れに突入する。

パンは1人につき1個限定。

その管理はカードの認証で行われ、オラクルに関してのみ先払いの形を取っている。

つまり、カードリーダーを通せば、その時点で購入決定になるという事だ。

【陽】

「く、この……うわっ」

人の群れに押し負けて集団から押し出されてしまった。

これは噂に聞く都会の満員電車以上かもしれないな……

黄牙だったらこの位掻き分けていくんだろっけど、俺にはそんな真似は無理だ。

いや、こんな所で諦めてなんかいられない。

もう一度、挑戦だ！

……

……

……

【陽】

「……俺は、無力だ……」

何度目かのチャレンジに失敗し、俺はがっくりとうなだれていた。

【??】

「ね、その人、どうかしたの？ 具合が悪いのかな？」

優しい声に顔を上げると、緑璃先輩が立っていた。

【陽】

「緑璃先輩……」

【緑璃】

「あれ、陽君だったんだ？ どうしたの、こんな所でしゃがみ込んで」

【陽】

「いえ、それが ってそれは!？」

先輩の手には、誰もが求めて止まない幻のパンが抱えられていた。

【陽】

「手に入れたんですか……」

【緑璃】

「うん、今日のもおいしそうだったよ。陽君も買いに来たの？」

【陽】

「俺も、と言いますか、みんなにも頼まれてるんですけど……」

ポケットから取り出した大量のカードを見せる。

【緑璃】

「うーん、それは大変だね」

通勤ラッシュみたいな騒ぎを眺める。

【緑璃】

「よし、お姉ちゃんに任せなさいっ」

俺の手からカードが抜かれ、代わりに先輩の持っていたパンが置かれる。

【緑璃】

「陽君はみんなの席取っておいてね」

気楽にそう告げると、先輩は戦場に向かっていく。

【陽】

「先輩っ、無茶ですって！」

どうやって1つ買ったのかはわからないが、男でも弾き出されるような所に行くなんて……

【陽】
「ってあれ？」

先輩は弾き出されるどころか、どんどん進んで行く。

って言うか、むしろ人の方が道を開けてないか？

【陽】
「あ、ぶつかった」

後ろから押された先輩が、前にいた男子生徒にぶつかった。

ぶつかられた男子生徒は驚いた顔で振り返り、妙に申し訳なさそうに道を譲った。

いや、申し訳なさそうだけど、微妙ににやけてる様な気も……

【陽】
「ああ、そう言う事が……」

健全な男子生徒なら意識せずにはいられない胸（大きい）。

うっかり押しつぶしてしまいそうな体（小さい）。

世話焼きな性格ゆえに割と知られている最高学年（偉い？）。

その辺の事情が相まって、この不思議現象が起こっているんだろ
う。

【緑璃】

「陽くん。買ったよー」

【陽】

「何と言うか、ハイスペックな人だ……」

自覚は無いのだろうが、2桁近いオラクル入手と言つ偉業を達成し、

人数分のパンを抱えて手を振る先輩に、俺は苦笑を浮かべるしかなかった。

<学園 学生食堂>

【陽】

「そんなわけで、緑璃先輩のおかげで、オラクルを入手する事が出来ました」

学食で合流したアルカンシエルメンバーにパンを配りつつ説明する。

【橙歌】

「ダメダメだねー」

【赤明】

「全然ダメね」

【黄牙】

「ダメだな」

【藍叉】

『頑張りが足りない』

【紫苑】

「何をやってたんですか」

とつても辛辣な言葉が帰って来た。

こいつら、本当に容赦無いな……

【陽】

「うう、俺だつて精一杯やったのに……」

【緑璃】

「うんうん、陽君は頑張ったよ」

よしよし、と撫でられる。

【陽】

「せんぱいっ」

その気遣いが胸に沁みます……

【緑璃】

「さ、みんなで仲良く食べようね。いただきます」

【全員】

「いただきますーす」

こうして、幻のパンを巡る騒動は幕を下ろした。

ちなみに、今回のオラクル、シーフードオムソバカレーパンは、
合いそつに無い組み合わせの癖に、相変わらず理不尽に美味しか
った。

<学園 2年教室>

今日最後の授業中、

突然空が暗くなったかと思うと、雨が降り始めた。

日曜にも降ったけど、梅雨の時期になったのかな。

参ったな、今日は傘持ってきてないぞ。

放課後までに止めばいいんだけど。

.....

.....

.....

【クラス委員長】
「起立、礼」

授業が終わり、今日も放課後になった。

雨はまだ降り続けているけど、どうしようかな……

< 選択肢 >

- 1・考えてみる（藍叉、湖珠）
- 2・寮まで走り抜ける（赤明、緑璃）
- 3・開き直って神社まで突っ走る（黄牙、橙歌、紫苑、那美）

六月十一日（選択肢1）

<学園 玄関>

【陽】

「うーん……」

外は容赦の無い雨が降っている。

さっきからしばらく待って様子を見ているが、

一向に止む気配すら見せない。

【陽】

「仕方ないな」

寮は学園のすぐ隣だ。

走れば5分もかからずに辿り着けるだろう。

濡れるのはどうしようもないけど、それは傘を忘れた罰と言っ事
にしよう。

どうせ、乾かせばいいだけの話だしな。

【藍叉】

『何してるの？』

雨の中に飛び出そうとした時、風見が声をかけて来た。

【陽】

「雨が降ってるからどうしようか考えてたんだよ。傘持ってきてな
くて」

【藍叉】

『そこ』

【陽】

「風見は？ 傘持ってるのか？」

【藍叉】

『持ってる』

と、鞆から淡いブルーの傘を取り出す。

【陽】

「持ってるのか。せっかく雨宿り仲間ができたと思ったのに」

やっぱり1人寂しく濡れて帰るしかないのか。

【藍叉】

『使う？』

風見が傘を差し出す。

【陽】

「それはありがたいけど、そうしたら風見が濡れるだろ？」

【藍叉】

『私は 湖珠に入れてもらっから』

【陽】

「夏原に？」

【湖珠】

「アイちゃん、お待たせだよ。

あれ、城崎君もいるんだよ。どうしたの？」

噂をすればなんとやら。

タイミング良く夏原が現れた。

【陽】

「傘を忘れてさ、風見と話してたんだ」

【藍叉】

『陽に貸すから 傘に入れて』

【湖珠】

「そっかそっかー。全然OKだよー」

夏原が傘を取り出し、ぱっと広げる。

【藍叉】

『はい』

【陽】

「ん、ありがとう」

風見が濡れないのなら断る理由はない。

ありがたく傘を受け取る。

【湖珠】

「私は今日もレッスンだから、また明日なんだよ」

【陽】

「ああ、じゃあな」

【藍叉】

『バイバイ』

2人の入った傘が遠ざかっていく。

【陽】

「……あれ？」

風見はいつも夏原のレッスンにまでは付き合ってたような気がする。

だとすると、2人が別れた後は傘が足りなくなるんじゃないのか？

【陽】

「おーい！ ちょっと待ってくれー！」

俺は、2人を追いかけて雨の中に走り出した。

<道路>

【陽】

「いやー、気がついて良かったよ。危うく風見がずぶ濡れになる所だったからな」

同じ傘に入っている風見が頷く。

案の定、風見達は後の事を考えていなくて、

夏原を見送った後、風見の傘と一緒に帰る事になった。

【陽】

「濡れてないか？」

彼女の傘はそれほど大きくない。

1人には十分でも、2人も入る程の余裕は無い。

【藍叉】

『大丈夫』

スケッチブックに文字を書くたびに、傘がぐらぐらと揺れる。

【陽】

「傘持つよ。話しくいだろ」

頷いた風見から傘を受け取り、ついでに風見の側に少し傾ける。

傘からはみ出した片腕が濡れるが、このくらいなら気にするほどでもない。

【藍叉】

『陽が濡れてる』

俺が濡れているのに気がついた風見が、傘を押し戻してくる。

俺が濡れなくなると言う事は、風見が濡れてしまふ事になるわけ
で、

【陽】

「俺は入れてもらってる側だから、気にするなよ」

傘を押し戻す。

【藍叉】

『入れてあげて濡れさせるのは無責任』

押し戻し返される。

【陽】

「そんなの気にするなって」

傘を押し戻す。

【藍叉】

『や、気にする』

押し戻される。

そんな事をしている間に、俺達は2人とも片袖がびっしょり濡れてしまっていた。

【陽】

「……何やってるんだろっな」

【藍叉】

『ホントに』

馬鹿馬鹿しさに2人して笑ってしまう。

【陽】

「ちよっとずつ濡れていこうか」

【藍叉】

『もう濡れてるけど』

【陽】

「全くだな」

俺達は、2人とも袖を濡らしながら、歩き始めた。

やがて、神社に続く石段が見えてくる。

<神社 石段>

今日は雨だけど、誰か来てるかな？

【陽】

「寄って行くか？」

石段の上を指差して聞く。

【藍叉】

『ヤー』

風見が頷く。

【陽】

「ん、なら行こうか」

俺たちは、歩調を合わせながら神社への石段を上って行った。

六月十一日（選択肢2）

<学園 玄関>

【陽】

「うーん……」

外は相変わらずさあざあと雨が降っている。

さっきからしばらく待って様子を見ているが、

一向に止む気配すら見せない。

【陽】

「仕方ないな」

寮は学園のすぐ隣だ。

走れば5分もかからずに辿り着けるだろう。

濡れるのはどうしようもないけど、それは傘を忘れた罰と言いつ事にしよう。

どうせ、乾かせばいいだけの話だしな。

【陽】

「よしっ」

雨の中に飛び出す。

【陽】

「うお、冷てっ」

割と容赦のない雨が襲いかかってくる。

冬だったら堪らなかっただろうな。

俺は、今が夏である事に感謝しながら寮までの道を一気に駆け抜けた。

それにしても、今日は走ってばかりだっ。

< 学生寮 玄関 >

【陽】

「着いたー！」

勢い良く寮の玄関に駆け込む。

【緑璃】

「きゃっ」

【赤明】

「な、何？」

玄関先で傘を畳んでいた女子生徒が驚いたような声を上げる。

【赤明】

「って、城崎君じゃない。何してるのよ？」

と言うか、先輩と赤明だった。

【陽】

「ご覧の通りだよ。傘が無かったんだ」

【赤明】

「天気予報くらい見なさいよ。雨って言ってたわよ」

【陽】

「俺の部屋ってテレビ無いんだよ。」

黄牙の部屋にはあるけど、あいつ天気予報とか見ないし」

話していると、濡れた髪から水滴がぼたぼた落ちてきてかなり鬱陶しい。

何をするにしても、とりあえず着替えないと駄目だな。

【陽】

「着替えたいから部屋に帰るよ。じゃあな」

【赤明】

「ちょっと待ちなさい。そんなので寮の中歩いてたら怒られるわよ」

赤明がポケットからハンカチを取り出す。

【陽】

「ハンカチなら持ってるって」

ポケットから自分のハンカチを取り出すが、

【赤明】

「それでどうやって拭くつもりなのかしら？」

【陽】

「あはは……」

ポケットの中でも雨を逃れられなかったらしく、絞れるほど濡れていた。

【赤明】

「ほら、その髪の毛だけでも拭いときなさいよ」

【陽】

「ん、悪い」

ハンカチを受け取って、髪を拭う。

【緑璃】

「陽君、後ろの方拭けてないよ」

【陽】

「え、どこですか？」

手を回してみるが、良くわからない。

【緑璃】

「はい、動かないでね」

先輩が自分のハンカチを取り出して後ろ髪を拭いてくれる。

【陽】

「すみません」

【緑璃】

「いいよいいよ。んー、陽君の髪意外と細いんだね。さらさらだよ」

拭き終わった髪の毛を弄くられる。

【陽】

「あの、恥ずかしいんですが……」

【緑璃】

「もうちょっと。あ、横もまだ濡れてるよ」

【陽】

「そっちは自分でできますから」

先輩から距離を取り、適当にハンカチで拭く。

【赤明】

「全然拭けてないじゃない。ほら、貸して」

今度は、俺の手からハンカチを奪った赤明に拭かれる。

【赤明】

「あら、本当に細いわね」

【陽】

「赤明まで……」

【赤明】

「女の子は髪を弄るのが好きな生き物なのよ」

【緑璃】

「うんうん、楽しいよね」

赤明の言葉に、先輩も頷く。

【赤明】

「先輩くらい長い髪だと弄り甲斐がありますよね。
髪型変えてみませんか？」

【緑璃】

「うーん、私はこれで安定しちゃってるから。赤明ちゃんは？」

【赤明】

「私もあんまり変えようとは思いませんね。
特にこだわりがあるって訳でもないんですけど」

【緑璃】

「それじゃあ、こんどみんなで弄りっこしてみようか」

【赤明】

「あ、それいいですね」

【緑璃】

「神社にみんなが集まった時とかどうかな？」

【赤明】

「那美の髪も弄り甲斐がありそうですね」

これ、いつまで続くんだろ……。

俺は、人の髪をぺたぺた触りながら盛り上がる2人を尻目にひっそりと溜息を吐くのだった。

六月十一日（選択肢3）

<学園 玄関>

【陽】

「うーん……」

外は相変わらずざあざあと雨が降っている。

さっきからしばらく待つて様子を見ているが、

一向に止む気配すら見せない。

【陽】

「仕方ないな」

寮は学園のすぐ隣だ。

走れば5分もかからずに辿り着けるだろう。

濡れるのはどうしようもないけど、それは傘を忘れた罰と言いつ事にしよう。

どうせ、乾かせばいいだけの話だしな。

【陽】

「よしっ」

【黄牙】

「お、陽じゃねえか」

気合を入れて飛び出そうとした瞬間に、声をかけられて出鼻をくじかれる。

【陽】

「……黄牙か」

中途半端に飛び出していた体を屋根の下に戻す。

【陽】

「一応聞いておくけど、傘持ってるか？」

【黄牙】

「持ってねえな」

【陽】

「だろうと思ったよ。お前も走るか？」

【黄牙】

「おう、そのつもりだ」

【陽】

「それじゃ、行くかつ」

今度こそ雨の中に飛び出し、少し遅れて黄牙が出てくる。

俺と黄牙では黄牙の方が足が速い。

校門を抜ける頃には、黄牙の方が少し先になっていた。

校門を出て、道を曲がる、って。

【陽】

「お前、どこ行ってるんだよ！」

そっちは寮と反対側だろ。

【黄牙】

「神社に行くんだよ」

【陽】

「1回寮に戻ってからでいいだろ」

何でわざわざ遠い方まで濡れていこうとするんだ。

【黄牙】

「お前、1回戻って、濡れた服着替えて、もう1回雨の中を神社まで行けるか？ 俺は絶対無理だぜ」

【陽】

「……それは確かに」

何かイベントがあるならともかく、何人来るかもわからない状態だ。

着替えた辺りで外に出る気力が無くなりそうな気がする。

【黄牙】

「つーわけで、俺は行く。んじゃあな」

【陽】

「あ、待てって！」

俺は黄牙の後を追う事にした。

<神社 境内>

【陽】

「あー、濡れたー。そして疲れた……」

盛大に濡れて、ようやく神社に辿り着いた。

何となく黄牙に流されたけど、早まった気がしてくる。

【黄牙】

「やばいくらい濡れちまったな。ま、さっさと部屋に入ろっぜ」

黄牙が、ずぶ濡れのまま神殿に上がろうとする。

【陽】

「待て待て。そんな格好で上がったら床が大変な事になるだろ」

【黄牙】

「あー……まあいいだろ？」

【陽】

「良くないっての」

【黄牙】

「めんどくせえなあ」

黄牙は上着を脱いで、それを絞る。

そして、その上着を使って乱暴に頭を拭き始めた。

大雑把な奴め……

【陽】

「那美にタオルか何か無いか聞いてくるよ。誰か来てたら持つてるかもしれないし」

【黄牙】

「おう、頼む」

黄牙に倣って上着の水だけ切ってから、神殿に上がり扉を開ける。

【紫苑】

「え」

【陽】

「あ」

紫苑だ。

いつもより大目の肌色成分が目にあぶしい　　じゃなくて！

【陽】

「あーえっと、紫苑も濡れたのか？」

「どうやら、着替え中だったらしい。」

「上着を脱いで、ちょうどインナーのシャツを頭から抜いた所で固まっている。」

「ちゃんと上着をたたんであるな。」

「そういう所が紫苑らしい。」

「スカートを穿いているのは不幸中の幸いだが、ブラの方はぼつちり見えてしまっていた。」

【橙歌】

「陽……何、してるの……」

【陽】

「あ、と、橙歌？」

「声をかけられて、橙歌と、ついでに那美もいたのに気づく。」

「とりあえず何か言わないと、この状況は拙すぎる。」

【陽】

「いや、これは、決して狙ったわけでは無くて……」

【橙歌】

「そんな事言ってる暇があったらあ」

橙歌が拳を握り締める。

と、そこでようやく硬直していた紫苑が我に返った。

一瞬で頬に朱が散り、体を隠してしゃがみ込む。

そして、

【紫苑】

「きゃあああああああっ！」

【橙歌】

「とっくと出てけー！」

【陽】

「ごめんなさあああいつ！」

紫苑の悲鳴と橙歌の怒号と、俺の謝罪が交錯した。

【黄牙】

「な、何だあ？」

騒ぎを聞きつけた黄牙が顔を出し、

【橙歌】

「だから見ちゃ駄目だって言ってるじゃんか！」

【黄牙】

「俺は何も見えてねえよー！」

とぼつちりで橙歌に殴られていた。

間の悪い奴……

<神社 神殿>

【陽】

「本当に申し訳ないです。ごめんなさい」

騒動から数分後、きちんと服を着た紫苑に平謝りに謝っていた。

ちなみに、誰もタオルなんて都合のいいものは持っていなかったから、

俺と黄牙はとりあえず絞っただけの服を着ている。

【紫苑】

「いいですよ、もう。謝らなくていいですから、忘れて下さい」

【陽】

「ああ……」

そう言われても、インパクトが強すぎてそう簡単に忘れられそうに無いんだけど。

気を抜くと紫苑の肌の色が再生されて……

【紫苑】

「忘れて下さい。いいですね？」

【陽】

「はいっ」

紫苑にギロリと睨まれる。

慌てて、脳裏に浮かびかけていた映像をかき消す。

【橙歌】

「そうそう」

【紫苑】

「元と言えば、先輩が傘を回して水を散らしてたせいなんですから、先輩も反省してください」

【橙歌】

「う、ごめんなさい……」

紫苑に怒られた橙歌が小さくなる。

【黄牙】

「お前、そんな事してたのかよ。ほんとガキだな」

【橙歌】

「別にいいじゃんか。子供ばんざーい」

不機嫌そうにそっぽを向く。

まんま子供だ……

【那美】

「まあまあ、みんな仲良くしようよ。はい、お茶どうぞ」

紙コップに入ったお茶を配られる。

コップは親睦会の時の残りで、お茶是那美が買ってきたらしい。

【那美】

「それで、どうして陽君達はそんなに濡れながら来たの？」

【陽】

「いや、それがまたしょうもない理由なんだけどさ」

那美達に事の経緯を説明する。

【那美】

「もう、そんなに無理して来なくてもいいのに」

【紫苑】

「そんな理由で濡れてきたんですか？ 信じられません」

【陽】

「俺も今はそう思うよ」

【橙歌】

「そっちも子供みたいな事してるじゃんか」

【那美】

「んー、子供でもしないんじゃないかな……」

【紫苑】

「結局傘は無いんですよね？ 帰りも濡れて帰るつもりですか？」

【陽】

「あ、そう言えばそうだな」

帰りの事はちっとも考えていなかった。

【黄牙】

「橙歌、傘に入れてくれよ」

【橙歌】

「やーだよ」

【黄牙】

「なら紫苑はどうだ？」

【紫苑】

「濡れて来たんですから、濡れて帰ったらどうですか」

【黄牙】

「……だったら那美、お前は!？」

【那美】

「方向違つよ……」

【黄牙】

「ちっ、まあいい。濡れて帰るか」

【陽】

「結局そうなるのか……」

そんな風にとりとめのない話をして、神社での時間を過ごした。

ちなみに、帰りは橙歌が傘を貸してくれて、俺と黄牙、紫苑と橙歌で傘に入って帰る事になった。

六月十一日(その2)

<学生寮 213号室>

【橙歌】

「あー！」

今日も恒例のお茶会の準備をしていたのだが、突然橙歌が大声を上げた。

【陽】

「どっした？」

【橙歌】

「これ、中身無いじゃんかー」

橙歌が、お菓子の袋をひっくり返して文句を言ってくる。

【陽】

「無いって事は無いだろ。お前が食べつくしたんじゃないのか？」

【橙歌】

「最初っから1個しか無かったよ」

【黄牙】

「やっぱり食べつくしてんじゃないか」

【赤明】

「まあまあ、1個だけしか無かったのなら仕方ないわ」

【赤明】

「それでも、準備中に勝手に食べてるのはどうかと思っけれど」

【橙歌】

「そんなのいつもの事じゃん」

橙歌がしれつと言い返すと、赤明は大げさに溜息をついた。

【赤明】

「……それで納得しそうになる自分に呆れるわ」

【黄牙】

「それはどうでもいいけどよ。菓子無しでちゃんのか？」

【陽】

「それは俺も遠慮したいな」

この集まりのメインはダベリだけど、お菓子が無いのは何となく寂しい感じだ。

【陽】

「仕方ないな。売店で買って来るよ」

【赤明】

「ええ、頼むわ。私は準備を終わらせておくから」

【陽】

「ん、行って来る」

<学生寮 廊下>

【陽】

「ま、こんなもんか」

最近は他のアルカンシエルメンバーが来る事も多いから、少し多めに買い込んでおいた。

微妙に痛い出費だが、代金は俺持ちだ。

と言っても、俺が損しているって訳でもなく、お菓子は持って来る人がお金を出す事になっている。

それでも、俺がお菓子を用意する事が多いのだが、

お茶なんかは赤明と橙歌が割り勘で買っているし、備品を買う時は黄牙の負担が大きい。

きちんと計算すれば、損得があるんだろうけど、その辺は誰も気にしていない。

【陽】

「ん？ あれは……」

部屋に戻っていると、階段で紫苑の姿を見つけた。

【陽】

「紫苑」

【紫苑】

「あ、先輩。こんばんは」

呼びかけると、紫苑が振り返って足を止めた。

【陽】

「ん、こんばんは。何してるんだ？」

足早に近づいて、紫苑の隣に並ぶ。

【紫苑】

「食堂で友人と少しお話を。部屋に帰るところです。先輩はお買い物ですか？」

【陽】

「まあな」

買い物袋の中身を見せる。

【紫苑】

「これ、全部お菓子ですか？
随分と買い込んでるみたいですけど、これ、全部食べるんですか？」

心なし呆れた感じの視線が向けられる。

【陽】

「まさか、みんなで食べるんだよ。流石にこんなに食べるはしないっ

て

【紫苑】
「あ、そうですか。そうですね。失礼しました」

【陽】
「別に謝られる程じゃないけど。あ、そうだ、紫苑も来るか？」

【紫苑】
「どこにです？」

【陽】
「俺の部屋に」

【紫苑】
「なっ」

軽い気持ちで誘ったんだが、何故か紫苑は真っ赤になって、しかも後ずさりした。

【紫苑】
「な、何を言ってるんですか！」

【紫苑】
「こんな時間に女性を部屋に誘うなんて、信じられませんっ」

【陽】
「え、ああいや、俺だけじゃなくて、みんないるから」

【紫苑】

「え？」

【陽】
「俺達は『お茶会』って言ってるんだけど」

何か勘違いしてる紫苑に、簡単に説明する。

【紫苑】

「そ、そうでしたか。重ね重ね、すみません……」

申し訳なさそうに頭を下げる。

【陽】

「いや、俺の言い方も悪かったし。で、来るか？」

【紫苑】

「そうですね……」

紫苑は、少し考えた後、

【紫苑】

「では、折角のお誘いですから、お邪魔させてもらおう事にします」

【陽】

「ん、じゃあ行くか」

【紫苑】

「はい」

俺は、紫苑を連れて部屋に戻った。

【陽】

「ただいまー」

【橙歌】

「あ、やっと帰って来た。ね、何買って来たの？」

部屋に入ると、お菓子を待ちわびていた橙歌が入り口まで出て来た。

数歩の距離も待てなかったのか、お前は。

【陽】

「まあ、色々だな。ほら」

【橙歌】

「どれどれ……」

【橙歌】

「ってあれ？ 紫苑」

買い物袋を渡すと、橙歌はごそごそと中身をチェックし、顔を上げた所で、ようやく俺の後ろの人物に気が付いた。

【陽】

「やっと気付いたか……」

【紫苑】

「こんばんは、時雨先輩」

【橙歌】

「あ、うん。いらっしやい」

【赤明】

「何？ 南雲さんを連れて来たの？」

俺達の声聞きつけたらしく、赤明の声が飛んで来た。

【陽】

「ああ、階段で会ったんだ」

【赤明】

「そう。それじゃ、カップを出さないといけないわね」

【赤明】

「それと、そんな所にいないで、早く入って来たら？」

【陽】

「ん、そうだな」

橙歌の所為で、つい玄関先で立ち止まっていた。

【陽】

「それじゃ、紫苑、中に入ってくれ」

【紫苑】

「はい。お邪魔します」

紫苑を促して、移動する。

部屋に入ると、赤明が追加のカップを机に並べ、何も言われていないのに黄牙が座布団を降りて床に座っていた。

【陽】

「学習したな」

【黄牙】

「うるせえ。誰の所為だよ」

【陽】

「まあまあ。と、言う訳で紫苑はそこに座ってくれ」

【紫苑】

「？ はい」

不思議そうに首をかしげながら、紫苑が座布団の上に座る。

そして、赤明がお茶を持って来て、お茶会が始まった。

【橙歌】

「おっ菓子、おっ菓子」

お茶会が始まると、早速橙歌が袋をひっくり返した。

机の上に、小さなお菓子の山が出来る。

【赤明】

「あら、随分と買い込んだのね」

【陽】

「最近アルカンシエルのメンバーがよく来るだろ？
今日も紫苑が来たし」

【紫苑】

「他の皆さんも来てるんですか？」

【赤明】

「ええ。緑璃先輩と風見さん、夏原さんは来た事があるわ」

【橙歌】

「一回ずつだけどね。僕達は固定メンバーなんだ」

【紫苑】

「じゃあ、以前からこうやって？」

【橙歌】

「うん。えーと、いつからやってたっけ？」

【黄牙】

「俺と陽は割と最初の頃からだったな。
赤明と橙歌が入ったのは……いつだ？」

【陽】

「ん……どうだったっけ？」

【陽】

「去年の夏休み明けにはもういた気がするけど」

【赤明】

「そうね。大体その位だと思うわ」

【紫苑】

「そうなんですか。仲、いいんですね」

【橙歌】

「まーね。ところで、陽」

お菓子の山を漁っていた橙歌が不満そうな声を出す。

【陽】

「何だよ？」

【橙歌】

「いっぱいあると思ったら、駄菓子ばかりじゃん」

【陽】

「そりゃ、量増やそうとすれば単価は下がるよ。」

それに、こつこつのも懐かしくていいだろ？」

【橙歌】

「そりゃそうだけど。」

お客さんの分も買ってるのなら、もっと奮発しようよ」

【赤明】

「そんなこと言って、自分が食べたいだけなんでしょう？」

【橙歌】

「む……まあそうだけど」

【紫苑】

「私はこれでいいですよ。」

「こついうお菓子って、あんまり食べた事ないんです」

そう言って、興味深そうに駄菓子の山に手を伸ばす。

【黄牙】

「へえ。ガキの頃に食わなかったのか？」

【紫苑】

「私の両親は共働きで、夜遅くまで帰って来ないんです。」

「小さい子供の時ですから、自由になるお金もありませんでしたし」

【紫苑】

「お小遣いを貰えるようになる頃には、こついうお菓子は食べなくなっていましたから」

【赤明】

「確かに、小さな子供の食べるものってイメージがあるわよね」

【橙歌】

「僕は今でも好きだけど、何でだろ？」

【黄牙】

「安いからじゃねえの？」

【陽】

「それもあるだろうけど、食べ物で遊ばなくなるからじゃないか？」

【紫苑】

「食べ物で遊ぶ、ですか？」

【陽】

「この手のお菓子って、ただ食べる為だけの物じゃ無いんだ。例えば」

お菓子の山を探して、1つのお菓子を探し出す。

取り出したのは、ケースの中に小さなチョコレートがたくさん並んでいるお菓子だ。

【赤明】

「あら、占いチョコじゃない。懐かしいわね」

【陽】

「だろ？」

久しぶりに見つけて、思わず買ってしまった一品だ。

黄牙と橙歌も見覚えがあるようだが、紫苑だけは不思議そうな顔だ。

ポピュラーだと思うけど、やっぱり知らないのか。

【紫苑】

「何なんですか、それ？」

【陽】

「見ての通りチヨコなんだけど、取り出したらその下に書いてる占
いが見えるんだよ」

勉強、お小遣い、なんて項目が、
、
、
、
×の4段階で評価さ
れていた、と思う。

【紫苑】

「それだけ、ですか？」

【陽】

「それだけなんだけど、子供心には楽しかったんだよ」

今になると、何でそんなに楽しかったのかわからないけど、結果
に一喜一憂していた記憶がある。

多分、それがそんなに楽しくなくなった頃が、駄菓子からの卒業
だったんだろう。

【黄牙】

「俺はそれでバトルしてたけどな」

【橙歌】

「え？ 何それ？」

【黄牙】

「まあ占いの結果がどっちが良かったかってだけなんだけどよ」

【赤明】

「それでもバトルって発想に行くところが、いかにも男子ねえ……」

【橙歌】

「面白そうじゃん。陽、それって1個しか買わなかったの？」

【陽】

「いや、2つあるはずだけど」

【橙歌】

「やった。えーと、どこだろ？」

橙歌はお菓子の山をこそこそかき回す。

そして、取り出したお菓子を黄牙に突きつけた。

【橙歌】

「見つけ。黄牙、勝負しよ、勝負！」

【黄牙】

「いいぜ、その勝負受けて立つ。

陽、それ俺にくれ」

【陽】

「え、ああ、いいけど」

黄牙にチョコを渡す。

【黄牙】

「よし、じゃあ橙歌、どれにするよ？」

【橙歌】

「僕が選んでいいの？
じゃあねえ……スポーツ！」

【黄牙】

「スポーツだな」

2人がチョコをケースから取り出す。

【黄牙】

「だ」

【橙歌】

「負けた！。僕、」

【橙歌】

「次！ 今度は……友達！」

【黄牙】

「おう！」

すっかり2人の世界に入って遊び始めてしまっていた。

【赤明】

「すっかり童心に返っちゃってまあ……」

【紫苑】

「普段も大体こんな感じだと思いますけど」

【赤明】

「……それもそうね」

【陽】

「おいおい……」

好き放題言われてるなあ。

まあ、真剣に遊んでいる姿を見たら、とても弁護する気は起こらないけど。

【紫苑】

「あの、先輩」

【陽】

「ん？」

【紫苑】

「他にはどんな物があったのか、教えてもらえますか？」

【陽】

「もしかして、興味あるのか？」

【紫苑】

「今まで全然知りませんでしたから、少しは」

口ではそんな風に言っているが、微妙に顔が赤くなっている。

結構興味があると見た。

正直意外な感じだけど、アルカンシエルなんてグループに参加し

て来た事を考えるとそう不思議でもないのか。

ま、折角だから、色々教えてやるとするか。

【陽】

「そっちなあ。」

定番はさっきみたいなの占いと当たりつき」

【陽】

「後はネタ系だな」

【紫苑】

「ネタ系？」

【陽】

「ありえない位すっぱい飴とか、食べると舌が真っ黒になるガムとか」

【赤明】

「そんなのもあったわね。あれ、舌よりも歯が黒くなるのよね……」

【陽】

「食べた事あるのか……」

【赤明】

「女子は1回食べたなら2度と手を出さないわね、あれは」

【陽】

「いや、男子でも専ら罰ゲーム用だったぞ」

【紫苑】

「真っ黒は、ちょっと困りますね……」

【陽】

「そうだな、他にも」

そんな風に駄菓子の話をしながら、お茶会の時間は過ぎて行った。

六月十二日

夕闇に染まった世界。

ほんの一筋だけ、光を投げかけていた太陽が、ゆっくりと姿を消す。

【那美】

「……間に合わなかった」

那美がぼつりと呟く。

俺達、アルカンシエルのメンバーは誰も、彼女にかける言葉を持たない。

虹を架けようと、そう言った彼女と共に活動して、

今、結局それは失敗に終わった。

ただ虹を架げるだけなんだ。

簡単な事だ何て思い込んで、ろくに準備もしなかった。

これが、その結果だった。

【那美】

「おしまいだよ」

この結果は終焉だ。

他でもない俺たちが招いた、最期だ。

太陽が姿を消して、空に輝くはずの星達は姿を見せない。

天はただ闇に覆われて、もう光が瞬く事は無い。

ピシリと、何かがひび割れる音を聞いた。

空に、大地に、真っ黒い亀裂が走り、

寄る辺も無く、世界は砕け散った。

俺達は、なす術も無くその深淵へと落ちて行った……

< 6月12日(金) >

< 学生寮 213号室 >

【陽】

「……ヤな夢見た」

これ以上無いってくらい、目覚めは最悪だった。

何で、夢を見てる間って、明らかにおかしい状況でも普通に受け入れてるんだろう。

【陽】

「でも……」

虹、か。

夢が何かを暗示しているなんて言う気は無いけれど、

準備不足なのは確かかもしれないな。

と言うか、不足どころか何もしてないし。

【陽】

「ちよっと調べておいた方がいいか」

<学園 図書室>

昼休み。

俺はアルカンシエルメンバーを召集して図書室を訪れた。

夢を見たなんてわざわざ言う必要も無いからその辺は伏せておいて、

取り合えず、虹の事を調べようと提案した。

【黄牙】

「めんどくせえ……」

【橙歌】

「僕、お祭りは本番だけ楽しむタイプなんだよ……」

【赤明】

「却下よ」

【紫苑】

「今まで何もしていなかったと言う事が既に論外ですね」

【藍叉】

『実は切羽詰ってる？』

【緑璃】

「これから頑張れば大丈夫だよ」

勉強嫌いの2名（黄牙と橙歌）から微妙な反対があったが、取り合えず賛成多数となった。

【陽】

「それじゃ、行動開始だな」

……

【陽】

「とは言ったものの、どこにあるんだろ？」

図書室なんてめったに利用しないから、さっぱりわからない。

【陽】

「この辺か……？」

源氏物語……明らかに違うな。

【紫苑】

「先輩？ 何してるんですか？」

本棚の影から紫苑が出てきた。

【陽】

「何って、本を探してるんだけど」

【紫苑】

「ここ、古典とか文学作品のエリアですよ」

【陽】

「そうじゃないかと思ってたところだよ」

【紫苑】

「……知らなかったんですね」

【陽】

「本読んでる暇があったらあいつ等と遊んでたからなあ……」

【紫苑】

「はあ……頼りにならない人ですね」

溜息付きで呆れられてしまった。

しかし実際その通りだから、なんとも言えないな。

【陽】

「ははは、仰る通りで」

【紫苑】

「今検索してきましたから、ご案内します」

そう言えば、検索用の端末なんて物があつたな。

それで紫苑もこんな関係ない場所にいたのか。

【陽】

「それじゃ、頼むよ」

【紫苑】

「はい。こつちです」

.....

【紫苑】

「この辺りだと思っんですけど」

【陽】

「それじゃ、探してみるか」

本棚には、科学や自然科学、地学関係の本が並んでいる。

しかし、虹のジャンルって何なんだ？

虹は光の屈折だから、科学か？

わからんな。

片っ端から見ていくしかないか……

えーと、電磁石……は明らかに違う。

こっちは音。これでもないな。

【陽】

「紫苑、本当にここなのか？」

【紫苑】

「そのはずですけど……あ、あれってそうじゃありませんか？」

【陽】

「ん、どれだ？」

【紫苑】

「その、一番上の段です」

【陽】

「えーと……」

本棚の一番高い棚を見上げる。

並んでいる背表紙の中に、虹の字が見えた。

【陽】

「あー、それっばいな」

手を伸ばす。

【陽】

「……………」

背伸びして手を伸ばす。

【陽】

「……………」

届かない…………。

【陽】

「何でこの本棚はこう無駄に高いんだ……………」

【紫苑】

「踏み台か何か探してきましようか？」

【陽】

「あるのか？」

【紫苑】

「こんなに高い本棚ですから、あるとは思いますが…」

【陽】

「探すのも面倒だな……………」

探すのにこれ以上時間かけると昼休み中に調べられないし、

あ、そうだ。

【陽】

「紫苑、ちょっとこっち来てくれ」

紫苑を手招きする。

【紫苑】

「はい？」

【陽】

「許せ、緊急事態だ」

紫苑の腋の下に手を入れて体を持ち上げる。

【紫苑】

「ひゃ!?!」

【陽】

「お、割と軽いな」

【紫苑】

「な、ななななな何をするんですかっ」

【陽】

「いいから、取り合えず本を取ってくれ」

いくら軽くても、人1人を支え続けるのは辛い。

【紫苑】

「わ、わかりました。わかりましたから。早く下ろしてください!」

【陽】

「取れた？」

【紫苑】

「取りました！」

【陽】

「ん、よつと」

紫苑を床に下ろす。

【紫苑】

「先輩っ、何て事をするんですっ」

【陽】

「踏み台を探す時間が惜しかったんだ」

【紫苑】

「それはわかりますけど、やり方を考えて下さい。もう、本当に信じられませんっ」

【陽】

「悪い悪い。次は気をつけるよ」

【紫苑】

「次なんてありませんっ。」

私はこれを読みますから、先輩は自分で見つけて来て下さいね」

【陽】

「あ、おい、紫苑？」

紫苑は本を抱えたまま歩いて行ってしまった。

やっぱりちょっと拙かったかなあ……でも、時間も惜しかったしなあ。

……後でもう一回謝るとして、他の本でも探すか。

……

……

……

見つけた本を持って閲覧用の机に行くと、

既に全員が揃っていた。

集めてきた本を開いて作業を始める。

【黄牙】

「……駄目だ。活字が意味を成して頭に入って来ねえ」

【橙歌】

「あ……持病の、難しい本を読んではいけない病が……」

あっという間に脱落者が出た。

【赤明】

「まだ5分も経ってないじゃない……」

【陽】

「もうそいつら放っておけよ……」

【黄牙】

「だってなあ」

【橙歌】

「だってだってー」

【緑璃】

「もう、しょうがないなあ。読んであげるね」

先輩が、2人の傍に椅子を寄せて、膝の上に本を開く。

【陽】

「どこの母親ですか……」

【緑璃】

「おねえちゃん、だよ」

【陽】

「続柄の問題じゃないんですけどね……」

【赤明】

「城崎君。もうそっちは気にするの止めたほうがいいわよ」

赤明が呆れたように声をかけて来た。

【陽】
「ん、そうだな」

戦力外2人を先輩に預けて、残りのメンバーで黙々と作業をした。

<神社 神殿>

放課後、

昼休みから続けて、作戦会議だ。

昼にいなかった那美と聞いていなかった2人への説明だから、どちらかと言うと発表会か。

プレゼン資料と化した風見のスケッチブックを使いながら赤明が説明していく。

【赤明】
「意外だったのは、太陽の位置が高いと虹が見えにくいつて所ね」

【那美】
「あ、そうなんだ」

【赤明】
「あら、やっぱり那美も知らなかったのね」

【陽】
「俺達も、全員揃って知らなかったもんな」

そう、これは本当に意外だった。

てつきり日差しが強い昼頃が見えやすいと思ってたんだが、単なる思い込みだったみたいだ。

ある程度太陽の高さが低いほうが虹が見えやすいらしい。

【赤明】

「だから、朝か夕方になるわけだけど、予定の都合的に夕方の方がいいでしょうね」

要するに、集まっていきなり虹を架けるより、

遊んだ後の締めには虹を架ける方がいいだろうと言っただけの話だ。

【赤明】

「太陽を背にして水を撒くといいらしいから」

スケッチブックをめくる。

簡単な神社の見取り図が書かれたページが出てきた。

【赤明】

「午後なら神社の裏で崖の方に向かってやるのがいいと思うわ。下も川でちょうどいいし」

【赤明】

「それで、土曜日か日曜日かって話になるんだけど」

スケッチブックをもう1ページめくる。

今度は、天気予報の週間予報みたいな図が出てきた。

しかも、妙に良くできている。

【陽】

「これ、手書きか？ 凄いな」

【赤明】

「それは風見さんよ。意外な才能を発見した気分だったわ」

【那美】

「藍又が描いたの？ 上手だね」

【藍又】

『ありがとうございます』

いつものスケッチブックが塞がっているから、もう1冊を使う。

定型文用って初めて使ってるの見た気がするな。

でも、今のページを一発で開いていた所からすると、結構使っているのかもしれない。

【赤明】

「それで、天気予報によると、土曜日は曇りみたいね」

【赤明】

「日曜は晴れるらしいから、日曜日の午後に実行するのがいいと思

うわ。どうかしら?」

【那美】

「うん、いいと思うよ」

俺達は昼休みの時点で一度話を通っているから、改めて確認する必要も無い。

【陽】

「それじゃ、決行は日曜午後。」

準備とか、色々考えておいてくれ」

こうして、かなりギリギリのタイミングで計画が決まったのだ。た。

<学生寮 廊下>

【陽】

「黄牙ー。いるかー」

声をかけながら、黄牙の部屋の扉を叩く。

【黄牙】

「あー、陽かあ?」

ちよっと待ってる」

返事から少しして、部屋の扉が開いて黄牙が姿を見せた。

【黄牙】

「どうした？」

【陽】

「今日、お茶会するってさ。連絡が来た」

【黄牙】

「お、そうか。」

「じゃ、準備しとかねえとな」

【陽】

「ああ」

<学生寮 213号室>

部屋に戻って準備していると、ノックの音が聞こえた。

【陽】

「開いてるから、入ってくれ」

返事をすると、扉が開き、ぞろぞろと参加者達が入ってくる。

「つて、ぞろぞろ!？」

【赤明】

「こんばんは。お邪魔するわね」

【橙歌】

「やっほー」

お馴染みの2人と。

【緑璃】

「また来ちゃった」

【紫苑】

「お邪魔します」

先輩後輩。

【藍叉】

『こんばんは』

【湖珠】

「お邪魔するんだよ」

最後に風見と夏原が入って来る。

学園にいるアルカンシエルメンバーが勢揃いだ。

【黄牙】

「うお、どうしたんだ、これ」

【藍叉】

『誘われたから湖珠と来た』

【緑璃】

「私も誘われたから」

【紫苑】

「私もです」

次々に証言が集まって来る。

【陽】

「で、誘ったのは？」

【橙歌】

「僕と赤明だけ」

【赤明】

「折角の機会だからと思っただけ、ちょっと多すぎたかしら……」

【陽】

「ん……まあ、仕方ないか」

誰か誘わないで仲間ハズレを出す訳にもいかないしな。

問題は、この人数が部屋に入って大丈夫かどうかだけ。

やってみない事には何とも言えないか。

【陽】

「取り合えず入ってくれ」

客を招いて部屋の中に入る。

【陽】

「さて、まずは座布団をどうするかだな」

部屋にある座布団は4枚に対して、人数は8人。

半分の人間が座れない事になる。

【赤明】

「まず、男子2人には潔く諦めてもらいましょう」

【陽】

「っておいおい」

【赤明】

「4人も座れないんだから仕方ないでしょう?」

【陽】

「それはそうだけど……」

【黄牙】

「俺は別に構わねえぜ」

【陽】

「はあ、わかったよ、譲ります」

【赤明】

「ありがとう、2人共」

【赤明】

「それじゃあ、どうぞ、先輩。」

それと、南雲さんも」

【緑璃】

「うん、ありがとう」

【紫苑】

「ありがとうございます」

座布団を受け取って、2人が座る。

俺と黄牙も、直接床に座った。

【陽】

「で、後2枚はどうする？」

【赤明】

「そうね……」

【橙歌】

「あ、僕に分使ってよ。僕はベッドでいいから」

【陽】

「またかよ……」

【橙歌】

「別にいいじゃん」

【陽】

「まあ、いいけど」

【橙歌】

「じゃ、そついう事でーっ」

橙歌がベッドにダイブして、後1枚。

【赤明】

「じゃあ私が譲るわ。お客様に座布団無しじゃ駄目なものね」

結局初期メンバーが全員譲る事になったか。

無難な結論だな。

【赤明】

「風見さん、夏原さん。これを使って」

赤明が自分と橙歌の分の座布団を風見達に差し出す。

【藍叉】

『待つて』

【藍叉】

『私達は1枚でいいから 赤明が使つて』

【赤明】

「1枚でいいの？」

【藍叉】

『ヤー』

風見は赤明の手から1枚だけ座布団を取り、床に敷いた。

そして、夏原の手を引いて、1枚の座布団を半分ずつにして座った。

【黄牙】

「成る程。そんな手があったか」

【陽】

「夏原もそれでいいのか？」

どう見てもかなり窮屈そうだから、聞いてみる。

【湖珠】

「全然OKなんだよ」

あっさりと頷かれた。

【陽】

「ん、じゃあこれで席は決まったな」

【赤明】

「それなら、お茶を淹れましょうか」

【緑璃】

「あ、手伝うよ」

【紫苑】

「では、私もお手伝いします」

3人がお茶の容易を始める。

【黄牙】

「俺達はセツティングの続きと行くこうぜ」

【陽】

「ん、そうだな」

………

お茶の準備が整い、全員が決めた場所に座る。

【緑璃】

「今日もお土産を持って来たよ」

【紫苑】

「私も、一応ですけど」

先輩と紫苑が、ビニール袋をテーブルの上に置く。

それを見て、風見と夏原が不思議そうな顔になった。

【湖珠】

「もしかして、お土産を持って来ないといけなかったの？」

【藍叉】

『お土産 持って来てない』

そうか、先輩達は最初に来た時に、俺達がお茶菓子を調達してるのを見てたんだっけ。

だから、気を使ってくれたんだろうな。

でも、風見達の時は部屋にあったのを出したただけだから、お茶会の為に用意してるって知らなかったんだろう。

【陽】

「別に持って来ないといけないなんて決まりは無いけど、
暗黙の了解みたいになってる感じはあるな」

別に催促するわけじゃないけど、持って来なかった事を気にする
よりは、

持って来て気持ち良くお茶会に参加できた方がいいだろう。

【藍叉】

『次からは何か持って来る』

【陽】

「ん、頼むよ」

【藍叉】

『ヤー』

【橙歌】

「話はまとまった？

ね、それならお菓子出していいよね？

今日のは何かなー？」

【緑璃】

「それじゃ、最初は私のからだよ」

先輩が袋をひっくり返す。

中身は、前回同様のパンだった。

ただし、メロンパンじゃなく、小ぶりのクロワッサンがたくさん出て来た。

【緑璃】

「今日のお菓子はミニクロワッサンだよ」

【橙歌】

「あ、おいしそうじゃん」

橙歌が目を輝かせる。

【緑璃】

「人数がわからなかったから、これにしたの。
甘くて美味しいんだよ」

【紫苑】

「次は私ですね」

紫苑は、少し恥ずかしそうに袋の中身を取り出した。

【紫苑】

「私はこんなのを持って来てみました」

【黄牙】

「駄菓子じゃねえか」

紫苑の持って来たのは前回来た時と同じ、駄菓子だった。

やっぱり、この駄菓子ってお菓子が気に入ったのか？

【湖珠】

「わー、懐かしいんだよ。

昔、良く食べてたんだよ」

【緑璃】

「うんうん、食べるのってどれくらいぶりかな」

夏原と先輩が子供みたいに喜んでいる。

前回の俺達も似たような反応だったから、駄菓子には人を童心に帰らせる効果があるのかもな。

だが、その中で風見だけが不思議そうな顔をしている。

【藍叉】

『何がおもしろいの？』

【赤明】

「あら、風見さんも駄菓子の事を知らないの？」

【藍叉】

『ヤー』

【藍叉】

『知らない ただのお菓子とは違う？』

【陽】

「ん、ちょっと違うな。」

何て言うか、遊べるお菓子とでも言うのか」

紫苑にしたのと同じ様な説明を風見にする。

【陽】

「そんなお菓子なんだけど、やっぱり知らないか？」

【藍叉】

『知らない　こんなの初めて』

【湖珠】

「あ、そっか。そうだったんだよ」

【陽】

「ん？」

【湖珠】

「アイちゃんって子供の頃は日本にいなかったんだよ」

【陽】

「え、マジで？」

【藍叉】

『ヤー』

それは知らなかったな。

帰国子女って奴か。

【紫苑】

「外国には駄菓子って無いんですか？」

【赤明】

「無いんじゃないかしら？」

「何となくだけれど」

【陽】

「どうなんだ？」

【藍又】

『わからないけど 私は見た事無かった』

て事は、やっぱり無いのか、ポピュラーじゃないかのどっちかか？

【緑璃】

「それじゃあ、みんなで食べてみちゃおうか」

【橙歌】

「さんせー。ね、藍又、どれで遊ぶ？」

【赤明】

「どれを食べてみたい、でしょう？」

「玩具じゃないのよ」

【橙歌】

「えー、似たようなものじゃんか」

【橙歌】

「で、どれにする？」

【藍叉】

「……………」

風見は駄菓子子の山を見ながらしばらく考え、

手を伸ばして一つのお菓子を取り上げた。

【藍叉】

『これ』

取り出したのは、王冠の形をしたお菓子だ。

【橙歌】

「えーと、これ何だっけ？」

【紫苑】

「開けてみたら分かるんじゃないですか？」

【橙歌】

「そうだね。」

藍叉、開けてみて

【藍叉】

『ヤー』

包み紙を剥がすと、中から白い塊が出て来た。

【湖珠】

「ラムネなんだよ。」

「アイちゃん、ラムネは知ってる？」

【藍叉】

『それ位は知ってる』

【藍叉】

『食べていい？』

【陽】

「ん、どうぞ」

【藍叉】

『いただきます』

風見はラムネを摘んで口に放り込む。

ラムネの砕ける小気味いい音が聞こえた。

【湖珠】

「アイちゃん、どうぞ？」

夏原に聞かれた風見は、難しい顔をして一言書いた。

【藍叉】

『微妙』

【陽】

「微妙、ねえ」

【緑璃】

「うーん、駄菓子だからね……」

思わず苦笑してしまう。

1個10円かそこらのお菓子なんだから、当然と言えば当然なんだけど。

でも、この安っぽい味が、ある種の魅力なんだよなあ。

【橙歌】

「ね、僕達も食べようよ」

【黄牙】

「そつだな。食うか」

俺達はお菓子へと手を伸ばした。

【黄牙】

「このグミって当たり付きのやつだったよな？」

【陽】

「あー、あつたなそんなのも」

1個10円だけど、10円〜100円までの当たりが付いてた気がする。

【陽】

「俺も食べてみるか」

【橙歌】

「あ、じゃあ僕も」

お菓子の中からグミを取り出し、口に運ぶ。

うん、懐かしいコーラ味だ。

さて、当たりは包み紙の裏側に書いてあったはずだな。

【橙歌】

「やった！ 当たった！」

【黄牙】

「いくらだ？」

【橙歌】

「10円」

【黄牙】

「しょぼっ」

【橙歌】

「喜んでるのに何でそんな事言ってる……」

【橙歌】

「だったら、黄牙はどつなのよ」

【黄牙】

「俺は、30円だ」

黄牙が勝ち誇って橙歌に見せ付ける。

【橙歌】

「うわ、負けたー」

【黄牙】

「はっ、残念だったな」

【陽】

「そんなに大層な話じゃないだろ……」

【黄牙】

「何言ってるんだ。大事な事じゃねえか。」

「で、お前はとうだったんだよ？」

「う……やっぱり聞かれたか。」

「言いたくないけど……」

【陽】

「ハズレだった」

【黄牙・橙歌】

「「しよぼっ」「

【陽】

「うるさいっ」

だから言いたくなかったんだ。

くそ、だったら他のお菓子で勝利してやる。

えーと、何か無いかな……

【緑璃】

「陽君、ちよつといい?」

お菓子を探っていると、先輩に声をかけられた。

【陽】

「何ですか?」

【緑璃】

「お水ってある?」

【陽】

「水ですか?」

冷蔵庫の中にあつたような無かつたような……」

一旦立ち上がって冷蔵庫へと向かう。

中を調べると、ペットボトルに入った水があつた。

ミネラルウォーターとかじゃなくて、お茶会の後にポットに残つたお湯を冷ましたやつだ。

ま、水道水よりはましだろ。

【陽】

「湯冷ましですけど、いいですか？」

【緑璃】

「うん。十分だよ」

【陽】

「じゃあ、どうぞ」

先輩にペットボトルを渡す。

【陽】

「水なんて、何に使うんですか？」

【緑璃】

「それはね　じゃーん、これだよっ」

先輩が高々と手を掲げる。

そこには、1つの駄菓子握られていた。

【陽】

「ジュースの素ですか。

これも懐かしいなあ」

ビンの形をしたプラスチックの容器に、粉の詰まった駄菓子だ。

水に溶かすとジュースになるからジュースの素って呼ばれていた。

ただ、この駄菓子には致命的な欠点があるんだが……

【陽】

「これ、飲むんですか？」

【緑璃】

「うん。藍又ちゃんと紫苑ちゃんだね」

あの2人とか。

駄菓子を食べるんなら避けられないイベントではあるし、ここは味わって貰うとするか。

【緑璃】

「藍又ちゃん、紫苑ちゃん、コップ貸してね」

【藍又】

「(こくん)」

【紫苑】

「あ、はい」

2人からカップを受け取って、自分の分と合わせて3つのカップにジュースの素と水を入れる。

それを軽くかき混ぜて、即席ジュースの完成だ。

【緑璃】

「はい、どうぞ」

【紫苑】

「ありがとうございます」

【藍叉】

『いただきます』

コップを受け取った2人が、ジュースを口に運ぶ。

【紫苑・藍叉】

「……………」

一口飲んだ瞬間、2人の表情がかなり分かりやすく変化した。

【紫苑】

「こ、これは……………」

【藍叉】

『まずい』

非常に端的な評価が下された。

【陽】

「やっぱりか」

ジュースを作ったら不味いってのが定説だったけど、変わって無いのか。

水に溶かずにそのまま食べるとそれなりに美味しいんだけどな。

【紫苑】

「九走先輩……………知ってたんですか？」

紫苑が恨みがましい目で先輩を見る。

【緑璃】

「うーん、もしかしたら美味しくなってるかなって思ったんだけど」

先輩は、自分の分のジュースを一口飲む。

【緑璃】

「あははっ、やっぱりまずいね」

【紫苑】

「……もう」

楽しそうに笑う先輩。

少し不満そうだった紫苑も、それに気を抜かれたのか、呆れた様に一言漏らしたただけだった。

【藍叉】

『口直しが欲しい』

【紫苑】

「そうですね。」

先輩、選んでくれませんか？」

【陽】

「俺が？」

【藍叉】

『先輩はちょっと信用ない』

【緑璃】

「それ、酷いよお」

ある意味自業自得じゃないか。

【陽】

「そういう事なら仕方ないな。
んー、どれにしようかな」と

お菓子の中を搜索する。

これはネタ系、こっち激辛だし……

駄菓子で口直しつてのに無理があるんだって。

【橙歌】

「ね、これは？」

横から橙歌が何かを差し出す。

【陽】

「これは……」

……

【橙歌】

「はい、ちゅうもーく！」

突然大きな声を出した橙歌に、視線が集まる。

【橙歌】

「これから、ゲームするよ！」

名づけて、酸っパイんでロシアンキャンディー！」

机の上には、封を切られた3個入りの飴の袋が3つ。

商品名は『酸っパイん』。

パイん味の飴だが、3つに1つがかなり酸っぱい『アタリ』になっている。

【紫苑】

「……私は口直しをお願いした気がするんですけど」

【陽】

「ん……悪い」

橙歌の勢いに押し切られたんだ。

【陽】

「いや、あの飴自体は確かに美味しいんだ。
当たらなければ、だけど」

【紫苑】

「……もう先輩には頼みません」

【藍叉】

『陽も信用ない』

橙歌のせいなのに、何で俺が責められてるんだろうか。

【橙歌】

「ルールは簡単！」

「飴を食べて酸っぱかった人がアウト！」

【橙歌】

「はい、選んで選んで」

【黄牙】

「んじゃ、俺はこれにするぜ」

【緑璃】

「だったら、私はこっちにするね」

勝手に始まったゲームだが、最初に黄牙と先輩が飴を選んで、なし崩し的に全員が飴を選んだ。

【橙歌】

「みんな選んだ？」

「じゃ、せーの、で食べるよ」

【橙歌】

「せーの」

全員が一斉に飴を口に運ぶ。

飴は全部で9個あって、人数は8人。

『アタリ』は3つだから、最低で2人、運が悪いなら3人当たる

事になる。

【陽】

「……………」

ん、普通に甘い。

セーフ、か。

【陽】

「セーフだ」

【紫苑】

「私のもです」

【緑璃】

「甘いよ」

【黄牙】

「俺もだ」

【藍叉】

『セーフ』

【湖珠】

「大丈夫なんだよ」

【橙歌】

「僕もセーフつと」

【赤明】

「私もセーフよ。」

「ってあら？ どうして誰も当たらなかったの？」

【陽】

「あれ？」

2人は『アタリ』を引かなきゃおかしいんだが。

【橙歌】

「誰か、アウトなのに我慢して嘘ついてない？」

橙歌が全員の顔を見回す。

【黄牙】

「あ、もしかしたら、俺か？」

【橙歌】

「黄牙があ？ 何で黙ってたのさ」

【黄牙】

「いや、この飴、酸っぱいと言やあ酸っぱいけどよ。」

「そんなに凄え酸っぱいって訳でもねえんだよ」

【橙歌】

「何それ？」

【赤明】

「もしかして、味覚が変わったのかしら？」

「子供の時は凄く酸っぱく感じたけれど、今はそれほどでも無いよ」

うに感じるのかも」

【陽】

「ん、ありえるな」

元々パイナップルは多少は酸っぱいってイメージのあるものだし、

子供の頃感じた酸っぱさを大きさに記憶してたりしたら、感じ方も違うだろうしな。

いや、待てよ。

何も、昔と比較して分からなくなるってだけじゃないな。

【陽】

「初めて食べた紫苑と藍又が『アタリ』に気付いてないって可能性もあるのか」

【紫苑】

「それは、あるかもしれませんがね。」

私はちよつと甘酸っぱい飴だと思ってるんですけど」

【湖珠】

「アイちゃんも？」

【藍又】

『紫苑といっしょ』

【赤明】

「困ったわね。」

「これじゃ、誰が当たりかわからないわ」

【陽】

「そうだなあ。」

「あ、そうだ。この残った飴貰っていいか？」

【橙歌】

「いいんじゃない？」

【陽】

「じゃ、遠慮なく」

一つ残っていた飴を口に放り込む。

口に入れた瞬間、一つ目とは明らかに違う酸味が口に広がった。

【陽】

「これ、『アタリ』だ」

でも、確かに昔ほど酸っぱくは感じないなあ。

最初からこの味だと思ってたら、気付かないかもしれない。

【緑璃】

「今のがアタリって事は、後は1個だけ？」

【赤明】

「多分、南雲さんが風見さんのどちらかでしょうね」

【黄牙】

「つても、確かめようがねえよな」

【橙歌】

「えー、何とかならない？」

【湖珠】

「何とかなるよ」

【橙歌】

「ほんと!？」

【湖珠】

「任せてなんだよ」

そう言うなり、夏原は風見の頬に手を添えて、顔を寄せる。

【湖珠】

「アイちゃん……んー」

【藍叉】

「……」

夏原が唇に挟んだ飴玉を、ほとんど唇同士が触れそうな距離で見が攪う。

【湖珠】

「アイちゃん。お返しちょうだい？」

【藍叉】

「(くぐぐ)」

今度は、風見が飴玉をくわえて、夏原がそれを取って行った。

【湖珠】

「あ、酸っぱいんだよ」

【藍叉】

『甘い』

成る程、これで風見が『アタリ』を食べてたのがわかったな。

って、そんな事よりも凄い光景を見た気がするぞ。

【緑璃】

「え、えっと、2人はよくそういう事してるの？」

他のみんなもびっくりしていたが、先輩が何とか疑問を口にした。

【湖珠】

「変かな？」

【橙歌】

「変だよ！

キスしそうな勢いだったじゃん！」

【湖珠】

「でも、触ってないからセーフなんだよ。

同性だったら、ジュースの分けっことかするでしょ？」

【陽】

「そついうもんなのか？」

そりゃ、俺も黄牙と缶ジュースを回し飲みしたりはするけど、それとは全く別の次元の話に思えるんだけど……

【湖珠】

「そついうものなんだよ」

【藍叉】

『そついうもの』

少なくとも本人達はそう思ってるみたいだし、

何か不都合があるわけでもないから、まあいいか。

【湖珠】

「それで、橙歌ちゃん？」

【橙歌】

「え、何？」

【湖珠】

「アウトの人は見つかったけど、どうするの？」

【橙歌】

「あ、うん。」

「……もう、びっくりしてどろでもよくなったよ」

未だ呆然としたまま、橙歌が呟く。

ん、その気持ちは良く分かるよ。

こうして、酸っぱいパイナップルでロシアンキャンディーゲームは幕を閉じた。

……

……

……

人数が多いつて事は、それだけ話題が豊富って事で、気が付いた時にはもう随分遅い時間になっていた。

【陽】

「赤明、時間」

近くにいた赤明に言うと、赤明は時計を見て目を丸くした。

【赤明】

「もうこんな時間だったのね。
ちっとも気付かなかったわ」

【陽】

「そろそろ解散しないとな」

【赤明】

「そうね」

【黄牙】

「何だ、終わりにすんのか？」

【赤明】

「ええ。もう随分遅いから」

【湖珠】

「うわぁ、もうすっごい遅いんだよー！」

【紫苑】

「そうですね。」

いつの間にこんなに時間が経ったんでしょうか」

【藍叉】

『楽しいと時間があつという間』

【緑璃】

「ほんとだね。」

そろそろ後片づけして、部屋に帰らないとだね」

みんなも時間に気がついて、片付けの準備を始めよつとする。

【陽】

「あ、俺と黄牙が片付けるから、そのままでもいいよ」

【緑璃】

「いいの？」

【陽】

「もう遅いですから」

片付けると言っても大した労力でもないし、男が2人いれば十分だ。

その労力より、何人もの女の子と夜遅くまでいたってという風評の方が怖い。

【紫苑】

「それでは、私はこれで失礼しますね」

【藍叉】

『私も 今日には帰る』

【湖珠】

「じゃあ私も。」

楽しかったんだよ」

【陽】

「ん、じゃあな」

最初に、3人が帰って行く。

【黄牙】

「あれ？」

そう言や、橙歌の奴はどうした？」

【陽】

「ん？ あれ、そうだな」

言われてみると、しばらく声を聞いてないような……

【緑璃】

「橙歌ちゃんなら、あそこだよ」

【橙歌】

「……くー」

先輩の指差す方を見てみると、橙歌がベッドの上で丸くなって寝息を立てていた。

【陽】

「寝てるのか……」

通りで静かだったわけだ。

【陽】

「赤明、さっさと起こして連れて帰ってくれ」

【赤明】

「ええ、わかったわ」

赤明がベッドに近寄って、橙歌を揺する。

【赤明】

「橙歌。」

橙歌、起きなさい」

【橙歌】

「んー……」

【橙歌】

「もう朝……?」

【赤明】

「まだ夜だけど、取り合えず起きなさい」

【橙歌】

「んう……」

目を擦りながら橙歌が起き上がる。

【橙歌】

「ふあ〜……あれ? 何で陽達がいるの?」

こいつ、完璧に寝ぼけてるな。

【陽】

「逆だ逆。」

お前が俺の部屋にいるんだよ」

【橙歌】

「あ、そっか。お茶会してたんだっ……け……」

【陽】

「寝るなっ!」

【赤明】

「ほら起きて、寝るなら自分の部屋にしなさい」

【橙歌】

「んー、はぁーい……」

赤明がまだ半分以上寝てる感じの橙歌を引っ張って立たせる。

【緑璃】

「もう、しょうがない子だなあ」

先輩が赤明の反対側から橙歌を支える。

【赤明】

「先輩、すみません」

【緑璃】

「いいよ。気にしないで」

【緑璃】

「それにしても、良く寝てるね。」

寝る子は育つって言うけど、私ももっと寝たら大きくなれるかな」

【黄牙】

「それ以上大きくなりたいのかよ……」

黄牙が先輩のある部分を見ながらぼそつと呟く。

ん、確かに……

と、俺達の視線に気が付いたのか、先輩は空いている腕で胸を覆った。

【緑璃】

「そうじゃなくて、身長の話だよお」

拗ねたような目で睨まれてしまった。

【陽】

「あ、そうですよね。」

な、黄牙。あははは……」

【黄牙】

「お、おう。そうだな、ははは……」

【赤明】

「男子って……」

う、赤明の視線が痛い……

けど、仕方ないだろ。

あれだけ目立つと、健全な男ならつい目が行くもんだって。

……あ、だから『男子って』なんて言われるのか……

【緑璃】

「もう、あんまりエッチな目で見ちゃダメ、だよ」

【陽】

「……すみません」

こればかりは謝るしかない。

【緑璃】

「はい、よくできました」

素直に頭を下げると、先輩はいつもの様に頭を撫でながらあっさり許してくれた。

【緑璃】

「それじゃあ、また明日だね」

【陽】

「はい、おやすみなさい。赤明もな」

【赤明】

「ええ、お休みなさい」

【橙歌】

「やすみい……くう……」

3人を見送り、残ったのは俺と黄牙だけになった。

【陽】

「さ、片付けるか」

【黄牙】

「おう」

俺達は、お茶会の後片付けを始めるのだった。

六月十三日(その1)

< 6月13日(土) >

< 神社 神殿 >

土曜日の昼過ぎ。

示し合わせたわけでもないのに、神社にはメンバーが勢揃いしていた。

ただし、揃っているのは人数だけでやっている事はみんなバラバラだった。

那美と赤明と緑璃先輩は明日の計画について話しているし、

紫苑は宿題を、風見は壁にもたれて何かの音楽を聴いている。

【黄牙】

「ツーパーだ」

【陽】

「スリーカード」

【橙歌】

「僕ワンペアー」

残った俺達と言うと、誰かが持ち込んでいたトランプでポーカーをしていた。

【橙歌】

「あー、もう飽きたー」

橙歌が持っていたカードを放り出す。

【橙歌】

「ねえ、何か他の事しない？」

【陽】

「他って言っても、もうやりつくしただろ」

ババ抜きから始まって、七並べ、大富豪、神経衰弱等等、知っているゲームは一通りやってしまった。

【黄牙】

「何か他に知ってんならそっちにしてもいいぜ」

【橙歌】

「……そう言われると、無いけど」

【黄牙】

「んならもう一勝負だな」

【橙歌】

「だから飽きたってば。僕抜けた」

橙歌は畳みの上に寝転がると、そのままコロコロと転がっていった。

【橙歌】

「赤明い、暇だよー」

【赤明】

「あら、それじゃあ橙歌も準備の相談に乗ってくれる？」

【橙歌】

「さよならー」

ゴロゴロゴロゴロ

【橙歌】

「紫苑ー」

【紫苑】

「何ですか？」

紫苑がノートから顔を上げる。

はつきり迷惑って顔に書いてあるな。

【橙歌】

「暇ー」

【紫苑】

「そうですね」

冷たく言って視線を下げる。

【橙歌】

「紫苑―」

【紫苑】

「時雨先輩は暇かもしれませんが、私は忙しいです」

【橙歌】

「あう、ごめん……」

ゴロゴロゴロゴロ

【橙歌】

「藍叉―」

また、構って欲しそうに転がって行った。

……何やってるんだか。

【黄牙】

「陽、配ったぞ」

橙歌を観察している間に、新しい手札が配られていた。

【陽】

「何か賭けるか？」

【黄牙】

「金はねえぞ」

【陽】

「なら、唯鈴ちゃんとか」

【黄牙】

「何だとっ！」

【陽】

「いや、悪い。「冗談だ」

黄牙にこの冗談は拙かったな。

適当になだめながら、手札を開く。

【陽】

「お

種類はバラバラだが、3と7の数字が綺麗に揃っていた。

【黄牙】

「交換しねえのか？」

【陽】

「ん、このままでいいよ」

【黄牙】

「そうか？ 俺は2枚交換するぜ」

黄牙が手札を入れ替える。

【黄牙】

「それじゃ、行くぞ」

同時に手札を開く。

【陽】

「ストレート」

【黄牙】

「フラッシュ」

黄牙の手札は全てスペードのカードだった。

【黄牙】

「あれ？ これって、どっちが強いんだ？」

【陽】

「ん……どっちだったっけ？」

ストレートだったような気もするし、フラッシュだった気もする。

【陽】

「忘れたな」

【黄牙】

「なら、じゃんけんで決着決めようぜ」

【陽】

「それは嫌だ」

【黄牙】

「何でだよ？」

【陽】

「お前とじゃんけんしたらほぼ必ず負けるからだ」

黄牙は常人より随分と動体視力、特に反射神経が優れているらしい。

そのせいで、1対1でじゃんけんをすると、こっちの手が見切られてしまうのだ。

同じ理由で、喧嘩に負けた事も無いらしい。

【黄牙】

「じゃあどうすんだよ」

【陽】

「そうだな……山から1枚引いて数の大きいほうが勝ちって事で」

【黄牙】

「それでいいか」

山札から1枚ずつ引く。

【陽】

「せーの」

同時にカードを出す。

俺がダイヤの8。

黄牙はハートの11だった。

【陽】

「俺の負けか」

【黄牙】

「らしいな。もう1回やるか？」

【陽】

「いや、ちょっと休憩にしよう。喉が渴いた」

【黄牙】

「おう、そうするか」

トランプを置いて部屋の隅に移動する。

【陽】

「先輩、お茶貰いますね」

【緑璃】

「あ、どござどござー」

ここに来る時に先輩が買って来たペットボトルのお茶を、親睦会の時から残っている紙コップに注いで口に運ぶ。

【橙歌】

「隙ありっ!」

スパーンっ!

【陽】

「んぐっ　「じほっ、じほっ」

な、何だ!?

いきなり後頭部を引っ叩かれたぞ!?

【橙歌】

「ふっふっふ、油断大敵だね」

振り返ると橙歌がハリセンを担いでにやにや笑っていた。

【陽】

「何すんだよっ」

【橙歌】

「だって、暇だったんだもん」

【陽】

「そんな理由で叩くなよ……。」

「と言っか、そんな物どっから持ってきたんだ?」

【橙歌】

「これ?　藍叉に貰った」

【陽】

「風見に?」

見てみると、風見が無音で笑っていた。

掲げられたスケッチブックには『油断大敵』の文字。

なるほど、このハリセンもあのスケッチブック製って事か。

この、紙製品万能娘め……っ。

【陽】

「お前ら、戻って来たら覚えてるよ」

【橙歌】

「戻ったら？ どっか行くの？」

【陽】

「手を洗って来るんだよ」

叩かれた時に、うっかり紙コップを握りつぶしてしまって、手がお茶まみれだ。

ジュースみたいにべたべたはしないけど、気持ちのいいものじゃない。

<神社 境内>

【陽】

「ったく、ほんとにろくな事をしないな」

神殿の横手にある水道で手を洗う。

取り壊されるとか言う割にはちゃんと水が出るんだな。

まあ、これが無かったら虹をかける時に水をどこで調達するかで
悩む羽目になる所だったから、助かったけど。

【陽】

「ん、待てよ？」

ふと気がついたことがあって、周囲を見回してみる。

【陽】

「やっぱり、無いよな……」

これは、大変だ。

<神社 神殿>

【陽】

「みんな、大変だっ」

室内に飛び込みながら叫ぶ。

【那美】

「ど、どうしたの？」

【陽】

「大事なものが無いんだよ」

【那美】

「大事なものって？」

【緑璃】

「カードを無くしちゃったの？」

【陽】

「いや、違いますけど」

確かにそれは大事ですけど。

【藍叉】

『財布？』

それも大事だけどさつ。

【陽】

「違う違う。そんな個人的な物じゃなくて、ホースだよ！」

【那美】

「え？」

【陽】

「別にホースじゃなくてもいいけど、とにかく神社の裏で水をまくのに使う道具が無いんだって」

水道から神社の裏まで結構な距離がある。

かなり長めのホースか何かが無いと、水を運べないだろう。

何で前日までこんな大事な事に気がつかなかったんだろう。

【那美】

「あ」

と最初に那美が眩き。

【全員】

「あーーーー！！」

少し遅れて、驚きの声が上がった。

【緑璃】

「すっかり忘れちゃってたよ。どうしよう……」

【赤明】

「どうもこうも、どこかで調達しないといけないですね」

【藍叉】

『どこかって、どこ？』

【陽】

「しかも、結構長いのが必要と思うぞ」

【紫苑】

「そうですね。水道の位置が位置ですから」

【陽】

「参拝者の為にあるんだから当然と言えばそうなんだけどな」

水道から裏手までは、神殿の周りをぐるっと半周以上して回らな

いといけない。

大体20m位は欲しいところだ。

【赤明】

「一般家庭には中々なさそうね。

誰か、家にそんな長いホースのある人っている？」

赤明の問いに全員が首を横に振った。

【赤明】

「でしようね」

赤明も、それは予想していたのか特に落胆した様子は無い。

【那美】

「それなら、家には無くても、心当たりのある人は？」

【橙歌】

「うーん……ホースホース……」

【藍叉】

『学園は？』

【緑璃】

「あ、それはいい考えなんじゃないかな」

【陽】

「ん、確かに」

【赤明】

「そうね。それじゃあ、行ってみる？」

【緑璃】

「そうだね。善は急げって言うし」

【橙歌】

「僕も賛成だよ」

ぞろぞろと席を立つ。

【紫苑】

「ちょっと待って下さい。那美さんはどうするんですか？」

【陽】

「あ、そうだったな」

【黄牙】

「何か問題があんのか？」

【赤明】

「馬鹿ね。那美はうちの学園の生徒じゃないでしょ」

【黄牙】

「ああ、そういやそうだったな。でもよ、ちょっとぐらい大丈夫なんじゃねえか？」

【陽】

「んー、微妙、だな」

【赤明】

「そうね。一緒なら不審者って事は無いけど、部外者ではあるのよね」

【那美】

「私なら気にしなくていいよ。商店街の方を見に行くから」

【陽】

「いいのか？」

【那美】

「うん。もし学校に無かった時に、別の所に行く人がいてもいいよね？」

【陽】

「それはそうだけど」

仕方ない事とは言っても、1人だけ仲間外れみたいにするのは気が進まないな。

【赤明】

「そうね。それなら、私もそっちについていくわ」

【那美】

「え？ いいよ、私1人で」

【赤明】

「駄目よ。最低20mのホースなんて、女の子が1人で運ぶものじゃないわ」

【陽】

「そうだな。それじゃ、商店街は2人に任せていいか？」

【赤明】

「ええ、任せて。ね、那美」

【那美】

「うん。ありがとう、赤明」

【陽】

「それじゃ、出発しよう。ホースを見つけたら携帯で連絡するよ
うに」

<学園 校門前>

商店街に向かった那美と赤明と別れて、俺達は休日の学園にやっ
て来た。

【紫苑】

「私たち、私服ですけど、大丈夫でしょうか？」

【陽】

「一応生徒だし、大丈夫だと思うけど」

【黄牙】

「大丈夫じゃなくても注意されるくらいのもんだろ。気にすんなよ」

【紫苑】

「私は、その注意されるのが嫌なんですけど」

【黄牙】

「あー、細かい奴だな」

【紫苑】

「先輩が大雑把過ぎるんですよ……」

【橙歌】

「えー、紫苑が細かいんだよ」

【紫苑】

「……先輩たちが大雑把過ぎるんです」

【緑璃】

「大丈夫だと思うよ。」

ほら、休みの日に部活の人が私服で出て行ってるの見たこと無い？
「？」

【紫苑】

「あ、そう言えば見たことあります」

【緑璃】

「でしょ？ だから、大丈夫だよ」

【紫苑】

「はい。そうみたいですな」

【陽】

「それじゃ、紫苑も安心できたみたいだし、ホースを探るか」

【緑璃】

「そうだね。でも、学園って広いから、私たちも手分けしようか？」

【陽】

「そうですね。みんなもそれで良いか？」

【紫苑】

「そうですね。その方が効率が良さそうですし」

【黄牙】

「俺もそれでいいぜ」

【橙歌】

「僕も」

【藍叉】

『ヤー』

【陽】

「じゃあ、見つけたら携帯に連絡するって事で、解散」

<学園 玄関>

【陽】

「うーん、見つからないな」

取り合えず、校舎の周りを一周してみたが、それらしい物は見つ

からなかった。

あるとは思っただけど、いざ探してみると見つからないもんだな。

漠然とろつつくよりも、ある程度範囲を絞って探した方がいいか。

さて、どこを探そうか

< 選択肢 >

- 1・花壇（緑璃）
- 2・部活棟（橙歌、藍叉）
- 3・体育倉庫（紫苑、黄牙）
- 4・校門（那美、赤明）

六月十三日（選択肢1）

ホースを使って水をまく所といえば、やっぱり花壇かな。

よし、花壇の辺りを探してみるか。

<学園 中庭>

俺は、中庭の一角にある花壇にやって来た。

20×10m位の敷地に、園芸部が世話をしている花が植えてある。

花壇と言うよりは畑と言ってもいいかもしれない。

【陽】

「ホース、ホース……」

ぱっと見た感じでは見当たらない。

休日だし、どこかにしまってるのかもしれないな。

【緑璃】

「誰か、そこにいますか？」

【陽】

「ん？」

うつろうつろしているところから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

【陽】

「先輩ですか？」

【緑璃】

「あ、陽君？ よかったー」

相変わらず姿は見えないが、安心したような声が返って来た。

【緑璃】

「ちよっと大変な事になっちゃってるの。助けてー」

【陽】

「はあ。先輩、どこにいるんですか？」

【緑璃】

「花壇の中だよー」

【陽】

「わかりました。今行きますから」

目の前の割と背の高い草を掻き分けて花壇に入る。

【陽】

「先輩ー？」

【緑璃】

「こっちー、こっちだよ」

【陽】

「ん、そこですか」

先輩の声を目印に、草の壁を抜ける。

【陽】

「……何やってるんですか？」

花壇の中に、ホースに絡まった先輩が転がっていた。

【緑璃】

「もう、見たらわかるでしょ」

いや、見てもわからないんですけど。

【陽】

「えっと、趣味ですか？」

【緑璃】

「違うよっ。」

園芸部の子にホースを借りられたんだけど、ここで転んだら絡まっちゃうたの！

【陽】

「それは、何と云うか、災難でしたね……」

【緑璃】

「それはいいから、早く助けてよ」

【陽】
「あ、はい。今解きます」

先輩のそばに屈んで、ホースに手をかける。

【陽】
「よっ」

【緑璃】
「ひゃあっ」

ホースを引つ張ると、先輩が素っ頓狂な声を上げた。

【陽】
「どうかしましたか？」

【緑璃】
「えっと、その、色んな所に当たるから、適当に引つ張るのはちょっと……」

【陽】
「うわっ、すみません。気をつけます……」
注意しながら、ホースを辿る。

えーと、ここがこうなって……

【陽】
「あ」

ホースの行き先を辿っていると、その先が先輩の足の間を通っていた。

しかも、引つ張ったせいかスカートが盛大にめくれてしまっている。

【緑璃】

「あ？」

先輩が俺の視線を辿る。

【緑璃】

「あ」

あっという間に先輩の顔が真っ赤に染まる。

【緑璃】

「み、見ちゃダメー！！」

【陽】

「み、見てない、見てないですっ」

視線を引き剥がしてそっぽを向く。

【緑璃】

「だって、あ、って言ったよね？ 見たんだよね？」

【陽】

「一瞬、一瞬だけですから、四捨五入したら見えてないくらいです」

からっ」

【緑璃】

「ううー、解く時見ちゃダメだからね。目閉じててね」

【陽】

「それは、かなり難しいと思っんですけど……」

【緑璃】

「それでも見るの禁止。ダメ、ゼツタイ！」

【陽】

「わかりましたよ……」

目を閉じて、手探りでホースを解きにかかる。

視界が真っ暗で、ホースがどう繋がっているのかもわからない。

これ、難易度が半端じゃないって……

【陽】

「えーと、こっ、か？」

【緑璃】

「わひゃー！」

【陽】

「だ、大丈夫ですか？」

【緑璃】

「うん、ちょっとくすぐったかったただだよ」

【陽】
「じゃあ続けますね」

えっと、ここから繋がってるから、こっちか？

ん？ 何か手触りがホースと違うような……

【緑璃】

「あ、んんっ、陽君っどこ触ってるのぉ」

【陽】

「え？ え、どこ触ってるんですか？」

【緑璃】

「そ、それは……い、言えないよぉ」

【陽】

「ええ！？」

言えないような所！？

【陽】

「すみませんっ」

ぱっと手を離す。

【陽】

「あ」

しまった。

手を離したら、どこにホースがあるのかもわからなくなった……

確か、この辺だったような。

【緑璃】

「んんっ!？」

うわ、何か凄く柔らかい物を掴んだ感触がつ。

【緑璃】

「あ、そ、そこもダメえ！」

【陽】

「あああ、すみませんー！」

柔らかい何かから手を離す。

【緑璃】

「ようくんー？ さっきから何やってるのお？」

恨みがましい先輩の声。

【陽】

「し、仕方ないじゃないですか、見えないんですから！
て言うか、目を閉じたままとか絶対無理ですって！」

【緑璃】

「だったら見てもいいから、早く何とかしてよお」

【陽】
「わ、わかりました」

閉じていた目を開く。

【陽】
「うわぁ……」

どこをどう触っていたのか未だにわからないが、

ホースが食い込んだり、服がめくれたり、先輩が凄い格好になっている。

これはエロい、じゃなくて、エロいことに……

【緑璃】
「早くしてえっ」

【陽】
「あ、はい。今すぐにつ」

目の毒な先輩をなるべく見ないようにして、絡まったホースを解きにかかった。

<学園 グラウンド>

何とかホースを解き、俺達はみんなに連絡を入れてから神社へ向かっていた。

【緑璃】

「うう……あんな格好にさせられるなんて……
もうお嫁にいけないよ……」

涙目で先輩が呟く。

やばいなあ。何かフォローしないと。

【陽】

「大丈夫ですよ。ほら、えっと、そう、さっきの先輩、とてもエロかったですから」

って、あれ？

俺は何を言ってるんだ？

【緑璃】

「よ、陽君。陽君の」

先輩が俯いてぶるぶる震えている。

【陽】

「あ、いや、何と云うか、刺激が強すぎて思わず本音が……」

【緑璃】

「陽君の馬鹿ああああっ！」

辺り一帯に響きそうな声で叫び、

先輩は走り去ってしまった。

うーん、失敗したなあ……。

俺は、どうやって先輩に謝るかを考えながら、

長いホースを引きずって、神社へと向かった。

六月十三日（選択肢2）

部活棟に行ってみるか。

<学園 部活棟>

グラウンドの端っこに、プレハブの建物が並んでいる。

グラウンドを使う運動部が使っている部室で、生徒からは部活棟と呼ばれている。

【橙歌】

「あ、陽。陽もこっちに来たの？」

部室の裏から橙歌がひょっこり顔を出した。

その後ろに藍叉が続く。

【陽】

「何だ、橙歌達も来てたのか」

【橙歌】

「うん」

【藍叉】

「ホース見つけた？」

【陽】

「いや、まだだ。そっちは？」

【橙歌】

「ふふーん」

橙歌と風見が顔を見合わせて得意げに笑う。

【藍叉】

『こっちは見つけた』

【陽】

「お、マジか。先を越されたなあ」

【橙歌】

「しかも、ただのホースじゃないんだよ」

【陽】

「ただのホースじゃない？」

【橙歌】

「そうそう。ほら、こっち来て」

【陽】

「うわ、何だよ」

部活棟の裏に引っ張り込まれる。

【橙歌】

「じゃーん。カモンスネーク！」

【陽】

「いやいや、無理があるって」

地面の上にとぐるを巻いた蛇、

ではなく、ホースだ。

いくら薄暗い部屋棟裏と言っても、流石に見間違いはしない。

【藍叉】

『バレバレ？』

【陽】

「こんな長い蛇がいたら大変だって」

パニック映画もびっくりの事態になってしまいそうだ。

【陽】

「で、これのどこがただのホースじゃないんだ？

まさか、蛇って騙したかっただけじゃないんだろうな」

【橙歌】

「違うよー。ほら、伸ばしてみて」

ホースの束を渡される。

【陽】

「ん？」

渡されたホースを伸ばしてみる。

伸ばしても普通のホースに見えるけど……ん？

【陽】

「なんだこれ？」

片側の先端が、7つに枝分かれている。

その根元はビニールテープでぐるぐる巻きにしてあって、

いかにも手作りと言った感じだ。

【橙歌】

「てててーん、タコ足ホース」

秘密道具っぽい効果音を口で言いつつホースを掲げる。

【陽】

「これ、元はただのホースだよな？」

「何でこんな姿に？」

【藍叉】

『野球部の人改造した 練習の後に蛇口が足りなかったんだって』

【陽】

「ってこれ野球部のなのか？」

「ちゃんと許可取ったんだろうな？」

【藍叉】

『許可は貰ってないけど ホースは貰った』

【陽】

「貰ったあ？」

【橙歌】

「うん。もう要らないーって」

【陽】

「要らないって、それ大丈夫なのか？」

【橙歌】

「何が？」

【陽】

「あのな、普通備品が要らないって事は、壊れたか何かで使えないって事だろ？」

【橙歌】

「あ」

はあ、やっぱり気がついてなかったか。

【陽】

「使い物になるのか？」

【橙歌】

「うーん……わかんない」

【陽】

「やれやれ……」

【藍叉】

『実験 する？』

【陽】

「ん、そうだな。試しておくか」

……

……

……

近くの水道にホースを繋ぐ。

【陽】

「それじゃ、水出すぞ」

【橙歌】

「オッケー」

蛇口を捻る。

【橙歌】

「あれ、出ないよ？」

【陽】

「長いからな。もうちょっと待て」

【橙歌】

「あ、そっか」

しばらく待っていると、ホースの先から水が出始める。

だが、7つに分かれている先端のそれぞれから、少しずつしか水が出てこない。

【藍叉】

『これ 使える？』

【陽】

「うーん……」

蛇口をいっぱいに捻ってみるが、大して勢いは変わらない。

先端を摘んでみても、勢いが弱すぎるのか、水は飛ばなかった。

【陽】

「駄目っばいな」

【橙歌】

「ええー。そんなぁ……」

【陽】

「これは返して、他を探すしかないな」

【橙歌】

「せっかく見つけたのに……」

【陽】

「使えないんだから仕方ないだろ。
ほら、さっさと次に行こう」

【橙歌】

「はい」

【藍叉】

『ヤー』

使えないタコ足ホースを元の場所に返して、

俺達は次の場所を探しに出発した。

六月十三日（選択肢3）

体育倉庫に行ってみるか。

色々と詰め込まれてるあそこなら、あるかもしれないからな。

<学園 グラウンド>

体育倉庫はグラウンドの隅にある運動部の部室、通称部活棟の隣にある。

そこへ向かっていると、見覚えのある背中を見つけた。

【陽】

「黄牙！」

声をかけて、立ち止まった背中に駆け寄る。

【黄牙】

「陽か。ホースは見つかったか？」

【陽】

「いや、まだ見つかってない。そっちは？」

【黄牙】

「俺もだ」

【陽】

「ん、そっか。」

俺は体育倉庫に行くんだけど、お前は？」

【黄牙】

「俺は適当に歩いてただけだ。」

そっちに付いて行っていいか？」

【陽】

「ああ。一緒に探そうか」

【黄牙】

「おう。任せろ」

<学園 体育倉庫>

俺と黄牙は体育倉庫の前までやって来た。

体育倉庫の扉はきっちり閉じられている。

【黄牙】

「閉まってるな」

【陽】

「そつだな。鍵がかかってないといいんだけど」

活動している運動部もいたし、多分開いてると思うんだけど。

取っ手に手をかけて引いてみる。

【陽】

「……閉まってる」

【黄牙】

「マジかよ」

何回か試してみたが、扉が揺れるだけで、扉は開かなかった。

【黄牙】

「どうすんだ？」

【陽】

「開かないものは仕方ないだろ。他の所に行こう」

【黄牙】

「ったく、しゃあねえな」

【??】

「あの、誰かそこにいるんですか？」

俺達が体育倉庫から立ち去ろうとした時、中から誰かの声が聞こえてきた。

どこかで聞いた事のある声だな……

【陽】

「誰かいるのか？」

扉越しに声をかけてみる。

【??】

「はい。あの、もしかして先輩ですか？」

【陽】

「え？」

【??】

「私、紫苑です」

【陽】

「あ、紫苑だったのか」

くぐもっていてわかりにくいと言われてみれば確かに紫苑の声だ。

【陽】

「どうしたんだ？」

【紫苑】

「あ、はい。良くわからないんですけど、閉じ込められたみたいなんです。扉が開かなくなってます……」

【陽】

「体育倉庫の鍵は内側からなら開けられるはずだけど？」

万が一閉じ込められた時の為に、体育倉庫に限らず、大体の施設は内側からなら開けられるようになってはいるはずだ。

【紫苑】

「いえ、鍵は開いているんですけど、扉が開かないんです」

【陽】

「え？ 何で？」

【紫苑】

「ですから、それはわからないと言ってるじゃないですか」

【陽】

「あ、そうだったな」

鍵は開いているのに扉が開かないか。

扉が歪んでいるとか、何かが引っかかっているとかがそういう理由だろうか。

【陽】

「してみるから、ちょっと待っていてくれ。黄牙、そっちの扉を頼む」

【黄牙】

「りょーかい」

左右の扉に分かれて、扉を調べてみる。

見た感じでは普通の扉だ。

大体、どんな原因にせよ、右と左にスライドする引き戸が両方動かなくなるなんて考えにくい。

鍵がかかっていると考えるのが1番自然なんだけど。

【陽】

「紫苑、間違いなく鍵は開いてるんだよな？」

【紫苑】

「はい。開いています」

【陽】

「ん、そうか……」

【陽】

「黄牙。そっちはどうだ？」

【黄牙】

「あー、わかんねえなあ。普通の戸にしか見えねえぜ」

【陽】

「そうか」

「一体、どうなってるんだ？」

【黄牙】

「陽」

【陽】

「ん？」

【黄牙】

「考えてもわかんねえならよ、無理矢理にでも開けちまおうぜ」

【陽】
「……んー」

なるべくならそんな荒っぽい手を使いたくは無いけど……

今回はよく知ってる後輩が閉じ込められてる訳だし……

【紫苑】

「先輩？ 急に静かになりましたけど、どうしたんですか？」

体育倉庫の中から紫苑が聞いてくる。

その声に、隠しきれていない不安が見え隠れしていた。

【陽】

「黄牙」

【黄牙】

「ん？」

【陽】

「やるぞ」

あんな声を出されて、ただ何もできませんなんて手をこまねている事はできない。

取り合えずやれることがあるなら、それをするまでだ。

【黄牙】

「おつよ」

わかっていたとばかりに、黄牙が頷く。

【陽】

「紫苑、危ないからちよつと離れててくれ」

【紫苑】

「え？ あの、先輩？ まさかとは思いますが……」

【黄牙】

「扉をぶち破る。危ねえからどいてるよ」

【紫苑】

「ちよ、ちよつと、先輩!？」

【黄牙】

「行くぞお!」

【陽】

「ああ!」

タイミングを合わせて扉に体当たりする。

扉の向こうで小さな悲鳴が上がり、慌てて遠ざかっていった。

2回。

3回。

4回。

【陽】

「せーのっ」

【黄牙】

「おらぁあっ!!」

5回目の体当たりで、扉が外れた。

吹き飛んだ扉ごと体育倉庫の中に転がり込む。

【陽】

「あ痛たた……」

【紫苑】

「先輩！ 大丈夫ですか!？」

慌てて紫苑が駆け寄って来る。

【陽】

「あー、大丈夫だ、問題無い」

立ち上がって、土や埃を叩き落とす。

【紫苑】

「大陣先輩も、お怪我は無いですか?」

【黄牙】

「おう、全然大丈夫だ」

【紫苑】

「はぁ、良かったです。それにしても、先輩！」

紫苑はほっとしたように一息つくど、

表情を一瞬で変えて睨みつけてくる。

【紫苑】

「原因がわからないから扉を破るなんて、どれだけ短絡的なんですか！？」

信じられません！」

【黄牙】

「助けてやったつてのに文句言うなよ」

【紫苑】

「助けていただいたのはありがたいですけど、もう少し考えて行動してください。」

大陣先輩だけならともかく、先輩まで……」

【陽】

「仕方ないだろ、紫苑の事が心配だったんだから。余計な事考える余裕が無かったんだよ」

【紫苑】

「へ………？」

言い訳のような事を口にするど、何故か紫苑の勢いが無くなった。

さっきまで文句を吐き出し続けていた口をパクパクとあけている。

【陽】

「な、何だよ？」

【紫苑】

「い、いえ……。そっか、そんなに心配、してくれたんですね……」

【紫苑】

「そんな風に言われたら、怒れないじゃないですか……」

【陽】

「ん？ 何か言ったか？」

【紫苑】

「な、何でもありません！ もういいですから、早くその扉を直してくださいっ！」

【陽】

「あ、ああ。黄牙」

【黄牙】

「わかったよ。面倒くせえなあ……」

俺達は紫苑の剣幕に押されるように、扉を直し始めた。

<学園 体育倉庫>

扉を直しながら確認してみると、

「どうやら、鍵の金具が壊れて鍵が開かない状態になっていたみたいだった。」

「一応先生に報告してから、改めて俺達は体育倉庫の探索を開始した。」

【陽】

「紫苑、そっちはどうだ？」

【紫苑】

「無いみたいです。先輩はどうですか？」

【陽】

「こっちもだ」

「やっぱりと言うべきか、体育倉庫の中にあるのは体育の授業や何かで使うものばかりで、」

「たまに珍しいものがあったって、体育祭の競技のための物だった。」

【陽】

「これは、体育倉庫って場所が外れだったかな」

【紫苑】

「体育の授業ではホースは使いませんからね……」

「紫苑がそうばやくが、基本的にホースを使う授業は存在しない。」

「と言う事はもしかすると学園という発想から間違っていたのだから」

うか。

【黄牙】

「お！」

隅の方でごそごそしていた黄牙がいきなり大声を上げた。

【陽】

「どうした？」

【黄牙】

「ホース、あつたぜ」

【陽】

「マジか？」

紫苑と2人でそっちに向かう。

【黄牙】

「ほれ」

と言って黄牙が持ち上げたのは、確かにホースだった。

いや、ホースはホースなのだが、

火事の消火活動で見かけるような、太いホースだった。

【紫苑】

「黄牙先輩……これは使えませんかよ」

【黄牙】

「そうか？」

【紫苑】

「そうですね」

【黄牙】

「でも、火事の時とかこんなホースですっげえ水をまいてるだろ？」

【紫苑】

「それはそうですね……」

【陽】

「普通の水道じゃ、そんなに水が出てこないからな」

あれは消火栓なんか繋ぐから出来る事だ。

一般の水道では、水圧も水量も全く足りない。

【黄牙】

「あ、そうか。じゃあ、これは？」

【陽】

「紫苑の言う通り、使えないな」

【黄牙】

「マジかよー」

黄牙がホースを乱暴に放り投げる。

【紫苑】

「ここには無かったみたいですね」

【陽】

「そうだな。次に行くか」

俺達は体育倉庫を後にして、ホースのありそうな場所を探しに行った。

六月十三日（選択肢4）

<学園 グラウンド>

うーん、どこに行けばいいんだろうか……

悩みながら歩いているといつの間にか校門の近くまで来ていた。

【陽】

「あれ？」

校門の所に見知った2人組みが立っている。

あいつらは商店街に行ったんじゃないのか？

<学園 校門>

【陽】

「赤明、那美」

【赤明】

「あら、城崎君。どうしたの？」

【陽】

「どうしたって、それは俺の台詞だよ。商店街に行ったんじゃないのか？」

【赤明】

「雑貨屋さんとか回ってみたけど、見つからなかったのよ。神社で待ってても良かったんだけど、みんなこっちにいるでしょう？」

【陽】

「それでこっちに来たのか。それなら、探すの手伝ってくれよ」

【赤明】

「それはいいけど、那美はどうするの？」

【陽】

「ん、一緒に行ったんでいいんじゃないか？」

【那美】

「でも、私はここの生徒じゃないよ？」

【陽】

「ここまで来たんだし、気にするなって」

確かに那美は生徒では無いが、別に悪い事をしにきたわけでも無い。

生徒の俺達と一緒にいたら、多分大丈夫だろう。

もし先生に見つかったりしても追い出されるくらいですむだろう。

いや、もしかしたら説教くらいはされるかもしれないけれど、それよりも優先したいことがあった。

それは、那美と同じ時間を過ごす事。

アルカンシエルは虹をかけるために集まったグループだ。

目的を達成すれば、アルカンシエルと言う集まりは終わりを迎える。

そして、アルカンシエル結成の場である秘密基地（じみつきち）も取り壊される事が決まっている。

出会いと別れは裏表だ。

でも、那美との出会いの裏にある別れは、あまりにも近すぎる。

そんな予感がする。

それが本当にそうなのか。

それとも、あまりに那美の事を知らないからそう思っただけなのか。

どちらにしても、彼女と過ごすべきだと、そう思った。

【赤明】

「……そうですね。そうしましょうか」

赤明がしかたなさそうな顔で賛成してくれた。

どちらかと言うとメンバーのストッパーになる赤明があっさりと賛成するのは珍しい。

もしかしたら、赤明も同じ事を感じているからなのかもしれない。

【那美】

「本当にいいの？」

【陽】

「もちろん。な？」

【赤明】

「ええ」

【那美】

「そっか」

那美が嬉しそうに笑ってくれる。

【那美】

「2人とも、ありがとう」

その笑顔を見ていると、俺達がやってる事は無駄じゃないと、そう思えた。

【赤明】

「それで、今までどこを探したの？」

【陽】

「俺は校舎の周りをちらっと。他のみんなはわからないな」

【赤明】

「被ったら困るから、確認してくれる？」

【陽】

「そうだな。みんなにメールでもするか。あ、そうだ。那美も手伝ってくれ」

【那美】

「私も？」

【陽】

「メールの練習したんだろ？使えるようになったって所を見せてもらわないとな」

【那美】

「ちゃんとできるようになったよ。もしかして、疑ってるの？」

【陽】

「いやいや、純粹に戦力として期待してるよ」

【那美】

「それならいいけど」

那美と手分けしてみんなに居場所を聞く。

しばらく待っていると、それぞれに返信のメールが返って来た。

【那美】

「紫苑は今体育倉庫で緑璃は今から花壇に行くって」

【陽】

「黄牙も体育倉庫の辺りだ。橙歌と風見は一緒に部活棟にいるみたいだな」

【赤明】

「あら、みんな外にいるのね」

【那美】

「ホースって屋内で使わないからね」

【陽】

「まあ、そうだろうな」

【那美】

「他にホースのある所は無いの？」

【陽】

「んー、あるか？」

【赤明】

「そうね……あ、あそこは？」

【陽】

「どこ？」

【赤明】

「資料室よ。第二の方」

【陽】

「あーあそこか……」

資料室。

名前の通り、授業で使う道具が教科の区別も無く詰め込まれている部屋だ。

そして、第二と言うと、校舎改築の時に処分し損ねた使わない教材の物置になっている、第二資料室の事だ。

確かに、あそこならホースが有る可能性もあるし、説明すれば借りられるかもしれない。

【陽】

「でも、あそこは駄目だろ」

【赤明】

「どうして？」

【陽】

「場所が悪い」

資料室は職員室の隣にある。

見つかったても大事にならないだろうとは言っても、

わざわざ見つかりやすい所に行くのは遠慮したい。

【赤明】

「あ、そうね。確かにそうだわ」

【陽】

「そうなるよ、他の場所だけど。……あるか？」

【赤明】

「そうねえ……」

赤明が首を傾げる。

【赤明】

「だめね、もう思いつかないわ」

【陽】

「俺もだ。どうする？」

【赤明】

「そうね、それなら資料室には私1人で行くわ」

【陽】

「俺達はどつするんだよ？」

【赤明】

「学園の案内でもすればいいでしょ。那美の事は任せるわね」

【陽】

「おいおい」

【赤明】

「それじゃ、また後で会いましょ」

赤明は1人で勝手に決めてしまうと、校舎に向かってずんずんと歩いて行った。

呆気にとられたまま、那美と2人で取り残されてしまう。

【陽】

「……………」

【那美】

「……………どうしよう?」

【陽】

「取り合えず、色々見て回るか?」

【那美】

「あ、うん」

【陽】

「どこか行きたい場所はあるか? あるなら案内するけど」

【那美】

「どこでもいいの?」

【陽】

「よっぽど無茶な場所じゃなければな」

【那美】

「んーと、それなら私、陽君の教室に行ってみたいかな」

【陽】

「教室? 本当にそれでいいのか?」

【那美】

「うん。そこがいいの」

教室なんてどこの学校でも似たような物で、珍しくも無いと思うけど、

那美が見たいって言うならそれでいいか。

【陽】

「それじゃ、行くか」

【那美】

「うんっ」

<学園 2年教室>

教室の扉を開けて、中に滑り込む。

何とか誰にも見つからずに辿り着けたみたいだ。

【陽】

「ここが俺の教室だ。2年生のメンバーはみんな同じクラスなんだけどな」

【那美】

「そっか。みんな、ここで一緒に勉強してるんだね」

那美は興味深そうに教室を見回している。

【那美】

「ねえ、陽君の席ってどこ？」

【陽】

「ん？　そこだけど」

自分の席を指差して那美に教える。

那美は俺の席に近づいて、机をそつと撫でた。

【那美】

「ここが陽君の席なんだ。ねえ、陽君。座って？」

【陽】

「何で？」

【那美】

「いいから、いいから。お願い」

【陽】

「まあいいけど」

何か断る理由があるわけでも無い。

俺はすっかり慣れた自分の席に座る。

【陽】

「座ったけど」

【那美】

「うん。それじゃ、お邪魔します」

那美が隣の席に座る。

厳しい先生の授業の時みたいに、背筋をしっかりと伸ばして前を向いていた。

いつも制服姿のクラスメイト達がいる教室に、私服で2人きりでいるのは、何か変な感じだ。

【那美】

「こうしてると、クラスメイトになったみたいだね」

【陽】

「ああ、そつだね」

【那美】

「こんな風に、一緒に勉強とか、してみたかったな……」

悲しげに、那美が呟く。

【陽】

「それなら、転校でもしてみたらどうだ？」

【那美】

「うん、そつだね。そう出来たらいいのに、ね」

本当に、出来たらいいのに。

だからこれは、出来ない話だ。

それなら、せめて今だけでも。

【陽】

「なあ那美、今日の数学の宿題やったか？」

【那美】

「え？ 何？」

那美が不思議そうな顔になる。

ちよつと唐突過ぎたか。

【陽】

「いや、クラスメイトっぽい会話してみようと思って」

【那美】

「陽君……」

那美が一瞬だけ泣きそうな表情を浮かべて、

でも、最後には笑ってくれた。

【那美】

「それじゃあ、お話ししてくれるかな？」

【陽】

「ああ」

どうでもいいような小さな話題で、話を始める。

俺と『クラスメイトの那美』との会話は、ホース発見の連絡が届くまで続いた。

六月十三日(その2) (前書き)

この後、変則的な選択肢が出ます。
面倒ですが、そこに書いてある指示に従って読み進めてください。

六月十三日(その2)

< 神社 神殿 >

学園でのホース探しを終えて、俺達は神社に戻って来ていた。

行く前はみんな好き勝手な事をしていたが、今は揃って輪になって座っている。

【赤明】

「そういう訳で、ホースは先輩が見つけてくれました」

【橙歌】

「おー」

パチパチと何故か拍手が上がる。

緑璃先輩の見つけたホースはぐるぐる巻きになって部屋の隅に置いてある。

【緑璃】

「あはは、どうもどうも」

【那美】

「これで、本当に準備が完了したね」

【紫苑】

「そうですね」

準備完了も何も、やった準備なんて本を読んだのとホースを探した位なだけだな。

【黄牙】

「なーんか一段落しちまったなあ」

【赤明】

「そうね。ー安心と言つところかしら」

【藍叉】

『これからどうするの?』

【那美】

「んー、せつかくみんながいるんだから、みんなのできる事がいいね」

【橙歌】

「じゃあ、これする?」

橙歌が置いてあつたトランプを掲げる。

【赤明】

「そうね。いいんじゃないかしら」

【黄牙】

「またトランプかよ。俺らさっきもやったじゃねえか」

【陽】

「いいだろ、別に」

ずっとやってた訳でもないんだから。

【橙歌】

「えー、またトランプやるの？」

【赤明】

「発案者が何言ってるのよ」

【緑璃】

「それじゃあ、トランプを使ってトランプじゃないゲームにしようか」

【橙歌】

「え、何それ？ やるやる！」

【緑璃】

「みんなもそれでいい？」

先輩の確認にみんなが賛成し、決定となった。

【緑璃】

「準備しちゃうから、ちょっと待っててね」

先輩が準備したのは、人数と同じ枚数のトランプ。

そして、何故か橙歌が放り出していたハリセン。

【緑璃】

「はい、準備完了。説明するね」

【緑璃】

「まずは、みんなもうちょっと近づいてね」

みんなが近づきあって、小さな円になる。

俺から右回りに、黄牙、風見、赤明、橙歌、紫苑、緑璃先輩、那美の順だ。

【緑璃】

「はい、良く出来ました」

先輩の両隣の2人が先輩に頭を撫でられている。

【紫苑】

「もういいですから、早く説明してください」

【緑璃】

「あ、うん。最初にトランプを配るね」

1人に1枚ずつトランプが配られる。

【赤明】

「先輩、これ見てもいいんですか？」

【緑璃】

「いいよ。でも、他の人には見せないでね」

みんなが一斉に手元のトランプを確認する。

俺のカードは、ダイヤの3だ。

【緑璃】

「えっとね、ジョーカーの人とスペードの1の人には役があるの。ジョーカーの人は犯人、スペードの人は共犯者だよ」

【那美】

「その人は何をするの？」

【緑璃】

「まず、ゲームが始まったらみんな目を閉じててね。そうしたら、動いていいのは犯人と共犯者だけ」

【緑璃】

「犯人の人と共犯者の人は、2人で相談して、共犯者の人が指示した人を犯人の人が叩くの」

これを使ってね、と円の真ん中にハリセンが置かれる。

【緑璃】

「犯人と共犯者が元の位置に戻ったら目を開けて、今度は叩かれた人が探偵になるんだよ」

【緑璃】

「探偵の人は、『隣の人は動いたかどうか』3回聞いて犯人を推理するの。」

そして、犯人だと思う人を、叩き返す！」

【橙歌】

「犯人がわからなかったらどうするのさ？」

【藍叉】

『犯人と共犯者も見分けられない』

【緑璃】

「分からないときは、勘で叩いちゃってね。犯人と共犯者は、運だよ」

上手く特定できても、最後には運が絡んでくるのか。

【緑璃】

「そして、正解だったらお終いだけど、間違ってた時は罰ゲームでその人に叩かれて終わりだよ。

共犯者の時も同じ。みんな、分かった？」

わかったー、とかはいい、とか返事が上がる。

【緑璃】

「それじゃ、みんな目を閉じて」

【緑璃】

「ゲーム、スタート！」

先輩の号令からしばらくして、誰かの動き出した音が聞こえてきた。

俺の両隣は動いていない。

この時点で、黄牙と那美は犯人でも共犯者でも無いって事になる。

視界が閉ざされているせいで、犯人の動く音がやけに大きく聞こえて、

スパーン！

【黄牙】

「うおっ」

ハリセンのいい音と黄牙の声が上がった。

叩かれたのは黄牙か。

また、畳の上を動く音がして、離れて行く。

【緑璃】

「もういいよね？ みんな、目を開けて」

先輩の声に従って目を開く。

ハリセンは元通りの位置に置かれていて、みんな何事も無かったかのような顔をしている。

【陽】

「叩かれたのは、黄牙か？」

【黄牙】

「おっ」

【赤明】

「それじゃ、大陣君の推理を見せてもらおうかしら？」

【黄牙】

「まかせろ。ぜってー当ててやるよ」

黄牙は威勢よく立ち上がり、ハリセンを手に取る。

俺達の顔をぐるりと見回し、

【黄牙】

「橙歌！ お前の隣は動いたか？」

【橙歌】

「動いてないよ」

最初に聞かれた橙歌の答えは否定。

これで、赤明と紫苑が除外か。

【黄牙】

「先輩はどうなんだ？」

【緑璃】

「動かなかったよ」

【黄牙】

「げ、マジかよ」

これでさらに那美が除外される。

自分の隣が動いたかどうかは分かるだろうから、藍叉も違っただろ

う。

となると、残ったのは、質問をした橙歌と先輩。

黄牙は、げ、なんて言ったが、否定されたおかげで、逆に特定できている。

【黄牙】

「じゃ南雲！ お前の隣は動いたか？」

【陽】

「は？」

何を今更聞いてるんだ？

紫苑の隣は橙歌と先輩なんだから、動いたのに決まってるだろ。

【紫苑】

「動きましたけど？」

【黄牙】

「って事は、橙歌が先輩のどっちかが犯人か共犯者って事か……」

【陽】

「気づいてなかったのか……」

【黄牙】

「ん？」

【陽】

「いや、何でもない」

【黄牙】
「そうか。くそっ、分からねえな……」

【陽】
「もう勘で行くしかないだろ？」

【黄牙】
「そうだよなあ。しゃあねえか」

黄牙は橙歌の前に歩いて行って、ハリセンを構える。

【黄牙】
「犯人は、お前だあ！」

バシッ。

【橙歌】
「あいたあつ。黄牙！ 力入れすぎだよ！」

【黄牙】
「あー悪い悪い。で、お前が犯人でいいのか？」

【橙歌】
「全然悪いって思って無いじゃん……」

頬を膨らませて文句を言いながら、橙歌がトランプを見せる。

【黄牙】

「スペードの1だ」

【赤明】

「と言う事は、橙歌は共犯者ね」

【橙歌】

「残念でしたー。黄牙は罰ゲームだね！」

橙歌は黄牙の手からハリセンを引ったくり、黄牙の頭を叩いた。

【黄牙】

「くっそお。犯人は誰だよ」

【陽】

「誰って、橙歌じゃなかったんなら先輩だろ」

【緑璃】

「ピンポーン。私が犯人でしたー」

先輩が見せてくれたカードは、予想通りのジョーカーだった。

【黄牙】

「あー、くそ。もう1回だ！」

と言う事で第2回戦。

配られたカードはハートのクイーン。

……また役無しか。

【緑璃】

「それじゃあ目を閉じて、ゲームスタートだよ」

犯人と共犯者の動く音がする。

そして、

パシーン！

【陽】

「つつ」

俺の頭を衝撃が襲った。

そんなに痛くは無いけど、不意に叩かれると結構驚くな。

犯人達が元の位置に戻るのを待って、推理パートに移行する。

【橙歌】

「誰が叩かれたの？」

【陽】

「ん、俺だよ」

【橙歌】

「そっか、今度は陽だったんだ」

【陽】

「まあな」

さて、と。

一同の顔を見回す。

俺の両隣は動かなかつたから、黄牙と那美は除外される。

叩かれた人を確認した橙歌は、普通に考えると目を閉じていた方に分類されるけど、

もしかするとそれを逆手にとつた罠かもしれない。

……橙歌はそこまで考えて言うようなタイプじゃないとは思っただけだな。

取り合えず、質問をしていくか。

最初は隣接する人に両方可能性のある人に聞くとしよう。

<選択肢>

- ・赤明に質問する
- ・橙歌に質問する
- ・紫苑に質問する

六月十三日（選択肢）（前書き）

質問したキャラのところの文章を読んで、一度一番下へ。

その後、二度目の質問をするキャラのところを読み直してください。

六月十三日（選択肢）

- ・赤明に質問する（6 - 1 3 - 2 から）

【陽】

「赤明、隣のどっちかが動いたか？」

【赤明】

「ええ、動いたわ」

【陽】

「ん、そうか」

となると、橙歌か藍叉、もしくは両方が動いたって事だな。

それを踏まえた上で、次に聞くべきなのは

< 選択肢 >

- ・那美
- ・緑璃
- ・紫苑
- ・橙歌
- ・藍叉
- ・黄牙

・橙歌に質問する（6 - 1 3 - 2から）

【陽】

「橙歌、隣は動いたか？」

【橙歌】

「うん、動いたよ」

【陽】

「ん、そうか」

となると、紫苑か赤明、もしくは両方が動いたって事だな。

それを踏まえた上で、次に聞くべきなのは

<選択肢>

・那美

・緑璃

・紫苑

・赤明

・藍叉

・黄牙

・紫苑に質問する（6 - 1 3 - 2から）

【陽】

「紫苑、隣のどっちかが動かなかったか？」

【紫苑】

「はい、動きませんでした」

【陽】

「ん、そうか」

これで橙歌と緑璃先輩は除外だな

それを踏まえた上で、次に聞くべきなのは

<選択肢>

・那美

・緑璃

・橙歌

・赤明

・藍叉

・黄牙

(下へ)

・那美

【陽】

「那美の隣は動いたか？」

【那美】

「私の隣の人は動いてないよ」

【陽】

「そうか」

これで、緑璃先輩が除外されたな。

・緑璃

【陽】

「先輩はどうですか？」

【緑璃】

「私の隣の人は、動いたよ」

【陽】

「そうですか」

先輩の右隣の那美は俺の隣だから除外されている。

と言う事は、左隣の紫苑が犯人か共犯者のどちらかだ。

・紫苑

【陽】

「紫苑、お前の隣は動いたか？」

【紫苑】

「動かなかったです」

【陽】

「そうか」

と言う事は緑璃先輩と橙歌はシロだな。

・赤明

【陽】

「赤明、隣は動いたか？」

【赤明】

「ええ、動いたわ」

【陽】

「そうか」

となると、橙歌が藍叉、もしくは両方が動いたって事だな。

・橙歌

【陽】

「橙歌、お前の隣は動いたか？」

【橙歌】

「うん、動いたよ」

【陽】

「動いたのか」

つまり、紫苑か赤明のどちらか、もしくは両方に可能性があるって事か。

・藍叉

【陽】

「風見、お前の隣は動いたか？」

質問すると、風見は首を横に振った。

【陽】

「動かなかつたんだな？」

【藍叉】

「ヤー」

となると、黄牙と赤明はシロか。

・黄牙

【陽】

「黄牙、お前の隣は動いたか？」

【黄牙】

「いや、動かなかつたぜ」

【陽】

「ホントか？」

【黄牙】

「何だよ？」

【陽】

「動いたのに気づいてないとか無いよな？」

【黄牙】

「あるわけねえだろ！」

【陽】

「それならいいんだけど」

これで風見が除外されたか。

(上記選択肢後)

じゃあ、最後に聞くのは

<選択肢>

・那美

・緑璃

・紫苑

・橙歌

・藍叉

・黄牙

・赤明

(質問したキャラは除く)

(選択肢後は上記をもう一度繰り返す)

六月十三日(その3)

今までの質問で大体絞れたけど、最後には運って所がプレイヤーに優しくないゲームだな。

【陽】

「よし、決めた」

真ん中においてあったハリセンを拾う。

俺の推理と勘によれば、犯人は

<選択肢>

- ・ 緑璃先輩だ
- ・ 紫苑だ
- ・ 橙歌だ
- ・ 赤明だ
- ・ 風見だ

(下へ)

- ・ 緑璃先輩だ

【陽】

「犯人は、緑璃先輩ですね」

ハリセンを構え、

思いつきりやる訳にも行かないから、軽く叩く。

【緑璃】

「あ、ちゃんと気遣ってくれたんだ。いい子だね」

撫で撫でされた。

【陽】

「えーと、合ってたんですか？」

【緑璃】

「ううん、ハズレー」

見せてくれたカードは何の役でもなかった。

運どころか、推理の段階で間違ってたのか……

【緑璃】

「それじゃあ、罰ゲームだね」

【陽】

「あ、はい」

ハリセンを先輩に渡す。

【緑璃】

「いくよー」

スパーンっ！

【陽】

「あいたあっ」

割と容赦なく叩かれてしまった。

・紫苑だ

【陽】

「犯人は紫苑、お前だ」

ペシ、と頭を叩く。

【紫苑】

「先輩。惜しかったですね」

【陽】

「え？」

【紫苑】

「私は共犯者です」

表になったトランプはスペードの1。

うーん、外したか……

【陽】

「罰ゲーム？」

【紫苑】

「罰ゲームですね」

ハリセンを渡す。

【紫苑】

「では、行きます」

紫苑はハリセンを振り上げ、

スパーンっ！

容赦無く振り下ろしたのだった。

・橙歌だ

【陽】

「橙歌。お前が犯人だ！」

バシっ。

【橙歌】

「あいたっ」

【陽】

「合ってたか？」

【橙歌】

「……ってない」

【陽】

「ん？」

【橙歌】

「合ってないっ！ 何で黄牙も陽も僕を犯人にしたがるかなあっ」

橙歌が俺の手からハリセンをひったくる。

【橙歌】

「罰ゲーム！」

バシっ。

【橙歌】

「罰ゲーム罰ゲーム罰ゲーム、罰ゲーム！」

バシバシバシ、バシっ！

【陽】

「いた、痛い痛い痛いつて！」

【橙歌】

「罰ゲーームーームーー！」

【陽】

「いってええええつ！！！」

・赤明だ

【陽】

「犯人は、赤明。お前だ！」

「ハリセンを振り上げ、

【赤明】

「違うわよ」

【陽】

「え……」

叩く前から答えられても……

ていうか、間違ってたのか。

【赤明】
「あ……」

失敗に気がついた赤明が口を押さえるが、もう遅過ぎる。

【陽】
「どうするんだよ……」

主にこの行き場を失ったハリセンとか。

【赤明】
「えっと、叩く？」

【陽】
「……いいよ。間違ってるんだろ」

【赤明】
「え、ええ。
それじゃあ、罰ゲームもなしにしましょ」

【陽】
「そ、そうだな」

何と言うか、グダグダだった。

・風見だ

【陽】

「犯人は、お前だ」

バシ。

【藍叉】

『バレた』

【陽】

「お、正解か？」

【藍叉】

『ヤー』

不満そうな顔をしながらも、見せてくれたカードはジョーカー。

紛れも無く犯人の証拠だった。

しかし、このゲーム。

犯人に協力しておいてリスク皆無の共犯者が一番悪い気がするの
は俺だけだろうか。

六月十三日(その4)

俺の推理が終わり、そのまま3回目に入ります。

配られたトランプを確認する。

手元のカードはスペードの1。

今回は共犯者が。

【緑璃】

「じゃあ始めるよ。ゲーム、スタート」

開始の合図で、目を開く。

みんなが目を閉じて並んでる光景が結構微妙だ。

その空間で動いていると、何か間違っている事をしている気がする。
てくる。

何と言っか、全校集会の時に1人だけ違う事をしているみたいな。

「取り合えず立ち上がる、と、隣に座っていた那美も立ち上がって
いた。」

【陽】

「犯人か？」

小声で聞くと、那美が頷いた。

【陽】

「ほら、これ」

【那美】

「あ、ありがとう」

ハリセンを拾って那美に渡す。

【那美】

「陽君、誰にするのかな？」

【陽】

「ん、そうだな……」

動いたのがわかるだろうから、俺と那美の隣は駄目だろう。

となると、紫苑、橙歌、赤明、藍叉の誰かなんだけど……

見回してみる。

当たり前だが、みんな目を閉じていて無防備極まりない。

……この状況で女の子を選ぶってのはなあ。

ん、もしかしてそれで黄牙、俺って叩かれたのか？

【那美】

「陽君？」

【陽】

「ん、そうだな……」

もう、仕方ない！

黄牙を指差す。

【那美】

「いいの？」

黄牙は俺の隣だ。

自分が『犯行』に関わっていると云うようなものだけど……

【陽】

「構わない」

【那美】

「うん。わかった」

那美が黄牙の前まで歩いて行き、振り下ろす。

スパーン！

【黄牙】

「また俺かよ！」

黄牙の文句を聞きながら、

またどころじゃなくこの先何度も叩かれるんだろつと思った。

< 神社 境内 >

8割方俺と黄牙が叩かれた推理ゲーム（と命名された）に興じている間に、夏の日も落ちかけていた。

いつものように、石段の上で那美と別れる。

【黄牙】

「じゃあな」

【赤明】

「さようなら」

【紫苑】

「失礼します」

【緑璃】

「またね」

【藍叉】

『さよなら』

【橙歌】

「バイバイ」

口々に別れを告げて、みんなが帰って行く。

【陽】
「それじゃ、俺も帰るよ」

那美に別れを告げて、石段を下り始める。

【那美】
「陽君！」

【陽】
「どうした？」

【那美】
「また、明日ね」

【陽】
「ああ、また明日」

ゆっくりと石段を下る。

また、明日。

この言葉を言えるのは、今日で最後かもしれない。

虹を架けた後、また、あそこで那美に会えるのかどうかわからなかった。

石段の下に辿り着いて神社を見上げる。

那美は、まだそこに立っていた。

【陽】

「那美ー！ また明日なー！」

手を振りながら大声で言うと、

那美も、俺に見えるように大きく手を振り返してくれた。

<学生寮 食堂>

学生寮で最も娯楽があるのは各々の部屋だろう。

テレビやゲーム、パソコン等、基本的に何でも持ち込む事が出来る。

そして、その次に娯楽があるのが、ここ、食堂だ。

テレビが3台あるだけだが、他に人が集まる場所が無いだけに、いつも結構な人の溜まり場になっている。

そう言う俺も、部屋で暇を持て余してここを訪れたのだ。

誰かいるかな。

【陽】

「お、発見」

食堂のテーブルに、風見が座っている。

一人で何かしているみたいだけど。

行ってみるか。

【陽】

「風見、ちょっといいか？」

声をかけると、風見が手を止めて顔を上げる。

テーブルの上には、ティッシュや折り紙、はさみやペンやテープが転がっていた。

【藍叉】

『こんばんは』

【陽】

「こんばんは。で、何してるんだ？」

【藍叉】

『作ってる』

【陽】

「何を？」

【藍叉】

『これ』

風見がテーブルの上に置いたのは、ティッシュを包んだ白い布。

【陽】

「てるてるぼうず？」

風見がこくと頷く。

【陽】

「そう言えば、先週は雨だったもんな」

晴れてたとしても、色々と準備不足で失敗したかもしれないけど。

【藍叉】

『明日は晴れますようにって』

【陽】

「なるほどね」

てるてるぼうずを手にとって見る。

【陽】

「上手いな」

頭と体のバランスが絶妙だった。

【藍叉】

『まだ完成してない 返して』

【陽】

「そうなのか？」

【藍叉】

『ヤー』

【陽】

「じゃあ、はい」

風見にてるてるぼつずを返す。

風見は、オレンジ色の折り紙を切って頭に貼り付け、ペンで目を書き込む。

【藍叉】

『できた』

はい、と手渡される。

オレンジ色のショートヘアのてるてるぼつず。

むしろ簡単な人形と言う感じだ。

【陽】

「これは……橙歌？」

【藍叉】

『ヤー』

【陽】

「面白いな、これ。他のみんなの分も作るのか？」

【藍叉】

『そのつもり』

【陽】

「俺も一緒にやって良いか？」

【藍叉】

『助手 する？』

【陽】

「いいか？」

【藍叉】

『ヤー』

風見の助手になって作業を始めた。

紙を切ったり、貼ったりして、アルカンシエルメンバーを模した
てるてるぼつずを作っていく。

【藍叉】

『できた』

【陽】

「黄牙だな」

.....

【藍叉】

『できた』

【陽】

「緑璃先輩だな」

.....

【藍叉】

『できた』

【陽】

「赤明だな」

.....

【藍叉】

『できた』

【陽】

「那美、じゃないな、紫苑か」

【藍叉】

『ヤー』

.....

【藍叉】

『できた』

【陽】

「今度こそ那美だな」

.....

【藍叉】
『陽』

【陽】
「あ、俺か」

【藍叉】
『そっくり』

【陽】
「そっか？」

自分の顔ってあんまり意識しないから、良くわからないけど。

まあ、風見がそう言うならそうなんだろう。

……

【藍叉】
『できた』

【陽】
「お、風見だな」

【藍叉】
「……………」

【陽】
「風見？」

なぜか不満そうな顔をされてしまった。

【陽】

「どうした？」

【藍叉】

『陽 これは何？』

てるてるぼうずの1体を指差す。

【陽】

「赤明だろ？」

【藍叉】

『こっちは？』

【陽】

「紫苑」

【藍叉】

『こっちは？』

【陽】

「緑璃先輩」

【藍叉】

『陽 これは？』

【陽】

「風見だよな？」

【藍叉】

「はぁ……」

今度は溜息付きで不満を表現された。

【陽】

「何なんだよ？」

【藍叉】

『仲間ハズレみたいで や』

仲間外れ？

【陽】

「何がだ？」

【藍叉】

『私だけ名字 みんな名前なのに』

【陽】

「ああ、確かに」

言われてみればそうだな。

変える機会が無かったから何となく名字で呼び続けてたんだけど。

【陽】

「えーと、名前で呼んだ方がいいのか？」

【藍叉】
『そっちがいい』

【陽】
「じゃあ、これからはそう呼ぶよ」

【藍叉】
『そう呼んで』

風見、もとい、藍叉が頷く。

【陽】
「……………」

【藍叉】
「……………」

【陽】
「……………」

【藍叉】
「……………」

【藍叉】
『呼んで』

【陽】
「今、か？」

【藍叉】

『ヤー 今すぐに』

【陽】

「お、おう」

何か凄い期待に満ちた目で見られてるな……。

【陽】

「じゃあ、呼ぶぞ」

【藍叉】

『呼んで』

何か改まると妙に照れるな……

【藍叉】

『早く』

【陽】

「あ、藍叉っ」

はい、と口の動きで返事をされた。

【陽】

「これでいいだろ？」

【藍叉】

「……………」

【陽】

「どうした？」

【藍叉】

『何だか 恥ずかしい』

【陽】

「んなっ」

お前にまで照れられたら、こっちも困るって。

【陽】

「……………」

【藍叉】

「……………」

き、気まずい……………」

【陽】

「……………あっ」

【藍叉】

『何？』

【陽】

「このてるてるぼっず、みんなに配らないか？」

黄牙には俺が渡しておくからさ、女子メンバーの分配ってくれよ」

藍叉がこくこくと頷く。

【陽】

「それじゃあ、持って行くな」

自分の分と黄牙のてるてるぼうずを手取る。

【藍叉】

『那美の分も持って行って』

【陽】

「ああ、わかった」

那美の分を受け取る。

【陽】

「それじゃ、お休み」

【藍叉】

『お休みなさい』

<学生寮 213号室>

黄牙にてるてるぼうずを渡してから、自分の部屋に戻った。

自分のと那美のてるてるぼうずをカーテンレールに吊るす。

【陽】

「何か、首吊ってるみたいだな……」

天気以前に縁起が悪すぎる。

机の上に置いたのでいいか。

【陽】

「明日、天気になりますように」

このてるてるぼつずをお願いして、ベッドに入る。

今日はもう寝よう。

六月十四日

< 6月14日(日) >

< 学生寮 213号室 >

目を覚ますと、朝の日差しが部屋に差し込んでいた。

カーテンを開いて空を見上げる。

雲ひとつ無い、とまでは言わないが、いい天気だ。

絶好の虹日和。

あのとるてるぼうずが効いたのかもな。

< 学生寮 食堂 >

身支度を整えて食堂へ向かう。

【橙歌】

「あ、陽だ。やっほー」

【陽】

「ん？ 橙歌？」

食堂に入った瞬間に、橙歌に声をかけられた。

朝食を受け取って、橙歌の座っている席に向かう。

【橙歌】

「おはよ」

【陽】

「おはよう。お前が最初か？」

【橙歌】

「そだよ」

【陽】

「そりゃ珍しい事だな」

橙歌は基本的に起きて来るのが遅い。

俺が黄牙を起こすのと同じくらいの頻度で赤明に起こされているはずだ。

こいつが1番乗りって言うのは珍しい。

【橙歌】

「楽しみだったから、早く目が覚めちゃって」

【陽】

「遠足当日の小学生かよ。まさか、昨日の夜は中々寝られなかったとか言わないよな？」

【橙歌】

「……いーじゃんか」

寝られなかったのか……

……

やがて、次々にメンバーが集まり、いつの間にか学園メンバーが勢揃いしていた。

【緑璃】

「みんな、今日は随分早かったんだね」

【赤明】

「そうですね。平日もこの位きちんと起きてくれたらいいんですけど」

【橙歌】

「それって、僕に言ってる？」

【赤明】

「あら、自覚はあるのね」

【橙歌】

「むー」

橙歌が不満そうに頬を膨らませて唸る。

【黄牙】

「全く、しかたねえ奴だな」

【陽】

「他人事みたいに言ってるけど、お前もだからな」

【黄牙】

「お、おう、悪い」

【陽】

「本当に悪いと思ってるのか？」

【紫苑】

「大陣先輩と時雨先輩は寝起きが悪いんですか？」

【陽】

「割と遅刻魔だな」

【赤明】

「そうね。私達が起こさなかったらどうなる事やら」

【紫苑】

「私、わからないんですけど。朝ってそんなに起きられないものですか？」

【橙歌】

「起きられるよ。起きられるけど……二度寝しちゃうんだもん」

【緑璃】

「うんうん、わかるよ。二度寝は気持ちいいよねー」

【橙歌】

「ねー」

【赤明】

「それでも先輩はちゃんと起きてるのよ。見習いなさい」

【橙歌】

「……はい」

【緑璃】

「お姉ちゃんとしては、みんなのお手本にならなくちゃだからね」

【藍叉】

『黄牙は？』

【黄牙】

「ん、俺か？俺は起きられねえ」

【陽】

「起きる努力すら放棄してるからな」

【紫苑】

「どつという事ですか？」

【陽】

「こいつ、目覚ましすらかけてないんだ」

【黄牙】

「つつせ、起きられる時はそれでも起きられるんだよ」

【藍叉】

『起きられないときは？』

【黄牙】

「陽が起こしに来るからな」

【紫苑】

「ほとんど起きるつもりが無いんじゃないですか……信じられませ
ん。

そんなのでいいんですか、先輩？」

【陽】

「もう慣れたよ」

こいつとの付き合いもそれなりだし。

出会った瞬間から迷惑かけられてたからな。

【陽】

「ま、そんな事は置いておいて、今日はどうする？」

【赤明】

「虹を架けるのは4時頃だから、昨日みたいに午後に集まったので
もいいとは思っけど」

【橙歌】

「えー。朝から集まって、先週みたいにパーティにしようよ」

【緑璃】

「うーん、陽君、どうしよっ？」

【陽】

「何で俺に振るんですか？」

【緑璃】

「あれ？ アルカンシエルのリーダーって陽君じゃなかったの？」

【陽】

「那美だと思いますけど」

そもそも、リーダーなんてわざわざ決めてないけれど。

なるとすれば発案者の那美だろう。

【緑璃】

「それじゃあ、嶺明学園のリーダーが陽君って事で」

【陽】

「はあ」

なぜか、アルカンシエルの分隊長に任命されてしまった。

【緑璃】

「それで、どうする？」

【陽】

「そうですね、民主主義に則って、多数決って事で」

そして、多数決の結果、橙歌の案が採用される事になった。

【陽】

「じゃ、10時に商店街の入り口で。那美には」

【赤明】

「私が連絡しておくわ」

【陽】

「ん、わかった。それじゃあ、また後で」

<商店街>

約束の時間になった。

学園メンバーは全員揃っているが、那美がまだ来ていない。

【陽】

「赤明、連絡は？」

【赤明】

「ちゃんとしたわよ。返事も返って来てるわ」

【陽】

「じゃあ、単に遅れてるだけか」

【赤明】

「そうだと思うけど」

【橙歌】

「気になるんだったら迎えに行ったら？」

【陽】

「そんなに気にする事でも無い……いや、待てよ……」

どうも那美は携帯に不慣れな感じが抜けないからなあ。

情報の伝達が妙な事になってる可能性が捨てきれないか。

【陽】

「一応行ってみるか」

神社までは基本的に一本道だし、こっちに来てたとしてもすれ違
いにはならないだろう。

俺は、みんなを置いて、神社へと向かった。

<神社 石段>

【陽】

「あ、いたな」

那美は、階段の下でしゃがんでいた。

手元に、白いような灰色のような塊が見え隠れしている。

【陽】

「あれは……」

前より綺麗になってるけど、もしかして前に見かけた犬か？

先輩はもう死にかけてるって言ってたけど、結構元気そうに見えるな。

那美が連れて行った後で、元気になったんだろっか。

【那美】

「もう、付いて来たら駄目なのに」

那美は俺には気づいていないようで、犬を追い返そうとしているようだった。

【那美】

「駄目だよ、今はまだ」

【那美】

「あなたの願いは、ちゃんと叶えてあげるから。いい子で待ってて」

那美が諭すように言つと、その言葉を理解したように犬はその場から去って行った。

やっぱり、元々は誰かに飼われていたのかもしれない。

【那美】

「遅くなったなー。早く商店街に行かないと……あれ？」

那美が立ち上がって後ろを向き、やっと俺に気がついた。

慌てて駆け寄って来る。

【那美】

「陽君、どうしたの？」

【陽】

「時間になっても来ないから、見に来たんだ」

【那美】

「あ、ごめんね。ここであの子に会ったから」

【陽】

「あれって、やっぱりあの時の？」

【那美】

「うん。そうだよ」

【陽】

「随分と元気になってたみたいに見えたけど、先輩の見立てが間違ってたのか？」

【那美】

「うっん、緑璃は間違ってるよ。あの子はそんなに長く生きられない。」

今は、蠟燭の最後の一瞬みたいなものなんだよ」

【陽】

「でも、それなら、あんなに動き回らせない方がいいんじゃないのか？」

【那美】

「もう後が無いから、残った全部の力を使って、やりたい事がある

んだよ。

人も動物も、それは同じ。だから、好きにさせてあげたいの」

【陽】

「……そうか」

燃え尽きる前の、最後の煌き。

あの犬は、その一瞬に何を望んでいるんだろう。

【那美】

「陽君？ 行かないの？」

那美の声で、思考に囚われていた意識を呼び戻された。

【陽】

「ん？ ああ、悪い。今行くよ」

俺と那美は、一緒に商店街へと向かった。

<商店街>

【陽】

「ただいま」

【那美】

「ごめんね、お待たせ」

【橙歌】

「あ、来た来た。そりゃ！」

【那美】

「きゃっ」

橙歌の手元で何かが光った。

【橙歌】

「ツーショット頂きー」

橙歌が握っていたのは、インスタントカメラだった。

【陽】

「また、古めかしい物を……」

久しぶりに見たぞ、そんなの。

デジカメや携帯のカメラが主流になってるこの時代に珍しい。

【陽】

「どうしたんだ、それ」

【橙歌】

「先輩が見つ付けてきたんだよ」

【緑璃】

「虹を架けたら、みんなで記念撮影しようね」

【陽】

「あ、いいですね」

なんて話している横で、橙歌がシャッターを切りまくっている。

【陽】

「あれは、いいんですかね……」

【緑璃】

「あはは……。橙歌ちゃん、記念撮影の分は残しておいてね」

【橙歌】

「えーと、一枚？」

【陽】

「少ないわ！」

こいつに持たせておいて大丈夫なのか。

激しく不安だ……

<神社 神殿>

【緑璃】

「はい、いただきます」

【みんな】

「いただきますーす」

商店街で買い込んだ食材で昼食会を開き、

【黄牙】

「犯人は、お前だ！」

【赤明】

「外れよ」

【黄牙】

「またかよ！」

みんなでもう1度推理ゲームをして、

【藍叉】

『撮るよー』

カシヤッ

【橙歌】

「あ、次僕ね。貸してー」

【陽】

「こら！ 本当に後1枚しか残ってないじゃないか！」

カメラを渡しながら写真に撮りまくり、

そして、いつしか太陽はその高度をぐっと下げていた。

< 神社 裏 >

【緑璃】

「いよいよ、だね」

【陽】

「はい」

夕暮れより、少しだけ早い時間。

初めて那美に出会った場所に、今はアルカンシエルのメンバーがいる。

純粹に楽しそうな顔、不安そうな顔、思い思いの表情で佇んでいた。

【陽】

「っつ」

ポケットの中の携帯が震える。

From: 大陣 黄牙

Subject: 無題

準備完了

ホースを繋ぎに行った黄牙からの連絡だった。

よし。

【陽】

「那美、準備できたぞ」

【那美】

「あ、うん。じゃあ、始めようか」

那美がホースの先端を手に持つ。

【陽】

「ホースを持ちたい奴は今のうちだぞ」

【橙歌】

「あ、僕も僕も！」

橙歌が那美と一緒に先端を握り、

【藍叉】

『私も』

【緑璃】

「私も入っちゃうね」

その後ろを藍叉と先輩が持つ。

【橙歌】

「赤明も来なよ」

【赤明】

「私も？」

【橙歌】

「ほら、早く早く」

【赤明】

「わかったわよ」

俺の方をチラッと見て、赤明が続く。

俺にも来いつてか。

となると、

【陽】

「紫苑！ 俺達も行こう」

【紫苑】

「え、私は別に」

【陽】

「みんなやってるんだから遠慮しない」

少々強引だが、紫苑の手を引っ張って最後尾に付く。

【紫苑】

「もう、強引なんですから……」

【陽】

「ちゃんと持ったな。じゃ、こっちは準備よし、と」

黄牙にメールを送る。

少し待っていると、黄牙が境内から走って来た。

【黄牙】

「水を出したぞ！」

【那美】

「うん。ご苦労様」

【陽】

「ほら、お前も持てよ」

【黄牙】

「おう」

黄牙が俺の後ろでホースを握る。

1本のホースに、8人の人間が群がってるって、

傍から見ると、何やってるのか分からない謎の集団だな。

【緑璃】

「なんだか、大きなかぶ、みたいだね」

先輩に言われて、有名な絵本の1ページを思い出す。

1人で抜けないほど大きなかぶを、みんなで抜く話だ。

【橙歌】

「あ、ホントだ」

【赤明】

「似てるからって、ホースを抜かないでよ」

【橙歌】

「わかってるよ」

【黄牙】

「お、冷たくなったぞ」

【陽】

「ん、確かに」

ホースの中を水が流れて行き、先端から溢れ出す。

【那美】

「あ、出てきた」

これで、全ての準備が整った。

【陽】

「那美」

那美を呼べば、頷きが返って来た。

【那美】

「それじゃ、行くよ」

ホースを持ち上げて先端を押しつぶす。

霧状になった水が、辺りにぱあっと散った。

そして

わあ、と声を上げたのは誰だろう。

誰か1人かもしれないし、もしかしたらみんなかもしれない。

水の粒がきらきらと輝き、その中に鮮やかな色彩が現れた。

赤。

橙。

黄。

緑。

青。

藍。

紫。

7色の虹が、空に見事なアーチを描いていた。

【紫苑】

「凄い……」

【赤明】

「虹って、こんなに綺麗だったのね……」

【藍叉】

『こんなの 初めて見た』

今まで見た事のある虹が、まるで偽物だと言つ様な、圧倒的な光景だった。

【橙歌】

「うわぁ、凄い、凄いなっ」

真っ先に橙歌がホースを放し、興奮を持ち余しているのか、その場でぐるぐる回り始めた。

【橙歌】

「やったねっ」

【赤明】

「きゃっ」

そのままの勢いで赤明に飛びつき、赤明もホースから離れる。

それを切つ掛けに、那美以外のみんなも手を放し、思い思いに虹を見上げる。

【黄牙】

「俺達、さり気に凄えのかもな」

【陽】

「……今回は賛成だよ」

【黄牙】

「やったな」

【陽】

「ああ」

みんな、しばらくの間、自分達で架けた虹に見とれていた。

【緑璃】

「あーっ、写真、写真撮らないと」

突然、先輩があげた大声で我に返る。

【橙歌】

「そうだった！」

【緑璃】

「みんなー。こっちに並んでー」

ぞろぞろと集まって、適当に並んでいく。

【緑璃】

「あ、陽君はこっち。真ん中だよ」

【陽】

「別にいいですよ」

【緑璃】

「だーめ。学園リーダーでしょ」

【陽】

「……わかりましたよ」

【緑璃】

「那美ちゃんも真ん中ね」

【那美】

「うん。わかった」

俺と那美が中心になって列を作る。

【赤明】

「先輩。誰が撮るんですか？」

そう言えばそうだ。

写真を撮る人は写真に写れないわけで。

交代で撮れるならいいけど、確か後1枚しか残っていなかったはずだ。

【緑璃】

「大丈夫。ちゃんとタイマーがあるよ」

【赤明】

「でも、三脚とか無いですよ?」

【緑璃】

「あ……」

しまった、と言う顔になる。

【緑璃】

「どうしよう?」

【陽】

「下から誰か呼んで来て撮ってもらいますか?」

【緑璃】

「うーん、それしかないかなあ。それじゃあ、ちょっと待っててね」

【赤明】

「あ、先輩!」

先輩はカメラを持って走って行ってしまった。

【赤明】

「せっかちな人ね。大陣君に行つて貰おうと思ったのに」

【黄牙】

「俺かよ!」

【橙歌】

「ね、思ったんだけど、虹つて写真に写るの?」

【陽】

「写るんじゃないか？」

【橙歌】

「絶対？」

【陽】

「そこまで言われると……」

そこまでの自信は無いんだが……。

【那美】

「大丈夫。ちゃんと、全部写るよ」

【橙歌】

「ホント？」

【那美】

「うん、本当」

【橙歌】

「そっかー」

【紫苑】

「那美さんも、虹について詳しいんですね」

【那美】

「え？ あ、うん。私も調べてみたから」

【紫苑】
「そうですか」

そんな話をしていると、先輩が見知らぬ女性を連れて戻ってきた。

【緑璃】
「お待たせー」

【藍叉】
『お帰り』

【緑璃】
「うん、ただいま。それじゃあ、お願いします」

女性にカメラを渡して、先輩が列に入る。

女性は、こんな所で何してるんだろうと言う様な、ちょっと不思議そうな顔をしながらカメラを構える。

【女性】
「じゃあ撮りますよ。3、2、1」

カシャッと、シャッターが切られた。

< 神社 境内 >

夕方になり、俺達は神社を出た。

いつものように、石段の所までやって来る。

【那美】

「みんな　今日は、本当にありがとう」

【赤明】

「お礼なんていいのよ。みんな、好きでやったんだから。ね、みんな？」

【緑璃】

「うんうん。その通りだよ」

【黄牙】

「おう、そうだけ」

【紫苑】

「はい。やってみて、良かったと思ってます」

【藍叉】

『楽しかった』

【橙歌】

「うん、楽しかったよ！　ね、次は何する？」

色々あるよねーと言って指折り数え始める橙歌。

その橙歌に、那美はゆるゆると首を振った。

【那美】

「ごめんね、橙歌」

【橙歌】

「え？」

【那美】

「アルカンシエルは、今日で解散するの」

【橙歌】

「ええー！ー！！」

【黄牙】

「マジかよ……」

橙歌と黄牙が驚きの声を上げる。

だが、俺の心に驚きは無かった。

ああ、やっぱりそうだったのかと、むしろ妙に納得してしまった位だ。

橙歌と黄牙以外のメンバーも、何となくは予想していたらしく、それほど驚いている様子は見えない。

【橙歌】

「どうして？ 何で解散するの？」

【陽】

「それは俺も聞きたい所だな」

虹を架けたらアルカンシエルは終わる。

それは何となく理解していたが、その理由はわからない。

【那美】

「んーと、私ね、もうすぐ遠くに行かないといけないの」

【藍叉】

『引越すの？』

【那美】

「うん……そんな感じかな。それで、その準備でこれからは忙しくなるから。今日、虹が架けられて良かった」

【橙歌】

「そんなあ……もっと一緒に遊ぼうよ」

【赤明】

「わがまま言わないで。那美にも事情があるんだから」

【橙歌】

「だって、折角友達になったのに……」

【那美】

「……」
「ごめんね」

【緑璃】

「忙しくなるって事は、まだしばらくはこっちにいるの？」

【那美】

「んーと、うん。もうしばらくはいられるかな」

【緑璃】

「じゃあ、忙しくない日は知らせてね？ 私、会いに来るから」

【那美】

「緑璃……」

【緑璃】

「だめ？」

【那美】

「……駄目じゃないよ。忙しくない日は、メールするね」

【緑璃】

「うん。ありがとう」

【橙歌】

「あ、僕にも！ 僕にも教えてよ！」

【那美】

「うん、わかった。ちゃんと教えるから」

【橙歌】

「約束だからね。はい、指切り！」

橙歌が小指を立てた手を差し出す。

【那美】

「うん、約束」

那美も手を差し出し、そっと、指を絡めた。

また明日はもう言えない。

でも、また会おうって約束できる。

2人の指が離れる。

【橙歌】

「じゃ、またね」

【那美】

「またね、橙歌。みんなも」

【陽】

「ああ」

また、会おう。

<学生寮 213号室>

【陽】

「はぁー……」

転がっていたベッドの上で溜息を吐く。

部屋の時計は午後8時を指している。

うわ、もうこんなに時間が経ってたのか……。

神社から帰って来た後、ぼんやりと時間を過ごしてしまった。

何と言うか、妙に疲れた。

肉体の疲労じゃない、精神的な物だ。

そればかりしていた訳じゃないが、2週間の準備期間があったイベントが終わったんだ。

学園祭が終わったようなものなんだろうか。

それなのに、それほど達成感が感じられないのは、終わってしまったと言う想いが強いからだろう。

虹を架けるのは成功した。

そして、予想していた通り、アルカンシエルは終わった。

今までのようには会えなくなったと言う那美。

永遠の別れでは無い、その筈だ。

でも 何だろうか。

この、妙な喪失感は。

【陽】

「那美。本当にまた会えるんだよね？」

ベッドから降りて、カーテンを開く。

【陽】

「え？」

一瞬、自分の目を疑った。

神社の方向。

俺達が虹を架けたその場所に、虹が架かっていた。

【陽】

「月虹^{げっこう}？ いや、違う……」

虹について調べている時に見つけた、月の光で見える虹かと思っただけ、そうじゃない。

こんな弱い光しかない状況で、あんなにはっきりと色が見えるはずが無い。

【陽】

「何なんだよ、あれ」

虹について調べただけに、今起こっている事が異常だとわかる。

それも、俺達が虹を架けたあの神社で。

俺達の行為に何か関係があるのか？

【陽】

「……行ってみるか」

わからない事をここで考えていても仕方が無い。

俺は、携帯をポケットに突っ込んで、部屋を飛び出した。

<神社 境内>

【陽】

「はっ、はっ、はっ……」

石段を駆け上がって、乱れた呼吸を整える。

空を見上げると、そこにはやっぱり虹があった。

しかも、ここまで来ると、その虹が昏間と全く同じ位置にある事がわかる。

裏に回るか。

<神社 裏>

今度はいつ会えるだろうなんて思って、別れたのに、数時間での再会だった。

初めて会った時と同じように、彼女はそこにいた。

俺に背を向けて、虹を見上げている。

出会ったときと同じ、存在感の希薄な、那美の姿だった。

【陽】

「……那美」

ゆつくりと、那美が振り向く。

【那美】

「こんばんは。陽君」

唇がゆるい弧を描く。

出会った時、那美が浮かべた笑みは、彼女に現実感を与えた。

だが、今の那美の笑みは、現実から遠ざかり、ある種の神聖さのような物を感じさせる。

辺りに満ちる静謐な空気。

例えるなら、今、ここは神殿で、那美は儀式を行う神官とでも言えるだろうか。

【陽】

「那美……」

聞きたい事は沢山あるのに、

この場の雰囲気は、ただの発言さえ許されないような物で、上手く言葉を紡げない。

【那美】

「陽君。この虹は、何だと思う？」

虹。

それは、俺達の目標だったもの。

けれど、後の無い目標は、ただの目標とは言えない。

【陽】

「……それは 終わりだ」

アルカンシエルと言うグループの終わり。

那美と紡いできた物語の終わり。

7色のゲートはまるでゴールのような、おしまいの象徴だ。

【那美】

「うっん、違うよ」

【那美】

「これが 本当の始まり。物語はまだ、スタート地点に着いたばかり」

那美が両手を天へと差し伸べる。

その手が、いや、全身が淡い光に包まれていく。

虹が、那美と同じように輝き、七色の光が空に踊る。

【陽】

「那美！？　これは！？」

明らかに常識を超えた事態に、ただ驚くしか出来ない。

これを、那美がやってるのか？

【陽】

「っ！」

ぐらりと、と、何かが揺れた。

地震じゃない、もっと根本的な何かが　世界が揺らいだ。

柔らかかった光が、強烈な閃光となって目を灼く。

【那美】

「始まるよ」

近くにいるはずなのに、どこか遠い場所から、那美の声が響いて来る。

【那美】

「本当の、物語が」

1度終わった俺達の物語は、こつして、もう一度始まった。

2度目の、本当の物語が。

六月十四日（後書き）

これで共通ルートは終了です。

ここから、赤明、橙歌、黄牙（唯鈴）、緑璃、藍叉、紫苑の個別ルートに分岐。

全ルート終了後、那美ルートが解放されるという流れです。

誰の個別ルートがいい、という要望がありましたら、感想か何かでリクエストしておいてください。反映されるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2320j/>

Arc-en-ciel ~ なないろのきざはし ~ （共通ルート）

2010年11月14日02時51分発行